

平成28年度
神戸市埋蔵文化財年報



2019

神戸市教育委員会

平成28年度

神戸市埋蔵文化財年報

2019

神戸市教育委員会



fig.1 住吉宮町遺跡 第52次 墳丘検出状況



fig.2 住吉宮町遺跡 第52次 古墳出土遺物

序

いにしえより、多くの人たちの営みは途切れることなく、
今に続いています。その足跡は静かに、しかし確実に地中
に刻まれています。

平成28年度も、多くの遺跡が、その上に新たな人間の痕跡
を刻まれ、消えていきました。

過去から伝えられたメッセージを着実に後世に伝えていく、
本書がその一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査および本書を作成するにあたり、ご協力
いただきました関係諸機関ならびに関係者各位に対し、厚
くお礼申し上げます。

平成31年3月

神戸市教育委員会

例　　言

1. 本書は、神戸市教育委員会が平成28年度に実施した埋蔵文化財発掘調査事業の概要である。事業に関わる発掘調査は、下記の調査組織によって実施した。

調査関係者組織

神戸市文化財保護審議会（史跡・考古資料担当）

黒崎　直　　大阪府立弥生文化博物館館長
菱田　哲郎　　京都府立大学文学部教授

教育委員会事務局

教育長	雪村新之助		
社会教育部長	日下　優		
文化財課長	千種　浩		
埋蔵文化財センター担当課長	安田　滋		
埋蔵文化財係長	前田　佳久		
文化財課担当係長	松林　宏典		
埋蔵文化財センター担当係長	斎木　巖		
事務担当学芸員	山口　英正	池田　毅	井上　麻子
調査担当学芸員	谷　正俊	阿部　敬生	内藤　俊哉
	浅谷　誠吾	藤井　太郎	石島　三和
	阿部　功	綾瀬　文佳	荒田　敬介
	岡田　健吾	三井　菜加	
埋蔵文化財センター担当学芸員	西岡　誠司	佐伯　二郎	井尻　格
	中村　大介（保存科学担当）		中谷　正
震災復興派遣職員（福島県）	山田　侑生		

2. 本書に記載した位置図は神戸市発行5万分の1神戸市全図を、各遺跡の位置図は、神戸市発行2500分の1都市計画図を使用した。

3. 本書は、埋蔵文化財発掘調査一覧表に示した各調査担当学芸員が執筆し、I-1～5は前田、6は斎木、III-1は中村、2は石島が執筆した。本書の編集は、平成30年度埋蔵文化財センター担当学芸員の斎木・内藤・井尻・阿部功が行った。

4. 調査現場の写真撮影、遺構図のトレースなどについては、各調査担当学芸員が行った。

5. 表紙写真は、住吉宮町遺跡第52次調査出土古墳の埴輪である。裏表紙写真は同遺跡の古墳主体部出土の方格T字文鏡である。

目 次

序

例言

I. 事業の概要

1. 事業体制	1
2. 開発指導	1
3. 埋蔵文化財調査事業	1
4. 指定文化財(考古資料)	2
5. 刊行物一覧	2
6. 埋蔵文化財の公開活用事業	3

II. 発掘調査

1. 森北町遺跡	第29次調査	13
2. 森北町遺跡	第30次調査	19
3. 深江北町遺跡	第17次調査	23
4. 北青木遺跡	第8次調査	27
5. 本山遺跡	第41次調査	31
6. 扁保曾塚古墳	第3次調査	37
7. 住吉宮町遺跡	第52次調査	41
8. 郡家遺跡	第93次調査	45
9. 篠原遺跡	第36次調査	49
10. 篠原遺跡	第37次調査	53
11. 雲井遺跡	第39次調査	57
12. 宇治川南遺跡	第3次調査	61
13. 楠・荒田町遺跡	第59次調査	67
14. 兵庫津遺跡	第69次調査	75
15. 兵庫津遺跡	第70次調査	79
16. 兵庫津遺跡	第71次調査	89
17. 神楽遺跡	第16次調査	95
18. 出合遺跡	第51次調査	99

III. 出土遺物の調査・保存科学調査

1. 保存科学調査・作業の概要	101	
2. 兵庫津遺跡	第67次調査	103

I. 事業の概要

1. 事業体制

神戸市教育委員会文化財課は、平成23年度から埋蔵文化財係と文化財保護活用係の2係体制で文化財の保護と活用を担っている。埋蔵文化財係に関する業務のうち、文化財保護法に関する届出などの窓口業務、試掘調査や本調査の受託契約等の事務や補助金事務は市役所文化財課で行い、発掘調査終了後の出土品の復元や保存修復及びその後の管理と活用に関しては、神戸市埋蔵文化財センターで行っている。出土品や発掘調査で得られた写真や図面等は、記録保存のために空調管理した収蔵施設で保管し、さらにこれらを活用した企画展示、様々な体験学習、出張講座等は埋蔵文化財センターを中心として展開している。また、外部からの依頼による収蔵資料に対する資料調査や貸出にも対応している。

神戸市埋蔵文化財センターの収蔵庫は飽和状態にあったが、その収蔵機能を補完する施設として平成26年度末で閉園した旧神戸市立みどりのまち幼稚園（北区緑町4丁目）を、平成27年度に小改修を行ったうえで収蔵施設として新たに確保することができた。この結果、28リットル入りコンテナ換算で、4000箱程度が収蔵できる予定である。

平成28年度についても、東日本大震災の復興調査支援のため、福島県教育庁文化財課（南相馬市駐在）に4月から学芸員1名を1年間派遣した。

2. 開発指導

周知の埋蔵文化財包蔵地内における土木工事等については、文化財保護法第93条・第94条に基づく届出・通知が必要であり、各事業者に対して必要とされる保護措置を示している。また、建築確認申請に伴う事前届出書の閲覧を実施し、周知の埋蔵文化財包蔵地内における建築行為については埋蔵文化財発掘届出書の提出を促している。

平成28年度の文化財保護法に基づく届出・通知件数は728件（前年度644件）であり、このうち、民間事業者・個人による第93条の届出が664件（前年度589件）であった。また、開発行為事前審査124件（前年度109件）、試掘調査依頼は104件（前年度110件）であった。以上のように届出の件数は、平成27年度は平成26年度に比べてほぼ横ばいの状況であったが、平成28年度はいずれも1割程度の増加が認められた。試掘調査については、近隣データーを積極的に活用したことや、建物の解体に伴う届出に関しては基礎解体時の立会を行うことで試掘調査を兼ねるようとした結果、平成28年度は平成27年度とほぼ同件数になっている。窓口やファックス等による包蔵地の確認、問い合わせは年間で約6,000件であった。

これらの届出や問い合わせに対して、試掘調査によって得られた情報や既存情報をGISデータに集積し、それを基に可能な限り建物の基礎が遺跡に影響を与えないように、設計変更を求めている。そのことによって、発掘調査を回避し、新たな建物等の下に遺跡の一部を保護している件数も多い。

3. 埋蔵文化財調査事業

平成28年度に実施した埋蔵文化財調査事業は、調査事業19件、整理事業3件で、それに要した経費の総額は、159,216千円であった。

国庫補助事業 発掘調査事業のうち、その原因が個人住宅や個人事業者、零細事業者による場合は国庫補助事業として、規程と基準により公費を充当している。平成28年度の緊急発掘調

査事業費は33,672千円であった。

市内発掘調査 平成27年度と同様に、発掘調査件数は、基礎構造の設計変更により発掘調査を回避することができたことなどにより、昨年度より7件減少した。

発掘調査面積は5,056m²（延べ12,549m²）で、このうち民間関連事業によるものが3,931m²（延べ7,299m²）と80%近くを占めている。平成27年度に比して、公共事業が増加した状況にある。

面積別でみると、4件を除いて300m²以下の調査で、平成27年度よりもわずかに調査面積の規模が大きくなっている。また、100m²以下の調査が7件を占め、引き続き個人住宅などを中心にした小規模開発事業が多いことを示している。この要因の一つとしては、地震に対応できる建物基礎構造を確保するために、個人住宅においても地盤改良工事などで基礎が深くなり、遺構などに抵触することが要因の1つであると考えられる。

また、平成28年度は埋蔵文化財調査の公開事業の一環で、兵庫津遺跡第69次調査の発掘調査現場の一般公開を1件実施した。11月26日（土曜日）に行い、122名の参加者があった。

これまで刊行した発掘調査報告書については、準備の整ったものから奈良文化財研究所の「全国遺跡総覧」において公開を進めている。

No	内 容		件数
1	発見・発掘届(保護法93・94条関係)		728件
	i 民間の事業に伴う発掘届(93条)	664件	
	ii 公共の事業に伴う発掘通知(94条)	64件	
	iii 発掘届・発見通知(92・96・97条)	0件	
2	開発行為事前審査等各種申請		124件
3	試掘調査(依頼件数)		104件
4	発掘調査(大規模確認調査も含む)		20件
	i 民間事業に伴う発掘調査	18件	
	ii 公共事業に伴う発掘調査	2件	
	iii 國場整備事業に伴う発掘調査	0件	
5	工事立会		82件
6	整理作業(復興調査整理作業を含む)		3件

表1 文化財保護法に基づく届出・通知等件数一覧

	民間関連事業	公共関連事業	合 計
調査面積	3,931	1,125	5,056
延べ調査面積	7,299	5,250	12,549

表2 発掘調査面積(単位: m²)

調査面積	件 数	%
~100m ²	7件	37
101~300m ²	8件	42
301~500m ²	1件	5
501~1,000m ²	3件	16
1,001~2,000m ²	0件	0
2,001~5,000m ²	0件	0
5,001m ² 以上	0件	0
合 計	19件	100

表3 発掘調査面積別件数(試掘及び確認調査を除く)

4. 指定文化財（考古資料）

平成29年3月21日付で、神戸市指定有形文化財（考古資料）として「白水遺跡梵鐘鑄造遺構出土品」〔梵鐘鑄型（外型）27片、溶解炉（復元溶解炉1基、こしき2片、上こしき2片）、梵鐘鑄造土坑（切取保存）1基、銅滓5点、土師器1点、平瓦1点〕が指定された。

平成7年度の発掘調査で発見され、平成11年3月に『白水遺跡第4次埋蔵文化財発掘調査報告書』として調査成果が報告されていたが、古代梵鐘の製作技術を復元する上で貴重で、白水遺跡の古代の様相を探るうえでも意義深いものとして評価されるに至ったものである。

5. 刊行物一覧

平成28年度に刊行した発掘調査報告書等は、下記のとおりである。

『兵庫津遺跡第62次調査発掘調査報告書』額価8,000円、『平成26年度神戸市埋蔵文化財年報』額価800円、『神戸市埋蔵文化財分布図（平成29年度版）』額価500円、『神戸の遺跡シリーズⅦ 神戸の古墳Ⅱ』額価200円。

6. 埋蔵文化財の公開活用事業

考古資料の特別利用等

埋蔵文化財センターでは発掘調査の一環として出土遺物の復元・修復作業および金属製品・木製品等の保存科学的処置ならびに、発掘調査報告書の作成を行っている。修復作業の終了した遺物および写真・図面等の記録類は埋蔵文化財センターで収蔵され、公開活用事業や調査研究等の利用に供している。平成28年度における資料の特別利用は表4～7のとおりである。

埋蔵文化財センターにおける公開活用事業

西区糸台にある埋蔵文化財センターを中心に、埋蔵文化財の公開活用の事業を行っている。埋蔵文化財センターの平成28年度の入館者数は32,349人である。その内、市内小学校団体の入館が97校6,510名で全体の約1／5を占めている。4・5月は日本の歴史を学び始めた6年生が「弥生時代」や「古墳時代」の学習のため、1・2月には「人びとのくらしのうつりかわり」で“おじいさんやおばあさんのころ”的のくらしを学習する3年生が、後述する冬季企画展『昭

No.	申 請 者	利用目的・内容	資 料 名	資料 点数
1	同志社大学歴史資料館	研究会で展示	祇園遺跡出土土師器	13
2	兵庫県立考古博物館	特別展「江戸時代の兵庫津」で展示	兵庫津遺跡57次調査出土土器12点・写真17点	29
3	明石市	明石市立文化博物館「発掘された明石の歴史展—明石の中世Ⅱ—」	端谷城 瓦他22点、枝吉城 土師器皿他5点、城ヶ谷砦跡 土師器皿他11点	38

表4 考古資料の館外貸出

No.	申 請 者	利用目的・内容	資 料 名	資料 点数
1	個人	論文執筆	出合遺跡32次出土土器	39
2	個人	論文執筆	兵庫津遺跡14次 出土石鏡・土鍤	352
3	個人	研究のため	生田遺跡4次出土 凹石・叩き石	38
4	個人	展示資料調査	祇園遺跡5次・17次 出土土器	170
5	個人	明石市立文化博物館 展覧会準備	端谷城 瓦	12
6	個人	論文執筆	舞子浜遺跡 人骨	1
7	個人	論文執筆	森北町遺跡出土 重闊文銘帯鏡片	1
8	個人	修士論文執筆	深江北町遺跡9次・12次出土土器	272
9	個人	卒業論文執筆	新方遺跡出土石鏡 他	122
10	個人	論文執筆	吉田南遺跡出土ウシ・ウマ遺存体8点 御藏遺跡出土ウシ・ウマ遺存体8点 上沢遺跡出土ウマ遺存体1点 小路大町遺跡出土ウマ遺存体3点	20
11	個人	那覇市東村跡出土陶磁との比較検討	兵庫津遺跡14次・42次・53次 出土陶磁器	119
12	個人	学術研究	旧居留地遺跡 津波転写土層 住吉官町遺跡 噴砂転写土層 西求女塚古墳 墳丘地すべり転写土層 垂水日向遺跡 土石流転写土層	4
13	個人	学術研究	神出古窯址群出土須恵器	50
14	明石市	明石市立文化博物館 展覧会準備	枝吉城出土土器 他	19
15	鹿児島県文化振興財團	報告書作成のための資料調査	東播系須恵器の鉢	30
16	個人	学術研究	鬼神山古墳出土懸面鏡	1
17	個人	卒業論文執筆	頭高山遺跡出土石鏡 他	111
18	個人	学術研究	雲井遺跡出土武器型青銅器鋳型	1
19	個人	学術研究	神出古窯址群出土瓦	20
20	個人	学術研究	玉津・田中出土弥生土器壺・木製器台	2
21	個人	学術研究	大歳山遺跡出土 繩文土器	30
22	個人	学術研究	新方遺跡1・3・12・13号人骨	4
23	個人	明石市の発掘調査報告書作成	神出古窯址群出土資料	50
24	個人	論文執筆	西岡本遺跡 野寄群集墳 3号墳出土鏡2点・須恵器2点	4

表5 特別利用

和のくらし・昔のくらし』展を見学するために来館している。この時期には市内のみならず、近隣市町からの小学校団体も来館している。

No	申 請 者	利用目的・内容	資 料 名	資料 点数
1	東海大学	東海大学オープンキャンパス開催案内チラシ	『兵庫津57次報告書』106頁 魚類	1
2	個人	株式会社平凡社別冊太陽「古墳時代の歴史と美」に掲載	白水瓢塚古墳出土菅玉写真(申請者撮影)	2
3	東海大学	東海大学海洋学部ホームページに掲載	『兵庫津57次報告書』106頁 魚類	1

表6 資料調査成果の公表

No	申 請 者	利用目的・内容	資 料 名	資料 点数
1	株ランズ	「日本歴史大地图」に掲載	五色塚古墳 画像データ	3
2	株はる制作室	「平成版 おとの歴史『謎多き古代史をめぐる』」に掲載	五色塚古墳 画像データ	1
3	集英社	『学習まんが日本の歴史』5巻	祇園遺跡出土 瑞波天目小碗	1
4	九州国立博物館学芸部	「九州の古墳時代史」「東北アジア装飾古墳の研究」に掲載	五色塚古墳 画像データ	1
5	(公財)姫路市文化国際交流財团	「パンカル播磨事典」(上巻)	五色塚古墳 画像データ	1
6	布グリーポ・ビコ	「日本の伝統と文化」	五色塚古墳 画像データ	1
7	明石市	「明石の中世Ⅱ」に掲載	吉田遺跡 枝吉城地点 発掘調査状況	4
8	株洋泉社	「歴史REAL 天皇と争乱の古代史」	五色塚古墳 画像データ	1
9	神戸商工会議所	広報印刷物	西求女塚古墳 5号鏡・出土鏡群	2
10	明石市	「発掘された明石の歴史展」ポスター・チラシ・図録に掲載	端谷城出土鬼瓦 他	3
11	KKベストセラーズ	「一個人」10月号「日本人と温泉の歴史」	湯山遺跡 岩風呂	1
12	垂水区まちづくり課	垂水区政70周年記念誌	五色塚古墳出土埴輪群	1
13	神戸市経済観光局		兵庫城	12
14	西神ニュータウン研究会	「神戸市 西区の物語」に掲載	天王山古墳群 画像データ(垂直)・二ツ屋遺跡調査区全景(垂直)・神戸市埋蔵文化財センター・アケボノゾウ(申請者撮影)・三木合戦関連主要城郭「神戸で秀吉と出会う」転載許可・二ツ屋遺跡4・5区遺構平面図「平成4年度 埋蔵文化財年報」転載許可	5
15	兵庫県立考古博物館	加西分館「古代鏡展示館」でパネル展示	西求女塚古墳 3号鏡 画像データ	1
16	個人	高齢者大学で展示	五色塚古墳 画像データ	2
17	明石市	「発掘された明石の歴史展」図録に掲載	端谷城甲出土状況 他	9
18	赤磐市教育委員会	史跡シンボジウム「両宮山古墳とその時代」記録集に掲載	五色塚古墳 画像データ	1
19	個人	『考古学ジャーナル』特集「入浴と考古学」	湯山遺跡 岩風呂(人物入り)	1
20	株ニューサイエンス社	『考古学ジャーナル』特集「入浴と考古学」	湯山遺跡 岩風呂	1
21	株グレイル	「新発見で迫る戦国の謎」	兵庫城	2
22	株日水コン	「ひょうご水百景」69号に掲載	旧居留地下水道(京町筋)	2
23	株イディー	「ひょうご自治」2月号「歴史街道を行く」に掲載	大歳山遺跡	1
24	堺市	講演会記録集「検証! 河内政権論 なぜ、百舌鳥に大王陵が築かれたのか」に掲載	西求女塚古墳 画像データ 3号鏡	1
25	韓国 百濟世界遺産センター	「百濟文化アーカイブ構築学術研究」に掲載	上沢遺跡9次 他 画像データ	4
26	神戸市環境局		五色塚古墳 画像データ	1
27	株TBSビジョン	BS-TBS「美しい日本に出会う旅」で放送	湯山遺跡 岩風呂・寺町界隈	1
28	大手前大学史学研究所	『史林』第100巻第1号「海の古墳」研究の意義、限界、展望に掲載	舞子浜遺跡 第7次 1・2号棺出土状況	1
29	株雄山閣	『季刊考古学』139号「戦国城郭の考古学」に掲載	端谷城	5
30	個人	文化庁刊行「東日本大震災総括報告」に掲載	岡本北遺跡現地説明会風景	2
31	編集分室	「神戸おさんぽマップ 手のひらサイズ」に掲載	五色塚古墳 画像データ	1
32	株かみゆ	別冊歴史REAL「地理と地形から解き明かす古代史の謎」に掲載	五色塚古墳 画像データ	1
33	株ベストセラーズ	「歴史人」5月号「戦国武将と温泉」に掲載	湯山遺跡 岩風呂	1
34	(公財)兵庫県園芸・公園協会	舞子公園のホームページに掲載	五色塚古墳・大歳山遺跡・神戸市埋蔵文化財センター常設展示室	3

表7 画像データなどの貸出

企画展・速報展の開催 埋蔵文化財センターでは平成3年の開館以来、毎年数回の企画展を開催しており、平成17年度より年4回以上の企画展を開催している。平成28年度は表8のとおり4回の企画展と1回の発掘調査速報展を開催した。

春季の企画展は、先述したとおり、歴史学習を始める多数の小学校6年生が訪れる事から、歴史に興味が持てるような、わかりやすい展示を心掛けている。当年度は『“でっかいお墓”の誕生－弥生の墓から古墳へ－』と題し、方形周溝墓や木棺墓などの弥生時代の墓から古墳へと移り変わる墓の変化と社会の流れを探る展覧会であった。重要文化財である西求女塚古墳出土鏡などを展示した。

夏季企画展は、市内各地で行われている多くの発掘調査から近年新たに見つかった、重要な遺跡や貴重な遺物を紹介する展覧会『こうべ発掘ニュース 最新号』を開催した。主な展示資料は祇園遺跡の平安時代末頃の邸宅跡から出土した遺物や兵庫津遺跡の発掘調査で出土した江戸時代の土人形や陶磁器類である。また、兵庫城跡で見つかった石垣や堀、城下町の街路などの紹介をした。会期中には展示解説と埋蔵文化財センターのバックヤードの見学会を2回開催した。

秋季企画展『発掘！古代のお役所』は、市内で発掘調査された深江北町遺跡から出土した古代山陽道に関連した木簡や墨書き器、上沢遺跡の立派な井戸から出土した精巧な銅鏡が近年、神戸市有形文化財に指定されており、この出土遺物が役所や郡司層に関わる寺院の要素が強いことから、これらの資料を通じて古代の「お役所」から神戸の歴史を見てみよう企画された。

この企画展の会期中には、京都府立大学の菱田哲郎氏を招き「佐波理鏡からみた古代の神戸」というテーマで、また奈良文化財研究所の渡辺晃宏氏を招き「木簡から深江北町遺跡と古代の神戸を考える」と題しての講演会を実施した。

冬季企画展は毎年『昭和のくらし・昔のくらし』と題して展覧会を開催し、今回で11回目となる。ちょっと昔の、昭和のくらしを理解するための展示を行っている。先述したように、この企画展は小学校3年生の学習課程に即した展示で、会期中には小学校団体の見学が多い。また、かつて実際に使われた電化製品などの展示資料に、一般の市民の方々も懐かしんで見学に来られる方が多い。特に、昭和40年代のお茶の間と台所を実物大で復元した展示ジオラマは来館者の注目を集めており、親から子、子から孫への語らいの場としても好評であった。

当年度は、神戸開港150年をまもなく迎える記念の年でもあり、「みなと街神戸 ノスタルジー」と副題をつけ、昭和の神戸港と当時の街の様子などを写真パネルで振り返った。また、ちょうど、戦前・戦後の神戸を舞台にしたNHK連続テレビ小説『べっぴんさん』が放映中であり、番組内で使用された昭和40年代の衣裳の展示も行った。

企画展に関連したイベントでは、武庫川女子大学の横川公子氏を迎えて「神戸ファッション発信への道程」と題して講演会を開催した。また恒例となった「昭和のあそび・昔のあそび」では当館のボランティアスタッフの協力を得て、わりばし鉄砲づくり・こま回し・竹馬・糸巻き

展覧会名	開催期間	日数	入館者数
“でっかいお墓”の誕生－弥生の墓から古墳へ－	4/9(土)～5/29(日)	48	8,721
こうべ発掘ニュース 最新号	7/16(土)～9/4(日)	43	2,784
発掘！古代のお役所	10/15(土)～12/4(日)	42	3,520
昭和のくらし・昔のくらし11－みなと街神戸 ノスタルジー－	1/21(土)～3/5(日)	38	8,109
住吉宮町遺跡第52次調査速報展	3/18(土)～3/26(日)	8	1,000

表8 企画展

戦車などの遊び体験や昭和時代に街を駆け抜けていたミゼットなどの「昭和の車 ミニパレード」を旧車運転同好会の協力で実施し、来館者の乗車体験も行った。

3月18日から26日の間には「住吉宮町遺跡第52次調査速報展－築造当初の姿を保った古墳を発見－」を開催し、樹立したまま出土した円筒埴輪や鏡などを展示した。会期中の入館者は1,000名であった。

体験考古学講座 夏休みの期間を中心に、「体験！考古学講座」を実施した。土器や勾玉・銅鐸などの発掘調査で出土する遺物の製作技法を学び、それに近い方法で古代の物づくりを体験する講座で、参加は小学校4年生以上を対象としたものである。全9種の講座で、のべ504名が受講した。

歴史講演会の開催 各企画展のテーマにあわせ、展示をより深く理解できるような内容や、また後述する西区地域学の見学地にちなんだ内容のもので、外部講師ならびに神戸市教育委員会文化財課学芸員による講演会を計5回実施した。さらに秋季企画展では外部講師を招いて特別講演会を2回実施した。

こうべ考古学入門講座の新設 平成28年度には、これまでになかった講座を新設している。「こうべ考古学入門－埋もれた神戸の歴史が10倍わかる－」と銘打って全7回シリーズで講演会を実施した。内容は「遺跡からわかる神戸の歴史」を見る入門講座。旧石器時代から江戸時代までを6つの時代に分けて、各時代の神戸の姿を解説、最終回には平成28年度に発掘調査を実施した遺跡の中から成果の大きかった住吉宮町遺跡・兵庫津遺跡の発掘調査成果を報告した。のべ499名の参加を得た。

出張考古学講座・出張授業・出張講義 埋蔵文化財センターで実施する体験考古学講座以外に、市内小学校や公民館からの依頼に基づいて学芸員が赴き、勾玉づくりや土器づくりの体験講座や学校での地域の歴史についての授業や講義を行っている。当年度は14団体、1,120名の参加があった。

学校等との連携授業 連携協定を結んでいる神戸学院大学の博物館学芸員課程の実習とし

月 日	講 演 名	講 師	参加者数
5月21日	神戸における弥生の墓から古墳へ	神戸市教育委員会学芸員 阿部敬生	77
7月23日	こうべ発掘ニュース 最新号	神戸市教育委員会学芸員 井尻 格	40
11月5日	神戸の古代の役所	神戸市教育委員会学芸員 佐伯二郎	50
11月26日	西神戸・明石の古代遺跡	神戸市教育委員会学芸員 西岡誠司	58
1月28日	神戸ファッショントリビュート発信への道程	武庫川女子大学 横川公子氏	41

表9 歴史講演会

月 日	講 演 名	講 師	参加者数
6月18日	こうべ考古学入門	神戸市教育委員会学芸員 安田 滋	41
	「こうべ人」誕生－旧石器・縄文時代－	神戸市教育委員会学芸員 佐伯二郎	
8月27日	稻作のムラムラ－弥生時代－	神戸市教育委員会学芸員 西岡誠司	62
9月24日	王のクニグニ－古墳時代－	神戸市教育委員会学芸員 安田 滋	81
10月29日	古代の役所とムラ－奈良・平安時代－	神戸市教育委員会学芸員 安田 滋	60
12月17日	中世の情景－鎌倉・室町・戦国時代－	神戸市教育委員会学芸員 安田 滋	56
2月25日	湊に吹く風－江戸時代－	神戸市教育委員会学芸員 中谷 正	76
3月18日	こうべ発掘最新情報－平成28年度の調査－	神戸市教育委員会学芸員 石島三和・阿部敬生・中谷正	123

表10 こうべ考古学入門

て、学生の企画した展示に関する展示実習指導を行った。その実習成果は、平成28年11月7日～12月5日に同大学図書館において「古代飯—モノからよみとる食生活」「埴輪とは何か」の2テーマで展示が行われた。

また、夏には博物館実習を受け入れており、当年度は8月3日～7日の5日間、神戸学院大学から計2名の実習生を受け入れ、考古資料の取り扱いや資料の写真撮影、保存科学、展示企画立案などの実習を行った。

5月30日～6月3日および11月7日～11日の2回、兵庫県下の中学校2年生の職業体験プログラムである「トライやるウィーク」に協力し、市内10校から計16名の生徒を受け入れ、出土土器の洗浄など埋蔵文化財センターでの仕事を体験してもらった。

また毎年、神戸市小学校教育研究会社会科部と連携し、神戸市生涯学習支援センターコミスタこうべにおいて9月に開催される小学生の夏休み自由研究作品展である『神戸市小学校社会科作品展』において、考古学的な遺物や遺跡に関する優秀な研究作品を37点選定し、『埋蔵文化財センター賞』を授与した。

地域連携事業

各地域におけるイベントや各区役所・西図書館等と連携して埋蔵文化財の公開活用事業を実施した。

地域事業への参加協力 西区においては、「西神中央公園桜まつり」(4月9日)、中央区「ふれあい中央カーニバル（神戸まつり）」(5月14日)、「西神工業団地IPフェア」(8月26日)、「櫛谷川まつり」(9月3日)、「押部谷明石川リバーウォーク2016」(11月23日) 等の地域におけるイベントに参加・協力し、埋蔵文化財センターや地域の遺跡をパネルなどで紹介し、現地での遺跡説明などを行った。また西図書館とは「2016西図書館自由研究相談室」において学芸員が「神戸の遺跡相談室」と題して講演し、また夏休みの期間中両館を回るクイズスタンプラリーを実施した。北区では毎年11月2・3日に北区道場町の農村環境改善センターにて開催される「道場町文化祭」に参加協力している。当年度は「道場町の埋蔵文化財展」として町内で見つかった遺跡の出土品を展示した。また、引き続き11月4日～8日には道場小学校において「中世の村・墓・城」をテーマに出張展示を実施した。

「五色塚古墳まつり」の開催 平成26年度から、垂水区に所在する史跡五色塚古墳の活用を促進する目的として、垂水区役所と連携して『五色塚古墳まつり』を行っている。当年度は6月11日に開催した。それに先立つ5月28日には地元霞ヶ丘小学校の6年生に授業の一環で小形の円筒埴輪を作ってもらい、まつり当日には、あらかじめ同校6年生の中から募った希望者に、午前中各自が作った埴輪を持ち、古代衣装をまとめて五色塚古墳の周囲をパレードし、墳丘上にその埴輪を並べて古墳でのオマツリの疑似体験をした。

午後は一般の方も参加できる、「勾玉作り」「鏡づくり」「土器・埴輪づくり」などの古代体験を実施した。午前・午後合せて504名の参加者があった。

「おおとし山まつり」の開催 垂水区役所と連携して11月の文化財保護月間の期間中に、垂水区にある大歳山遺跡公園（舞子細道公園）に復元されている弥生時代の竪穴建物を公開し、それと合わせて「勾玉づくり」「土器づくり」「塩づくり」「赤米おにぎり試食」などの古代体験イベントを開催している。当年度は11月3日に実施し、466名の参加があった。

「西区地域学」の開催 西区役所と連携し、西区を中心とした遺跡などを巡るバス見学会を開催している。当年度は開催中の秋季企画展とのコラボ企画で11月27日に「西神戸の古代の役

所と寺院をめぐる」と題し、太寺廃寺（明石市）・吉田遺跡・吉田南遺跡・西水環境センター展示室をマイクロバスで移動して見学した。参加者は27名だった。またその前日は前記の歴史講演会として学芸員による「西神戸・明石の古代遺跡」と題して講演会を実施した。

史跡五色塚古墳の公開

神戸市垂水区にある史跡五色塚古墳は日本で初めて築造当時の姿に復元された巨大前方後円墳として全国的に有名であり、歴史学習の場としてまた、明石海峡を望む絶好のビューポイントとして毎年全国から多くの見学者がある。平成28年度の入場者は37,798人であった。そのうち小学校団体や専門的な説明を希望する団体には学芸員が赴いて説明を行った。



fig.3 企画展示「でっかいお墓の誕生」



fig.4 連続講座「こうべ考古学入門」



fig.5 五色塚古墳まつり2016



fig.6 バックヤードツアー



fig.7 出張考古学講座



fig.8 体験考古学講座「竪穴住居を建てよう」

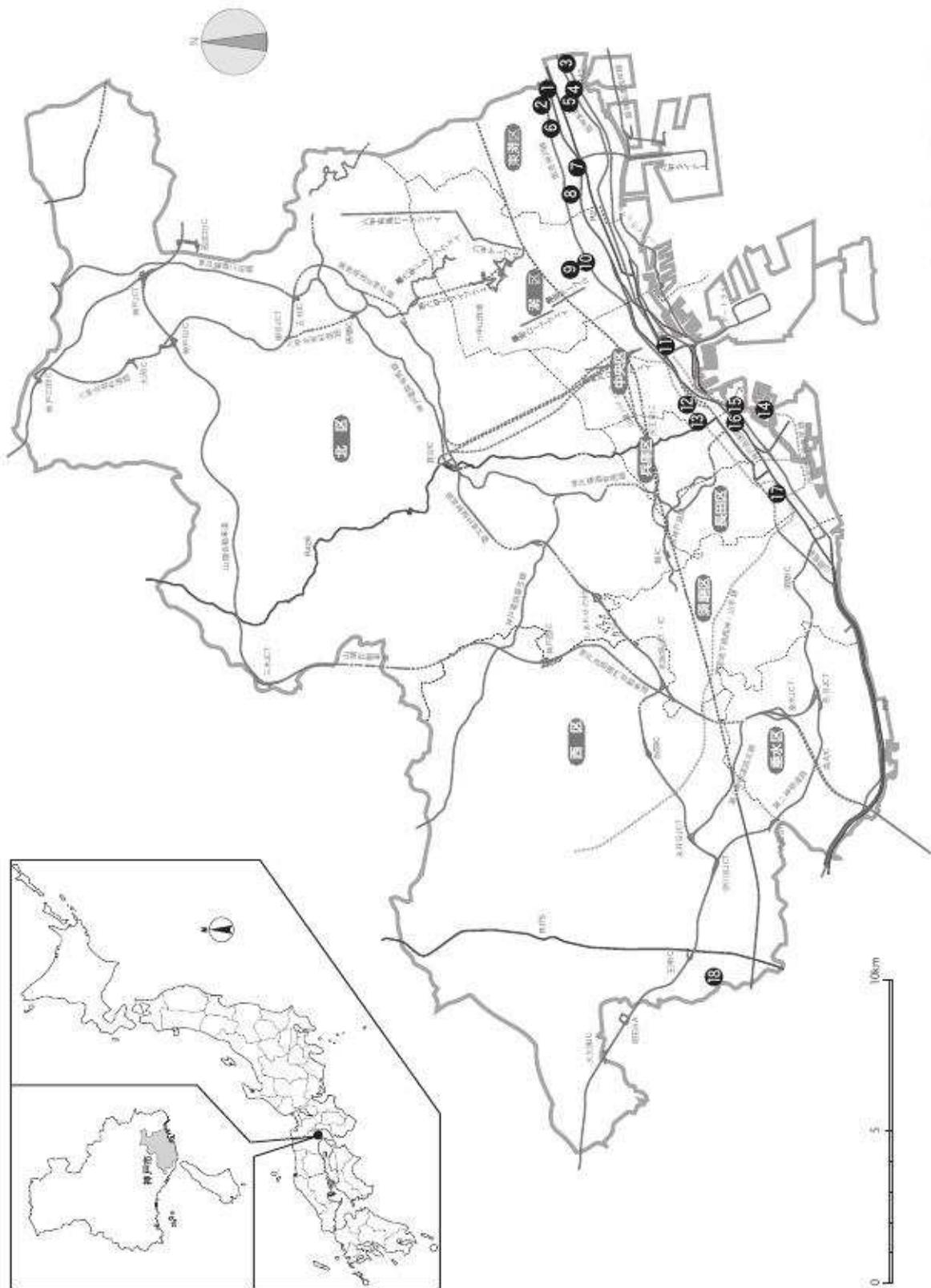
	遺跡名	所在地	調査担当者	調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
				延調査面積			
1	森北町遺跡 第29次調査	東灘区森北町2丁目1-1	石島三和	98m ² 98m ²	28.4.11～ 28.4.28	弥生時代中期・後期の堅穴建物・ピット・溝・土坑。平安時代末頃のピットを検出。	共同住宅建設 〔国庫補助事業〕
2	森北町遺跡 第30次調査	東灘区森北町4丁目28-14	阿部 功	39m ² 78m ²	29.1.23～ 29.2.1	第1遺構面：溝・ピット・落込み。 第2遺構面：弥生時代～古墳時代の溝・ピット。	個人住宅建設 〔国庫補助事業〕
3	深江北町遺跡 第17次調査	東灘区深江北町1・2丁目	谷 正俊・荒田敬介・岡田健吾・三井菜加	943m ² 2333m ²	28.4.11～ 28.10.14	奈良・平安時代の獨立柱建物・ピットを検出。 湿地部から木製品・墨書き器が出土。	鉄道立体交差
4	北青木遺跡 第8次調査	東灘区深江北町5丁目・ 北青木1～2丁目	浅谷誠吾・藤井太郎・ 阿部 功	960m ² 1429m ²	28.4.11～ 28.8.18	弥生時代中期の方形周溝墓。 奈良・平安時代の土坑・ピットを検出。	鉄道立体交差
5	本山遺跡 第41次調査	東灘区田中町1丁目30-1	阿部 功	120m ² 240m ²	28.8.17～ 28.9.16	第1遺構面：平安～鎌倉時代の溝。 第2遺構面：弥生時代の谷状地形から多量の弥生土器が出土。	共同住宅建設 〔国庫補助事業〕
6	扁保曾塚古墳 第3次調査	東灘区岡本1丁目111番16号、 19号	藤井太郎	50m ² 100m ²	29.2.13～ 29.3.22	扁保曾塚古墳の前方部南西面を確認。 前方部墳丘裾部の石列を確認。	個人住宅建設 〔国庫補助事業〕
7	住吉宮町遺跡 第52次調査	東灘区住吉本町1丁目 468番1、3番の一部	石島三和	140m ² 140m ²	29.1.20～ 29.2.17	埋没古墳を1基確認。埴輪を樹立したまま検出する。主体部から鏡、玉類などの副葬品が出土。	共同住宅建設 〔国庫補助事業〕
8	郡家遺跡 第93次調査	東灘区御影郡家1丁目33-14 西隣	浅谷誠吾	60m ² 160m ²	28.12.20～ 29.1.26	古墳時代前期の堅穴建物・土坑・ピットを検出。 乾式系土器が出土。	個人住宅建設 〔国庫補助事業〕
9	篠原遺跡 第36次調査	灘区篠原本町3丁目30-1	阿部敬生	230m ² 230m ²	29.1.16～ 29.2.21	弥生時代後期の土坑・ピットを検出。	共同住宅建設
10	篠原遺跡 第37次調査	灘区篠原中町2丁目6-2	谷 正俊	60m ² 180m ²	29.1.13～ 29.2.8	中世の土坑・ピット、弥生時代後期の堅穴建物・土坑、縄文時代晚期の甕棺墓を検出。	共同住宅建設 〔国庫補助事業〕
11	雪井遺跡 第39次調査	中央区旭通3丁目350～354	石島三和	80m ² 80m ²	28.10.3～ 28.10.27	室町時代の流路、弥生時代の落込み、縄文時代の落込みを検出。	社屋建替え
12	宇治川南遺跡 第3次調査	中央区楠町1丁目12-1	荒田敬介	375m ² 1,500m ²	28.11.7～ 29.1.31	鎌倉～室町時代のピット・溝、古墳時代初頭～前期の土坑・ピット・溝、弥生時代後期の土坑・ピット・溝を検出。	市営住宅建設
13	鷲・荒田町遺跡 第59次調査	兵庫区西上橋通2丁目8-6	石島三和	237m ² 237m ²	28.7.4～ 28.8.29	弥生時代前期～中期初頭の大整円形土坑・水路を検出。	共同住宅建設 〔国庫補助事業〕
14	兵庫津遺跡 第69次調査	兵庫区中之島2丁目	阿部敬生・内藤俊哉・ 阿部 功	750m ² 3,750m ²	28.8.2～ 28.12.27	5面の遺構面を確認。17世紀初頭～幕末までの町屋を検出。	街路築造工事
15	兵庫津遺跡 第70次調査	兵庫区本町1丁目4-12・13	藤井太郎	155m ² 1,085m ²	28.9.13～ 28.12.22	7面の遺構面を確認。16世紀末～19世紀の町屋と大量の陶器類が出土。	共同住宅建設
16	兵庫津遺跡 第71次調査	兵庫区三川口町1丁目1	浅谷誠吾	200m ² 350m ²	28.9.5～ 28.10.18	2面の遺構面を確認。中世後期～近世の井戸・柱穴を検出。	共同住宅建設
17	神楽遺跡 第16次調査	長田区神楽町3丁目101-1	阿部 功・三井菜加	290m ² 290m ²	28.10.17～ 28.11.9	古墳時代後期後半～平安時代後半頃の溝・土坑・ピットを検出。	共同住宅建設 〔国庫補助事業〕
18	出合遺跡 第51次調査	西区中野1丁目	岡田健吾	60m ² 60m ²	28.12.14～ 28.12.28	古墳時代後期の土器、中世の土器が出土。	個人住宅建設 〔国庫補助事業〕
19	住吉宮町遺跡 第53次A調査	東灘区住吉宮町3丁目95	荒田敬介	209m ² 209m ²	29.3.27～ 29.3.31	平成29年度に継続調査	大学施設建設
				調査面積合計	5,056m ²		
				延調査面積合計	12,549m ²		

表11 埋蔵文化財発掘調査一覧

遺跡名	調査担当者	実施期間	調査内容	調査原因
1 兵庫津遺跡 第62次調査	斎木巖・内藤俊哉・ 浅谷誠吾・中村大介・ 中谷正・荒田敬介・ 岡田健吾	28.4.1～ 29.3.31	出土遺物整理・記録類整理・報告書作成 〔平成29年3月刊行〕	商業施設建設
2 兵庫津遺跡 第67次調査	石島三和	28.4.1～ 29.3.31	出土遺物整理・記録類整理	市営住宅建設
3 神出窯跡群	繩蘿文佳・岡田健吾	28.4.1～ 29.3.31	昭和56年度～59年度、昭和62年度に実施した神出窯跡群の遺物整理・記録類整理・報告書作成 〔平成30年3月刊行〕	圃場整備

表12 埋蔵文化財出土遺物修復調査一覧

fig.9 平成28年度 埋蔵文化財年報掲載遺跡位置図
(各遺跡の番号は、掲載遺跡番号と一致)



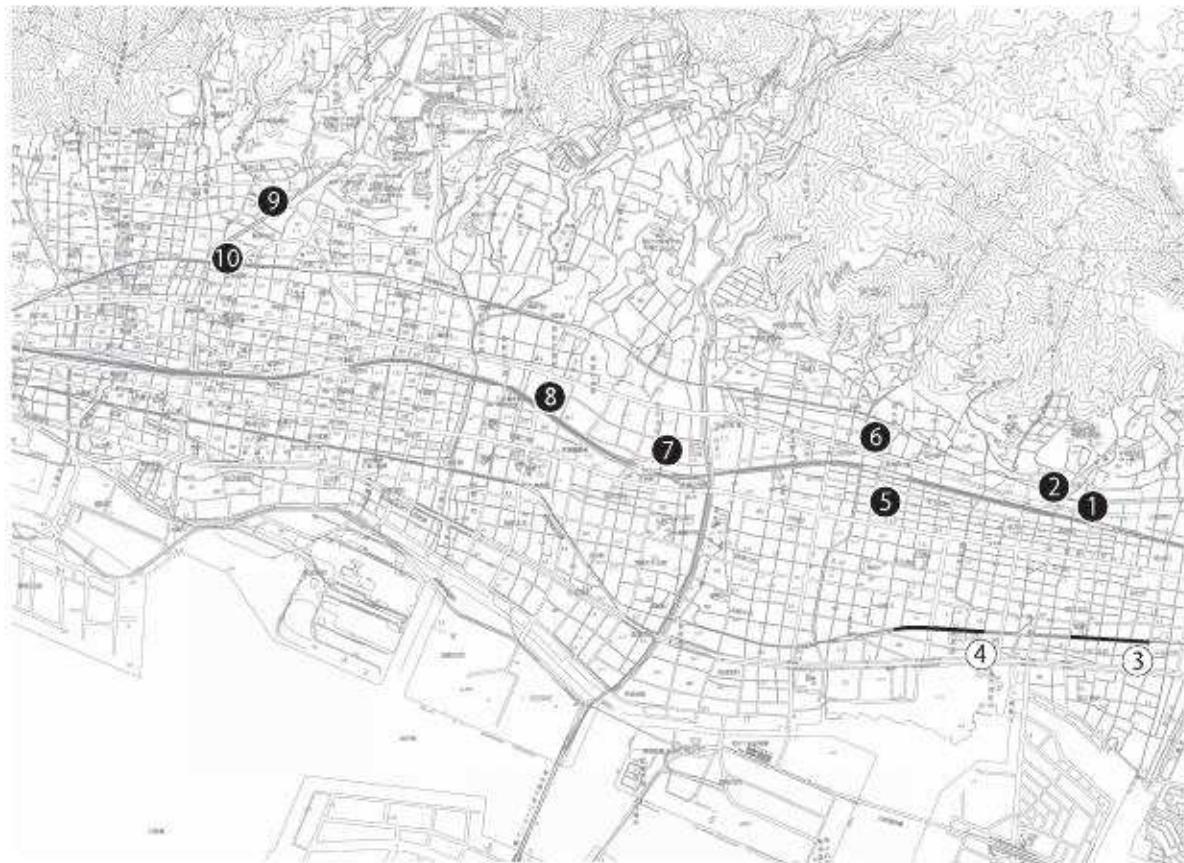


fig.10 調査地点位置図 (1) 1: 50,000

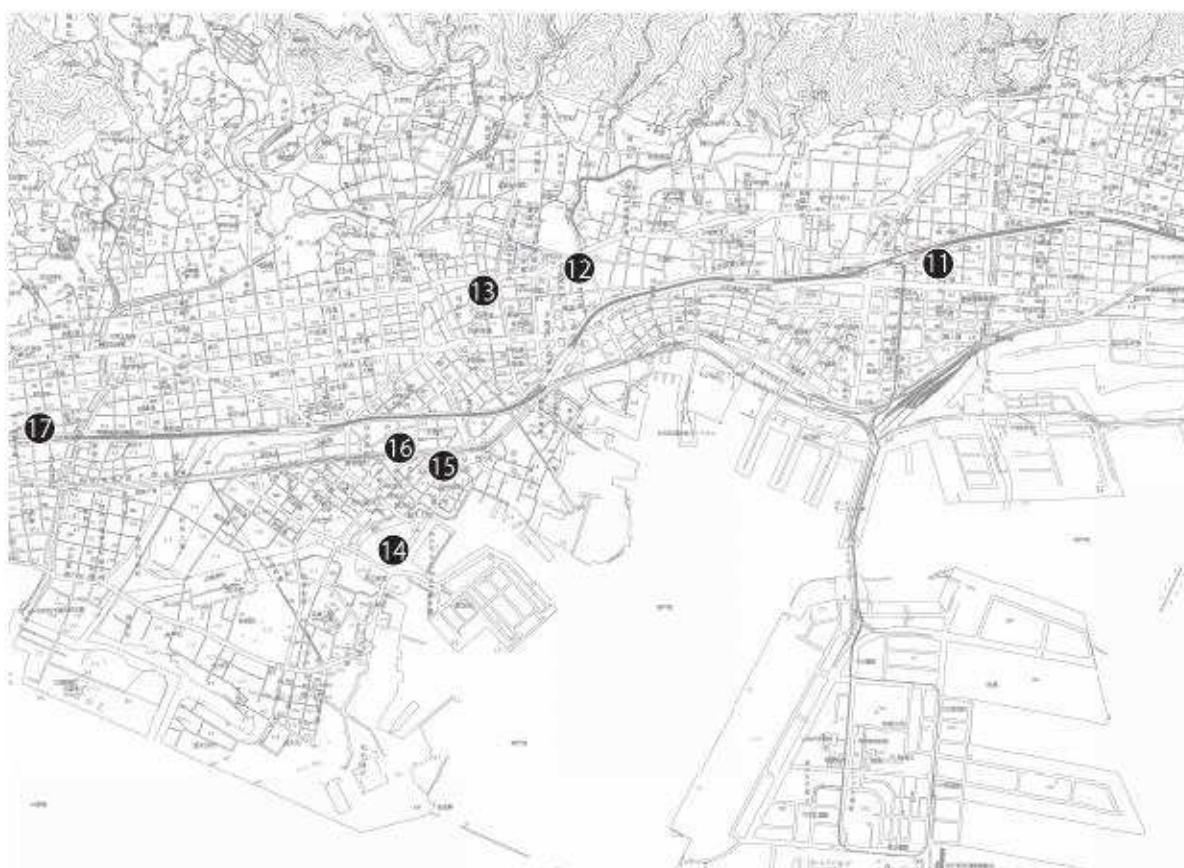


fig.11 調査地点位置図 (2) 1: 50,000

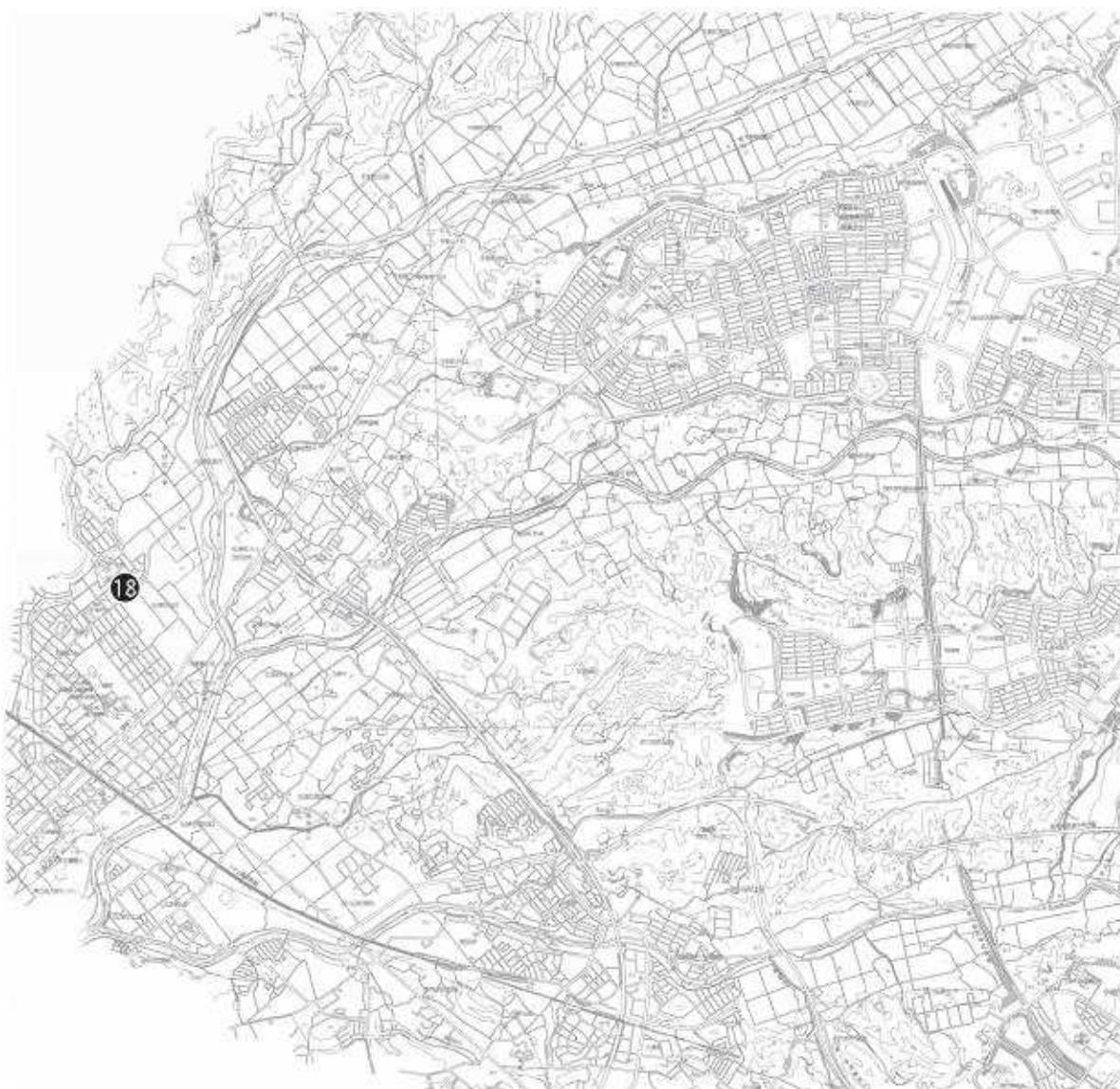


fig.12 調査地点位置図(3) 1:50,000

II. 平成28年度の発掘調査

1. 森北町遺跡 第29次調査

1. はじめに

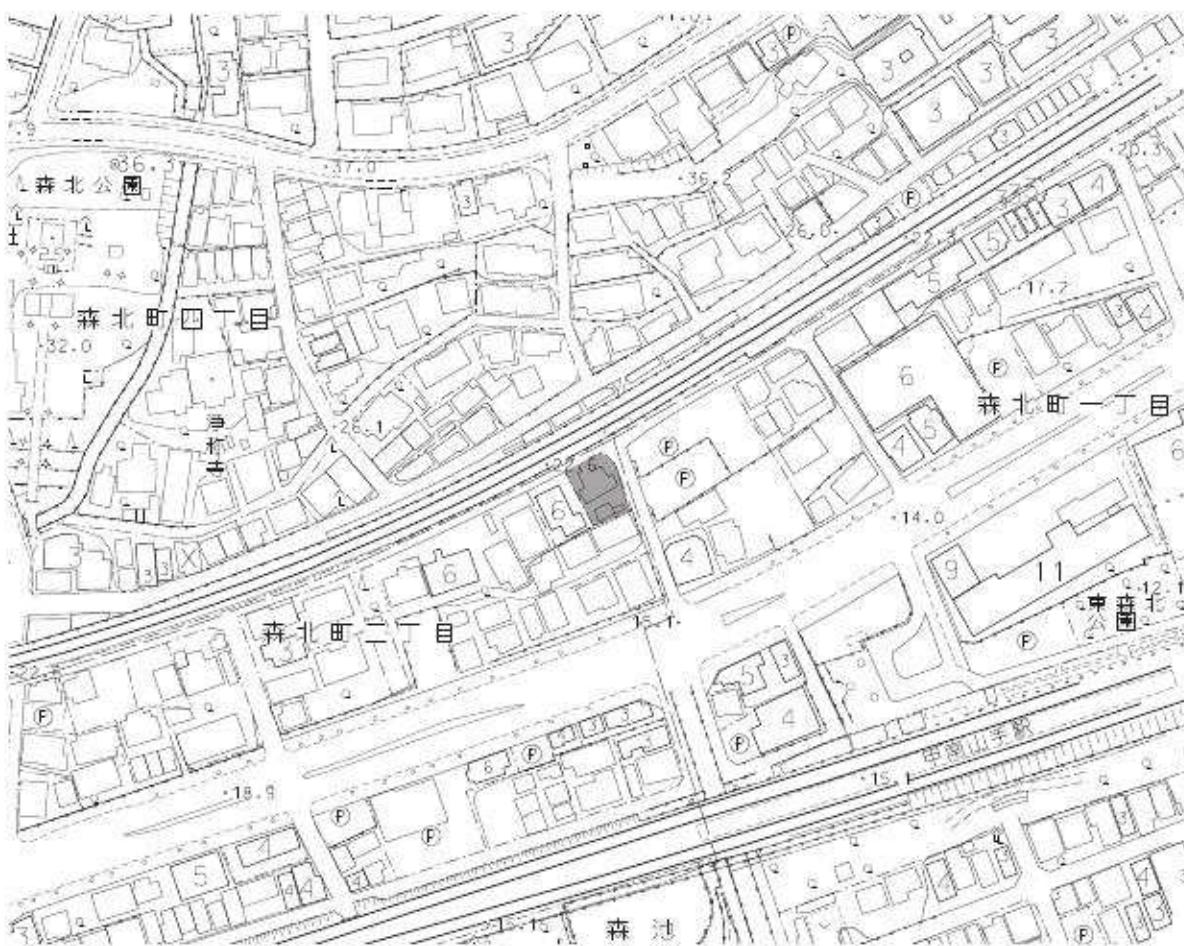
森北町遺跡は縄文時代から飛鳥時代にかけての複合遺跡として知られ、とくに弥生時代後期から古墳時代がその最盛期と考えられる。周辺には森南町遺跡、郡家遺跡、住吉宮町遺跡など、同時期の集落遺跡や古墳群が多数存在し、互いに有機的な関係性を築いていたとみられる。昭和39年の発掘調査を端緒とし、調査次数は現在までに29次に及ぶ。

2. 調査の概要

今回の調査は、民間事業者による共同住宅建設に伴うものである。工事予定範囲のうち、道路境界と接近し掘削に際して安全確保が難しい部分を除外した部分について実施した。工程の便宜上、調査区を東西に2分割し、東をI区、西をII区として順次着手した。

基本層序

本調査区の特徴として、六甲南麓の急な傾斜地に位置する点がある。周辺の道路地盤から今回検出した遺構面までは、掘削深度約60cm程度だが、標高では、調査区北端で20.2m前後、南端では19.0m前後と、南北長約11mの調査区内においてさえ1m以上の高低差を有する斜面地である。



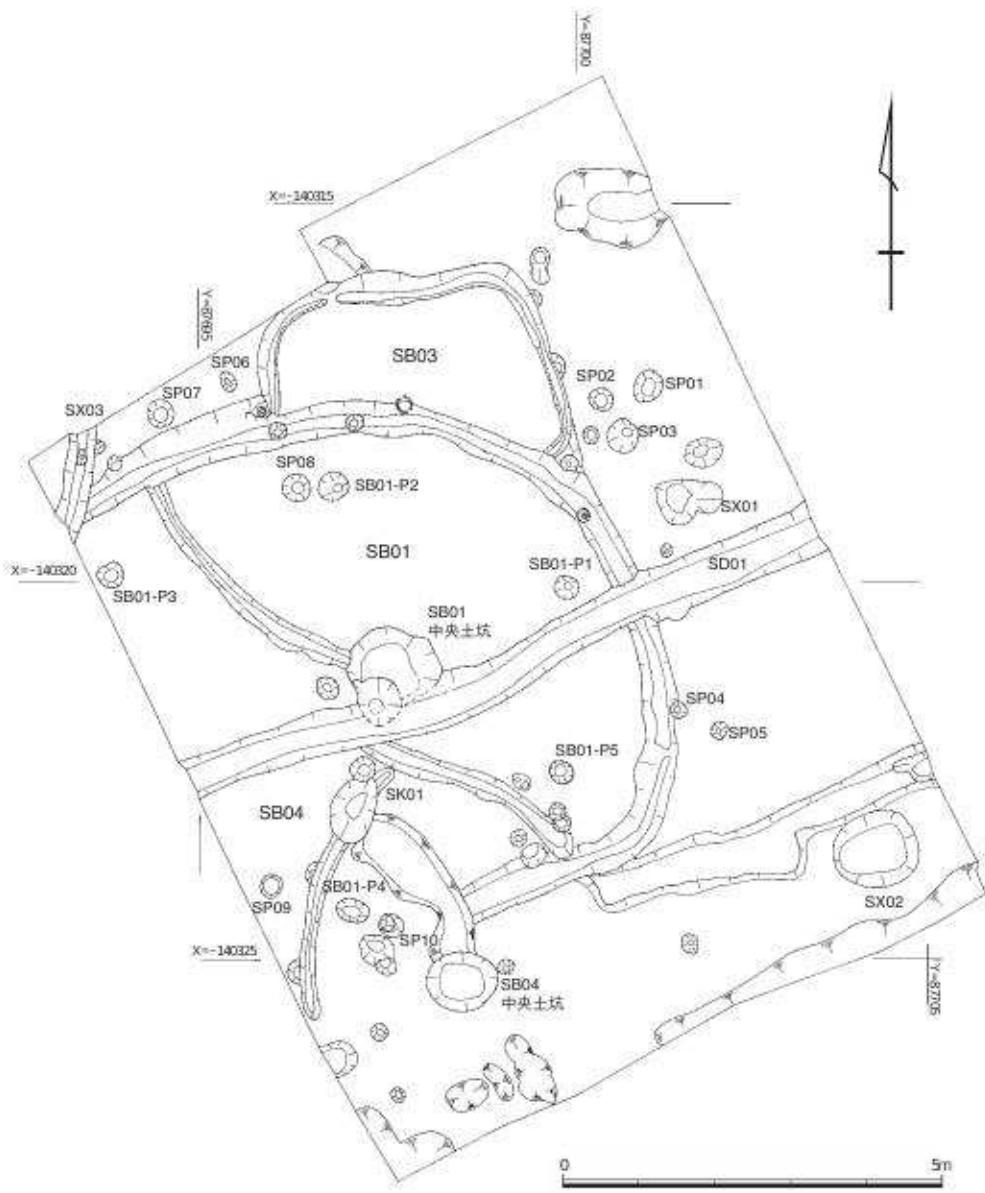
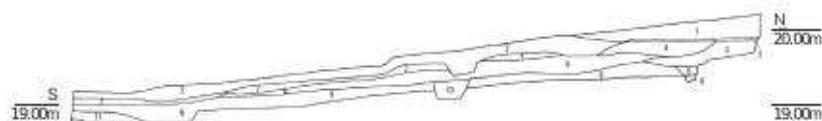


fig.14 調査区平面図



1. 10YR7/6 明黄褐色砂（旧耕作土）
2. 10YR7/1 灰白色粗砂（平安末期洪水砂）
3. 10YR4/1 褐灰色粘質砂（弥生時代包含層）
4. 10YR5/1 褐灰色砂（弥生時代包含層）
5. 10YR5/2 灰黄褐色粗砂（SX03）
6. 10YR5/2 灰黄褐色砂（SB01周壁溝）
7. 10YR4/4 褐色砂
8. 10YR4/2 灰黄褐色砂（包含層）
9. 10YR3/2 黑褐色砂に炭混（SD01埋土）
10. 10YR4/1 褐灰色砂に 10YR6/4 にぶい黄橙色砂ブロック状に混
11. 25Y6/2 灰黄色粗砂（弥生時代洪水砂）
12. 25YR5/1 黄灰色細砂（弥生時代洪水砂）
13. 25Y3/1 黑褐色粘土（弥生時代包含層）

fig.15 II区 西壁土層断面図

今回の調査では、上記の標高で弥生時代中期から後期を主体とする遺構面を検出したが、遺構面基盤層は六甲南麓に特有の花崗岩バイラン土壌である。この遺構面より上位には、地表面から順に①旧耕作土、②洪水砂ないし鉄砲水のような急激な一過性の水流由来の灰色系砂層、③・④弥生時代包含層2層が堆積していた。なお調査区南端でのみ、包含層直下に⑤弥生時代の洪水砂の堆積も確認しており、今回遺構面としたバイラン土層(⑥)より上位には4ないし5層の堆積層を数えることができる。

このうち遺構面を形成するのは、②の洪水砂上面、③あるいは④の包含層上面、⑥今回検出の遺構面、の3面である。

②の洪水砂層上面では、平安時代末期頃のピットを複数検出している。③、④の上面では弥生時代後期の竪穴建物1棟、中期の可能性が高い竪穴建物1棟、溝1条、⑥の上面で弥生時代中期の竪穴建物1棟のほか、複数のピットが検出された。

すなわち、当該調査地においては、第1遺構面=平安時代末頃、第2遺構面=弥生時代中期から後期、第3遺構面=弥生時代中期、の3時期3面の遺構面が存在すると考えるべきである。

ただし、②の層については、後世の削平により調査区全体での堆積は確認できず、部分的に残存した状態だった。また③、④についても、バイラン質の黒褐色系の粘質砂層をベースとし、同系色の埋土を有する遺構であったため、平面検出作業にあたって、目視で遺構の輪郭が不明瞭にしか捉えられなかった。

上記理由により今回の調査では、目視で明瞭に平面形が把握できる⑥の層上面まで掘削を行い、結果的には3時期1面での検出となった。したがって検出後の遺構の形状は1、2面のものが実際の切り合い関係と逆転した、不完全に欠損した状態となった。



fig.16 I 区全景（南西から）



fig.17 II 区全景（南東から）

検出遺構

ピット38基(SP)、土坑1基(SK)、性質の不明な遺構(SX)4基、竪穴建物3棟を確認した。SXと遺構名を付したものには竪穴建物の周壁溝の可能性があるものも2か所含まれる。

ピット 直径10cm~35cm、深さ5cm~80cm程度と規模にはらつきがある。そのうち、灰色系の砂層の埋土を有し、平安時代末の須恵器や土師器の破片を出土するものは、本来第1遺構面で検出すべき遺構と考える。これに該当するピットは、SP01、02、07、10である。その他にもこの時期のピットは存在するが、出土遺物を詳細に検討しないと確定できない。

土坑 (SK01) 長径95cm、深さ15cm程度の楕円形である。弥生土器を出土しているが、詳細な時期は不明である。

不明遺構 (SX01~04) SX01は、植栽の抜き取り穴等、後世の攪乱である可能性が高いが、黒褐色の粘質砂層を埋土とし、出土遺物は皆無であったため、断定できない。

SX02は、弥生土器の細片を数点出土したものの、灰色系の粘土を埋土とし、その他の遺構と明らかに埋土が異なる。この遺構が位置する部分は、近世以降の耕作に伴う段差とみられる一段落ち込む範囲であり、この段落ちに付随する時期の可能性も考えられる。直径1.15m、深さ70cm程度、壁体はほぼ垂直に立ち上がる。

SX03は幅40cm、深さ17cm程度の、緩やかに弧を描く溝状の遺構である。SB01の肩を切るもので、SB01より新しいとわかる。竪穴建物の周壁溝の可能性もあるが、大半が調査区外のため、詳細は不明である。

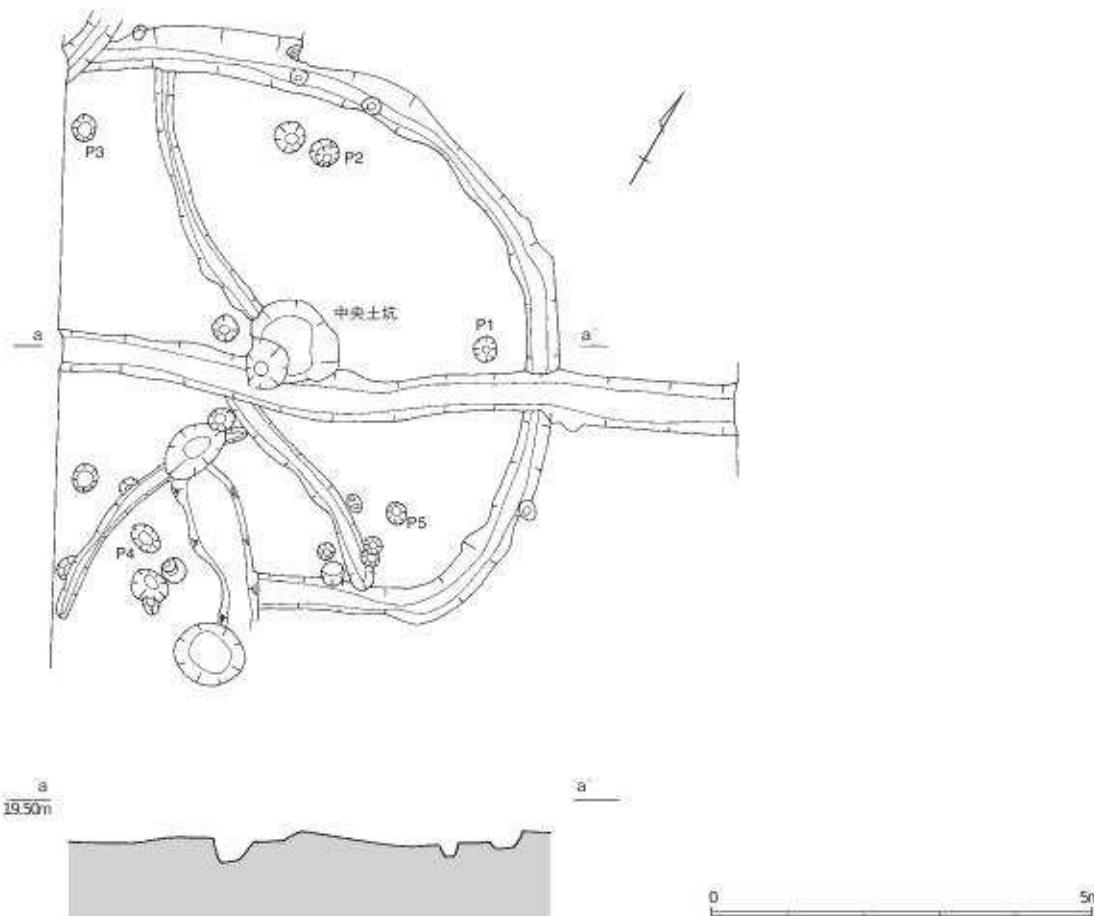


fig.18 SB01 平・断面図

SX04は幅25cm、深さ10cm程度の、緩やかに弧を描く溝状の遺構である。SB01の床面上で検出されている。SB01より新しい時期のもので、SB01の埋没後、埋土をベースとして形成された。第2遺構面で検出すべき遺構である。埋土、基盤層とも同系の黒褐色粘質砂のため、目視で壁体の立ち上がりを把握できず、周壁溝の一部のみが検出された。SB01周辺で検出したピットのいずれかが、この建物の主柱穴の可能性が考えられるが、確定できない。

溝 (SD01) 幅50cm、深さ10cm程度の東西に走る溝である。SB01を切り、調査区外にさらに伸びている。検出した範囲では、長さ8m以上。第2遺構面の遺構と考えられる。

竪穴建物 SB01は弥生時代中期の土器を出土する、円形の竪穴建物である。本調査地で検出した建物のうち、もっとも古い。第3遺構面の遺構である。中央に炉跡と思われる径1.35m、深さ40cmの土坑を有するが、土坑内に焼土、焼け面は確認できなかった。

建物埋土内には、炭が多く混じる。北側肩は良好な残存状態を示したが、南側は斜面地形に築かれたため流失し、浅い周壁溝のみが、一部確認できたに止まる。北側の壁高30cm程度、周壁溝の幅40cm、深さ15cm程度を測る。

炉跡を中心と仮定した場合、半径3.5m程度で、ほぼ正円なら径7m前後の床面となろう。ただし南の溝の一部が不整形に崩れており、正円でない可能性もある。

主柱穴の可能性があるピットは5基確認している。Fig.18に示したP1～P5を主柱穴とした場合、土坑を中心に、放射状に主柱が配置される建物が復元できる。P1～P5の規模は、いずれも径40cm、深さ40～80cm前後である。ただし、SB01、03、04、SX03、04の5棟の建物が複雑に切り合っており、当該建物の柱穴でない可能性も残る。

SB03は弥生時代後期の土器を大量に出土した方形の小型竪穴建物である。SB01が埋没した後これと重なる状態で、SB01の埋土を基盤として形成された。SB01と重なり合う部分は、互いの埋土色調が酷似しており、目視での平面検出ができなかった。したがって、地山に構築された部分のみ、一見するとSB01がSB03を切り込んでいるような完掘状況になったが、出土土器の時期はSB03が新相である。

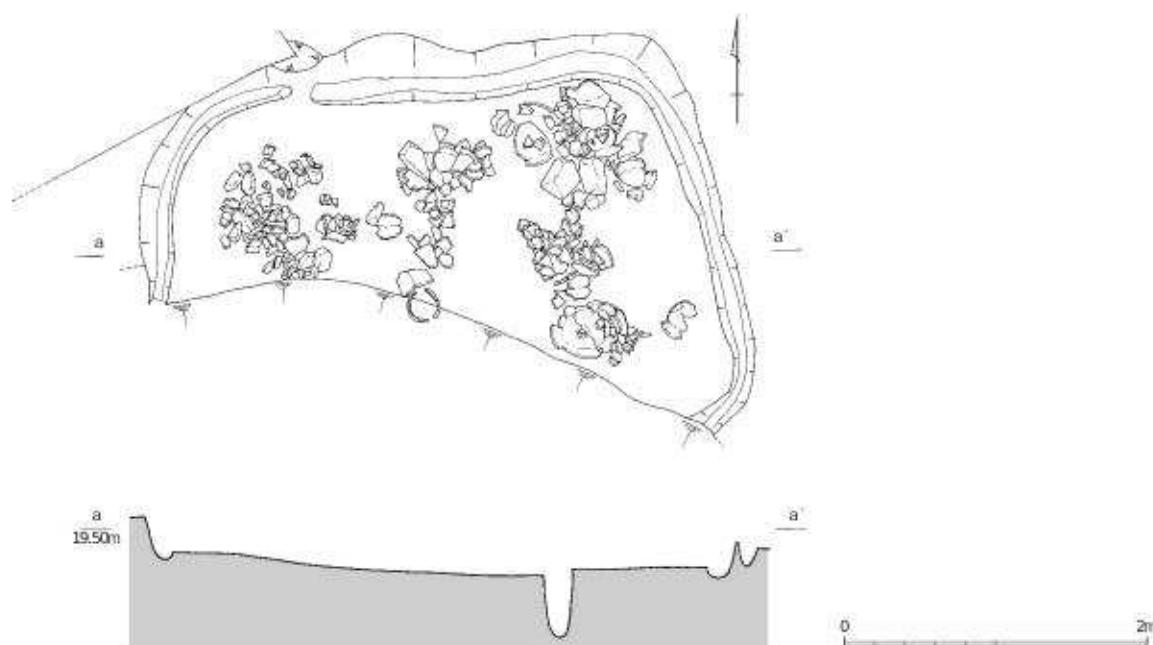


fig.19 SB03 平・断面図

建物四隅のうち、北西、北東、南東隅を確認している。東西面に比べ南北面が長い長方形の平面を呈し、南北側が桁方向となる。北面長さ3m×東面長さ2mを測る。

主柱穴は東に1か所確認しているが（fig.19・断面図参照）対面西側に対になる柱穴がなく、柱配置は不明である。2本柱構造の可能性も考えられる。

炉は付随せず、住居でない可能性が高い。埋土内には多量の土器が含まれており、建物廃絶時に一括投棄したか、意図的に土器を残した可能性が高い。これらの土器は、完形に近い良好な残存状態のものが多かった。

SB04はSB01の南半に、これと切り合って検出した。ただし傾斜地のため、ほぼ流出して欠損しており、周壁溝の一部と炉跡の可能性がある土坑を確認したのみである。弥生時代中期～後期の土器を出土しているが、上述のように複数の建物が複雑に切り合っており、SB04周辺から出土した土器は上位の遺構、北側の遺構からの流入品も多数含まれると見るべきである。

特に炉跡と思われる土坑の北側に、水流で削られたような痕跡があり、この中から大量の土器が出土した。またSB04より南側の範囲には、弥生時代と思われる洪水砂が堆積していたことからも、後世の流入が著しいと判断する。したがって正確な平面や時期判定、SB01、SX04との前後関係などは判断不能である。主柱穴も確定できない。土坑を中心土坑と仮定した場合、径4.5m程度の円形建物が復元できる。

3.まとめ

当該調査区は、六甲南麓の急な傾斜地で、南半分の遺構は極めて残存状態が悪かった。北半については、比較的良好に残存していた。

今回確認した3棟の竪穴建物および、竪穴建物の可能性がある2か所の遺構の構築順は、以下の通りに変遷する。

①SB01（円形・弥生時代中期。直径7m程度）→②SX04（円形・弥生時代中期か。直径4.5m程度）→③SB03（方形・弥生時代後期。北面長3m×東面長2m）。

SX03はSB01より新相だが、SX04との前後関係は分からぬ。円形であり、弥生時代中期の可能性があるが、出土遺物がほとんど不明である。建物以外の可能性も考えられる。SB04は構造がSB01と類似することから、同時期ないし近い時期の可能性がある。

なお、本報告で示した遺構の年代観は、あくまで調査中の所見である。複数の遺構が複雑に切り合う状態で確認されており、今後遺物整理作業を通して、個々の遺構の時期を厳密に確定し直す必要がある。



fig.20 SB01・03検出状況（北東から）



fig.21 SB04検出状況（北東から）

2. 森北町遺跡 第30次調査

1. はじめに

森北町遺跡は、六甲山系より大阪湾へと流出する高橋川が、六甲山系南麓の扇状地へ流れ出す扇頂部付近、標高約20~40mの傾斜変換点付近に立地する、縄文時代~中世の遺跡である。昭和20年代以降、弥生時代~古墳時代の遺物が採集され、昭和39年に森北町4丁目で建設工事の際、厚い遺物包含層が確認され、長頸壺などの弥生土器が出土した。昭和62年度に寮建築工事に伴い、第1次調査が実施されて以来、これまで約30回の発掘調査が実施されている。

これまでの調査では、森稲荷神社の東側で実施された第1次調査で、方形周溝墓の可能性がある溝から弥生時代中期（Ⅲ様式）の遺物が出土した。中世の遺物も確認されている。

森稻荷神社の西側から南西側にかけては、弥生時代～古墳時代の遺構・遺物が濃密に確認されている。昭和62年度の第2次調査では、弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴建物2棟が検出され、これを覆う遺物包含層から、破鏡と考えられる青銅鏡片（重闊文銘帶鏡：前漢鏡）が出土した。昭和63年度の第8次調査では銅鏡が出土するなど、青銅製品の出土が注目される。

平成元年度の第10次調査（旧第8次）では、弥生時代中期～飛鳥時代の4面の遺構面が確認された。第4遺構面では、弥生時代中期～古墳時代前期の竪穴建物・掘立柱建物が検出され、山陽・山陰・河内などの各地域で製作された、弥生時代末～古墳時代初頭の土器が多量に出土した。第3遺構面からは、古墳時代前期後半～中期の竪穴建物・流路が検出され、流路からは東海地域で製作された土師器や、第3遺構面を覆う洪水砂（5世紀）から土師器・初期須恵器あるいは韓式土器が出土するなど、森北町遺跡と各地との交流を窺わせる遺物が出土している。

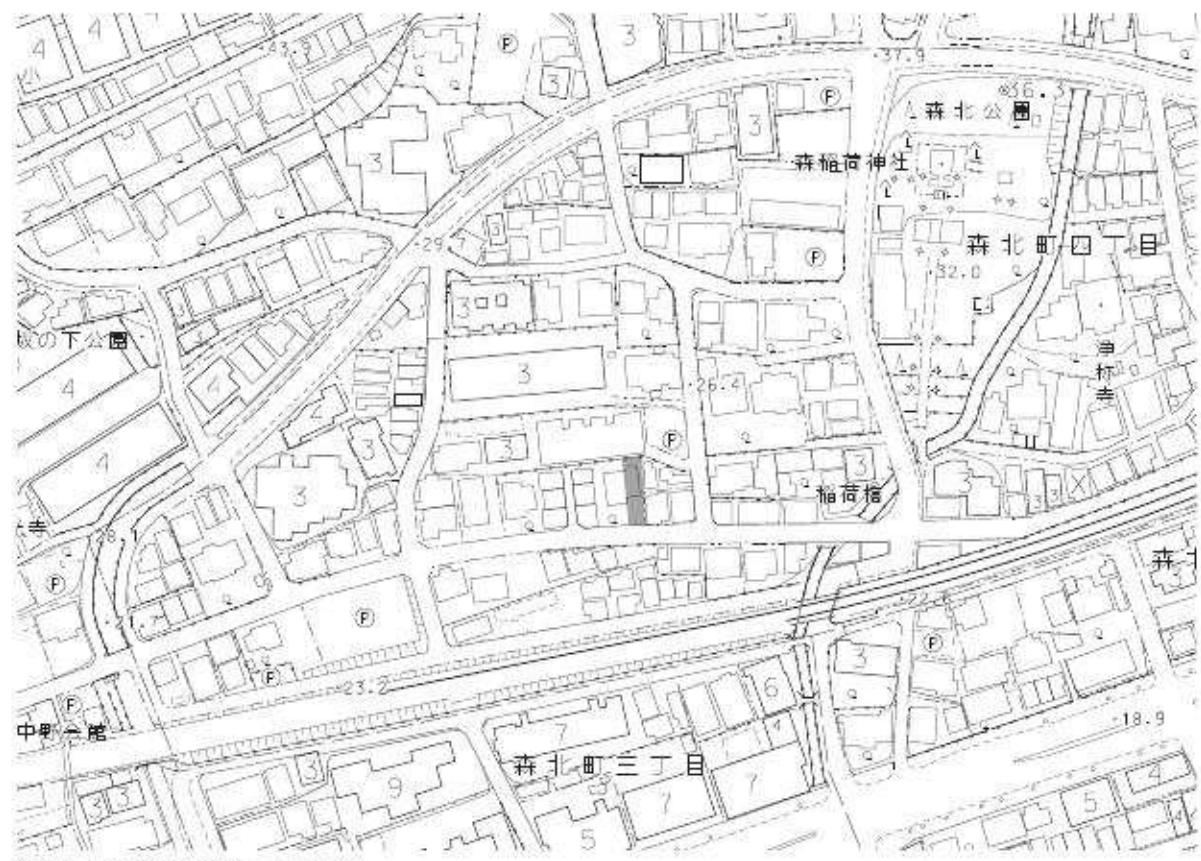


fig.22 調査地位置図 1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、個人住宅建築に伴うものである。昭和62年度に実施した、第3次調査地の南側に隣接する。西側隣接地では平成28年度の試掘調査で弥生時代の溝が確認されている。

工事計画により、建物基礎の掘削が文化財に及ぶ範囲について発掘調査を実施した。調査は残土置場の確保の関係上、2分割の反転調査を実施し、北半を1区・2区とし、南半を3区とした。調査地は、現況で北から南へと下がる緩斜面地であり、南西へもやや下がっている。

基本層序

盛土層下に複数の耕土・床土層が存在し、調査区の北側で現地表面から深さ0.35m、南側で同じく深さ1.2m前後に遺物包含層である淡灰褐色砂質シルト(15層)及び灰褐色砂質シルト(16層)が存在する。その下層の暗褐色シルト(18層)の上面で第1遺構面を検出した。この暗褐色シルトは、弥生時代～古墳時代の遺物が含まれる遺物包含層である。

暗褐色シルトの下層には、暗茶灰色シルト(22層)が1・2区北半の一部を除いて、全体的に広がり、3区南西角付近では灰色極細砂(19層)、暗褐色シルト(20層)、暗褐色シルト(20層・やや暗)の堆積が認められた。これらの上面に遺構は検出されなかった。なお、19～22層は弥生時代の遺物包含層である。この下層の黄灰色粘質土の上面で第2遺構面を検出した。

現地表面から遺構面までの深さは、調査区北側で第1遺構面が0.45m前後、第2遺構面が0.55m前後、調査区南側では、それぞれ深さ1.3m前後、1.5m前後である。

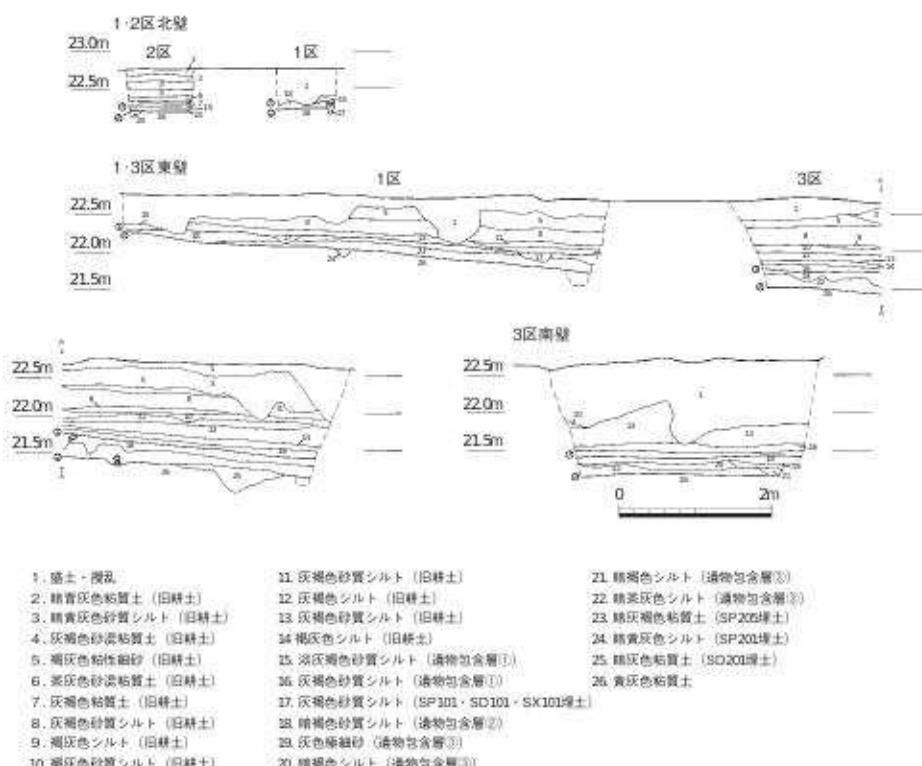


fig.23 土層断面図

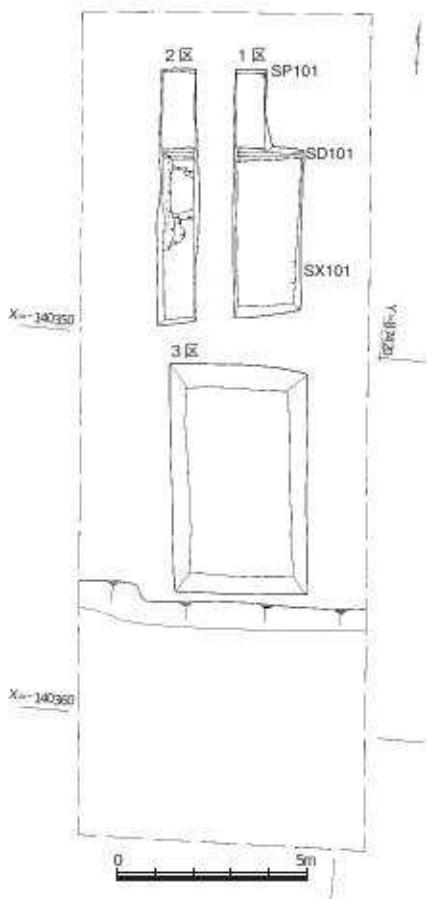


fig.24 第1遺構面平面図

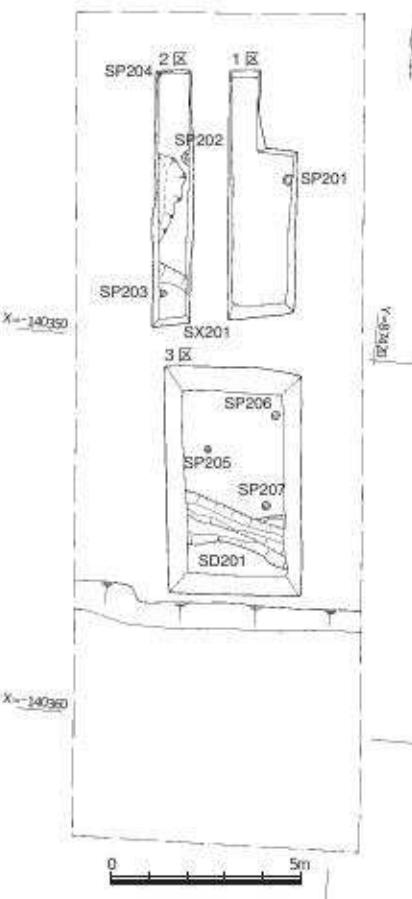


fig.25 第2遺構面平面図

第1遺構面

溝1条、ピット1基、落ち込み状遺構1基を検出した。

溝(SD101)は、1・2区北半で検出した東西方向の溝である。主軸はN-84°-E、幅0.35m前後、深さは0.07~0.1m前後を測る。弥生土器、土師器が出土した。

ピット(SP101)は、1区北東角で検出された直径0.1m、深さ0.17mで、弥生土器が出土しているが、埋土への混入であろう。建物などを構成するものであるかどうかは不明である。

SX101は、1区南半で検出した落ち込み状の遺構と考えられる。遺物は出土しなかった。

第2遺構面

第1遺構面のベース層である暗褐色砂質シルト(18層)には、弥生時代~古墳時代の遺物が含まれていたが、3区で古墳時代中期後半頃と考えられる須恵器などが出土した。暗褐色砂質シルトの下層では遺構面は確認されなかった。壁面での断面観察では、下層の暗茶灰色シルト(22層)などは凹凸をもって堆積している状況が確認でき、堆積過程の中で時期差を伴ったことが推定される。遺構は固くしまった黄灰色粘質土の上面で検出され、第2遺構面とした。

第2遺構面からは溝1条、ピット7基、落ち込み状遺構1基を検出した。

溝(SD201)は3区南半で検出した、北西から南東方向の溝である。主軸はN-75°-Wで、幅0.8~1.4m、検出面から深さ0.18~0.33mを測る。弥生土器片が出土した。

ピット(SP201~207)は1区1基、2区3基、3区3基の計7基を検出した。直径は0.15~0.4m、検出面からの深さは0.08~0.3mを測る。SP203以外は弥生土器片が出土した。



fig.26 1区第1遺構面全景（南から）



fig.27 3区第2遺構面全景（北西から）

SX201は2区南端で検出した。調査区外へ続くため規模は不明であるが、南側へ下がっており、検出面からの深さは0.1mである。弥生土器片が出土した。底面でSP203を検出している。

3.まとめ

今回の調査では、弥生時代と古墳時代以降と考えられる2面の遺構面を検出した。

第1遺構面からは 1・2区で溝、1区でピット、落ち込み状遺構を検出した。東西方向の溝であるSD101は、南への斜面と交わることから、山側からの湧水に対して、排水機能などの効果を求めたものと推定される。第1遺構面の時期は、遺物包含層を含めて出土遺物が小片のため特定は困難である。

第2遺構面の各調査区から溝、ピット、落ち込み状遺構を検出した。各遺構からの出土遺物は小片が多かったが、遺物包含層からは弥生時代中期後半（IV様式）～後期（V様式）頃の弥生土器が出土しており、検出遺構も概ねこの時期と考えられる。また、遺物包含層から磨製石斧（扁平片刃石斧）片1点が出土した。

今回の調査地の北西側に近接する、第10次（旧第8次）調査では、弥生時代後期の竪穴建物や、弥生時代中期～後期の遺構・遺物が数多く確認されており、集落域とみられる。今回の調査地はその縁辺部に位置するものであろう。

3. 深江北町遺跡 第17次調査

1. はじめに

深江北町遺跡は、昭和59年に県営住宅建設に伴い実施した試掘調査によってその存在が確認され、16次にわたって発掘調査が実施されている。

これまでの調査では、古墳時代初頭の円形周溝墓群および土器棺墓や飛鳥時代～平安時代までの堅穴建物・掘立柱建物等、古墳時代後期の祭祀場が確認されている。発見された出土品としては、奈良時代から平安時代の遺構より、硯、青銅製帶金具、小型銅鏡、瓦、墨書き土器、木簡、綠釉陶器、灰釉陶器など一般の集落から出土することの少ない遺物が多く発見されている。深江北町遺跡の北側に隣接する芦屋市津知遺跡からは平成5年の調査で「和同開珎」「萬年通寶」が出土している。さらに、「承和」の年号が入った米の支給伝票木簡や、「九九八十一・八九七十二」と書かれた木簡や、「驛」、「驛・(大)垣・北・大西・東・百」等と墨書きされた土器が出土している。

これらの出土遺物から、山陽道に設置されたと文献に伝わる「葦屋驛家」またはそれに関連する施設が近くに存在していたことを示唆するが、驛家の施設と断定できる遺構はいまだ確認できていない。また、各種土錘・蛸壺等の漁具が多く出土し、海との関わりが深い人々が生活した集落でもあることが指摘されている。

遺構群が分布する浜堤の北側と東側の湿地には、古墳時代から水田が拓かれるが、東側にある芦屋川の氾濫の影響をしばしば受け、複数層の水田面が洪水砂に覆われる状況が確認されている。



fig.28 調査地位置図 1:4,000

2. 調査の概要

調査は、阪神電気鉄道本線の連続立体交差工事に伴うもので、平成23年度（第12次調査）18箇所と平成24年度（第14次調査）7箇所の合計25箇所の調査に隣接している。発掘調査は、これまでと同様に調査必要範囲において、シートバイルで囲って調査を行った。今回実施した調査区は計25箇所で、調査区の呼称は、各橋脚に工事番号として付している呼称名を用いた。以下に主だった調査を記す。なお、今回の調査成果については、平成29年度に『深江北町遺跡第17次調査埋蔵文化財発掘調査報告書』を刊行しており、詳細については報告書を参照されたい。

B79区

柱穴・ピット 第3遺構面で、奈良～平安時代初め頃の柱穴・ピットが18基確認されている。第12次調査で確認された柱穴と並びが一致し、複数の掘立柱建物が重複していることが判明した。柱穴はほぼ東西方向に並び、東西方向の棟の建物が、複数回同じ場所に建てられたと推定される。



fig.29 B79区 第3遺構面全景(東から)

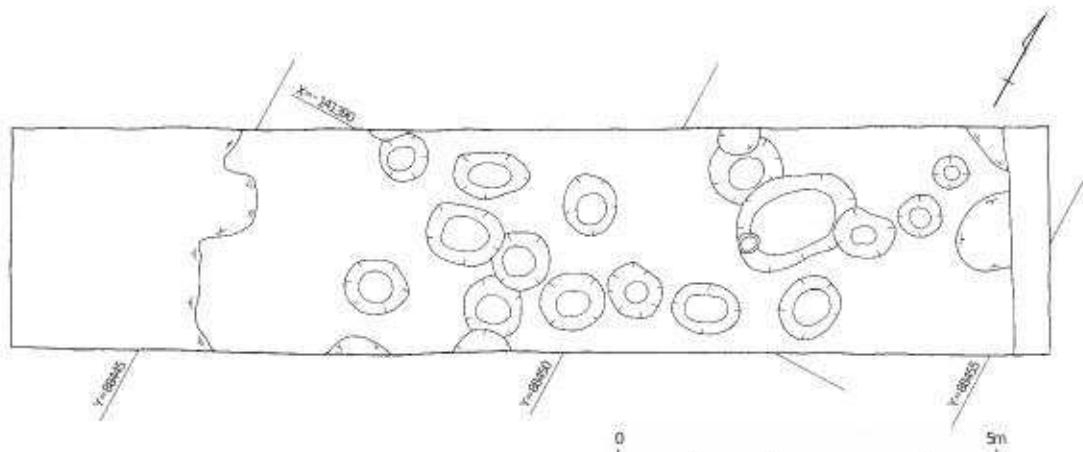


fig.30 B79区 第3遺構面平面図

B80-A区

柱穴・ピット 奈良・平安時代の第1遺構面で柱穴・ピットを21基検出した。うち2基は柱材が残存していた。検出した遺構と前回の結果から、南西～北東方向の柵列の可能性がある。また、湿地の堆積土上面にピットが確認されたことから、ある程度埋没した段階で掘り込まれたものと判断される。

第2遺構面では、調査地の東半分は湿地で、曲物の部材、木錘、大量のはつり材、木の枝、松笠等が出土している。



fig.31 B80-A区 奈良・平安時代遺構面全景(東から)

B80-B区

湿地 中世耕土の下層は、奈良～平安時代の土器を多く含む湿地上面になる。調査区西側の黒色砂質シルト層上面では杭跡・礫群・土器小破片群が出土している。同層からは金銅製の端止め金具、木簡、土馬等の特殊な遺物が出土している。その下層からは「手」と書かれた墨書き土器、小型の円面鏡が出土した。さらに下層からは飛鳥時代の土器が出土している。

湿地内から出土した木製品では木簡、杓子、斎串、馬形、舟形、下駄、机の脚部と思われるほど穴のある部材などがある。また、桃の種子や松葉の塊などの植物化石が出土している。

B82-A区

柱穴・ピット 第2遺構面から土坑・柱穴を40基以上検出した。このうち、SP01からは柱材が出土している。埋土には奈良時代の土師器・須恵器などの破片が含まれる。建物の復元には至らないが、SP28・SP14・SP42、そして第12次調査区のSP43がほぼ等間隔で一列に並んでいる。それぞれのピットの間隔は約1.5mである。方角は北から東に4°振っている。また、SP01・SP44、第12次調査のSP02もほぼ等間隔に一列に並ぶ。それぞれのピットの間隔は約1.6mである。方角は北から西に6°振っている。また、SP02から90°東に振つて、SP03と組み合う可能性も考えられる。



fig.32 B80-B区 第1遺構面全景(西から)



fig.33 B82-A区 第2遺構面全景(東から)

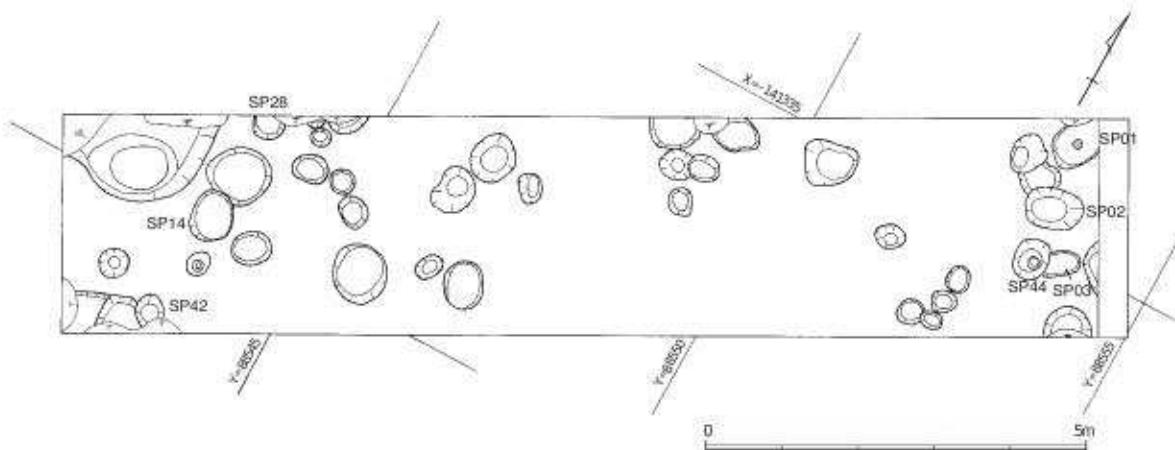


fig.34 B82-A区 第2遺構面平面図

B83-B区

水田 薄い洪水砂の下層で奈良～平安時代初め頃の南北方向の畦畔2条を検出した。この面では偶蹄目及び人の足跡が複数確認された。湿地からの出土遺物としては、記号を記した墨書土器、転用硯、馬の歯、斎串、馬形木製品、ほぞ穴のある建築材、板材、桃の種子などが出土している。

P3区

土坑・ピット 奈良時代頃の遺構面で、土坑5基、ピット1基、人と偶蹄類の足跡を検出した。SK01からは、須恵器高坏の脚部が出土している。

P6区

土器溜 第6遺構面で人の足跡を確認した。土器溜(SX01)からは古墳時代前期の高坏2点が土圧によって押し潰された状態で出土している。

さらに下層の第7遺構面では土坑1基と土器溜1箇所、人と偶蹄類の足跡を検出した。土坑からは布留式の直口壺が2点出土した。

3.まとめ

今回の第17次調査地は、第12・14次調査地に接した部分を調査して、前回の調査成果を追認する結果となった。

B74～78区までは概ね浜堤と湿地が交錯する部分であり、弥生～平安時代には居住地として永続的に使用された痕跡は認められなかった。当該時期には大半が湿地または荒地であったと推定される。

B79～82-B区で確認された浜堤上の遺構群は前回の調査で検出された柱穴・ピット等の遺構と連続することが判明し、奈良・平安時代の生活の拠点であったと考えられる。

B80-B、B83-A、B83-B区などの湿地部分からは前回同様に、奈良時代前後の土器とともに多量の木片に混じって、斎串、馬形、舟形などの祭祀具、杓子、下駄、机などの脚部と推定されるものなどの生活用具、建築材、板材、木製品が出土している。また、「津守里戸主津守…」「米五斗…」と記された木簡が出土し、これまでの調査成果と併せて地方官衙の性格を帶びた遺跡であることが明らかになりつつある。

「驛」「大垣」などが書かれた墨書土器や転用硯の出土点数は周辺の調査地に比べ抜きん出ており、筆記作業を常に行う施設が存在したことを窺い知る資料を得られた。

前回の調査でB81-B～82-B区にかけて3区間で連続して発見した古墳時代の祭祀場とそれに伴う遺物は、前回の調査区と接した部分を調査しているにもかかわらず、全く確認することができなかった。これらの遺構・遺物は南北方向にはごく限られた狭い範囲に、東西方向に帯状に広がるものと推定される。

P2～P8区までの間は基本的に低湿地が連続し、耕作地として利用される時期もあるが、海や河川から供給された砂や礫が堆積し、湿地が徐々に埋められていく状況が確認された。また、湿地層にはヒトや動物の足跡等が残されていることや、古墳時代の土器がほぼ完全な状態で複数出土する地点があり、当該区付近で何らかの祭祀が行われた可能性がある。

前回の調査同様に「驛家」に関わる木簡や墨書土器は主に湿地内から発見されており、「葦屋驛家」である蓋然性は高まってくるが、浜堤上の遺構では「驛家」と断定できる遺構は今回の調査でも確認することはできなかった。現状ではごく近辺に「葦屋驛家」または「菟原郡家」に関わる公的な施設が存在したことは確実であるが、未だその正体は明らかではない。

4. 北青木遺跡 第8次調査

1. はじめに

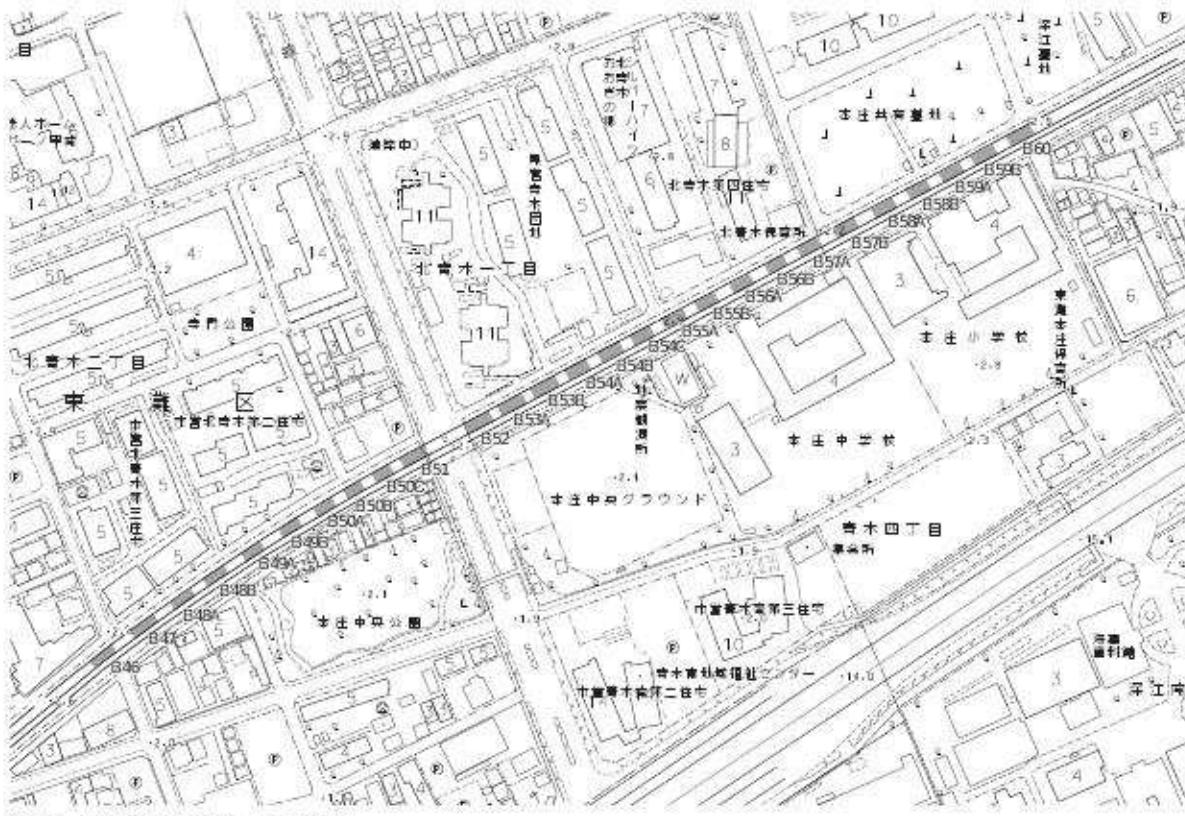
北青木遺跡は、大阪湾岸に形成された浜堤（砂丘）と堤間湿地に立地する、縄文時代～中世の遺跡である。昭和59年度に、県営住宅建設に伴い、兵庫県教育委員会により初めて発掘調査（第1次調査）が実施されて以来、これまでに7回の発掘調査が実施されている。

第4次調査では、堤間湿地北側の浜堤上に弥生時代前期～古墳時代前期の多くの土坑・ビットなどが確認され、集落域の存在が推定されている。第5次調査では、土坑に埋納された弥生時代中期後半の銅鐸（扁平紐式四区袈裟襷文銅鐸）が出土している。また、周溝墓の供献土器と考えられる弥生時代中期の土器や、後期後半の壺棺墓2基が検出された。第6次調査では弥生時代前期の赤彩を施した広口壺が出土し、阪神電鉄北側には墓や祭祀などの遺構が多く確認されている。

平成23年度に阪神電鉄本線立体交差工事に伴い実施された第7次調査では、本庄小学校北側及び本庄中央公園北西で、弥生時代中期後半の方形周溝墓が検出され、本庄中央公園北東では弥生時代後期の円形周溝墓が検出された。前記の調査区の方形周溝墓は、複数の組合式木棺が良好に遺存しており、弥生時代の墓制を考える上で貴重な資料である。

2. 調査の概要

今回の調査は、阪神電気鉄道本線の連続立体交差工事に伴うもので、橋脚工事により、掘削が及ぶ範囲について発掘調査を実施した。調査地は平成23年度の第7次調査の調査区北側に隣接し、下り高架線（神戸方面）への移設前の路線敷部分である。調査地点は27箇所である。調査地点の呼称は、工事にあたり橋脚に付けられている番号を使用した。



なお、本書では弥生時代中期の方形周溝墓が検出されたB47調査区と奈良～平安時代のビット等を検出したB57-A調査区を記すに止める。今回の調査成果については、平成29年度に『北青木遺跡第8次発掘調査報告書』を刊行しており、詳細については報告書を参照されたい。

地区	面積m ²	面数	検出遺構・遺物	地質
B46	49.0	1	弥生／中期方形周溝墓・後期円形周溝墓	浜堤
B47	44.0	2	弥生中期／方形周溝墓(周溝・埋葬施設)	土石流・干潟
B48-A	48.9	2	弥生後期／落ち込み 古墳初頭／溝 中世？／耕作溝	湿地・溝
B48-B	49.6	2	弥生中期／方形周溝墓 古墳初頭／溝 平安／溝・ビット・耕作痕	浜堤
B49-A	44.2	1	古墳初頭／溝	浜堤・湿地・溝
B49-B	36.4	2	古墳初頭／溝 古代以降／耕作痕	浜堤・湿地・溝
B50-A	31.2	1	古墳初頭／溝	浜堤・溝
B50-B	28.6	2	古墳初頭？／土坑・ビット	浜堤
B50-C	32.5	1	弥生中期／方形周溝墓(周溝)	浜堤
B51	35.0	1	弥生中期／祭祀土坑	浜堤
B52	39.0	1	弥生中期／祭祀土坑 古代／溝・耕作痕	浜堤
B53-A	32.5	1	弥生中～後期／溝・土石流 奈良／溝・ウマ下顎骨	浜堤・土石流
B53-B	32.5	1	奈良～平安／土坑・ビット 近世／井戸	浜堤
B54-A	32.5	1	弥生？／溝 奈良～平安／土坑・ビット	浜堤
B54-B	32.5	1	弥生？／溝 奈良～平安／ビット 近世／水溜め	浜堤
B54-C	32.5	1	奈良／溝・ビット	浜堤
B55-A	30.7	2	奈良～平安／土坑・ビット 中世／耕作溝 近世／水溜め	浜堤
B55-B	30.7	1	弥生前期／土坑／溝 奈良～平安／土坑・ビット	浜堤
B56-A	30.7	3	奈良～平安／土坑・ビット・炉床状遺構	浜堤
B56-B	30.7	1	古墳初頭／小型丸底壺 奈良～平安／土坑・ビット・井戸 近世／水溜め	浜堤
B57-A	39.0	2	奈良～平安／土坑・溝・ビット 焼土・炭化材	浜堤
B57-B	39.0	2	古代～中世／耕作溝 近世／溝	浜堤
B58-A	30.5	1	中世／溝 近世／旧河道	浜堤
B58-B	30.5	2	弥生中期／土坑 奈良～平安／遺物包含層(洪水層)・井戸 中世／耕作痕	浜堤
B59-A	30.5	2	弥生中期？／溝状遺構 中世／耕作痕	浜堤
B59-B	30.5	1	奈良／井戸 中世／旧河道・潮汐痕	浜堤・湿地・溝
B60	36.4	1	近世／耕作痕	土石流・湿地

*B47～B60の地質分類は第7次調査の分析結果(B46は掘削範囲の観察結果)／検出遺構・遺物欄は「時代」を省略

表13 北青木遺跡第8次調査内容一覧

B47調査区

調査区中央で第7次調査区から続く溝（SD201）を検出した。幅2.4m、深さ70~80cmで南側にやや深くなる。上層埋土からは弥生時代後期の土器が細片となって出土し、漏斗状となった断面の中位～下位の堆積層から弥生時代中期後半の複合土器（鉢と器台上部）1個体分が出土した。

この溝を境に、西側は浜提堆積、東側には土石流による粗砂礫層が堆積する。方形周溝墓は浜提面から湿地へと下がり地形となる際の部分に構築されている。方形周溝墓の規模は、第7次調査時のトレンチ調査によって東西が9.0mと判明していた。今回の調査では北側の溝は検出されず、埋蔵施設の検出状況からも南北長9.0m以上の南北に長い長方形プランの方形周溝墓になると考えられる。

ST205 SD201の西側で4基の埋葬施設を検出した。そのうちの1基が木棺墓ST205で、墓坑の幅は130cm、底板材のみが遺存していた。板材の幅は55cm、コウヤマキを使用していた。その他の埋葬施設には木質は遺存せず、土層観察でも棺を据えた痕跡はなく、土坑墓であったと考えられる。

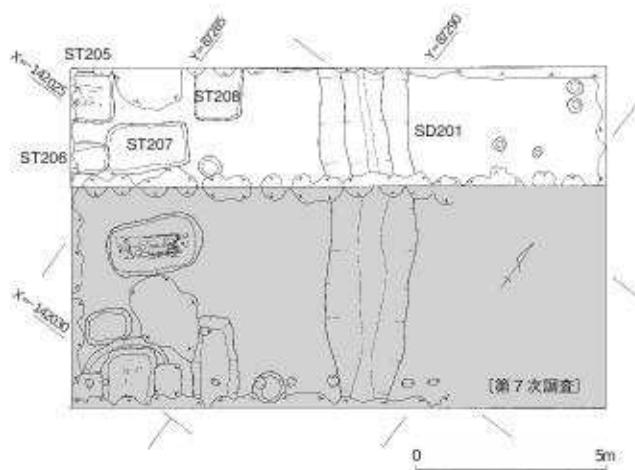


fig.36 B47区 調査区平面図



fig.37 B47区 調査区全景（東から）

B57-A調査区

遺物包含層上面とその下層の浜堤面の2面の遺構面を検出した。第1遺構面では、第7調査区から続く溝（SD01）と北側に続く溝（SD02）の2条の溝を検出した。

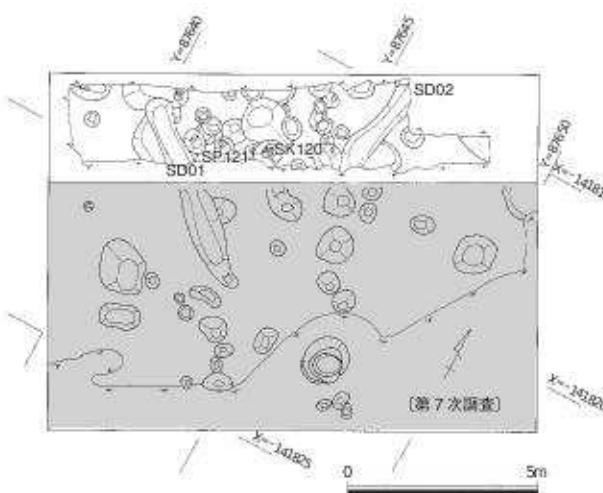


fig.38 B57-A区 調査区平面図



fig.39 B57-A区 調査区全景（西から）

第2遺構面では土坑14基、ピット21基、落ち込み2箇所など多数の遺構を検出した。ピットの径は25cm～60cmまでで、40～50cmの径のものが多い。検出面からの深さは浅いものが5cmほど、深いもので45cmである。ピットからは拳大の碟が出土したものもあり、遺構面が砂面という軟弱な地盤に対する沈下防止のための礎石と考えられるが、被熱した碟が多く、焼失した建物の一部、またはそれらの材の二次使用の可能性が考えられる。

遺構出土の遺物は須恵器の壺、壺蓋、塹、土師器の塹、皿などで8世紀代のものと考えられる。遺構検出面を覆う土層からは、小片が多いが、須恵器の壺、塹、皿、瓶、甕、などが出土した。遺物の時期は奈良時代後半、8世紀中頃～後半にかけてのものと考えられる。

3. まとめ

北青木遺跡では弥生時代中期後半に、方形周溝墓・土器棺墓などの墓域としての利用が始まり、第5次調査で検出された銅鐸埋納遺構など、祭祀空間としての側面も持ち合わせる状況となる。第5・6次調査の成果も合わせると、B46～B59-Bにかけてほぼ全域で弥生時代中期後半の遺構・遺物が確認される。方形周溝墓はB46・47・48-Bの一群とB52・53-B付近、B52-A・B付近の三つのまとまりが確認できる。B47の方形周溝墓は木棺墓4基、土坑墓4基の埋葬施設、B59-Bの方形周溝墓では木棺墓4基、土坑墓3基の埋葬施設が確認された。両者は複数埋葬であり、組み合わせ式木棺の棺材が遺存していた。

古墳時代には第7・8次調査でB49-Bの漆、B54-Aから布留式の甕などが出土し、B56-Bにおいて、第7次調査で平安時代の溝からではあるが、小型丸底壺に納められたとみられる石製管玉、ガラス小玉が出土している。しかしながら、顕著な遺構は確認されておらず、居住域などの実態は不明である。

飛鳥・奈良から平安時代は、B52～B53-BおよびB55-B～B57-A付近に遺構・遺物の分布のまとまりが確認される。ただし、B54-B～B56-Bは浜堤の高まりとみられ、後世の削平を受けており、弥生時代～平安時代の遺構が同一面で検出されている。奈良～平安時代には濃密な遺構分布が認められ、浜堤上での土地利用と進出が想定されるが、瓦や緑釉陶器などの出土から、一般的な集落とは異なる性格が考えられる。

中世以降は遺構・遺物共に、極めて希薄であると言わざるを得ない。顕著な遺構は確認されておらず、耕地としての土地利用が想定される。

今回の調査により阪神電鉄高架橋部分の調査が終了し、多くの成果が得られた。第5次調査以降、付近が祭祀空間であったことに加え、弥生時代中期～後期には墓域となり、墓域としての機能が見られなくなった後も、古墳時代前期頃までは水際での祭祀が行われる空間であったことが判明しつつある。また、奈良～平安時代の古代の遺構・遺物のまとまりは、深江北町遺跡など古代山陽道沿いに立地する官衙関連の遺跡からも近い海辺や内湾部縁辺に、職能集団などが存在したと推測させる状況を示すものと考えている。

検出遺構群と同時期の居住域が未だに発見されていない状況から、現状で集落域の復元は難しく、どの程度の距離感があるのか定かではないが、居住域に近い海辺、水辺を葬送・祭祀空間とし、事あるごとにやって来ては祭事を執り行ったのではないかと考えており、それらを想像させる資料が得られたものと捉えている。

5. 本山遺跡 第41次調査

1. はじめに

本山遺跡は、六甲山系より大阪湾へと流出する要玄寺川や天井川などにより形成された、扇状地の標高約9~24mの扇央部~扇端部に立地する、縄文時代~古墳時代・平安時代・中世の遺跡である。昭和58年度の第1次調査以来、これまでに40回の発掘調査が実施されている。

現在の国道2号線南側には、縄文海進時の海食崖と推定される段差が存在し、現況でも2m前後の比高差となっている。これを境にして旧地形は南北でその様相を異にしている。

国道2号線南側では、土坑に埋納された銅鐸（四区袈裟櫛文銅鐸）が出土した第11次（旧12次）調査や、弥生時代前期初頭頃の木製品が多量に出土した、第16・33次（旧17・34次）調査などで、弥生時代前期~中期の遺物が確認されているが、これまでに確認された遺構は、流路などが主体であり、多くは低湿地状の様相を呈している。一方、北側は段丘上に位置し、第18次（旧19次）調査で弥生時代中期~後期の掘立柱建物や土坑が確認され、第19次（旧20次）調査では前期の貯蔵穴、流路、中期の掘立柱建物、土器棺墓、土坑が検出された。また、第21次（旧22次）調査では、中期の竪穴建物が検出されており、国道2号線沿い北側に弥生時代の集落域の存在が推定されている。また、JR摂津本山駅南東の第4次（旧2次）調査では、弥生時代後期末頃の土坑が確認され、旧第34次調査では流路から中期後半~古墳時代初頭の遺物が出土するなど、本山遺跡は弥生時代前期初頭~後期末まで継続する、大阪湾岸地域を代表する弥生時代集落遺跡のひとつとして知られている。

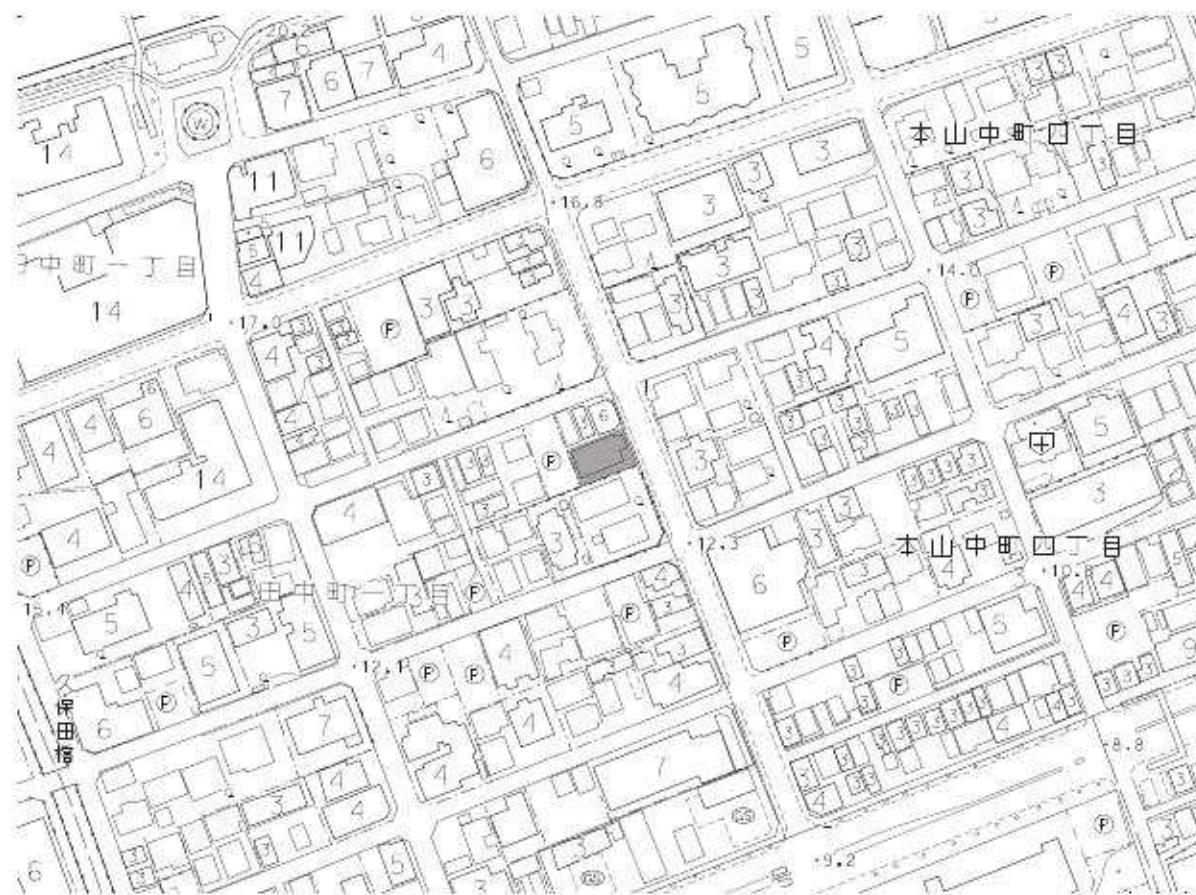


fig.40 調査地位置図 1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、共同住宅建築に伴うものである。調査地は平成11年度第33次（旧35次）調査地南側に隣接する。工事計画により、建物基礎の掘削が及ぶ範囲について発掘調査を実施した。調査は残土置場の確保の関係上、2分割の反転調査を実施し、南半を1区、北半を2区とした。調査地は、現況で北から南へと下がる緩斜面地であり、南西へもやや下がっている。

基本層序

現地表面から深さ約0.6～0.8m前後の盛土層下に、複数の耕土・床土層が存在し、その下層の暗褐色粘質土の上面で、第1遺構面を検出した。

これより下層は、調査区の西端部付近で、地山層である灰色粘質土を検出したが、灰色粘質土は東側へと落ち込み、調査区のほぼ全域に黒灰色粘質土などの湿地状堆積が認められた。遺構面までの深さは、第1遺構面が1.1m前後、第2遺構面が1.4m前後である。

第1遺構面

東西方向10条、南北方向2条の計12条の溝を検出した。

溝は1区SD101～108は暗褐色粘質土上面で検出されたが、2区SD109・110は暗褐色粘質土上層の茶灰色シルトや灰色粘質土の上層から切り込んでおり、他の溝よりも新しい。平安時代後期～鎌倉時代頃の土師器、須恵器、瓦器、白磁が出土した。

この他、1区北東部や2区東半で足跡が検出された。わずかに偶蹄目の動物足跡などが認められたが、多くは不明瞭であり、動物の種類や歩行単位の特定までに至らなかった。

第2遺構面

第1遺構面のベース層である暗褐色粘質土の下層には、黒灰色粘質土や黒灰色シルトなどの湿地性堆積が調査区全体に認められる。この下層に調査区西端部で、灰色粘質土を検出した。この灰色粘質土上面が第2遺構面であると考えられるが、遺構を確認することはできなかった。灰色粘質土は東側へ下がり、黒灰色粘質土などが堆積しており、調査地のほぼ全域が、南北方向の谷状地形に位置するものと考えられる。

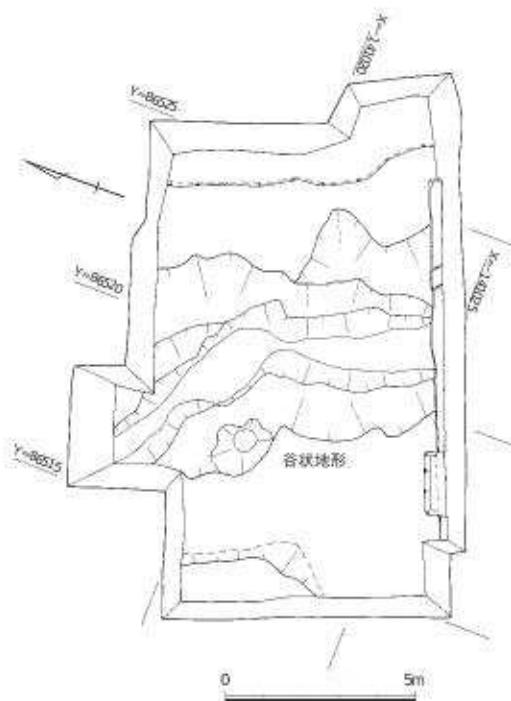
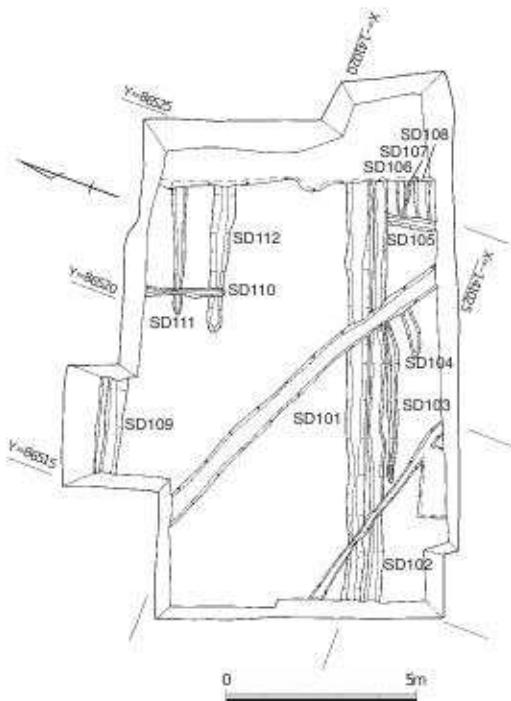




fig.43 2区 第2遺構面全景 (南東から)



fig.44 谷状地形内遺物出土状況 (北西から)

谷状地形は埋土の堆積状況から、埋没する過程で湿地状を呈していたと推定される。深さは現地表面から2.0mを超えており、掘削には危険が伴うため完掘はできなかった。調査区中央には、北西方向から南へと向かう流路状の堆積が存在した。埋土は礫を含む細砂やシルトなどが互層となっており、28ℓ入りコンテナ26箱分の大量の弥生土器片の他、サスカイト製石鎌、削器などの打製石器、大型蛤刃石斧片や石庖丁片などの磨製石器、砥石などの石製品や、板や加工痕のある木片、棒状の木製品などが出土した。特に最下層（黒灰色シルト・暗灰色混礫細砂）、暗灰色細砂層、黒灰色粘質土層からは、多くの遺物が出土した。弥生土器は、弥生時代中期（Ⅲ様式）～後期（V様式）頃のものが含まれているが、中期（Ⅲ・Ⅳ様式）のものが中心である。

最終堆積層である暗褐色粘質土層には、平安時代後期～鎌倉時代頃の須恵器・瓦器片が含まれることから、この谷状地形は中世までには埋没したものと推定される。なお、この流路状の落ち込み最下層では、2区で切断などの加工痕がある木材が出土したが、切断痕に新しい要素が認められることから、流路状落ち込み最下層への遺物流入の時期は、弥生時代後期ではなく、後に遺物が土砂と共に運ばれた可能性も考えられる。

この流路状堆積より下層の湿地状堆積層には、微細な土器片がわずかに含まれるのみで、遺物の出土はほとんど認められなかった。

3.まとめ

今回の調査では、埋土に多量の弥生時代の遺物を含む谷状地形と中世の遺構面を検出した。第1遺構面で検出した溝の方向は、現在の地割方向とほぼ同一である。今回の調査地から約150～200m北東の第3・4次調査地、約100m北に位置する、旧34次調査地でも同方向の溝が確認されており、中世段階には現在と同方向の地割が成立していたことが確認できる。しかし、近世～近代の暗渠は方向が違っており、明治18年（1885）の地形図にも、この暗渠と同方向の区画や溝などは存在しない。暗渠は天井川から南東方向に延びる等高線に対して、北西から南東に交わる角度であり、山側からの湧水に対して、排水機能を高める効果を求めたものと推定される。

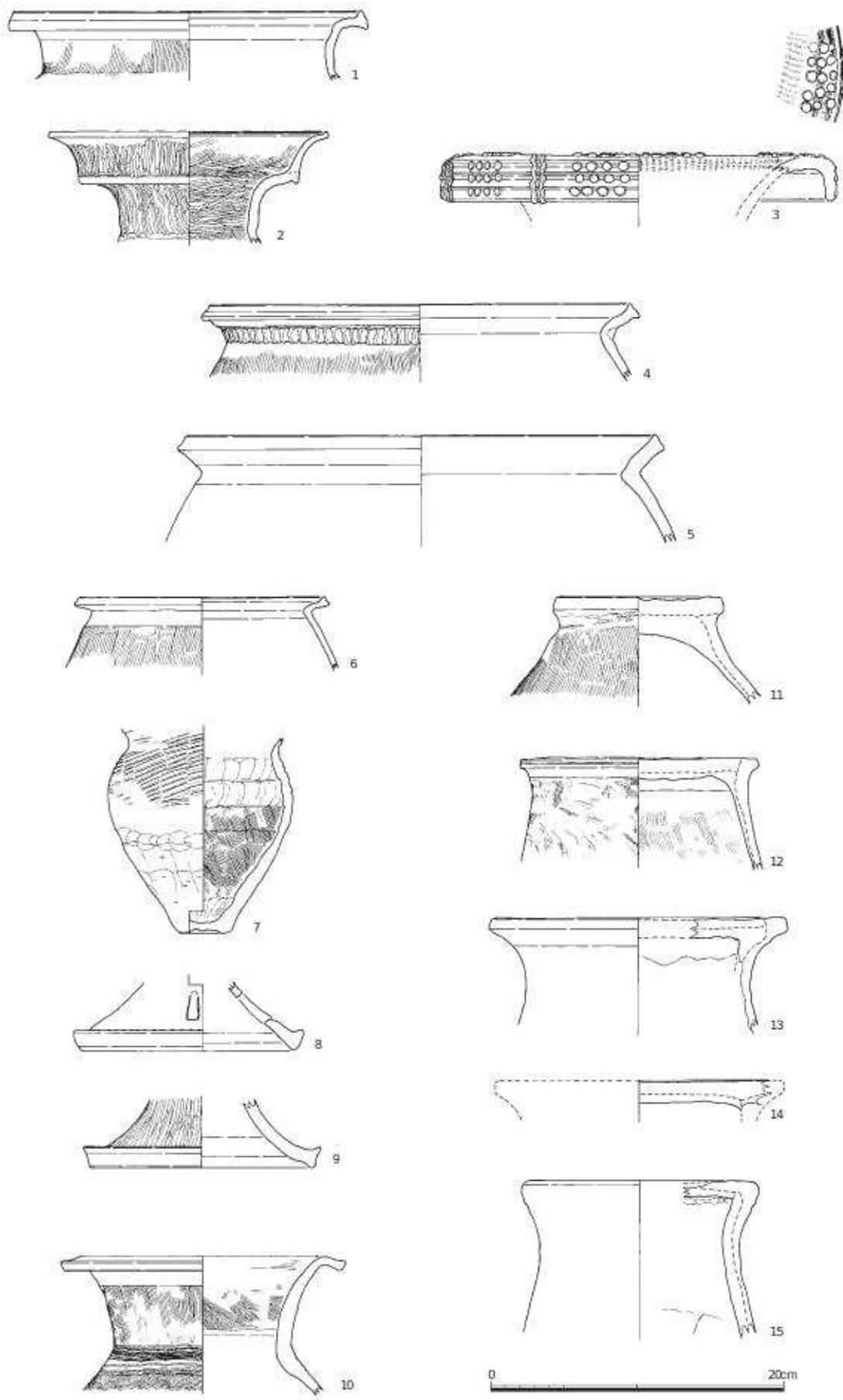


fig.45 出土遺物実測図

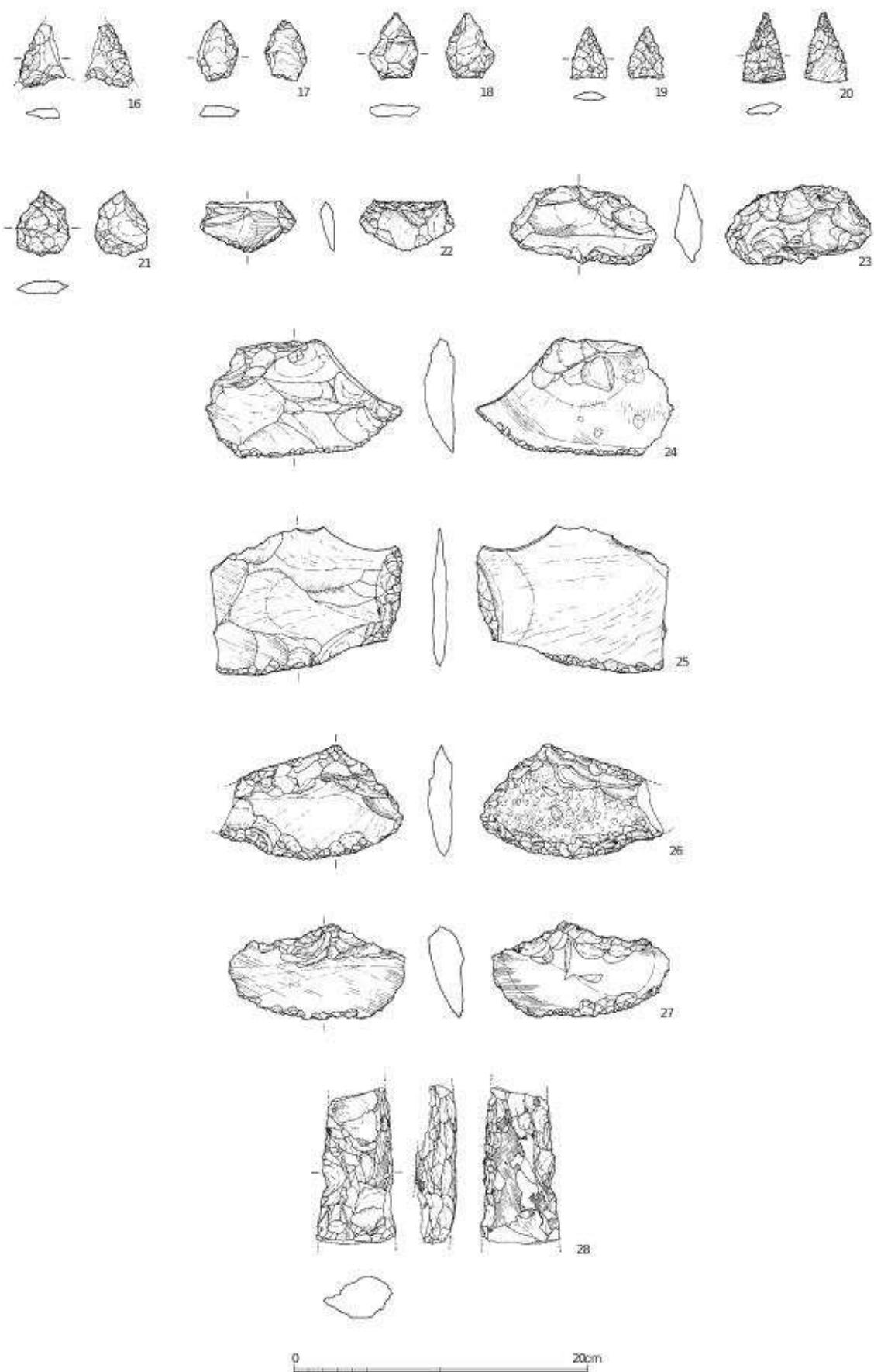


fig.46 出土遺物実測図

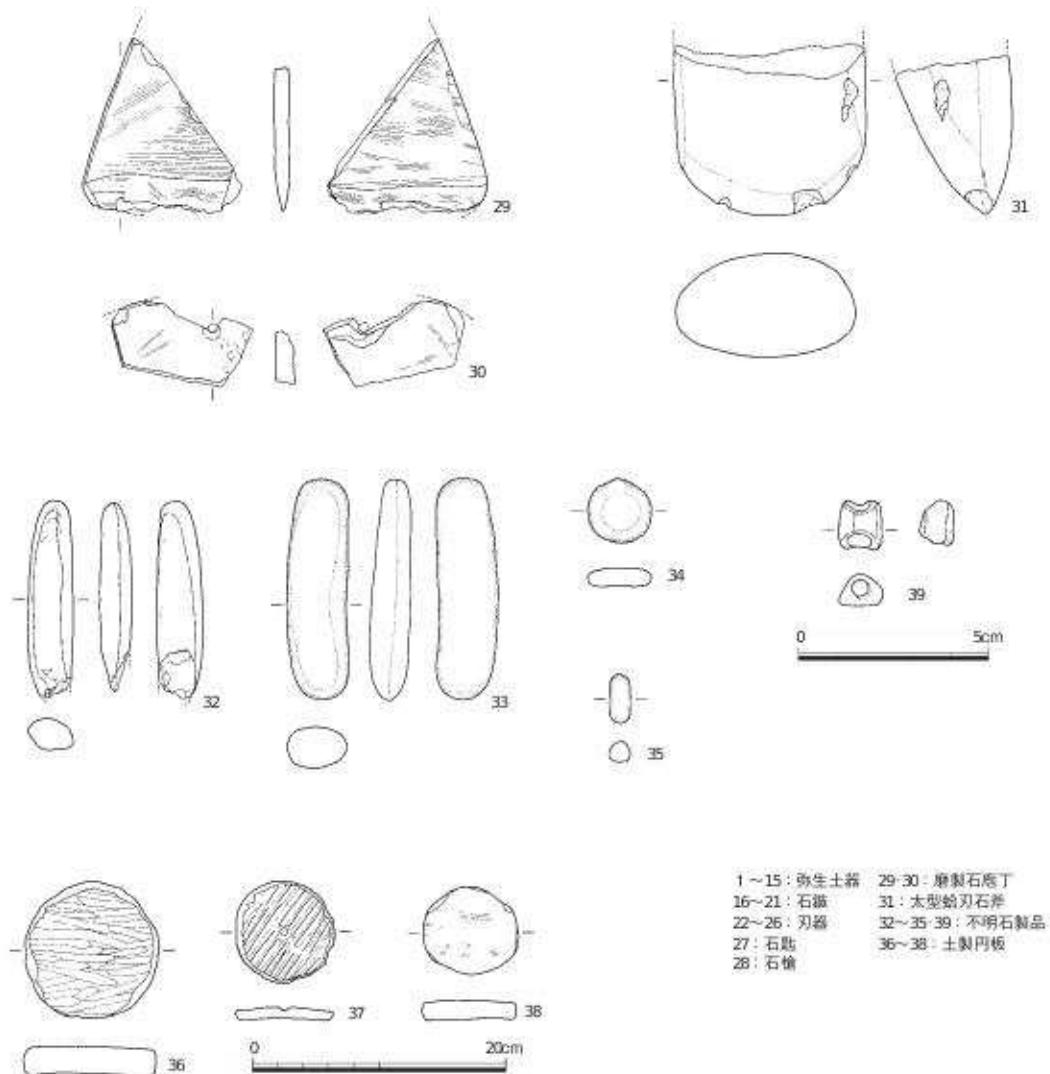


fig.47 出土遺物実測図

第2遺構面では南北方向の谷状地形を検出した。谷状地形は西側の肩が検出されたが、東側の肩は確認されなかった。谷状地形は深く、暗黒褐色粘質土などが堆積して湿地状を呈していたと推定され、調査地北方から土砂と共に、弥生時代の遺物が流入したものと考えられる。弥生土器は、弥生時代中期（Ⅲ・Ⅳ様式）を中心に、後期（V様式）頃のものが含まれている。遺物に顕著な磨滅痕が確認できず、ごく近くからの流入が考えられる。近隣では、旧第34次調査で流路から弥生時代中期後半（IV様式）～古墳時代初頭の遺物が多く出土し、第40次調査でも谷状の落ち込みから弥生時代中期の遺物が多く出土していることから、調査地北方には比較的規模の大きな弥生時代集落の存在が想定される。

谷状地形の最終埋土層である暗褐色粘質土層には、平安時代後期～鎌倉時代頃の須恵器・瓦器片が含まれることから、中世までには埋没し、耕地化したものと考えられる。

これまでに、本山遺跡における弥生時代の顕著な遺構・遺物は、国道2号線沿線付近で多く確認してきた。しかし、今回の調査における、多量の弥生時代遺物の出土は、旧第34次・第40次調査の成果も含めて、JR摂津本山駅東側付近にも弥生時代の集落域が存在する可能性をより高めるものとして、貴重なデータであると言えよう。

6. 扁保曾塚古墳 第3次調査

1. はじめに

扁保曾塚古墳は、東灘区のほぼ中央を南流する天井川東岸の扇状地先端に位置する前方後円墳である。明治時代の中頃まではほぼ完全な形で古墳の形態を残していたと伝わり、昭和27年当時には後円部の形状が残っていたことが、京都大学考古学教室作成の測量図から知られる。前方部を西北西に向ける全長約60数m、後円部の直径30数mの古墳と推測されている。市街地化が進み、古墳の形状は、南側では宅盤の擁壁にその形状を留めているものの、墳丘の高まりは失われている。また明治時代には竪穴式石室とされる主体部が掘り返され、出土品が散逸しきかけたが、銅鏡6面、勾玉2個、粢玉1個、管玉13個、小玉類121個、石釧2個、土器片1点が現在、東京国立博物館に所蔵されている。

周辺では平成6年度に南50mの地点で第1次調査が行われ、平成17年度には西側の隣地で第2次調査が行われている。第2次調査では古墳の周溝と考えられる溝状遺構が検出されており、今回はこの溝の続きが検出されるものと考えられた。

2. 調査の概要

今回の調査は個人住宅建設に伴うもので、埋蔵文化財に影響を及ぼす範囲について調査を実施した。調査区内には宅地造成に伴う2mを超える厚い盛土が施され、調査区東辺の中央から北側で間地石を谷積みした昭和30年代頃に築造されたと考える現代の擁壁を検出した。調査は残土置場の関係から全体を5分割して実施、南側のI区から北側のIV区まで順に調査を行った。

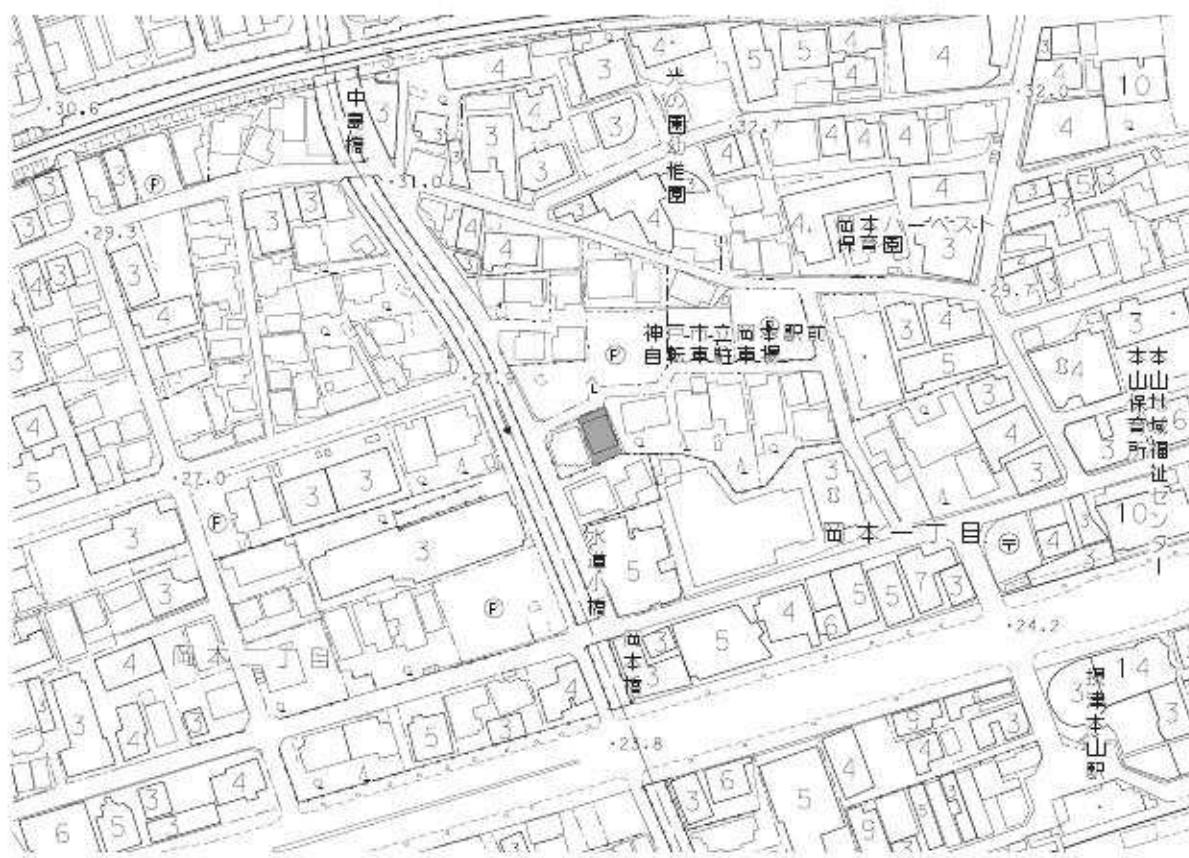


fig.48 調査地位置図 1:2,500

基本層序

厚い盛土層の下には宅地造成前の耕土層が調査区全域に堆積する。南側ではさらに下層に近代、近世、中世の耕土層が確認できるが、北側では地形的にも高いことから、削平により中世の耕土層がわずかに残り遺構検出面となる。

検出遺構

調査区の西側で第2次調査に続く溝状遺構SD01を検出し、東側では石列や葺石状の石を含む墳丘盛土と考えられる堆積を確認し、土坑、ピットを検出した。またIV区では地山面で溝SD02を検出した。

SD01 I区～IV区、調査区の全域で西側への落ち込みを検出した。南北の検出長11.6m、最大検出幅は2.3mである。I区の南端で東にL字状に折れ曲がる状況が確認でき、この部分が前方部の南西角となる可能性が高い。溝の埋土は暗灰褐色粘質土で、この堆積はII区の範囲まで、中央以北では上層から暗灰色砂質土、茶褐色礫混じり砂質土、灰褐色礫混じり砂質土が堆積する。溝の深さは北側が20cm、南側では40cm、底面は平らとなる。下層の灰褐色を呈する礫を多く含む層からは遺物の出土はなく、洪水などによる堆積と考えられる。溝内からは土師器が出土したが、いずれも小片で量も少ない。第2次調査では二重口縁壺など4世紀代の土師器が出土している。第2次調査で検出した溝の西肩から今回検出のSD01の東肩までの幅は約8mである。

SX01 III区中央で50cm大の比較的平らな石を立て並べた状況を確認した。同様の石はIV区の擁壁の下部にも散在しており、基底石とすれば石の検出ラインがおよそ墳丘裾の可能性がある。II区ではSD01内に葺石状の礫が流れたように堆積しており、石を据えた痕跡は明らかでない。

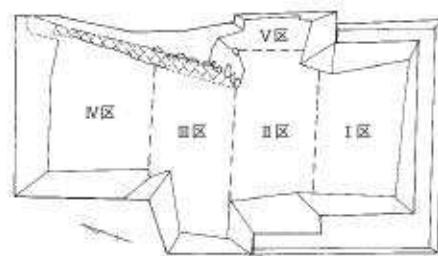


fig.49 調査区配置図

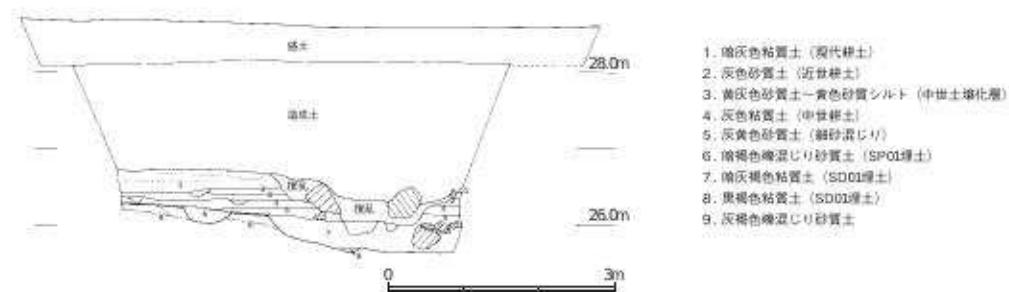


fig.50 I区南壁土層断面図

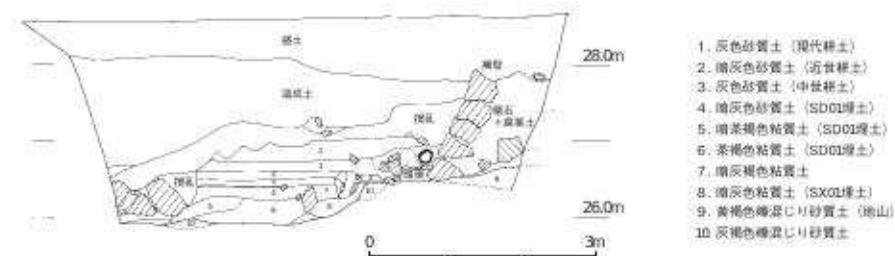


fig.51 II区北壁土層断面図

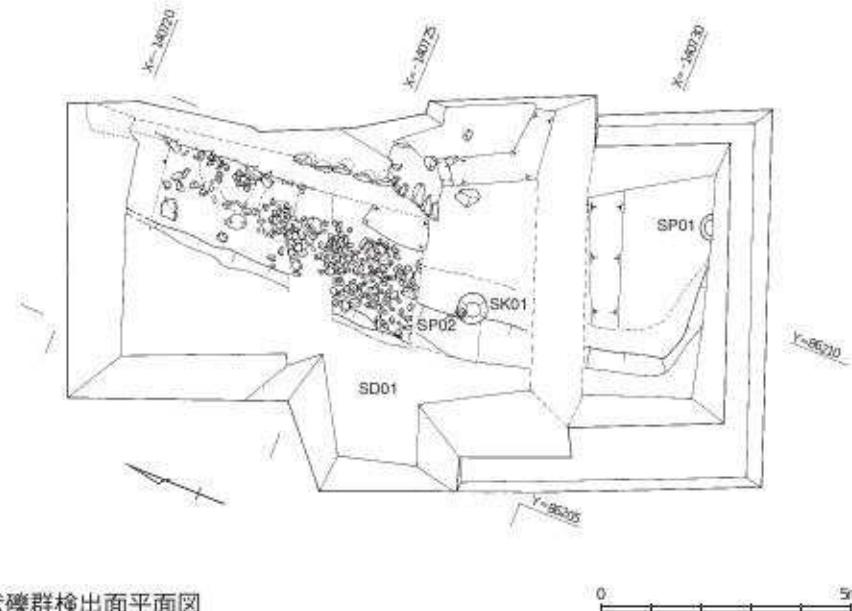


fig.52 葦石状礫群検出面平面図

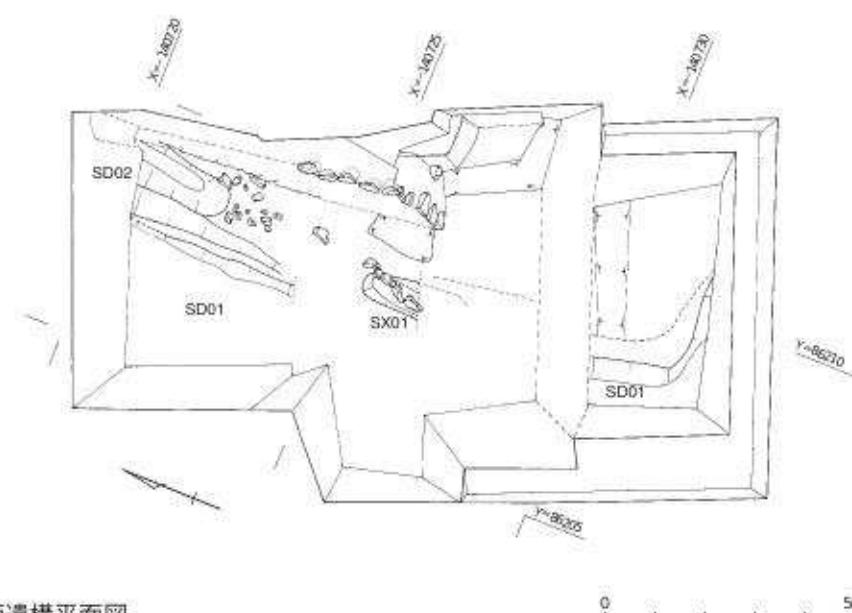


fig.53 地山面遺構平面図



fig.54 II区 SD01全景 (南西から)



fig.55 IV区 SD02検出状況 (南から)

SD02 IV区の擁壁際で溝を検出した。幅1.5m、深さ30cmである。III区のSX01の下部も幅70cm、深さ10cmの土坑状となり、一続きの溝状の遺構であった可能性がある。墳丘築造の際の地割りに伴う溝や基底石の掘形の可能性が考えられる。IV区では溝の中に一辺40cmの平石を礎石状に据えた箇所があり、溝の上に暗灰色粘質土をテラス状に整地したようにもみえる。またこの面の浅い灰色粘質土の溜りからは5世紀代の須恵器の坏片が出土しており、碟を円形にめぐらせたような痕跡も確認した。第1次調査では同時期の掘立柱建物が確認されており、何らかの関係が推測される。

V区確認トレンチ II区の北壁際で、擁壁裏込めの栗石に混じり、栗石とは異なる葺石状の碟や土師器片が混入する腐植土の堆積を確認した。腐植土は南側に大きく落ち込み地山面近くの耕土層を切り込んでいる。以前あった擁壁の跡かと推測される。II区調査時に擁壁下部の石を取り除いたが、地山面の立ち上がりや葺石状の石の混じる層の立ち上がりなどは今回の調査範囲では確認できなかった。

3.まとめ

今回の調査では扁保曾塚古墳の前方部南西角と考えられる位置を確認した。石列SX01は基底石の一部であったと考えられ、前方部墳丘裾部の様子が確認できた。

調査区の東辺で確認した擁壁は、京都大学考古学教室作成の墳丘測量図に描かれた柵のような区画線に沿って構築されたものと考えられ、当初は古墳の地形に沿って宅地造成が行われていた様子が窺える。前面には暗渠を設け、墳丘下方ではまだ耕作が行われていたようである。調査地の東側、擁壁の裏側の墳丘部の詳細は明らかでないが、後円部墳丘上から流れた腐植土の堆積からは葺石状の碟や土器が出土している。

今回の調査により前方部南西角が復元されることにより、現在、「扁保曾塚址」碑が建つ不自然な道路の屈曲部付近に前方部北西角が位置するものかと想像する。調査での遺構の検出レベルを考えると、周辺には未だ様々な古墳の痕跡が残されている可能性が高いものと考えられる。

残土置場の関係から一度に調査のできる範囲が限られたため、詳細が把握しにくい状況があったが、早くからの市街地化により、永く明らかにならなかった扁保曾塚古墳の墳丘の様子が明らかになった点は重要な成果であった。



fig.56 III区 SD01全景（南西から）



fig.57 IV区 SD01全景（南から）

7. 住吉宮町遺跡 第52次調査

1. はじめに

住吉宮町遺跡は、JR住吉駅付近に拡がる、弥生時代から中世におよぶ複合遺跡である。遺跡内にはJR住吉駅北側に所在する坊ヶ塚古墳（前方後円墳・推定全長57m）、南側の住吉東古墳（帆立貝式古墳・全長22m）の2基の盟主墳を中心として、その周囲に一辺10~20mの方墳が密集した状態で築造されており、これを集落遺構と区別して「住吉宮町古墳群」と呼んでいる。

既済の調査結果から、住吉宮町古墳群は坊ヶ塚古墳の築造を契機とし、5世紀から6世紀前半にかけて総数100基以上が築かれたとする説がこれまで通説であったが、今回の調査によって、坊ヶ塚古墳の推定築造年代である5世紀半ばをさらに半世紀程度遡る方墳1基が発見された。

2. 調査の概要

基本層序

調査は共同住宅建設に伴うもので、工事範囲のうち遺跡に影響する部分のみ行った。調査対象範囲は北側の本調査区1か所および南トレント2か所に分かれたが、この3か所の層序はほぼ同質であった。現況G.L.より80cm程度が従前の建物の解体に伴う盛土、その直下に60cm程度の厚さで近世・近代の耕作土、さらにその下層に平安時代末から鎌倉初頭頃と考えられる耕作土が2層、その直下が古墳検出面である。ただし南トレント2か所では、工事影響範囲が墳丘まで達しないことを確認して調査を終えており、古墳が確認されたのは本調査区のみである。

墳丘

当該古墳は上記の中世耕作土によって墳頂部を削平された状態で、周濠内は厚い洪水砂ないし土石流堆積層を埋土とする。いわゆる埋没古墳である。古墳直上に堆積するこれらの層は2～3単位程度の時期差が確認できるが、最上層では中世土器を、それより下層では墳丘テラス

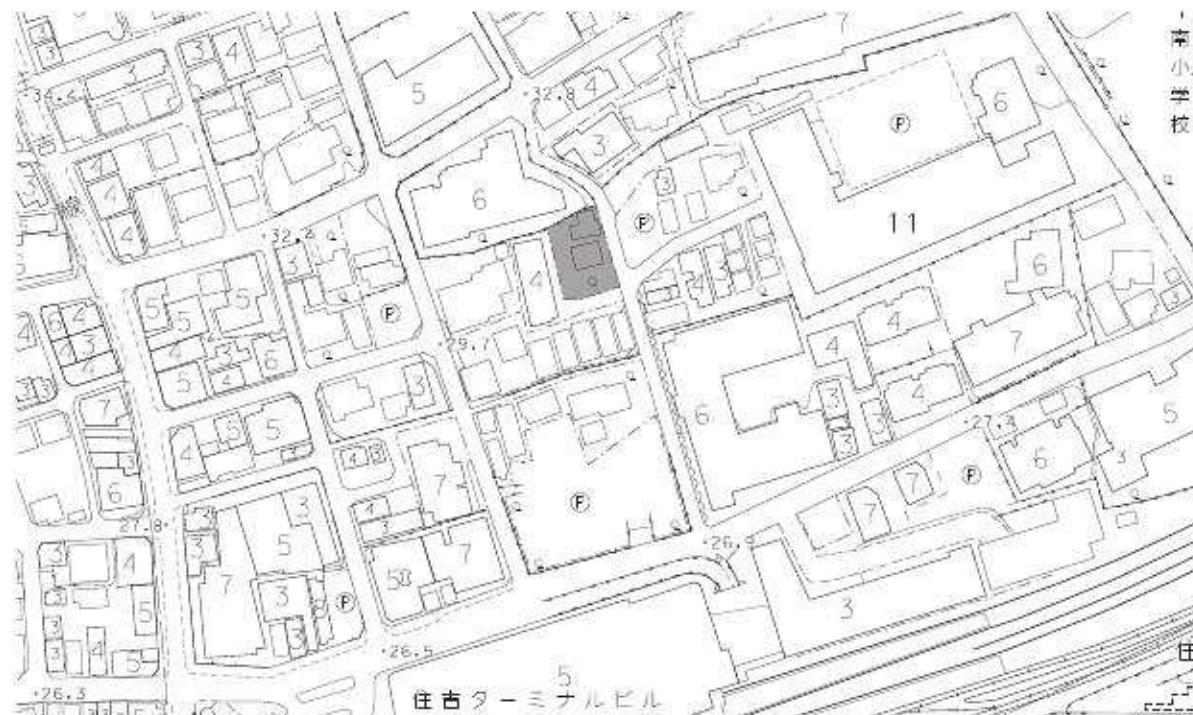


fig.58 調査地位置図 1:2,500

に樹立する埴輪と同時期の埴輪片と古墳時代の土師器のみが出土した。したがって、古墳が埋没したのは築造からほどないと判断される。

二段築成の方墳は南西側4分の1程度を確認したもので、それ以外の部分は当該調査地以北および以東にさらに拡がる。方眼北に対し南北軸で約20度西にふれる方墳である。

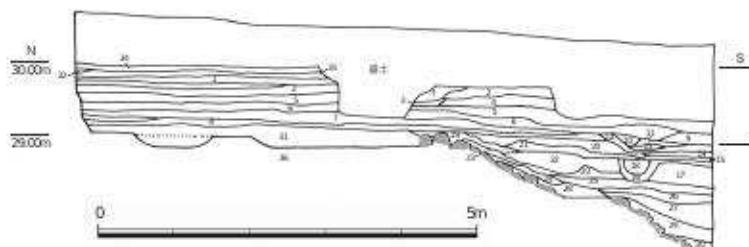
墳頂部は削平されていたが、主体部が一部残存していた。削平状態での上段の検出範囲は南北6.5m×東西3.3m程度である。この面は中世の土坑および近代の井戸によって攪乱されていたほか、平安時代末から鎌倉時代初頭頃のピットが複数検出された。



fig.59 調査区配置図

なお墳丘には周濠が付随するが、今回は一部を検出したのみで規模等は不明である。南周濠検出高が、T.P.27.6m前後、墳頂はおおむね29.1m付近で平坦に削平されていた。検出できた上段の規模は南北4.4m程度、東西8.5m程度、下段との間にテラスを有する。下段の検出規模は、下段墳裾で東西約9.6m、南北約7.0mである。上段・下段ともに墳丘斜面には花崗岩を主体とした葺石を葺く。

テラスには円筒埴輪および朝顔形埴輪が交互に樹立しており、検出できた範囲内では、朝顔形埴輪4点、円筒埴輪3点を、直立した状態で埴輪列として確認している。埴輪は一部欠損しているが、残存状態は良好で、やや傾いている4号埴輪を除き、樹立状況はほぼ築造当初に近いと考えられる。すべて3条4段構成で黒斑を有し、5世紀初頭の年代を示すと考えられる。



- | | | |
|-------------------------------------|-------------------------|----------------------------|
| 1. 10YR7/6明黄褐色粘土 | 12. 10YR6/6明黄褐色砂 | 23. 2.5Y5/2暗灰黄色砂 |
| 2. 10YR6/8明黄褐色粘土 | 13. 2.5Y7/3浅黄色砂 | 24. 2.5Y4/1黄灰色砂 |
| 3. 10YR6/6明黄褐色粘土 | 14. 2.5Y7/4浅黄色砂 | 25. 5Y5/3灰オリーブ砂 |
| 4. 10YR6/3こぶい黄橙色粘土 | 15. 10YR6/8明黄褐色砂 | 26. 2.5Y5/4黄褐色砂 |
| 5. 10YR6/2灰黄褐色粘土 | 16. 10YR5/2灰黄褐色砂にマンガン沈着 | 27. 2.5Y6/4こぶい黄色粗砂(土石流堆積層) |
| 6. 10YR6/4こぶい黄橙色粘土 | 17. 10YR6/3こぶい黄橙色砂 | 28. 2.5Y3/1灰褐色砂(古墳表土) |
| 7. 10YR6/2灰黄褐色粘土 | 18. 10YR6/6明黄褐色砂 | 29. 2.5Y5/4黄褐色粘土(古墳表土・硬質) |
| 8. 10YR3/1黒褐色砂にマンガン沈着
(平安時代末堆積層) | 19. 2.5Y6/2灰黄色砂 | 30. 2.5Y2/1黒色砂(周濠埋土) |
| 9. 10YR6/1褐灰色粘土 | 20. 2.5Y6/3こぶい黄色砂 | 31. 5Y5/2灰オリーブ色砂 |
| 10. 2.5Y7/2灰黄色砂 | 21. 2.5Y5/2暗灰黄色砂 | 32. 7.5Y6/1灰色砂 |
| 11. 10YR7/4こぶい黄橙色砂 | 22. 2.5Y6/2灰黄色砂 | 33. (主体部) |
| | | 34. NS/灰色粘土 |
| | | 35. 2.5Y5/1灰色粘土 |
| | | 36. 墳丘盛り土 |

fig.60 北壁土層断面図

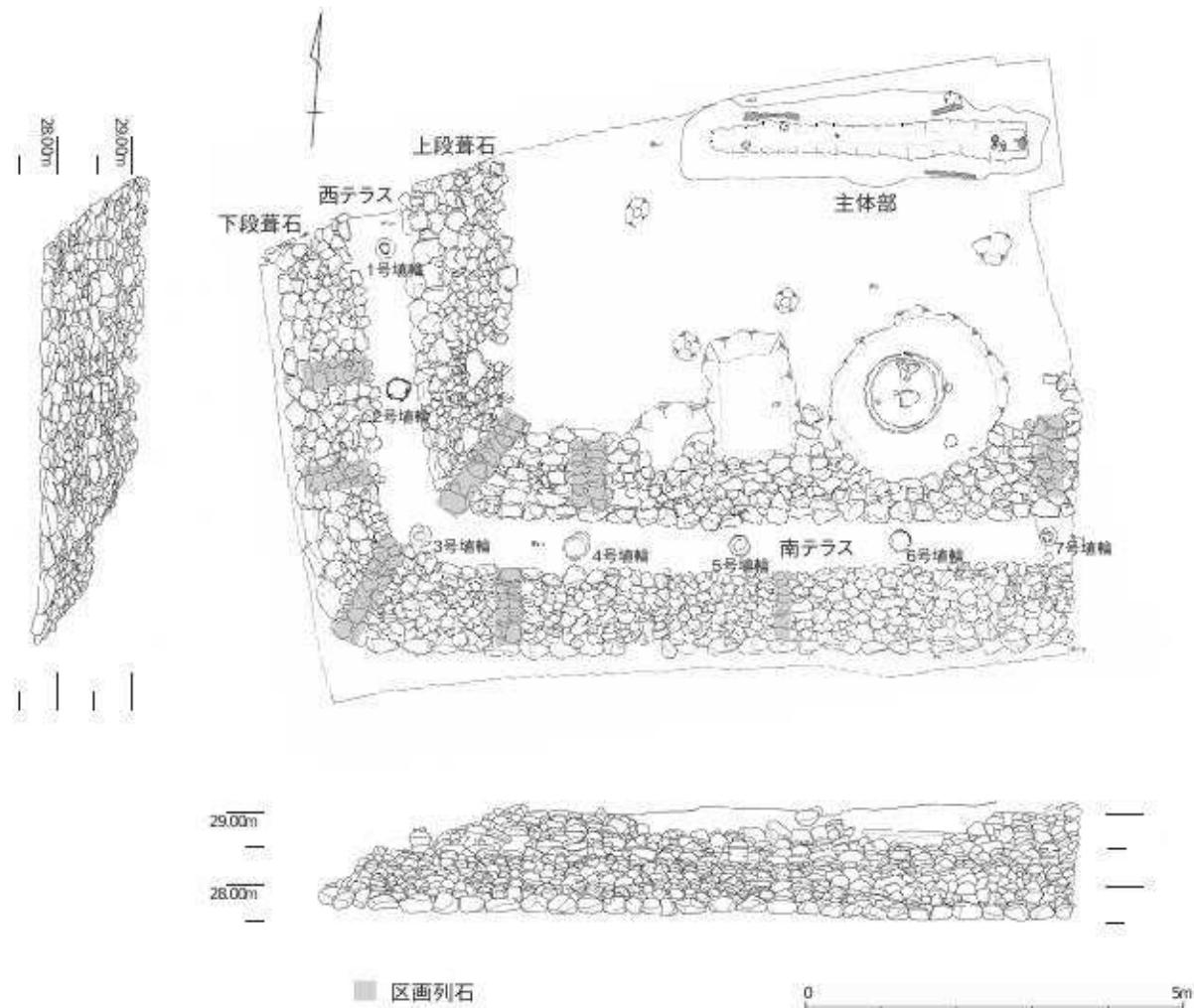


fig.61 墳丘平・立面図

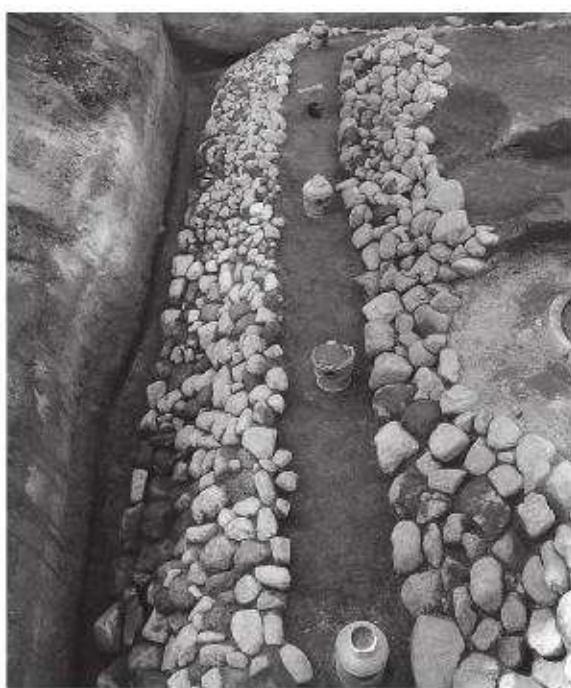


fig.62 南テラス埴輪列 (東から)

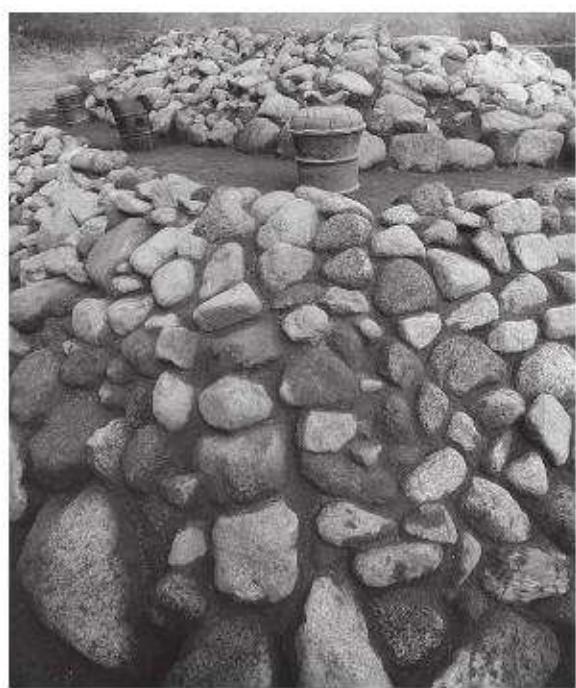


fig.63 南西コーナー区画列石 (南西から)

主体部

墓壙

墳頂部が削平されているため、顯著な墓壙は確認できなかった。おそらく墓壙の底部分が粘土櫛底いっぱいに築かれており、残存部分では粘土櫛の規模がほぼ墓壙の規模と同じなのであらう。墓壙底の規模は長さ4.9m、幅1.0m、残存する深さ約20cmである。

粘土櫛

T.P.29.1m前後で検出した。後世の削平により、被覆粘土の大半が失われ、耕土直下で木棺痕と周囲の粘土が露呈する状態である。検出面での長さ約4.9m、幅1.2mを測り、底に向かって船底状にすぼまる形状である。

木棺

粘土櫛の中心に墳丘東西軸と平行に、東西長4.2m、南北幅50cm程度の木棺痕を1基確認した。長さから刳抜式木棺と推測されるが、底部分の形状は平坦に近く、割竹形木棺でない可能性がある。棺痕の内部、東側3分の2程度は赤色顔料が良好に残存した。

副葬品

東小口付近で青銅製方格T字文鏡1点、鉄鎌の束、および鉄斧1点が出土しているほか、中央やや西寄りの場所で100点余りの玉類が出土した。玉類に混じって、人齒のエナメル質も若干検出している。

3.まとめ

古墳はこれまで遺跡の北限と考えられてきた範囲で確認されたもので、この発見によって住吉宮町遺跡の範囲が従来より北および東に拡大することが明らかになると同時に、5世紀中頃と考えられてきた住吉宮町古墳群の造営開始期も、5世紀初頭まで遡ることとなった。当該調査については現在整理作業が進行中であり、詳細については稿を改めて公表する機会を得ることとし、本報告は最小限の概略にとどめるものである。



fig.64 主体部（西から）



fig.65 主体部玉類出土状況（南から）

8. 郡家遺跡 第93次調査

1. はじめに

郡家遺跡は弥生時代中期に始まり、弥生時代後期には大規模な集落を形成する遺跡である。古墳時代後期には古墳群も確認され、当該地域では中核的な集落となっている。その後、奈良時代には菟原郡衙の存在が想定できる掘立柱建物も、大蔵地区で確認されている。

2. 調査の概要

個人住宅の建設に伴い、土壤改良により遺跡が削平される部分について発掘調査を実施した。今回は便宜上、北から1区～3区に分け、3分割による発掘調査を実施した。

調査内容は、第1遺構面で近世の鋤溝と土石流を確認した。また、第2遺構面で古墳時代前期と推定する土坑とピットを確認し、第3遺構面で古墳時代前期の堅穴建物とピットを確認した。黒茶褐色砂質土（古墳時代後期初頭遺物包含層）の下面となる黒灰色砂質土（古墳時代前期遺物包含層）直上でも精査を実施したが、遺構は検出できなかった。黒茶褐色砂質土からは、韓式系土器も破片で出土している。

基本層序

層序については、現況面からGL約80cmまで搅乱されている。以下、淡灰色シルト質極細砂、黄褐色極細砂質シルト（直上が第1遺構面）、明黄褐色礫混り砂質土、黒茶褐色砂質土（古墳時代後期初頭遺物包含層）、黒灰色砂質土（古墳時代前期遺物包含層）、部分的に黄褐色砂質土（直上が第2遺構面）を間層として挟み、暗黄褐色砂質土（直上が第3遺構面、基盤層）が堆積している。

第1遺構面

黄褐色シルト質極細砂直上で確認した近世の面である。耕作に伴う鋤溝と土石流を確認した。



鋤溝群 座標北から西へ約26°振る、ほぼ南北方向に伸びる鋤溝群を確認した。鋤溝は幅約20cm～40cm、深さ約4cm～17cmを測り、淡灰色砂質土が堆積している。遺構の時期を判別できる遺物では、近世の微細な磁器片が出土している。

土石流 調査区北端は土石流により第2・3遺構面が削平されている。土石流は灰褐色砂質土に、径10cm～30cm程度の礫を極めて多量に含み、東西方向に流れ鋤溝と同じ遺構面で確認した。

第2遺構面

黒灰色砂質土（古墳時代前期遺物包含層）の下面で検出し、遺構の大部分を調査区の中央部付近に存在する黄褐色砂質土直上で検出した遺構面である。黄褐色砂質土が存在しない調査区の北半と南半は、暗黄褐色砂質土（基盤層）直上の第3遺構面と同一遺構面となる。遺構は古墳時代前期と推定する土坑・ピットを検出した。

SK201 長さ72cm、幅44cm、深さ約14cmを測る土坑である。黒灰色砂質土が堆積し、遺物は出土していない。

SK202 長さ116cm、幅94cm、深さ約22cmを測る土坑である。暗黄茶褐色細砂～粗砂が堆積し、遺物は出土していない。

ピット群 径30cm～46cmで、深さ8cm～26cmの規模のピットである。全てのピットの埋土は黒灰色砂質土で、柱痕が確認できず、柱穴としての判断はできない。また調査区が狭い為、ピット間の並びも明確ではない。



fig.67 2区第2遺構面全景（北から）

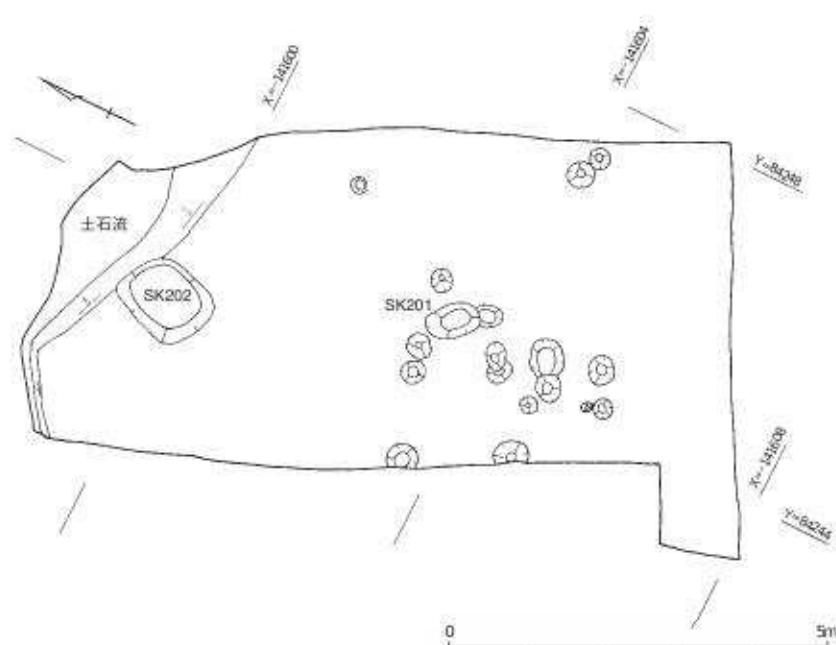


fig.68 第2遺構面平面図（北から）

第3遺構面

暗黄褐色砂質土直上で確認した遺構面である。古墳時代前期の方形の堅穴建物とピットを検出した。堅穴建物は、南側と東側の壁面を拡張する形で建て替えが確認でき、3時期を重複して検出した。

堅穴建物は大部分を黄褐色砂質土下面で検出し、埋土は黒灰色砂質土が堆積している。SB301-1とSB301-2は周壁溝が僅かに残る状態である。周壁溝からは微細な土師器片が出土している。

SB301-1 最初に造られた堅穴建物であり、南北約4m、東西0.5m以上を測る。東西方向と共に、南北方向の周壁溝も僅かに残存していた。

SB301-2 SB301-1の東壁を約1.5m拡張し、周壁溝がさらに東西方向にのびている。この事実から、建て替えと判断した堅穴建物である。南北約4m、東西約2m以上を測る。

SB301-3 SB301-2の南壁に沿うと想定する周壁溝から、約0.8m南へ拡張した位置で堅



fig.69 2区東半第3遺構面全景(西から)

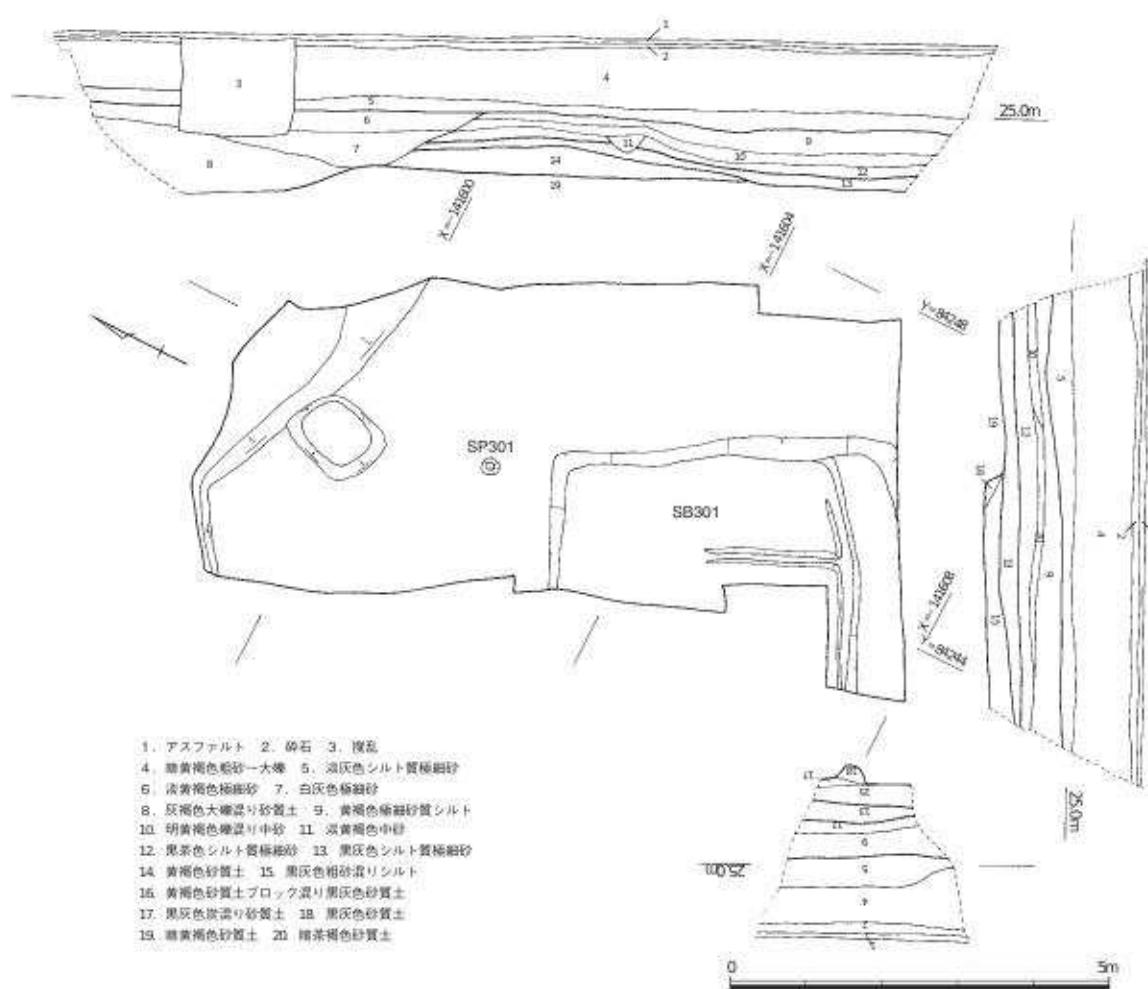


fig.70 第3遺構面平・断面図

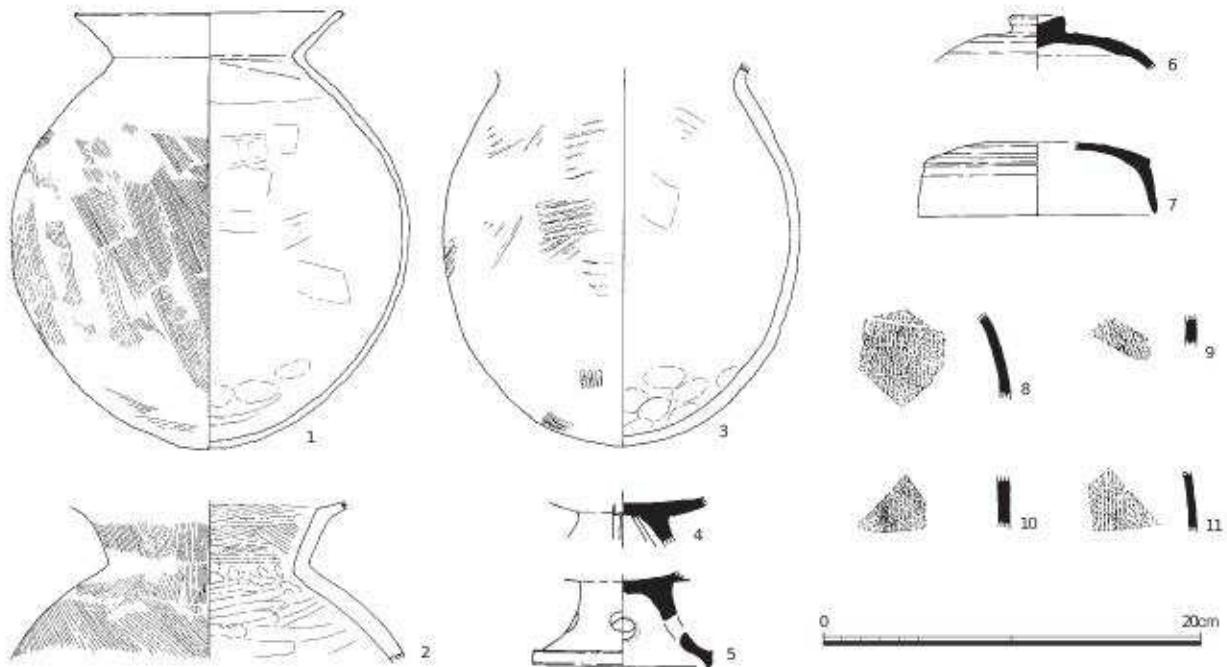


fig.71 出土遺物実測図

穴建物の壁面を検出した。上層から古墳時代前期の甕が出土した。3棟のなかで最も新しい堅穴建物である。東西方向の拡張はみられず、南北約48m、東西約2m以上で、深さ約30cmを測る。

3.まとめ

今回の調査では3面の遺構面から、近世の鋤溝、古墳時代前期と推定される土坑・ピット、堅穴建物などを確認した。

また特筆できる遺物では、黒茶褐色砂質土（古墳時代後期遺物包含層）から韓式系土器の破片が出土している。時期が判断できる遺物は、古墳時代後期初めの須恵器の蓋・坏・高坏が出土し、韓式系土器もほぼ同じ時期と考えられる。

第2遺構面の上面に堆積する黒灰色砂質土には、須恵器は含まれない。時期の判る遺物は少ないが、出土した土師器から古墳時代前期の範疇には収まると考えられる。第2遺構面で検出した土坑・ピットも微細な土師器しか含まない。

第3遺構面で確認したSB301は、上層から古墳時代前期（布留式期）の甕が出土し、中層～下層から古墳時代前期の土師器甕などが出土している。この事から、SB301も古墳時代前期の範疇に収まると考えられる。

今回の調査では古墳時代前期の堅穴建物を確認した。郡家遺跡で当該調査とほぼ同時期の遺構と遺物は、篠ノ坪地区で確認している。第36次調査で古墳時代初頭～前期の堅穴建物と溝を確認し、第42-1次調査では古墳時代前期布留式期に埋没した河道を確認している。城の前地区を挟むが地理的に篠ノ坪地区は比較的近く、今回の大蔵地区西端で実施した当調査から篠ノ坪地区の近隣に、古墳時代前期の集落が拡がると推察される。

9. 篠原遺跡 第36次調査

1. はじめに

篠原遺跡は、神戸市灘区篠原本町、篠原中町、篠原北町に所在しており、現在のところ、阪急神戸線を挟んで、東西約600m、南北約800mの範囲に広がっているものと考えられている。

当遺跡は、六甲川と柚谷川の合流する北側の扇状地に立地し、現標高は50~80mを測る。これまでに30回以上の発掘調査が実施されており、縄文時代から古墳時代、および中世の複合遺跡と考えられている。特に縄文時代晚期後半期の遮光器土偶や石棒類と共に出土した多量の土器は、「篠原式」と呼ばれ、当該時期の標識土器として知られている。

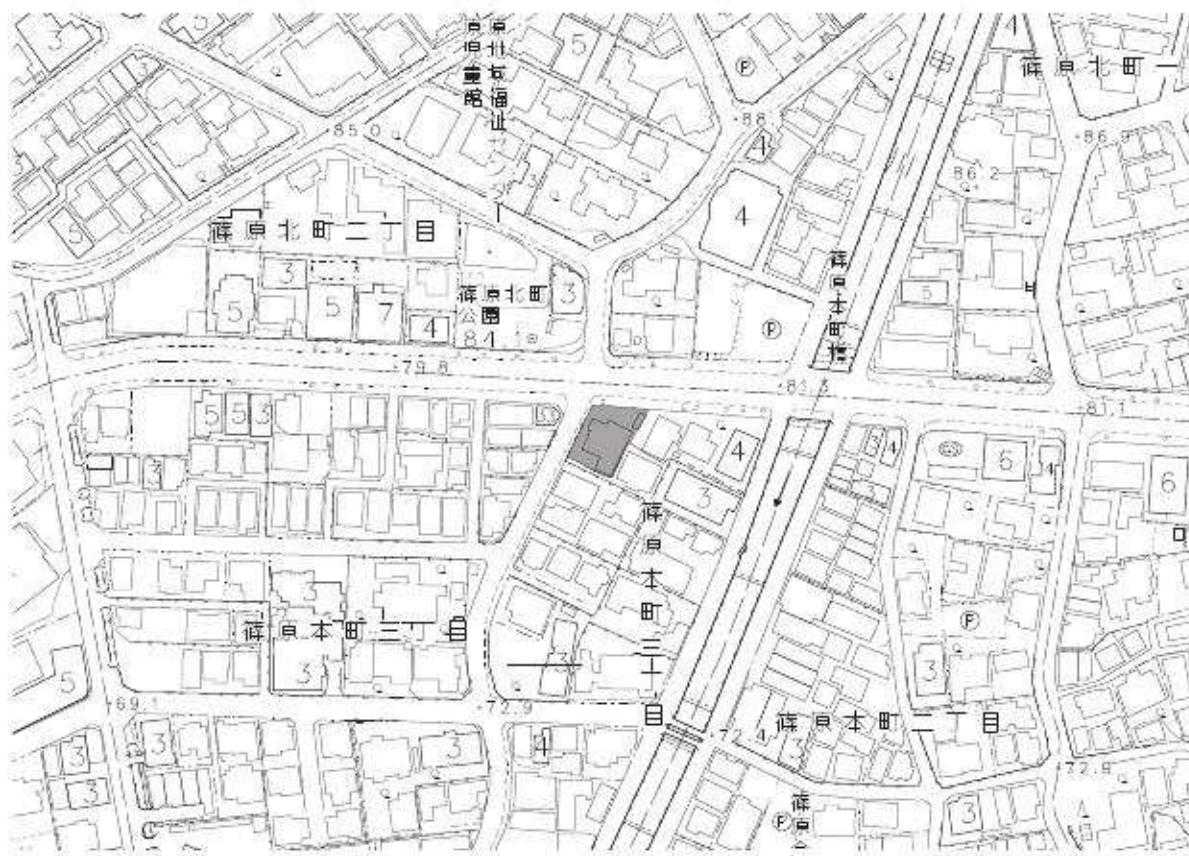
さらに弥生時代の集落も確認されており、今回の調査地から約150m西側の地区で実施した第12次調査においては、弥生時代後期の大溝が検出され、小形仿製鏡が出土している。

今回の調査は、店舗付共同住宅建設工事に伴って実施したもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。なお既存の擁壁保護のため、一部調査を実施できなかつた部分がある。

2. 調査の概要

今回の調査では、掘削土の置き場を確保するため、調査対象範囲を3分割し、1区から順次調査を実施した。現標高は、約81mを測る。

調査地の現況は住宅地となっているため平坦であるが、旧地形は北東側が最も高く、南および西側に向かって下がる斜面地となっていた。調査区北東隅で現地表から約1.0m、同南東隅で現地表下約1.4m、同南西隅で現地表下約2.0mにおいて遺構面を1面確認した。



基本層序

現地表から0.6~1.5m程度の厚い盛土の下層に、特に南半部で顕著であったが、おそらく近世頃と考えられる時期に田圃として利用されていた際の旧耕土層が堆積している。さらに下層にはいくつかの土層が堆積しているが、下層で確認した黒褐色粘性砂質土(16層)ないしは灰褐色砂質土(17層)が遺物包含層であり、その下面の淡褐灰色粘性砂質土(20層)あるいは茶灰色粘性砂質土(23層)の上面で遺構面を確認した。

遺構面 遺構面上には、大型のものを含む礫が露出しており、特に調査区北東部で顕著であったが、土石流によって遺構面が削り込まれる影響を受けていた箇所を多く検出した。その間に遺存する平坦地部分で土坑5基、落ち込み1基、不定形落ち込み5ヶ所、ピット約100基などの遺構を確認した。

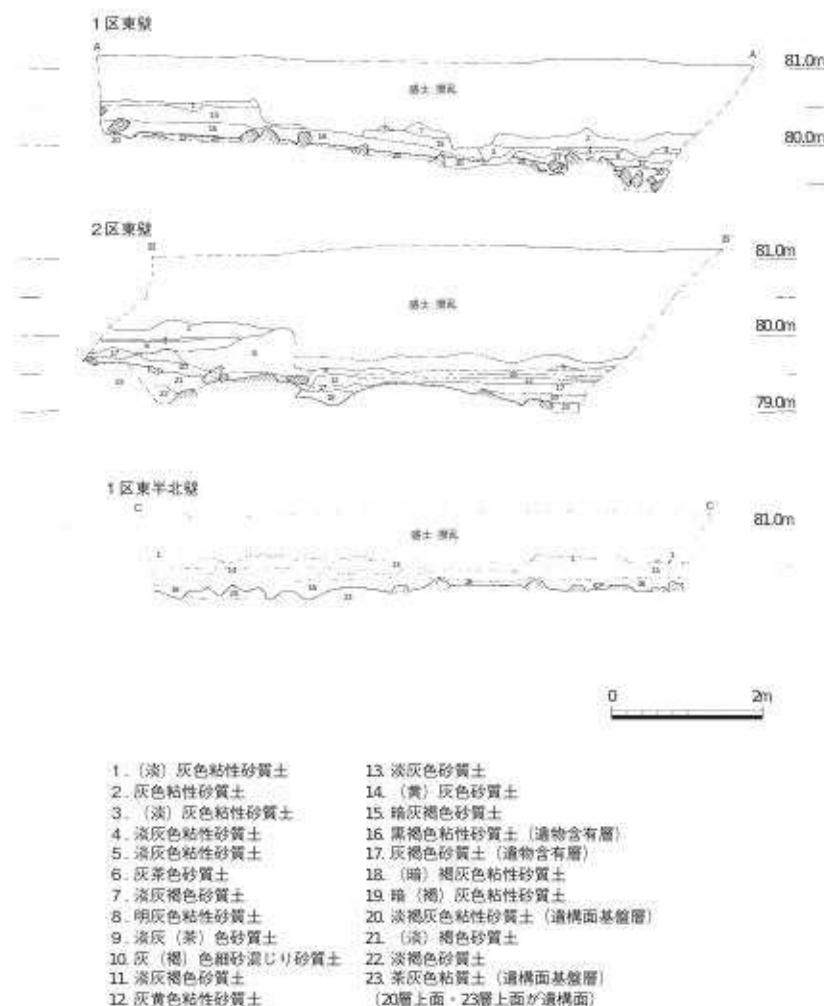


fig.73 東壁土層断面図

ピット 前述のように約100基検出し、うち約50基から遺物が出土している。これらの中には人為的な遺構以外に、土石流によって遺構面が削られ窪みとなったところへ上部の遺物包含層が入り込んだ、いわゆる自然地形によるものも多く含まれるものと考えられる。

調査区内で中央部付近にやや多く確認できたものの、全体的に散在している状況にあると言える。また、掘立柱建物としてまとまりは現段階では見出せていない。

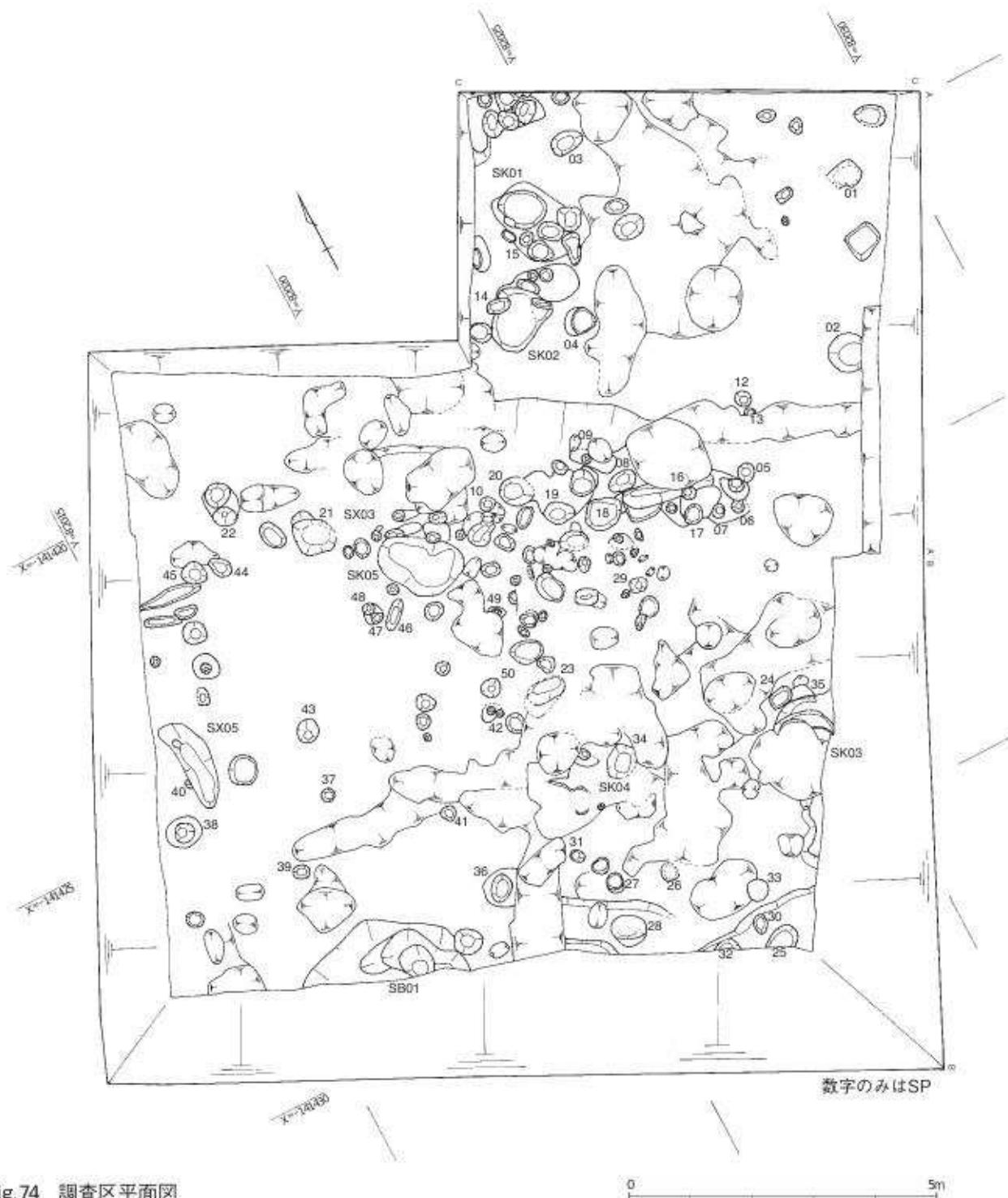


fig.74 調査区平面図

土坑 散在する状況で検出している。SK01が $0.78 \times 0.62\text{m}$ 、深さ10cm、SK02が $1.0 \times 0.89\text{m}$ 、深さ16cmを測る。SK03は土石流によって搅乱されており、また調査区外にも延びているため本来の規模は不明であるが、深さは36cmを測り、他の土坑よりも深くなっている。SK04も土石流の影響を受けており本来の規模や形状は不明である。深さ10cmを測る。SK05は $1.3 \times 0.97\text{m}$ 、深さ24cmを測る。

落ち込み 調査区南端で確認したSB01は、調査区外に拡がるため一部を確認した。 $2.7 \times 1.0\text{m}$ を測り、平面形が半円形状を呈する遺構である。当初竪穴建物の一部である可能性を考慮したが、遺構内部は中央付近から東側に一度落ち込んだあと、角度を変えて南側に落ち込む溝状の遺構の体裁を示している。以上の検出状況からは竪穴建物ではないと考えられるが、現段階では、遺構の性格は不明である。

そのほか、小規模な不定形の落ち込みを検出している。深さも深いものではなく、一部のピットと同様に自然地形によるものも含まれているものと考えられる。

なお、以上の遺構から出土した遺物や、上位の遺物包含層から出土した遺物は細片が多く、詳細は検討が必要であるが、概ね弥生時代後期頃のものと考えられる。

3. まとめ

篠原遺跡では、これまでに30回以上の発掘調査が実施されており、縄文時代や弥生時代を始めとして様々な時代の遺構・遺物を確認されている。今回の調査地の近隣でも、平成23・24年度に北東側約80mの地点で実施した第31次調査において弥生時代中期の竪穴建物や中世の遺構などを、また平成26年度に今回の調査地のすぐ西側で実施した第33次調査においても、弥生時代後期頃の遺構・遺物を確認している。

今回の調査では、竪穴建物は検出できなかったものの土坑やピットなどの遺構を確認し、弥生時代後期のものと考えられる土器も28リットル入りコンテナ2箱程度出土している。今回の調査地のある範囲の、西側道路と東側の六甲川に挟まれた地区については試掘調査等において、これまで埋蔵文化財が確認されることが少なく、六甲川の氾濫原に当たっているために遺跡は遺存しない可能性が考えられていたが、当調査において土石流の影響を受けてはいるものの、弥生時代後期のものと考えられる遺構・遺物を確認したことにより、周辺に弥生時代後期の集落が広がっていることが明らかとなった。そうした意味において、特に弥生時代後期の篠原遺跡の広がりを考える上で、貴重な成果を得ることができたといえよう。



fig.75 1区全景（東から）



fig.76 2区全景（西から）

10. 篠原遺跡 第37次調査

1. はじめに

篠原遺跡は、神戸市灘区篠原北町・中町・南町付近に広がる集落遺跡である。昭和初年に小林行雄氏によって学術雑誌に紹介されて以来、遺跡の名称は考古学界では有名であったが、発掘調査によってその実態が明らかになって行くのは、昭和58年の第1・2次調査以降である。

以来計37回の調査が行われ、縄文時代から中世にかけての大規模な集落遺跡であることが明らかになりつつある。また、これまでの調査では縄文時代～弥生時代の遺構・遺物が多く見つかり、当該時期に集落の勢いが特に盛んであったことが窺える。



fig.77 調査地位置図 1:2,500

2. 調査の概要

調査の結果、第1遺構面では中世の土坑やピットを確認した。第2遺構面では弥生時代の竪穴建物や土坑を検出した。また第3遺構面では縄文時代の甕棺墓や川原石が投げ込まれた土坑、ピット、縄文土器、サスカイトの破片が多く含まれる土石流路等を発見した。

基本層序

当該地付近は、六甲山南麓の六甲川と袖谷川が合流して都賀川となる付近に形成された扇状地地形に位置し、標高50~60m前後を測る。今回の調査地の地形は、概ね北東から南西方向に傾斜しているため、堆積層も概ね北から南に下がっていく状況で確認される。

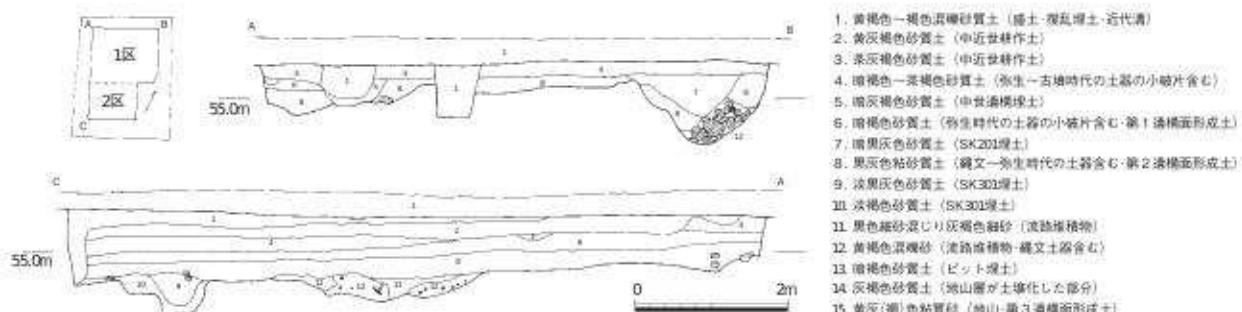


fig. 78 調査区断面図

第1遺構面

土坑2基、中世のピット16基を発見した。

土坑SK101・102 2区で検出された深さ5~10cmの浅い土坑で、いずれも近代に掘り込まれた溝に部分的に削られている。残存長1~1.2mを測る。遺物は細片の土器が出土している。

ピット 調査区内に散在する状態で確認されている。いずれも直径10~30cm、深さ20~40cm程度のものである。穿たれた目的は明確でない。埋土からは、平安時代末~鎌倉時代の土器の小破片が出土しており、当該時期の遺構と判断した。

第2遺構面

弥生~古墳時代の土器を含む第1遺構面を形成する土壤(暗褐色砂質土)を除去すると、黒灰色砂質土が現れ、その上面で遺構を検出している(第2遺構面)。この遺構面で弥生時代の竪穴建物を2基、土坑1基を検出した。

竪穴建物SB201 1区で確認された東西方向約5.3m、南北方向約4.2m、深さ0.2~0.3m、北側の隅2ヶ所を搅乱と土坑SK201によって削られているが、長方形の竪穴建物と判断される。この建物の南端部分は後述のSB202と重複して造られており、前後関係はSB201からSB202と判断される。

床面の北半分は黄灰色粘質砂であるため明瞭であったが、南半分は第3面で確認された土石流路の上層に堆積した黒灰色砂質土であるために床面の検出が難しく、検出作業時に掘りすぎた可能性が高い。柱穴は、北端で1基検出したのみで、その他は確認することができなかった。

床面上からは、まとまった土器は出土していないので、建物の正確な時期は判断しにくいが、埋土からは弥生時代後期頃の土器が出土している。

竪穴建物SB202 1・2区に跨った状態で確認されている。東西約5.5m、南北約4.3m、深さ

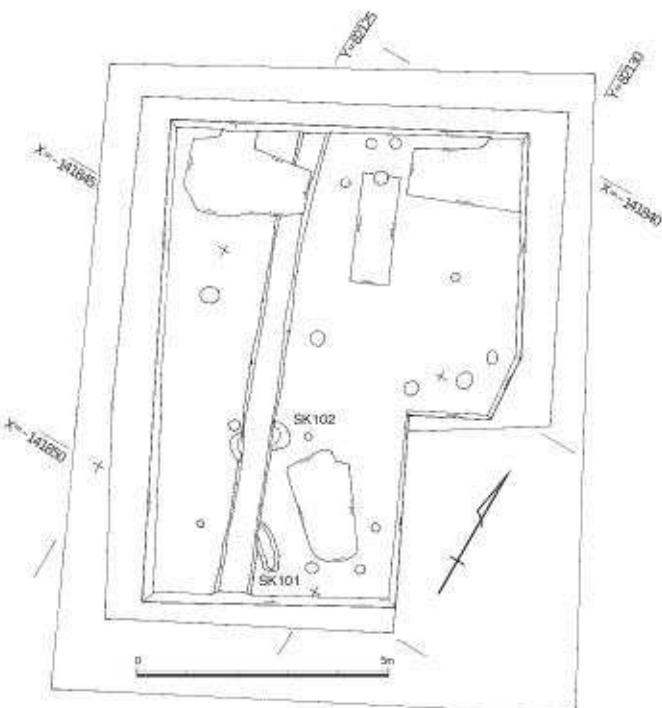


fig.79 第1遺構面平面図



fig.80 1区第2遺構面全景(南から)



fig.81 1区第3遺構面ST301(西から)

20cm前後を測り、南東隅は調査区外となっているが、長方形の竪穴建物であると判断される。

北半分では5cm程度の浅いベッド状の高まりを有するが、南半分では明確な高まりは確認できなかった。北半分のベッド状遺構の隅に近い部分に柱穴がそれぞれ確認されており、南側でもほぼそれに対応する場所で柱穴を検出していることから、4本柱で屋根材を支える構造と考えられる。SB201と同様に床面に土器は残されておらず、埋土からは弥生時代後期頃の土器が出土している。

土坑SK201 1区北東隅で確認されたが、大半が後世に掘り込まれた穴によって削られている。また調査地内では土坑全体の1/4程度の確認に止まり、大半は調査区外に延びている。

残された形状からみて方形または楕円形に近い形をなすものと推測される。深さは30~50cm程度残っている。この土坑は竪穴建物SB201を削って掘り込まれており、SB201からSK201の順で造られたことが判る。埋土からは弥生時代の土器が少量出土した。

第3遺構面

第2面を形成する黒灰色砂質土を除去すると1区南半部分が東西方向に深く窪み、1区北端部と2区のほとんどでは黄灰(褐)色粘質砂が現れる。この上面が第3遺構面となる。深く窪んだ部分には黄褐色混疊砂を主体とする土石流の一端と判断される堆積物が溜り、その砂疊に混じって縄文時代の遺物が確認された。

甕棺墓ST301 1区南東部で確認された遺構で、黄灰(褐)色粘質砂面を20cmほど掘り込んだ穴に、甕形土器がやや傾いた状態で据えられている。土器の口縁部は遺構検出面より10cm程度高い位置で確認されていたため、実際は1層上の灰褐色砂質土層から掘り込まれていたことが判る。出土した甕形土器は縄文時代晚期のものである。

甕棺墓ST302 1区西端で確認されたもので、縄文時代晚期の甕形土器1個体分が横倒しの状態で確認した。

出土した位置は、後述の土石流路の縁辺部にあたり、土器の一部が削り取られているように見受けられる。明瞭な掘形が確認できず、土器周辺の僅かに土壤化した部分からそれと判断した。

土石流路 1区北東隅から南西隅方向に遺構面を削る土石流路を確認した。底付近には黄褐色混疊砂(5~50cm程度の磯を含む)が堆積しており、砂疊に混じって縄文時代晚期の土器、とりわけ流路西端では甕形土器の約半分がまとめて発見されている。またサヌカイト片などが出土した。

この流路の上層には第2遺構面を形成する黒灰色砂質土が厚く堆積していることから、土石流で削られた低い部分に周辺から徐々に土砂が流れ込み、弥生時代後期には、ほぼ埋没していたものと推測される。

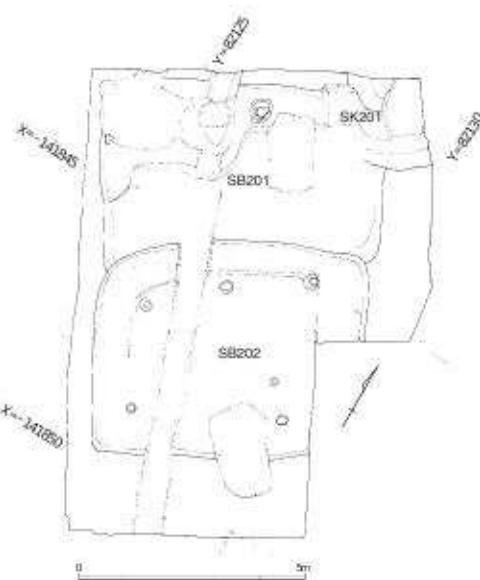


fig.82 第2遺構面平面図

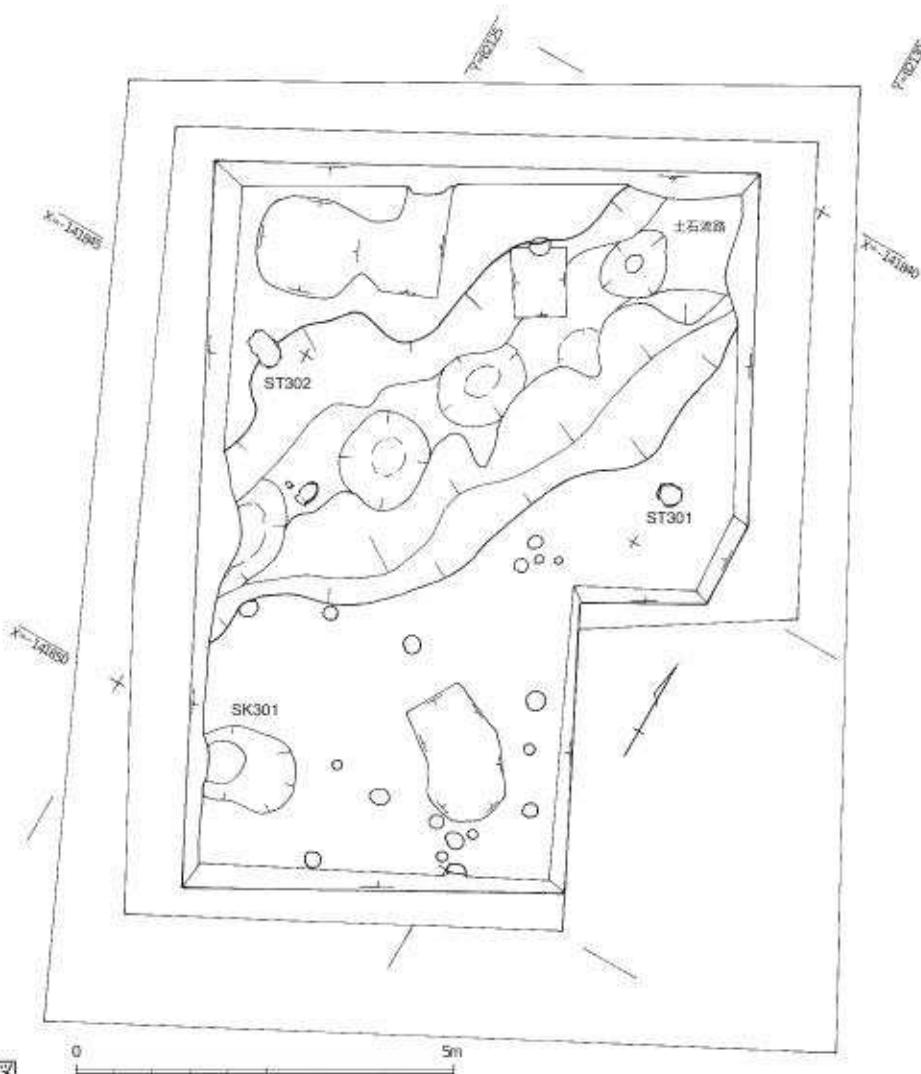


fig.83 第3遺構面平面図

土坑SK301 2区西端で確認された1.4×1.3m前後の方形の土坑である。西端は調査区外に出ている。掘形は逆台形の断面形を呈し、深さは40cm程度である。埋土の上層には10~30cm大の複数の川原石が土器片やサスカイト片とともに投げ込まれており、土坑が掘削されてから、やや時間が経過して、半分程度埋まった段階で不要なものをまとめて廃棄したと判断される。

ピット群 土石流路の南側すなわち1区南端と2区では複数のピットを確認した。特に2区南東端では稠密に検出されているが、その目的は明らかでない。

3.まとめ

今回の調査では、3面の遺構面を確認し、第1遺構面では中世の土坑、ピット、第2遺構面では弥生時代後期頃の竪穴建物2棟および土坑、第3遺構面では縄文時代の甕棺墓、川原石が投げ込まれた土坑や複数のピット、堆積した砂礫中に縄文土器や石鐵、サスカイトの破片が多く含まれる土石流路等を発見した。

これらの調査成果と周辺のこれまでの調査データと併せることで、縄文時代~中世にかけての篠原遺跡の様子を再現するための貴重な資料とすることができた。

11. 雲井遺跡 第39次調査

1. はじめに

雲井遺跡は縄文時代から中世にかけての複合遺跡として知られる。過去に行われた発掘調査では、縄文時代早期から後期の土器や石器を出土する層が確認されているほか、弥生時代の方形周溝墓群が著名である。特に今回調査地の西隣にあたる第28次調査では、弥生時代から古墳時代の竪穴建物が集中して発見され、武器型青銅器の石製鋸型や玉造関連の遺物などが出土して注目を集めた。

2. 調査の概要

今回の調査は、民間事業者による社屋建て替えに伴うものである。工程の便宜上、調査区を2分割し、I、II区として順次着手したが、残土置き場の関係からII区については第3構面以下層の調査は調査区内をさらに東西に二分して行った。本報告ではすべて一括して報告する。

基本層序

調査地点は、六甲山南麓に位置し、南に向かって下がる傾斜地形を呈する。現況地盤直下には、従前の建物解体に伴う盛り土と調査区全域を厚く覆う洪水砂の堆積が認められる。洪水砂の直下で弥生時代包含層（第1包含層）が堆積しているが、この層を切り込んで形成された流路によって削平され、包含層は流路の東西に部分的に残るに過ぎない。上位の洪水砂は、流路が氾濫した際に堆積したものと考えられる。

弥生時代包含層は2層堆積しており、その直下に2層～3層の褐色系砂層、バイラン土壌へと続く。



fig.84 調査地位置図 1:2,500

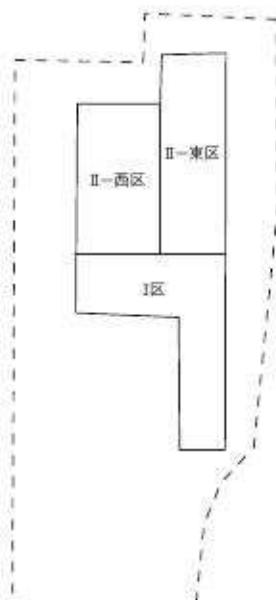


fig.85 調査区配置図

第1遺構面

第1包含層上面で、隣接調査地で報告されている第1遺構面に相当すると考えられる。室町時代流路を検出した。

流路は調査区を南北に貫き、肩は調査区外である。調査区内では流路の底および、東西岸に続く立ち上がりのみを確認した。底は起伏に富んでいるが、水流で地盤が削られた結果である。第1遺構面はすべて流路内であるため、第2遺構面検出時に一括で図化し報告する。

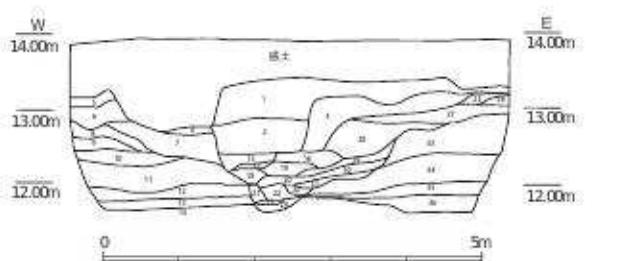
確認した範囲での流路の深さは1.8m程度である。最上層の砂層以下底まで複数の砂層が連続し、粘質の堆積層は確認できず、最下層にのみ、拳～人頭大の礫を多く含む粗砂層が認められた。埋土内からは室町時代の土器、陶器、瓦や弥生土器などが出土したが、最上層から最下層まで出土する土器に時期差はない。したがって、この流路は室町時代に形成されたもので、一過性の急激な水流によって形成され、短時間に埋没したと判断される。

第2遺構面

流路検出面より2層下、弥生時代の包含層を取り除いた直下の面を第2遺構面とする。流路による削平を免れた箇所で、部分的に検出された層である。弥生時代包含層の直下であることから弥生時代の遺構面と推測されるものの、検出した不定形の落ち込み2か所から遺物は出土せず、確定できない。これらの落ち込みは植生跡の可能性もある。部分的に検出したもので、規模等は不明である。

第3遺構面

第2遺構面の直下層を、第3遺構面とする。不定形の落ち込みを2か所確認しているが、遺物は出土せず、植生跡の可能性がある。いずれも部分的に確認されたもので、規模等は不明である。隣接地の既済調査で報告されている縄文時代遺構面に相当すると思われる。



- 1. 7.5Y5/1 灰白色細砂 2. 7.5Y5/1 灰白色細砂に人頭大礫多く混
- 3. 7.5Y6/1 灰色砂にマンガン沈着 4. 10YR5/2 灰黄色褐色砂
- 5. 7.5Y5/1 黄色砂 6. 2.5Y5/1 黄灰色砂 7. 10YR4/2 灰黄褐色砂
- 8. 10YR4/1 褐灰色粘質砂 9. 10YR5/1 褐灰色粘質砂
- 10. 10YR5/1 褐灰色砂 11. 2.5Y4/2 細灰黃色砂 12. 2.5Y5/4 黄褐色砂
- 13. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂に5cm大礫混
- 14. 2.5Y4/3 オリーブ褐色相帯に拳大礫多く混 15. 5Y5/1 灰色極細砂
- 16. 2.5Y5/1 黄灰色極細砂 17. 2.5Y6/3 にかい黄色粗砂
- 18. 2.5Y5/2 細灰黃色極粗砂に5~20cm大礫混 19. 2.5Y5/1 黄灰色極粗砂
- 20. 2.5Y5/1 黄灰色粘土 21. 2.5Y6/1 黄灰色粘質砂 22. 10YR4/2 褐色極粗砂
- 23. 2.5Y5/1 黄灰色粘質極細砂 24. 2.5Y5/1 黄灰色極粗砂に拳大礫多く混
- 25. 2.5Y5/1 黄灰色粘質砂に褐色粘土ブロック状混 26. 7.5Y5/1 灰色砂
- 27. 10YR6/1 灰色砂 28. 10YR5/1 褐灰色砂 29. 10YR5/1 褐灰色粘質砂
- 30. 2.5Y6/1 黄灰色粘質極細砂 31. 2.5Y6/1 黄灰色粘質砂に褐色粘土ブロック状混
- 32. 5Y6/1 灰色極細砂 33. 10YR4/1 褐灰色粘質砂
- (1.~10. 15.~32.=流路埋土 33.=弥生時代包含層・第1遺構面ベース層
11.=第3遺構面ベース層 12.=第4遺構面ベース層)

fig.86 流路上層断面図



fig.87 1区第1遺構面 (南西から)

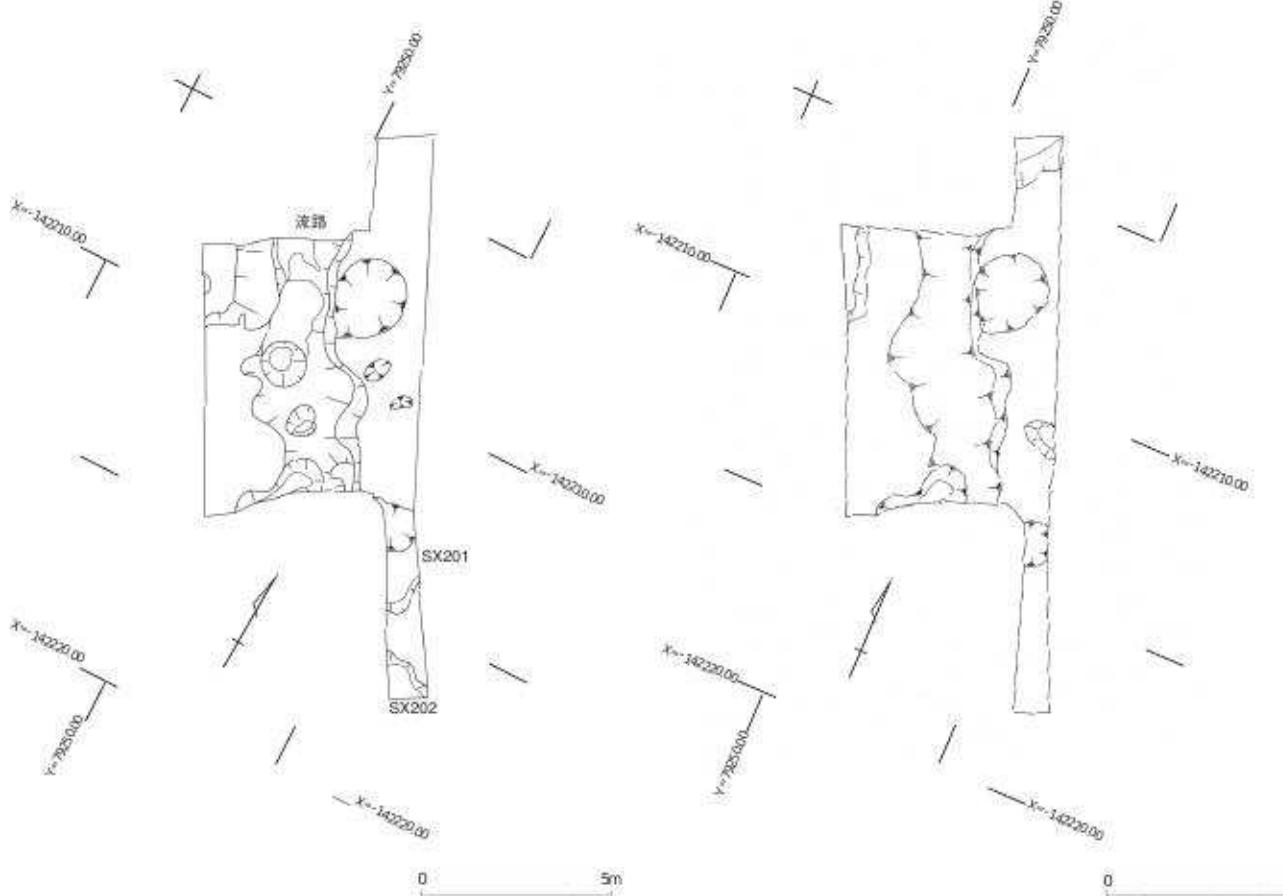
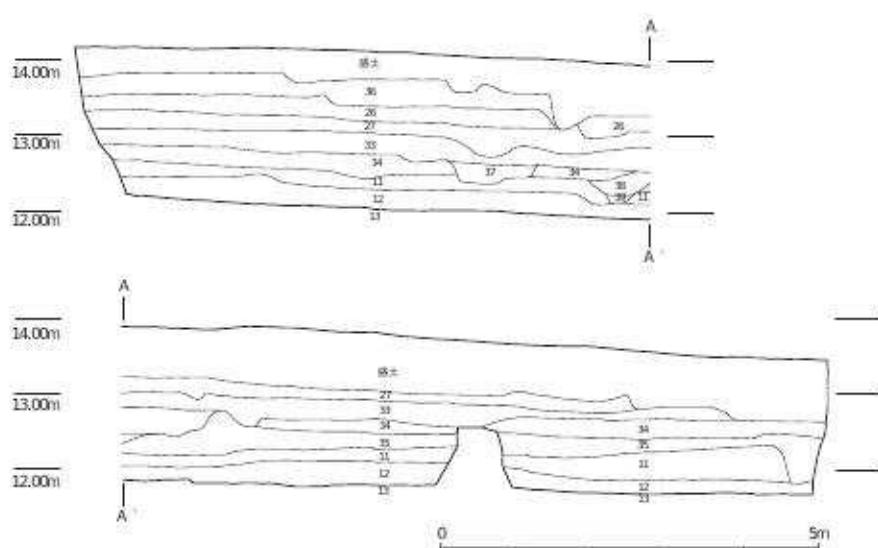


fig.88 第2遺構面平面図

fig.89 第3遺構面平面図



26. 7SY5/1 灰色砂 27. 10YR6/1 灰色砂 33. 10YR4/1 暗灰色粘質砂(弥生時代包含層・第1遺構面ベース層)
 34. 2SY3/2 黑褐色粘質砂(第2包含層・第2遺構面ベース層) 35. 10YR4/1 暗灰色粘質砂
 36. 7SY6/1 灰色的砂(波動堆土) 37. 7SY5/1灰白色砂 38. 10YR4/2 灰黄褐色砂(ヒナ大花壇より)
 39. 5YS/1 黑色砂

fig.90 東壁土層断面図

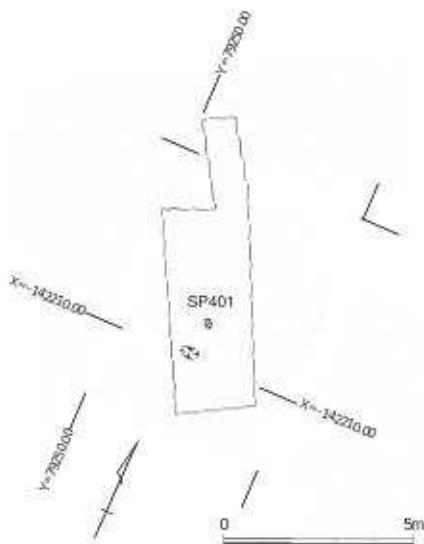


fig.91 第4遺構面平面図

第4遺構面

第3遺構面の直下層で検出した。II-西区で直径20cm、深さ36cm程度のピットを1か所確認しているが、遺物は出土していない。隣接地の既済調査で報告されている縄文時代遺構面に相当すると思われる。

3.まとめ

今回の調査では、調査区全体が室町時代に形成された流路内にあたり、本来の地層が削り取られてしまっているため、遺構の残存状態が悪く、遺物出土量も少なかった。第1遺構面=室町時代、第2遺構面=弥生時代、第3遺構面・第4遺構面=縄文時代としたが、第1遺構面以外は、時期確定に足る遺物は出土していない。

第2～第4遺構面は、流路による削平を免れた箇所を部分的に検出したもので、若干の遺構を確認しているが、遺物が出土していないため遺構の性質、時期ともに類推の域を出ない。

西隣の第28次調査では、弥生時代、古墳時代とも非常に濃密な遺構検出状況であるのに比べ、南北及び東隣接地は、遺構密度が低くなるようである。今回調査区は、西側以外の調査結果に近いもので、弥生時代および古墳時代の雲井遺跡は第28次調査地を境として、以東は集落域の周縁部の様相を呈するようである。



fig.92 2区第2遺構面全景(南から)



fig.93 2区第3遺構面全景(南から)

12. 宇治川南遺跡 第3次調査

1. はじめに

宇治川南遺跡は、大倉山と宇治野山の間を流れる宇治川下流域に立地する縄文時代から室町時代までの複合遺跡である。標高10mの地点にあり、大倉山丘陵の南東側斜面地に位置する。

今回の調査地点に隣接する第1・2次調査では、縄文時代早期中葉の黄島式土器が出土しているのを上限として、縄文～古墳時代中期・奈良～平安時代に該当する遺構がこれまでに検出されている。中でも、縄文時代の資料は、大洞式土器や中部・北陸地方の浮線文土器、大分県腰高産とみられる黒曜石などといった各種搬入品のほか、石棒や土偶なども出土しており、他地域との交流を物語る遺物が出土している。古墳～平安時代の遺構面では、溝や柱穴などが検出されているが、その中でも平安時代後期の遺構は、福原京の一部が当遺跡周辺まで及んでいた可能性があると言及されている。



fig.94 調査地位置図 1:2500

2. 調査の概要

基本層序

現地表面からT.P.9.0~9.2mまでが造成土・戦災関連遺物などを含む土層であり、その下位に遺構面が4面ある。第1遺構面は、黄灰色粗砂（第8・11層）で、第2遺構面は、黒色中砂（第18層）。なお、下層の灰白色シルト（第21層）は洪水砂だが、その面で腐食土壌のたまたま遺構を検出しており、灰白色シルトで検出した遺構は、黒色中砂から掘り込まれた遺構と認識した。第3遺構面は、調査区2・3・5・6区が暗灰茶色粘質土（第28層）と暗灰色粗砂混じり粘質土（第29層）、調査区1・4区が濃灰色中砂（第59層）である。第4遺構面は、灰褐色粗砂（第61層）である。



fig.95 調査区配置図

第1遺構面 犁溝45条、ピット7基を検出した。

犁溝は、長さ3m未満、幅0.3m、深さ0.1m未満のもので、東西方向に向かって掘削されている溝（東西溝）が大半を占める。南北方向に向かって掘削されている溝（南北溝）も少數ある。南北溝と東西溝には、切り合い関係が認められることから、犁溝を掘削した時期が2時期あつたと考えられる。溝内埋土中からは、土師器と須恵器が少量出土している。

ピットは、5区西側に集中し、径20~30cm、深さ10cmほどで、遺物は出土していない。

第2遺構面 土坑9基、ピット16基、溝2条、土器溜め（SX）1基を検出した。

土坑は、幅0.6~1.3m、深さ0.1~0.2mほどであり、SK201・205から土師器が出土している。なお、下層の洪水砂上で検出した遺構内からも同時期の土師器が出土している。

ピットは、径20cm、深さ10~20cmほどであり、SP201・203から土師器が出土している。

溝は、3区東壁際と6区北壁際で検出した。SD201は、幅10cm、深さ10cm、長さ20cm以上で、調査区外に伸びる。SD202は、幅10~15cm、深さ10cm、長さ30cm以上で、南側は削平されているが、北側は調査区外に伸びる。いずれの溝からも遺物は、出土していない。

土器溜めは、2区北西側で検出した。布留式甕で1個体分が出土している。

第3遺構面 土坑2基、ピット12基、溝1条を検出した。

土坑は、4区と7区で検出したもので、いずれも攪乱によって損壊している。SK301は、長軸1.6m以上、幅1.4m、深さ10cmほどである。SK302は、長軸3m、幅0.8m以上、深さ10cmほどである。遺物は、出土していない。

ピットは、2・3区で検出しており、幅20~50cm、深さ10cmほどである。遺物は、出土していない。

SD301は、調査区の北から南にかけて流れている。幅2.2~2.5m、深さ10~20cmであり、溝内埋土中から縄文土器や弥生土器などが出土しているが、いずれも混入品とみられる。

第4遺構面 土坑6基、ピット3基、落込み1基、溝2条を検出した。

土坑は、2区南側に集中している。幅0.8~1.2m、深さ0.1~0.2mの不整円形が多い。遺物は、SK401・402埋土中から弥生時代後期の土器が出土している。

ピットは、幅40~50cm、深さ30~50cmで、SD401東掘形際から検出したピットが最も深く、柱の痕跡も認められた。遺物は出土していない。

時 期	出 土 地 区	出 土 遺 構	器 種	備 考
鎌倉時代～安土桃山時代	2区	暗灰色粗砂	棒状土錘・有溝土錘	第1遺構面の上位層
古墳時代前期～縁倉時代	2区	SX201	土師器(甕)	1個体分
	1～4区	第1～4遺構面包含層+(旧)SK310・326・335埋土中+複乱底(褐色粗砂)	土師器(甕)	少なくとも4個体分
	5区	第2遺構面包含層～灰白色中砂(第21層)包含層	瓦器(椀)・縄文土器(甕)・弥生土器(甕)	
	6区	第2遺構面包含層	弥生土器(底部)	
縄文時代後晩期～弥生時代後期	1・2区	南壁先行トレンチ内(褐色粗砂中)	弥生土器(壺)	
	1～3区	第3遺構面～第4遺構面包含層中	縄文土器(深鉢)・弥生土器(脚付壺)・土師器(甕)	縄文土器はSD402上層から出土
	4区	第4遺構面検出時	弥生土器(甕)・剥片(サヌカイト)	
	4区	SD401 北壁断面第6層中	縄文土器(甕)・弥生土器(底部)	
	5・6区	SD401埋土中	弥生土器(広口壺)	
	5・6区	SD401下層層序確認トレンチ内	弥生土器(広口壺)	
	5・6区	第4遺構面包含層	弥生土器(甕)	SD401からみて西側包含層中から出土
	5・6区	SD401下層層序確認トレンチ内	縄文土器(甕)	
	6区	第3遺構面包含層	縄文土器(甕)・弥生土器(器台・甕・底部)	

表14 主な遺構等から出土した遺物の内訳

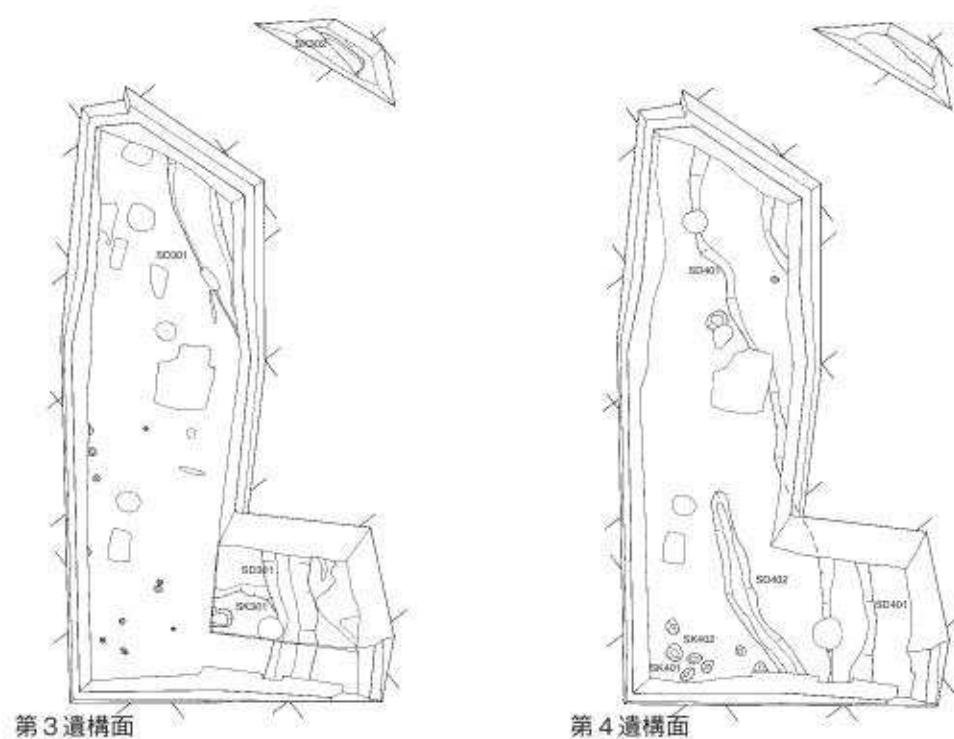
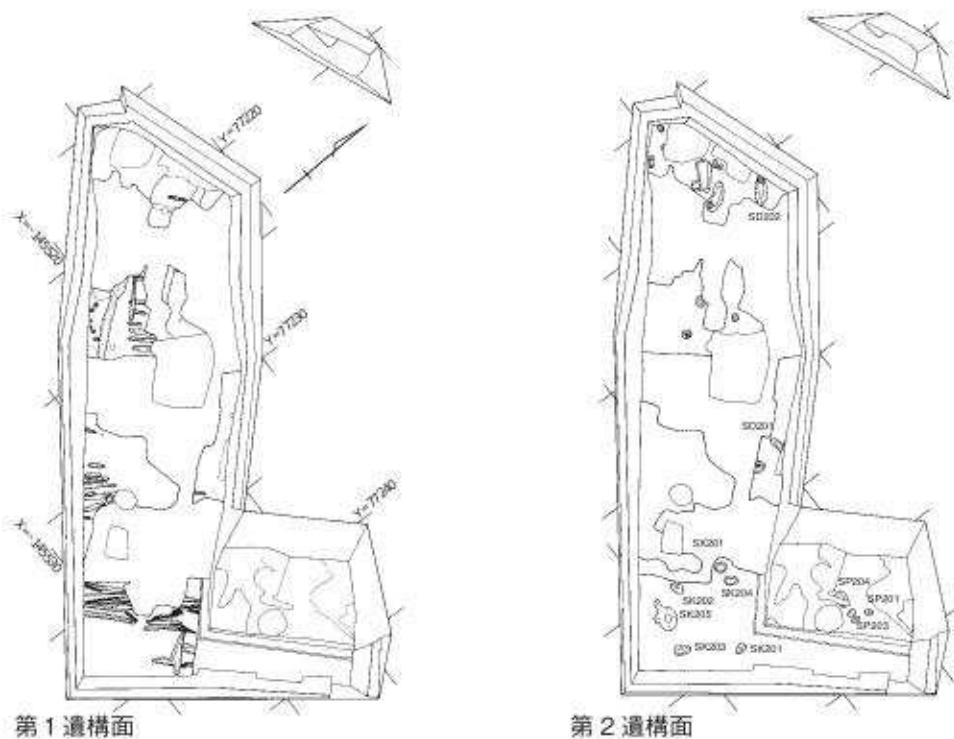


fig.96 第1～第4遺構面平面図



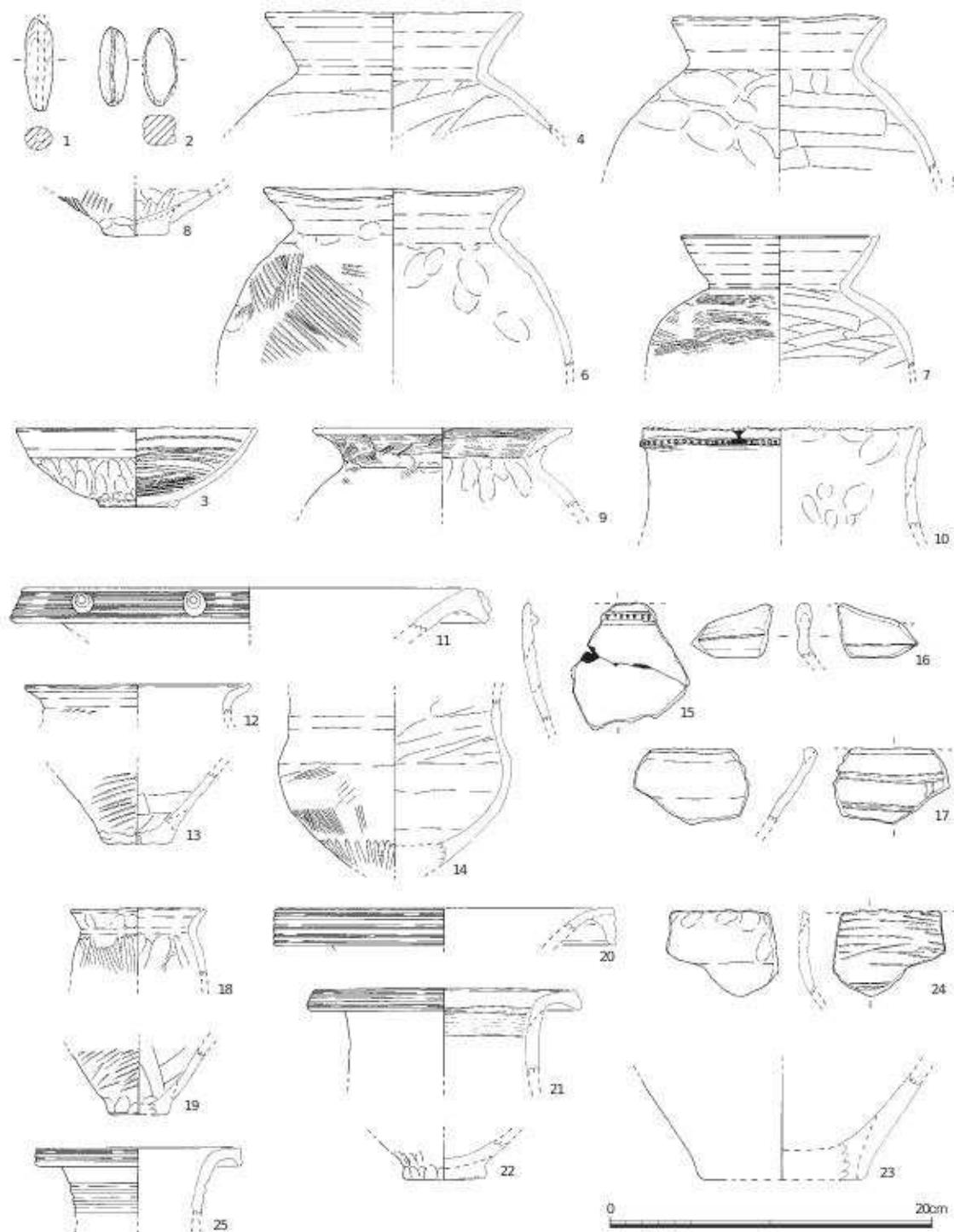


fig.97 出土遺物実測図

落込みは、7区で遺構の南肩のみを検出した。遺物は出土していない。

SD401は、幅2.2~4.7m、深さ50~80cmの溝で、北側のほうが南側よりも幅が広い。掘形がほぼ垂直に切り込まれていることから、短期間に多量の水が流れて形成されたものと同志社大学理工学部の増田富士雄氏からご教示いただいた。溝内埋土中からは、中期後葉~後期前葉の縄文土器や波状口縁を有する縄文土器、凹線文を有する弥生土器、広口壺、器台などが出土しているが、時期の古い資料は、上流からの混入品とみられる。

SD402は、幅0.9~1.4m、深さ20cmほどの溝である。埋土には、シルトが堆積していた。埋土中からは、弥生土器のほかに、半裁竹管を押引きした沈線を有する粗製鉢の口縁部が出土しており、東海地方などの影響を受けた中期前葉の縄文土器と考えられる破片が混入している。

回収番号	発見場所	出土地区	出土遺物	調整・施文	色・質	断面	焼成	寸法・容積cm 備考
1	排水溝	2区	暗灰色粘土層	ユビオサエ	暗褐色	普通: 1~3mm大の粒を含む	良好	幅5.8~横1.75m 第1造構面の上位層・草孔径は5mm
2	右溝土跡	2区	暗灰色粘土層	不明	褐褐色	普通~やや粗: 1~3mm大の粒を多く含む	良好	幅4.9~横2.1~厚1.8 第1造構面の上位層
3	瓦器(第1 底土層下部)~2層	5区	第2造構面包含層	内面ヨコナガのちくガキ・外面口縁 ヨコナガ・外直側部~底部ユビオ サエ	内外: 灰色	粗良: 1~5mm大の粒を少額含む	良好	119.5~5.0
4	上加谷(第1 底土層新段階)	2区	SK201	内外面共に側面ナガ・内面~外直口 縁部ヨコナガ	内: 褐褐色 外: 深褐色	粗良: 1~3mm大の粒を含む	良好	(180)~(7.6)
5	土師器(第1 底土層新段階)	2~3区	第2造構面包含層+(日) SK326埋土中	内面側部アリのちくヨビオサエ・内 面~外直口縁部ヨコナガ・外面ユビ オサエ	内外: 褐褐色	普通: 2~5mm大の粒を多く含む	普通: 黑 耳有	(133)~(100)
6	土師器(第1 底土層新段階)	2~4区	第1造構面包含層+第 2造構面包含層+(日) SK320埋土中+発光内 部(褐色根付)	外直口縁部ヨコナガ・側部内面ユ ビオサエ・側部外縁タキのちくヨ コナガ	内外: 褐色	普通~やや粗: 1~4mm大の粒を 多く含む	やや粗: 黒耳有	(16.2)~(11.2)
7	土師器(第1 底土層)	1~3区	第2造構面包含層+(日) SK325埋土中+第3造構 面+第4造構面包含層+(日)	内面側部ケリ・内面~外直口縁部 ヨコナガ・外直側部ハケ	内: 白褐色 外: 暗褐色及び白褐色	粗良: 1~2mm大の粒、角閃石、 チャートを含む	良好	(12.4)~(8.3)
8	弥生土器(窓か) 第V様式灰陶	5区	第2造構面包含層	内面ナガ・外直側部タキ・外直口 縁ユビオサエ	内外: 灰色	粗良: 1~4mm大の粒とタサリ繊 を多く含む	良好: 黑 耳有	-~(3.0) 底面に木象嵌
9	土師器(第1 底土層新段階)	5区	第2造構面包含層~灰白 色中砂)第21層(包含層)	側部内面~外直口縁部ヨコハケ~内面側部 ユビオサエ・外直側部タキハケ	内外: 褐褐色	粗良: 1~2mm大の粒+チャート を含む	良好	(16.0)~(15.1)
10	縄文土器(第1 底土層灰陶)	5区	第2造構面包含層~灰白 色中砂)第21層(包含層)	内面ユビオサエ・外直口縁部ヨコナ ガのちくヨビオサエ・外直側部不明	内: 普通 外: 灰色	粗: 1~3mm大の粒、角閃石、 黑母を含む	粗	(17.3)~(6.3)
11	弥生土器(窓か) 第V様式灰陶	5区	第3造構面包含層	内斜面旁にえすず~外直口 縁ぐり鉢ヨコナガ	内: 黃褐色 外: 暗褐色	良好: 1~5mm大の粒、チャート、 黒母を含む	良好	(25.0)~(27.7)
12	弥生土器(窓か)	6区	第3造構面包含層	内面マツモトえすず・内面~外直口 縁部ヨコナガ・外直側部タキ	内外: 褐褐色	粗良: 1~1mm大の粒とチャート、 角閃石、黑母を含む	良好	(13.7)~(12.9)
13	弥生土器(窓か) 第V様式灰陶	6区	第3造構面包含層	内面側部ナガ・内面側部ハケか・外 直側部タキモ・外直側部ユビオサエ	内: 灰色 外: 暗褐色	粗良: 1~5mm大の粒と角閃石、 チャート、タサリ繊を含む	良好	-~(4.0) 底面に木象嵌
14	弥生土器(脚付壺)	1~3区	第3造構面~第4造構面 包含層中	内面側部ナガ・内面底部不調整・外 直側部ナガ・外直側部下ハケのちくガキ	内: 白褐色 外: 深褐色	良好: 1~2mm大の粒、角閃石、 チャートを含む	良好	-~(10.6)
15	縄文土器(第1 底土層灰陶)	6区	第3造構面包含層	不明	内外: 灰色	粗良: 1~4mm大の粒と角閃石を 多く含む	良好	縦7.9~横7.3
16	縄文土器(窓か)	6区	第3造構面包含層	不明	内外: こげ褐色	粗良: 1~2mm大の粒を含む	良好	縦2.5~横5.0 底面化口縁の破片・縄文 後期型
17	縄文土器(第1 元古山Ⅱ式)	1~3区	第3造構面~第4造構面 包含層中	不明	内: 深灰色 外: 暗褐色	粗: 1~2mm大の粒を含む	粗	縦4.75~横7.5
18	土師器(第1 底土層)	1~3区	第3造構面~第4造構面 包含層中	内面側部ナガ+ユビオサエ・内面~ 外直口縁部ヨコナガ+ユビオサエ・ 外直側部ハケ	内: 白褐色~粉褐色 外: 暗褐色	良好: 1~1mm大の粒、タサリ繊、 角閃石、チャートを含む	良好	(8.4)~(4.3)
19	弥生土器(窓か) 第V様式灰陶	5~6区	第4造構面包含層	内面ナガ・外直側部タキ・外直口 縁ユビオサエ	内: 黑褐色 外: 暗褐色	良好: 1~3mm大の粒と角閃石、 黑母を含む	良好	-~(4.3) SD401西側部分から出土
20	弥生土器(広口型)	5~6区	SD401-2層層序確認記 トレンチ内	内面不明・外直口縁部ヨコナガ	内: 暗褐色 外: 暗褐色	良好: 1~4mm大の粒とタサリ繊、 黑母を含む	普通	(21.6)~(12.3)
21	弥生土器(広口型)	5~6区	SD401埋土中	内面側部ヨコハケ・外直口縁部ヨコ ナガ・外直側部花不明	内: 暗褐色 外: 粉褐色	やや粗: 1~6mm大の粒、角閃石、 黑母を含む	やや粗	(16.3)~(5.6)
22	弥生土器(窓か)	4区	SD401 北壁断面第6層中	内面不明・外直側部ユビオサエ・外 直側部花調整	内: 暗褐色 外: 粉褐色	粗良: 1~3mm大の粒を含む	良好	-~(2.5)
23	弥生土器(窓か)	4区	SD401 北壁断面第6層中	内面不明	内: 暗褐色 外: 粉褐色	不良: 1~3mm大の粒を多く含む	-	-~(6.7)
24	縄文土器(窓か)	4区	SD401 北壁断面第6層中	内面ユビオサエ・外面二枚目差頭	内: 黑褐色 外: 粉褐色	粗良: 1~2mm大の粒、チャート、 黑母を含む	良好	縦7.0~横3.4
25	弥生土器(窓)	1~2区	南壁下層確認先行トレン チ内(褐色根付中)	内面~外直口縁部ヨコナガ・内外面 難辨不明	内外: 深褐色	粗: 1~2mm大の粒を含む	粗	(12.8)~(4.4)

*1 (日)SK310~325~335は、第2造構面から取り戻された遺構の可能性があるもの。

*2 尺寸(高さの) ()は復元尺。破片資料は現存尺。土耕は推定している部位の長さを()で表記。

表15 出土遺物観察表



fig.98 1～3区第2遺構面全景（北西から）



fig.99 5・6区第4遺構面全景（北西から）

出土遺物 28リットルコンテナ換算で3箱分が出土している。主な遺物の出土遺構は、表に示したとおりである。図化できた遺物は25点である。実測図および観察表を参照されたい。

3. まとめ

今回の調査では、4つの遺構面を確認することができた。第1遺構面は遺構の切り合い関係から2時期あるとみられ、その所属時期は、鎌倉～室町時代にあたる。

第2遺構面は、古墳時代初頭～前期にあたる。第1・2次調査で検出された庄内式並行段階の住居址と木棺墓は、本調査の第2遺構面が遺構面に相当するものと考えられる。しかし、黒色中砂上で検出した遺構は少なく、前回の調査成果を追認する成果は得られなかった。

また、第3遺構面の所属時期についても、古墳時代初頭で第2遺構面の時期とほぼ変わらないことから、短期間に大規模な洪水を複数回受けていたものと考えられる。

第4遺構面は、調査区を南北に横断する流路を検出した点が特徴といえる。所属時期は、弥生時代後期後半～終末期である。1・2区南壁際と2区東側コーナー、3区北側、5・6区SD401中央、6区北壁際に下層確認のためのトレーニチを入れた結果、シルトと粘質土が互層堆積した洪水砂（第73・74層）を確認した。洪水砂は、6区北壁断面第73層以下全域に広がっており、上流から流れてきたとみられる縄文土器や弥生土器も含まれていた。堆積状況から、洪水砂が滞留した痕跡が少なくとも2回あったという点も増田氏からご教示を受け、弥生時代後期～古墳時代初頭における宇治川下流域の環境をうかがえる資料を得ることができた。

以上の調査成果および過去の発掘調査事例から、宇治川南遺跡の盛期は、縄文時代後期～晩期と弥生時代後期後半～古墳時代初頭に認められる。とくに縄文時代後期～晩期では、四ッ池式～北白川上層1式段階と元住吉山I～II式段階、篠原式・口酒井式段階に衰退期があり、いずれも、その後に安定した集落が営まれる傾向にある。今回の発掘調査では、過去の調査では出土していない型式の滋賀里IIIb式と元住吉山II式の深鉢口縁部片が出土しており、これらの資料から、これまで衰退期として認識されていた時期も見直す必要ができたといえるだろう。

その一方で、SD401のような急流によって形成されたとみられる流路の存在は、宇治川に起因する洪水・氾濫によって、集落が衰退するきっかけを与えた可能性をもつ遺構と考えられる。また、弥生時代の土器に関しては、特筆すべきは、前述した第2の盛期にあたる第V様式後半～布留式段階の土器である。今回出土した庄内式段階の甕は、3世紀前半の甕の編年を検討する上で参考となる資料であり、類例の増加を待って検討したい。

13. 楠・荒田町遺跡 第59次調査

1. はじめに

楠・荒田町遺跡は縄文時代中期から古墳時代にかけての複合遺跡で、弥生時代が最盛期と考えられる。周辺に点在する六甲南麓の遺跡の多くが河川扇状地上に形成されるのに比して、当遺跡は中位段丘裾に立地する点に特徴がある。

過去に行われた発掘調査では、弥生時代前期から中期の方形周溝墓群、「貯蔵穴」と称される土坑、竪穴建物などが多数確認されているが、墓、土坑ともに現在の楠町6丁目交差点付近で集中して発見されている。土坑はⅠ様式を主体とし、方形周溝墓は弥生時代中期のⅢ様式からⅣ様式を主体とすることから、当該地域では弥生時代の開始と前後する頃、舌状に張り出す中位段丘裾の等高線が広くなる傾斜の緩やかな部分に居住域が作られ、時代が下るにしたがって墓域へと転化したことがわかる。

2. 調査の概要

今回の調査は、民間事業者による共同住宅建設に伴うものである。工程の便宜上、調査区を4分割し、I区～IV区として順次着手したが、本報告では一括して報告する。

基本層序

調査範囲は、六甲南麓の傾斜地上に位置し、南および西に向かって下がる傾斜地形を呈する。現況地盤から弥生時代遺構面までの間には、従前の建物解体に伴う盛り土、コンクリート叩き等を除くと2～3層の耕作土、洪水砂などの堆積が認められる。

このうち洪水砂については、中世ないし古墳時代の土器を出土するため、当該時期頃の堆積の可能性が高い。洪水砂直下に弥生時代包含層が2層程度堆積し、その直下が遺構面である。





fig.101 調査区配置図

遺構面は1面で、確認された遺構はすべて弥生時代前期末から中期初頭の時期に集中していた。遺構面北端で標高11.4m前後、南端で11m前後だが、南側は従前の建物による削平が著しく、本来の弥生時代地盤はこの検出高よりも高かかったと考えられる。

検出遺構

溝1条(SD)、土坑状遺構35基(SKおよびSX)、ピット(SP)30基を確認した。溝はほぼ真北に軸をもち、南流する大型かつ直線的なもので、人工的な構造物である。

土坑のうちには、既済の調査で多数確認されている「貯蔵穴」と呼ばれるものと同様のものが20基含まれている。ピットは、深く、柱痕様の土層堆積を示すものも複数認められたが、今回の調査範囲内では、柱配置を把握して建物を復元するには至らなかった。

溝 (SD01)

幅120cm、深さ90cm程度の南北に走る溝である。調査区外にさらに伸びている。検出した範囲では、長さ12.8m以上。断面はゆるいU字形を呈し、溝内の埋土は、上・中層が包含層と酷似したバイラン土様の褐色系の粘質砂であるのに対し、下層は粘土と細砂の薄い互層の連続である。下層は溝が機能していた当時の沈殿物で、上・中層は溝が放棄されたのちの風性の堆積物であると考えられる。

弥生時代I様式末ないしII様式初頭の土器を多数出土している。当該時期に水路として掘削されたものの、比較的短時間のうちに機能しなくなったようである。放棄されたのちは乾燥した環境にあり、徐々に風性の砂が堆積して埋没に至ったと思われる。



fig.102 II区全景 (南から)



fig.103 SD01 (南西から)

土坑状遺構 (SK及びSX)

全部で35基の土坑状遺構を確認しているが、形状、堆積層、土器出土状況などから、以下の3つに分類できる。

I類 一般的な土坑の範疇に収まるもの。

II類 大型円形土坑。既往の調査において「貯蔵穴」として報告される類例が多数ある。

III類 遺構状の落ち込みを呈するが、植栽痕など、人為的遺構でない可能性が高いもの。

それぞれの分類については、表16の通りとする。I類7基、II類20基、III類6基を数えるが、これ以外に、調査区の端で検出されたため、遺構の一部分しか確認できず、分類しきれなかつたものが2基(SK07、SK10)存在する。

I類は形状に統一性がないものの、一定の量の遺物出土を見、かつ埋土の堆積が複層をなすといった特徴がある。長径が100cm以下で、深さは40cm~20cm前後の規模である。

断面はすり鉢状を呈し、その機能は様々であったと想像されるが、具体的に機能を示すような形状、出土遺物などはどちらも確認できていない。

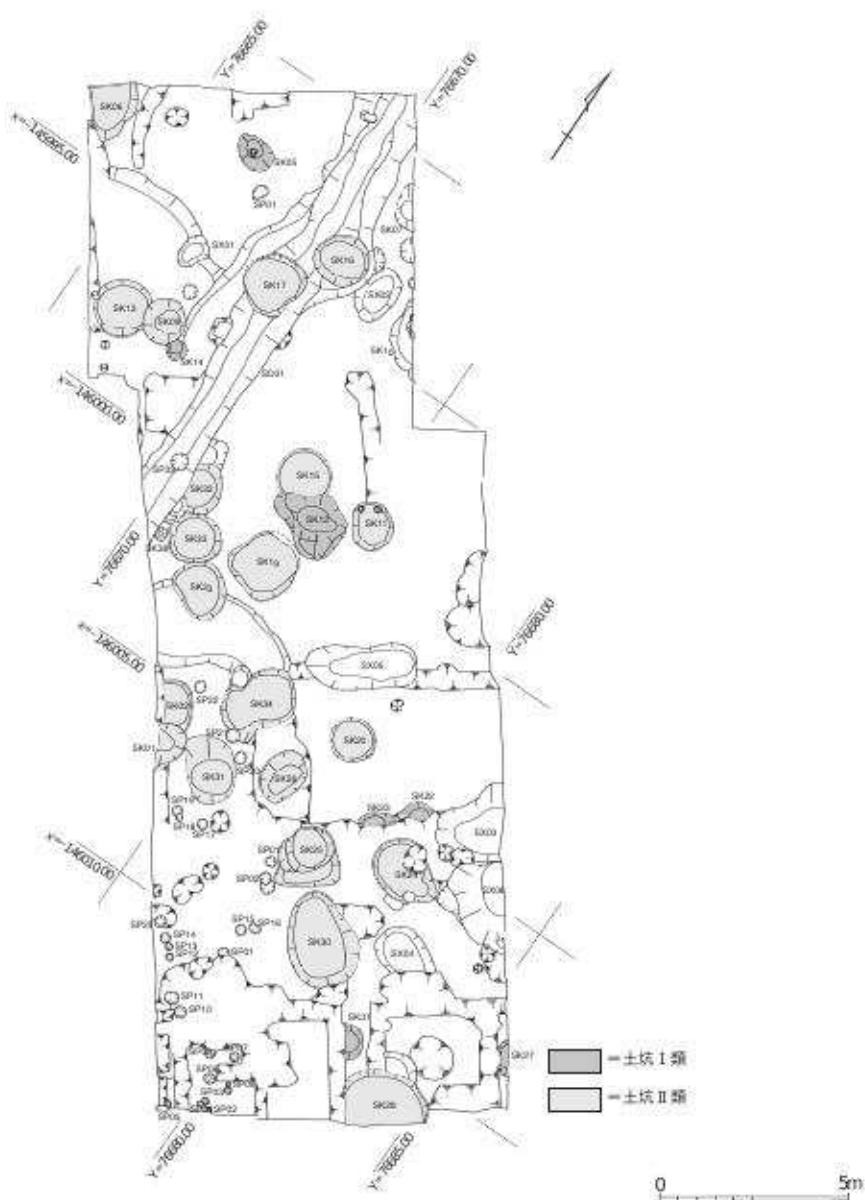


fig.104 調査区平面図

出土遺物はほとんどが細片で、埋没過程で砂と一緒に流入したものと思われる。時期の確定が困難なものばかりだが、上位に堆積する包含層の時期が弥生時代前期末から中期初頭に限られていることから判断して、この範囲のいずれかに収まる遺構であろう。

II類は正円に近い円形を主体とし、一部楕円形のものを含む。概して規模が大きく、小型のものでも長径が120cm以上、大型の場合は250cm近いものもある。深さも90cmを超えるものが存在するなど、I類の土坑に比して大きく深い外観を呈する。ただし調査区南側で見つかっているものは、上部を後世に削平されているため、本来の遺構の形状・規模を保っていない。

II類の土坑は壁体が垂直に立ち上がるという特徴を有し、断面筒型を呈する。一部袋状断面で確認されているものもあるが、壁体が早い段階で崩落した結果なのか、本的にこういう形状なのか判然としない。

埋土が極めて単純で、単層あるいは2～3層のうちに収まり、かつ水平堆積を示す場合が多い。このことは、II類の土坑の埋没が比較的短時間に風性堆積以外の要因、たとえば人為的な埋戻しなどによって行われたことを示すと考えられるが、具体的にどういった状況かは不明である。

類型	検出地区	遺構番号	形状	長径×深さ
I類	II区	SK05	楕円形	113×30
	II区	SK12	不整形	220×30
	II区	SK14	円形	57×45
	III区	SK22	—	90×20
	III区	SK23	—	93×18
	IV区	SK27	—	94×17
	IV区	SK31	—	90×28
II類	I区	SK01	—	122×23
	I区	SK02	—	120×46
	II区	SK06	—	140×90
	II区	SK09	円形	190×49
	II区	SK11	楕円形	118×49
	II区	SK13	円形	142×78
	II区	SK15	円形	146×65
	II区	SK16	円形	148×67
	II区	SK17	不整形	147×57
	III区	SK19	円形	172×80
	III区	SK20	円形	121×14
	IV区	SK24	不整形	170×27
	III区	SK25	不整形	160×57
	III区	SK26	楕円形	140×57
	IV区	SK28	—	237×46
	IV区	SK30	楕円形	249×56
III類	I区	SK31	楕円形	174×53
	I区	SK32	—	132×22
	I区	SK33	—	283×15
	III区	SK34	不整形	200×60
	II区	SX01	不整形	95×30
	II区	SX02	楕円形	153×38

表16 土坑状遺構一覧

II類の土坑群には、形状・規模に一定の規格性があり、何らかの特定の機能を有すると考えるべきである。既済の調査では「貯蔵穴」として、特にイモ・堅果類の保存のための施設と推定されている。今回の調査では、その仮説を裏付けるような植物遺存体は出土していない。

埋土からは多量の土器、サスカイト類が出土している。土器類は残存状態が良好で、完形に近い状態のもののがかなりある。このことは、土器類が意図的に土坑内に入れられたことを示しているが、ほとんどの土坑で土器の出土は上層に集中しており、配置や出土状態に規則性はなく、埋納よりは投棄といった印象を与える。

土器の出土状況からみてもII類の土坑は、その機能を停止した後、人為的に、短時間に埋没した可能性が高いがその理由は不明で、埋没に際して完形の土器を一緒に埋める理由も判然としない。

出土土器の時期は弥生時代I様式末からII様式初頭を示すが、調査時の印象では、それぞれの土坑ごとに、微妙な時期差が存在するようである。II類の土坑同士が切りあって検出されているもの、SD01に切られているもの、SD01を切っているものな

どがあり、Ⅱ類の20基すべてが、同時に開削～埋没したものでないことは明らかである。

Ⅲ類の土坑は、土坑状遺構と呼ぶべきものである。遺物の出土が皆無で、堆積層は単層ないし2層程度にとどまり、形状・断面に統一性がない。人為的遺構以外の形成要因を想定すべきものである。

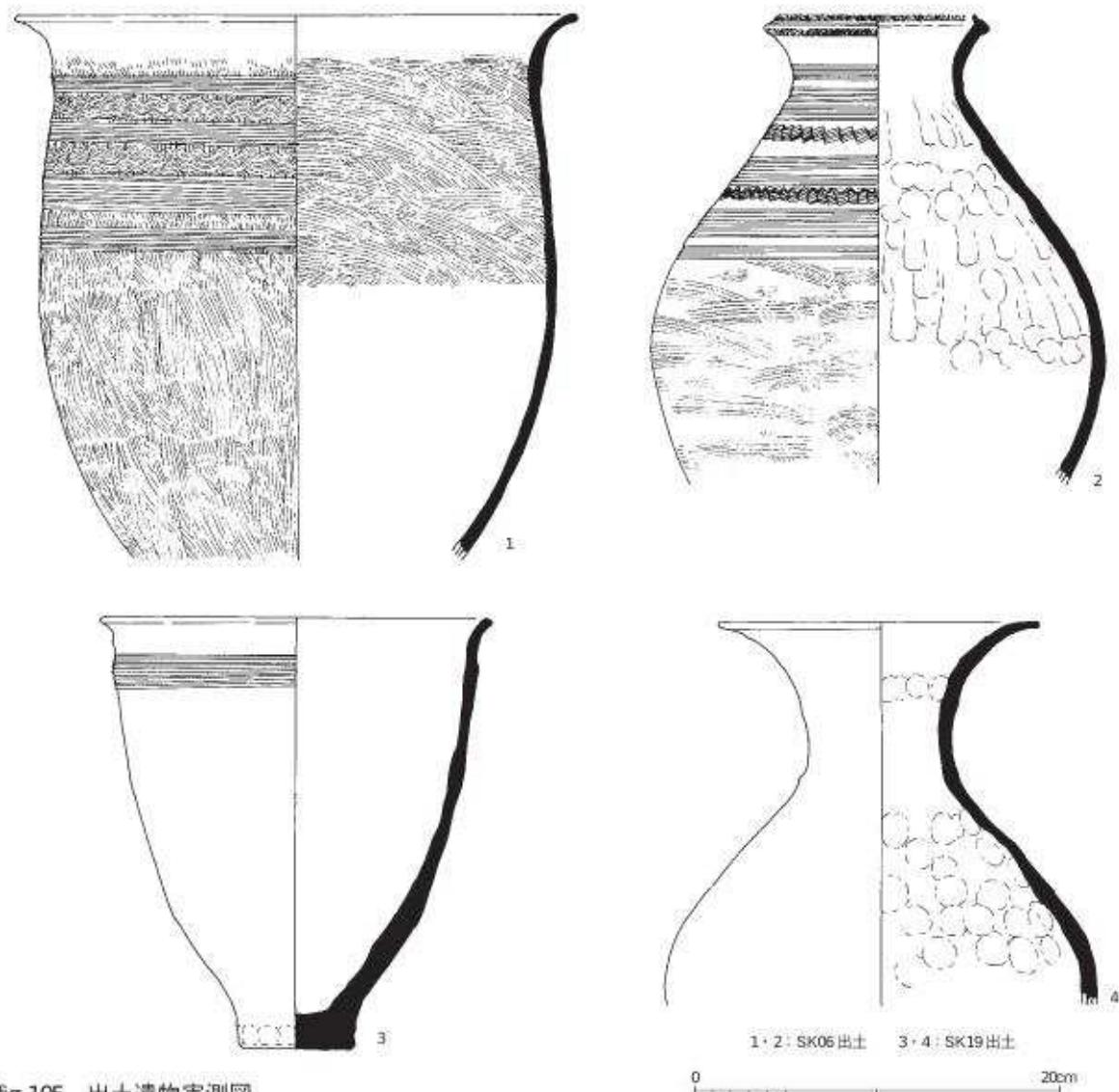


fig.105 出土遺物実測図



fig.106 Ⅲ区全景（北西から）



fig.107 Ⅳ区全景（西から）

ピット (SP)

調査区南角付近で集中して20基以上のピットを確認した。直径20~30cm程度で、深さも30cmを超えるものが多く、一部柱痕様の土層堆積を示すものもあるが、今回確認した範囲では建物として柱配置を復元するには至らなかった。ピット群が存在する範囲には土坑が見られない事からして、大型土坑は建物と共に存する範囲には造られないようである。

3. まとめ

今回の調査では、調査区のほぼ全域に、これまで「貯蔵穴」と推定されてきた大型円形土坑が点在する状況を確認した。またこの土坑群と時期を同じくして、南北に走る人工水路状の溝が築かれていた。調査時の印象では、「貯蔵穴」群の出土土器が示す時期幅より、水路の土器が示す時期幅のほうが短く、「貯蔵穴」群はⅠ様式末からⅡ様式初頭にまたがるもので、水路はⅡ様式初頭を主体とする。つまり、もともと「貯蔵穴」地帯であった場所に、ある時期水路が開削されたのである。

「貯蔵穴」のみの時期のうち、「貯蔵穴」・水路併存期があり、あるいはその後水路が廃絶した後、ふたたび「貯蔵穴」のみの時期に戻ったかもしれないが、その場合も廃棄された水路は埋まって浅くなりつつも、溝の痕跡として複数開口する穴の間に露呈していたようである。

当該地区の土地利用の変遷を正確に把握するには、個々の遺構から出土した土器を丹念に調査する必要があり、現時点ではこれ以上細やかな記述は不可能である。

次に、大型円形土坑の機能面に論及する。結論から言えば、この土坑が本当に「貯蔵穴」であるという確証は、今回の現地調査では得られなかった。

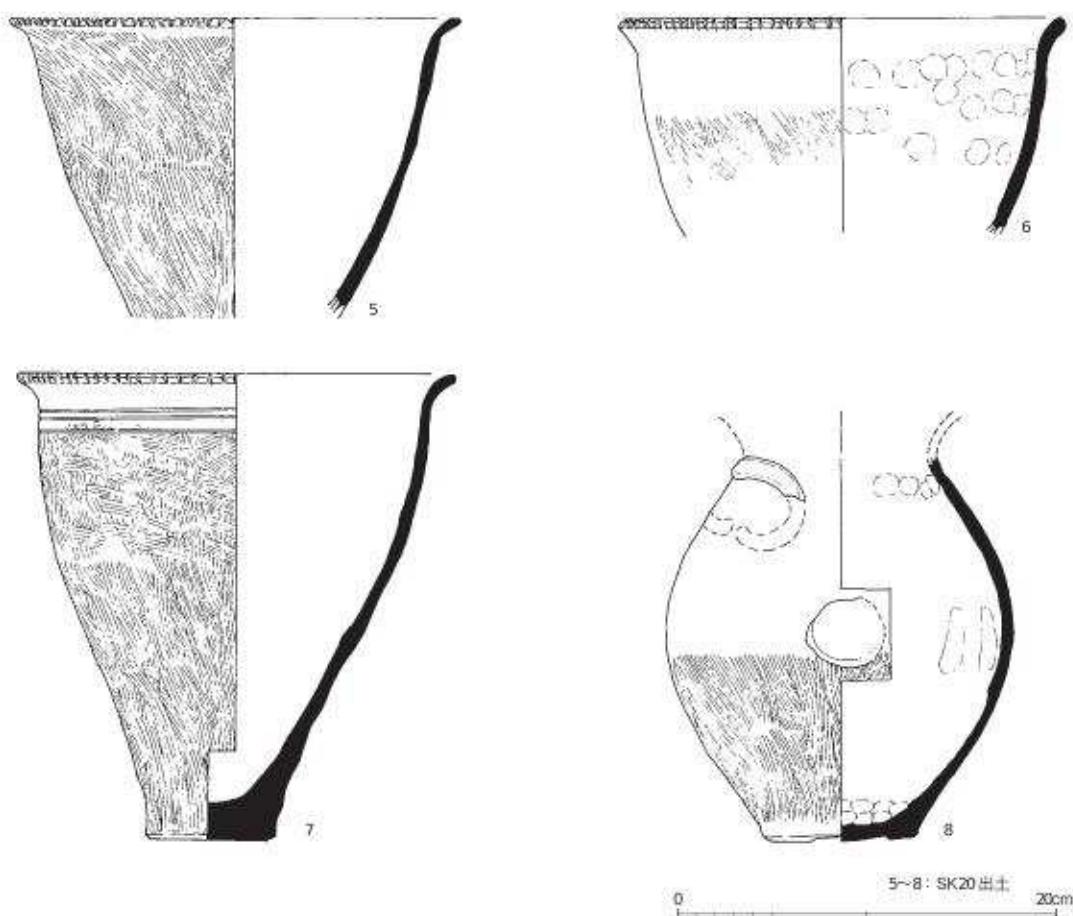


fig.108 出土遺物実測図

昭和53年に今回の調査区の北隣、山手幹線道路の位置で行われた市営地下鉄工事に伴う発掘調査報告書（『楠・荒田町遺跡発掘調査報告書』1980 = 第1次調査。以下報文とする）では、本調査結果と非常によく似た遺構検出状況が報告されている。

同報文では、他府県の類例を多数引用し、その形態的類似性から当該地区で検出された大型円形土坑群も貯蔵穴と判断すべきであると結論しているが、同時に「当遺跡出土の円形の小堅穴が貯蔵穴であるという積極的な根拠はない。」とも記している。報文はさらに「弥生時代の遺跡において小型の堅穴類（土坑）が群集するというのは、今日では貯蔵穴と墓址しか認められ

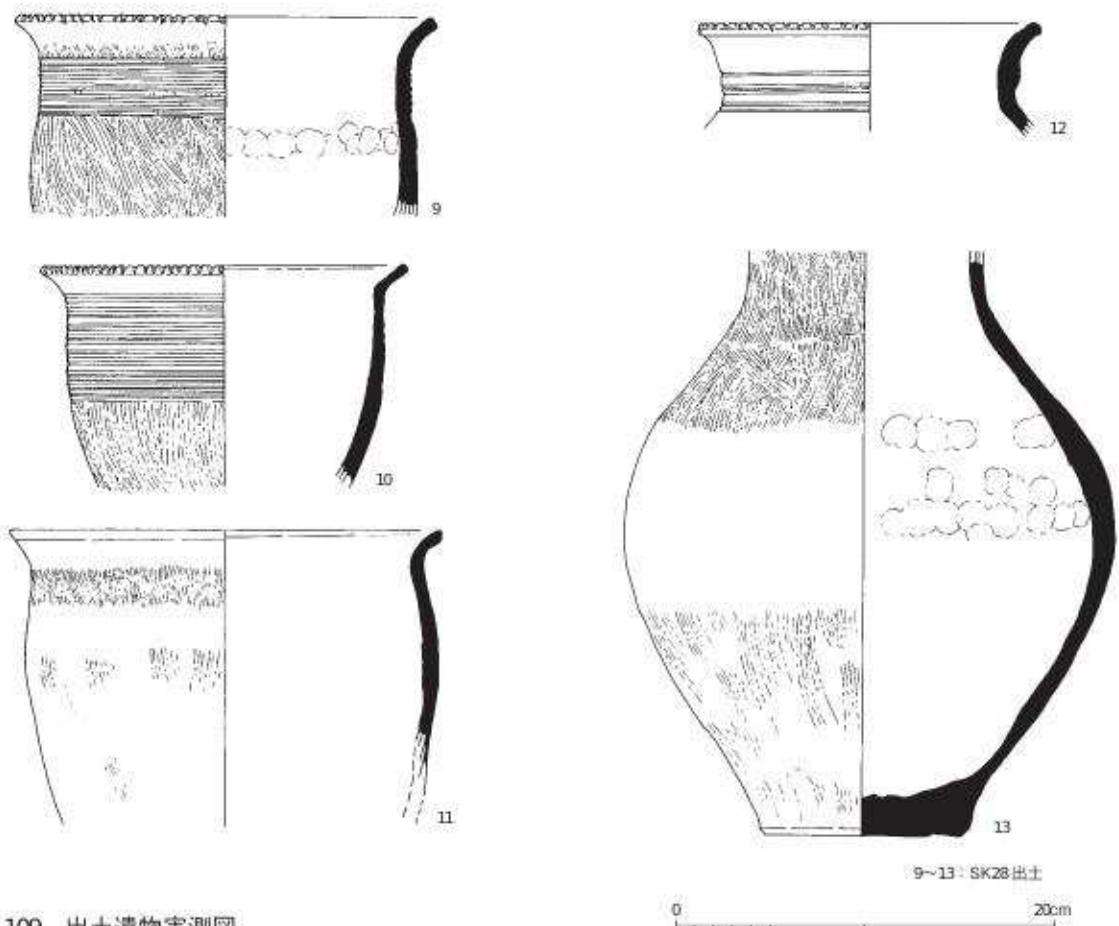


fig.109 出土遺物実測図



fig.110 SK16 (東から)



fig.111 SK28底面出土土器

ていない。そしてその埋没状況、遺物からおよそ墓址とは考え難く、消極的考証ではあるが貯蔵穴として認定したものである」と続けている。

報文は38年も前のものだが、今回の調査でも、この土坑群に関する基本的理に大きな変化はない。あえて違う点を指摘するなら、第1次調査の「貯蔵穴」は今回の調査に比べてかなり複雑で多様な埋土の堆積状況を見せており、本調査のように「短期間に」「人為的に」埋没した、と一律に捉え難い点である。だが、その場合でも土坑内の堆積が水平堆積を主体とする点は同じである。

一方で、この土坑が報文の言うようにイモ・堅果といった食料の貯蔵庫であるとすれば、なぜ建物から離れた場所に貯蔵穴だけがこれほどの数集まっているのか。楠・荒田町遺跡が従来の見解通り稻作に支えられた農耕集落であるなら、穀物倉庫＝高床式建物の検出例に比して、貯蔵穴の数が圧倒的に多いのはなぜか。不要になった土坑を、わざわざ完形の土器をいくつも投げ込むようにして埋め戻すのはなぜなのか、と言ったような疑問は残る。「貯蔵穴」と呼ぶ遺構の実態については、今後も十分議論の余地がある。

以上のように、今回確認された大型円形土坑群は、機能論と年代観という二つの側面で、いくつかの問題を提起している。そのうち機能論については、上記以上に踏み込むことは現時点では不可能と考える。

年代観については、今後出土遺物の調査が進めば、ある程度解明されるであろう。過去に六甲南麓において、Ⅱ様式初頭の土器がこれほど一括性を持って遺構から出土した例はなく、本調査で得られた資料群は、これまで未解明だった弥生時代前期から中期への土器様式の移行の実態を解明する指標的資料となりうる、極めて優れたものである。

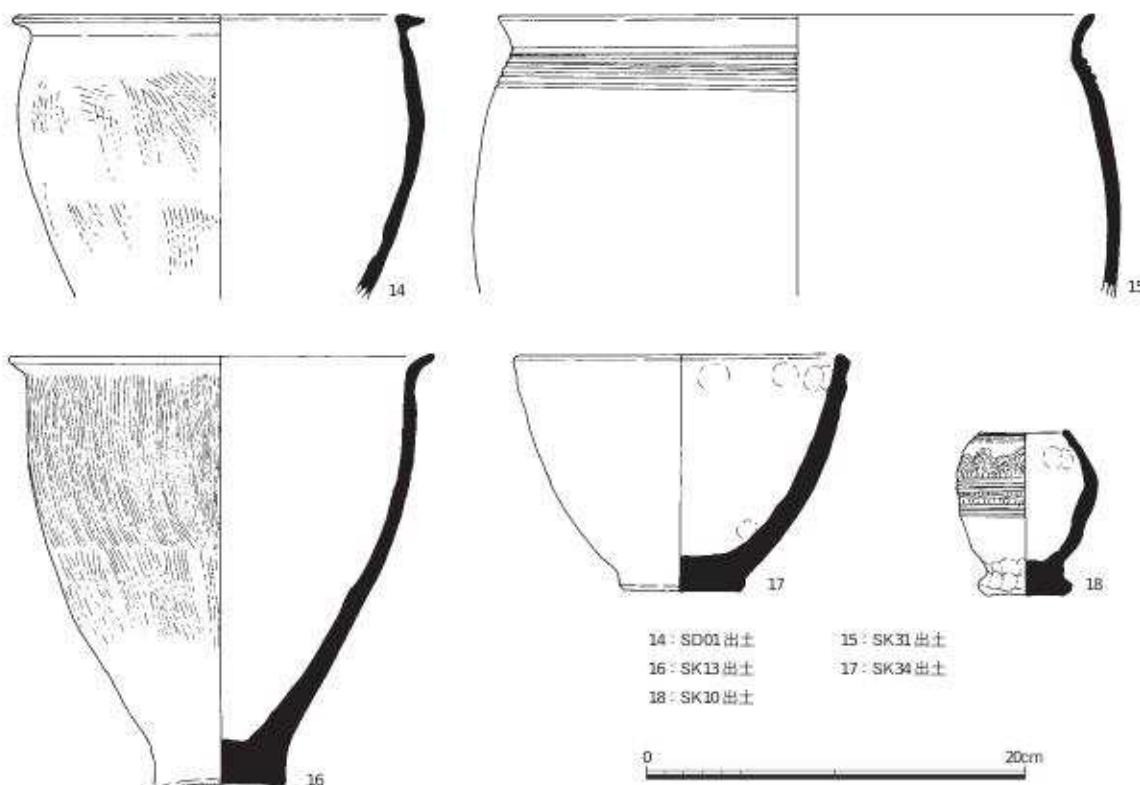


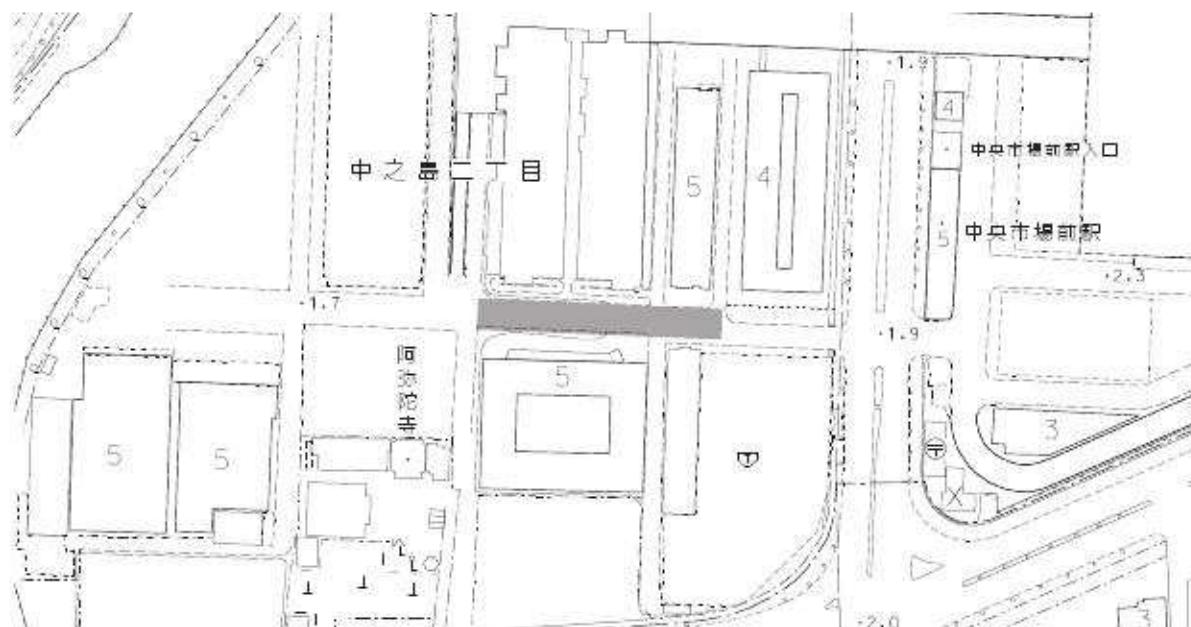
fig.112 出土遺物実測図

14. 兵庫津遺跡 第69次調査

1. はじめに

兵庫津遺跡は、兵庫区の臨海部に位置し、風化が進むと崩落しやすい性質をもつ花崗岩から成る六甲山地から流出した土砂と、海流によって運ばれた土砂の双方とによって形成された地盤上に立地している。より具体的にいえば、湊岬と和田岬の二つの砂嘴に挟まれた湾の臨海部に立地しているといえよう。奈良時代～近世にかけての複合遺跡で、これまで70回を超える発掘調査が実施されている。遺跡の範囲は現在東西1.5km、南北2.0kmに広がっているものと考えられており、神戸市内の遺跡で最も広い範囲に広がる遺跡の一つとなっている。

今回の調査地は、兵庫津の中でも新在家町の北東部に位置すると考えられる。新在家町は、慶長7年(1602)の『摂州矢田部郡兵庫屋地子帳』に記載があり、そこに記されている石盛が他所に比べて高く、生産力をもつ地区であることが窺える。また江戸時代、新在家町を中心とする一帯は、浜本陣と呼ばれる兵庫津独自の商形態を持つ商家が集まっていたことが知られている。



2. 調査の概要

今回の調査では、5面の遺構面を確認した。以下、遺構面ごとに主な遺構を中心に記述する。

第1遺構面

東部では標高(T.P.) 1.0~1.2m、西端部で同0.8m前後で第1遺構面を検出した。検出した遺構は、土坑、井戸、埋桶遺構、胞衣壺埋納遺構、性格不明遺構などである。

検出した遺構の時期については、出土遺物から18世紀後半～幕末頃と考えている。

第2遺構面

火災にあった町屋のほか、街路、土坑、石組み遺構、溝状遺構などの遺構を検出した。時期的には、SB201の出土遺物などから概ね18世紀前半が想定できる。この時期の焼土層は第62次調査では確認できており、周辺地域での遺構を検討する上で貴重な資料といえよう。

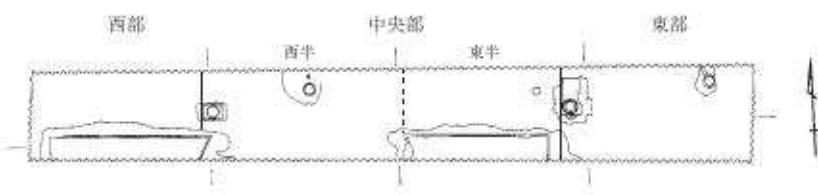


fig.114 調査区配置図

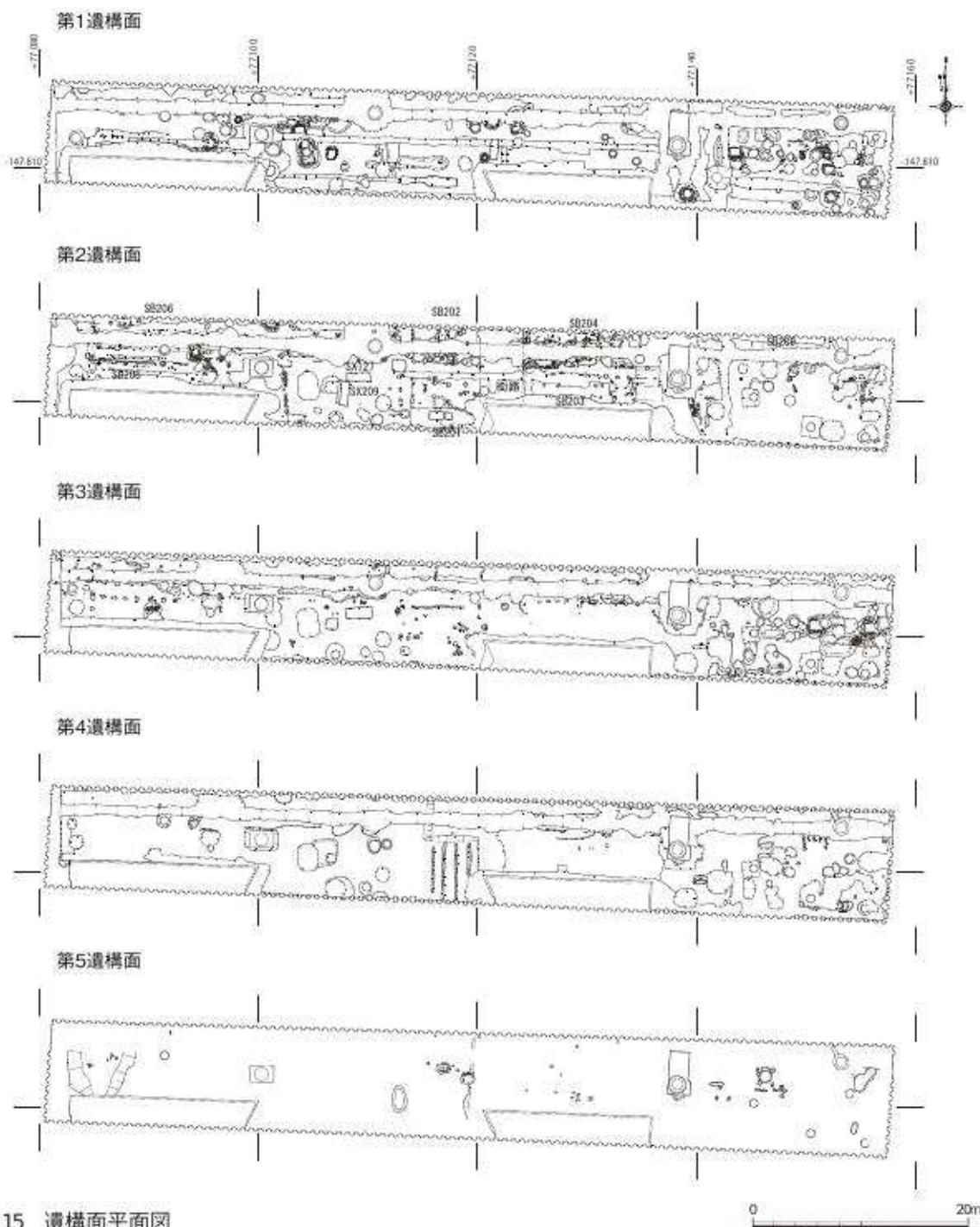


fig.115 遺構面平面図



fig.116 土層断面柱状図

検出した町屋建物のうちSB201およびSB202は、街路の西側に面して、SB203とSB204は街路の東側に面して建てられている。一方SB205とSB206は、1本西を走る南北方向の街路に面しており、2軒はやはり密接して建てられている。このように確認された町屋群は、街路に間口が取付き、隣同士の建物が密接する形態をとるもので、街路や屋地割りの方向などについても、絵図との照合の結果ほぼ齟齬をきたさないものであった。ただSB203の裏（東）側で屋地が東に向かい大きくスロープ状に傾斜して下がっており、同一時期の屋敷地の高さについては、同一の町内においてもかなり高低差があったと考えられる。残された絵図からは把握できない立体的な配置についても知ることができた。

その他、町屋に伴う生活関連遺構を、各遺構面において確認している。

第3 遺構面

第4 遺構面上に0.3~0.7m近く細砂層を盛土し、生活面を造成している。町屋建物、土坑、落ち込み、石組遺構などを検出している。特に東部での遺構の検出が顕著で、密集した状態で土坑、石組遺構、性格不明遺構などを検出している。遺構検出面の標高は、東部でT.P.0.3~0.9m、中央部でT.P.0.7~0.8m、西部でT.P.0.5mを測る。

第4 遺構面

西部西端および中央部東半では、土壤の入れ替えを伴う大規模な造成が確認された。西部西端ではベース層である暗褐色粗砂層を最大で約0.7m掘り下げ、粘土・細砂層による地盤改良を行ない、造成を行っていた。その範囲は調査区西端部から東へ5.0~10.4mの範囲である。

この造成範囲の底部からは、大型動物遺体や貝殻、板や棒状の木製品が出土し、造成層からは土師器、陶器、磁器、瓦、土錘、五輪塔などが出土した。なお、調査地西側へ向かって地盤が上がるよう造成を行っており、西側には一段高い屋敷地の存在が推測される。西部では、この面においても上層と同じ場所に石列を確認した箇所があり、礎石等は確認していないが、町屋や屋地割の存在がうかがわれる。

出土遺物

出土遺物中、陶器では唐津窯製品が多い傾向がある。胎土目、砂目ともにみられ、見込み蛇の目釉剥ぎ碗や刷毛唐津、二彩手や三島手も存在する。また銅緑釉を施し、見込み蛇の目釉剥ぎの嬉野窯皿も出土しており、SX127のようにまとまって出土し、さらに通常見られる皿以外に口縁が輪花状を呈する皿が含まれる。

磁器については、国産のものとしては波佐見窯染付、同白磁、同青磁、同青磁染付、初期伊万里、瀬戸美濃窯染付がある。瀬戸美濃窯のものは極少量である。

輸入陶磁器では、中国製磁器である景德鎮窯青花や漳州窯青花、朝鮮王朝陶磁や東南アジア産陶器などが出土している。うち、景德鎮窯や漳州窯の製品はともに約40点出土している。大半が青花で、景德鎮窯のものには白磁が、漳州窯のものには白磁や五彩が、数点含まれる。

3. まとめ

今回の調査地は、兵庫津遺跡の中でも南側の地区に位置しており、これまであまり調査の行われて来なかった地区に当たっている。さらに、新在家町という兵庫津の町の中でも比較的新しい時期に開発が行われた地区において発掘調査を実施した。

調査の結果、すでに述べてきたように、火災による焼失を受けて順次建て替えられた町屋建物群や、次々に掘り返されたごみ穴などの土坑、石組遺構、井戸などの遺構を検出し、面によつては大規模な造成が行われたことも確認した。

一方、今回の調査では中世に遡る時期の遺構については確認できず、また遺物についても確実に中世まで遡ると考えられるのは軒平瓦や中国製陶磁器の一部のみであった。このことについては、第62次調査においても中世の遺構が確認されたのが西側に偏っていたこと、さらに今回の調査地の西側に位置する地区で実施した第59次調査でも、中世の遺構・遺物が確認されていることから、当調査地よりも西側において中世の遺構が広がるものと考えられる。

また遺物の中には、動物遺存体が出土している。魚類や貝類の積極的な利用が窺われ、当時の生活の一端を表している。SB305では土間に貝殻が埋め込まれていた。タニシなどの食用の多種の貝を使用しているが、当遺跡では他に例をみないほど多量に使用している。さらに第4遺構面造成層中からはクジラ類の骨が出土している。捕鯨によるものかは即断できないが稀有な例であり、今後も検討を加えていきたい。

以上、これまで不明なことが多かった兵庫津遺跡の南部にあたる地区において、江戸時代における土地開発および土地利用の状況が明らかとなつた意義は大きいといえる。

なお、今回の発掘調査の詳細については、平成29年度刊行の『兵庫津遺跡第69次発掘調査報告書』を参照されたい。



fig.117 全景(南西から)



fig.118 第2遺構面全景(北東から)



fig.119 SX127遺物出土状況(南東から)

15. 兵庫津遺跡 第70次調査

1. はじめに

兵庫津遺跡は神戸港の西部、兵庫港一帯に拡がる古代から近代にかけての遺跡である。古くから畿内の外港として重要な位置づけがなされ、平安時代末には平清盛の修築により日宋貿易の拠点化が図られたことなどが知られる。最盛期の江戸時代後期には人口2万人を擁し、港町として大いに賑わったとされる。

調査地周辺では、七宮神社界隈での第14次、第20次調査などで中世～近世の町屋群が検出されている。



fig.120 調査地位置図 1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査では、複数面で西国街道と宮前町大道との交差点に立地する町屋敷群を検出した。調査区の南辺から北へ1.0mほどの位置で東西方向の溝や石列が、各遺構面で重複して検出されることから、この部分が町屋敷の境として継続的に意識され、機能していたと考えられる。基本的に西国街道を間口とする北西角地の町屋敷と、その南に隣接する町屋敷の一部、東側に隣接する町屋敷の一部を検出したと考えている。

基本層序

今回の調査では第1～7遺構面まで検出した。調査地付近の現地表面は標高2.2～2.6mで、東から西へやや下がり地形となる。現地表下0.3～0.5mまでは現代の盛土や戦災焼土が堆積し、直下の黄白色砂上面が第1遺構面、19世紀代、明治時代頃までの生活面となる。調査区西半ではこれ以下、第2遺構面、第4遺構面が灰白色砂を基調とする整地層上面に形成される。第5遺構面を形成する褐色砂質土、第7遺構面を形成する灰色砂質土は調査区全域に認められる砂層であるが、調査区の東半では標高0.7m付近までは砂や砂質土、粘質土や粘土、焼土混じりの堆積や下層遺構の埋土上面が遺構面となり、整地作業が繰り返されている。

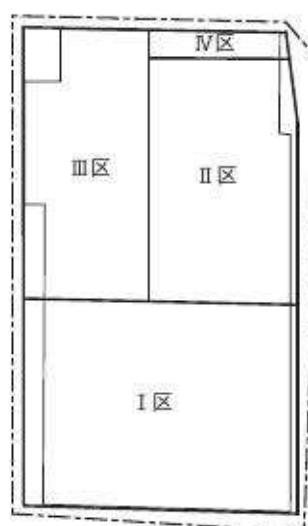


fig.121 調査区配置図

第7遺構面以下は灰色～灰褐色～灰白色の粗砂の堆積が続き、標高0.0mあたりでわずかに湧水がはじまる。

調査地の周辺の調査で確認された年代決定の指標となる焼土層が、今回の調査では3層確認されている。調査時の所見をもとに、各遺構面の年代を以下のように捉えている。

第1遺構面 19世紀代 標高1.9～2.1m

第2遺構面 18世紀後半 標高1.7m

第3遺構面 18世紀前半【宝永の大火(1708年)に伴う整地層(焼土層①)面】標高1.5m

第4遺構面 17世紀末～18世紀初頭【宝永の大火に伴う火災面】標高1.3m

第5遺構面 17世紀代【貞享頃とされる火災に伴う整地層(焼土層②)面】標高1.1～1.2m

第6遺構面 17世紀前半【慶長大地震(1596年)に伴う整地層(焼土層③)面】標高1.0m

第7遺構面 16世紀末～17世紀初頭【慶長大地震に伴う火災面】標高0.7～0.9m

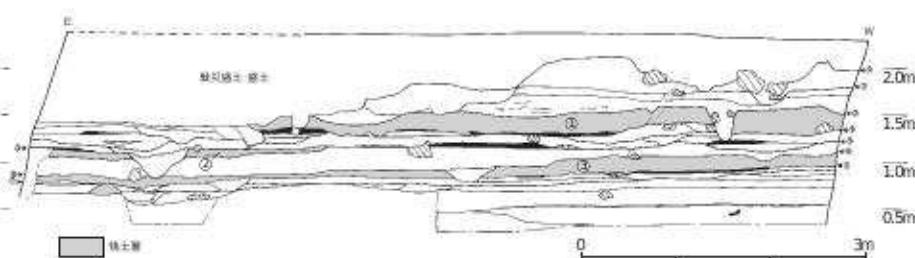


fig.122 II区南壁土層断面図

第1遺構面

調査区南東でSD101とSD102が交わり、交点で径1.5m、深さ0.7mの円形の土坑SK101を検出した。埋土に漆喰が混じり、この他に検出した土坑にも漆喰の混じるものが多い。SD102南辺には一辺50cmを超す角石が3石並び、角石は細い溝の壁となる。調査区西端の壁際などでは、やや大振りの石が攪乱から出土した。SD101の東辺には一辺30cmほどのやや小振りであるが、平たい角石が並ぶ。第1遺構面はこの東西、南北2条の溝により大きくは区画がなされるようだが、建物の様子は明らかでない。

調査区の北端、現在の道路際の部分は、間地石積みの石垣、水道管の敷設や戦災瓦礫の投棄などにより攪乱されていたが、その南側には一辺60cm角の石を用いた基壇状の痕跡SX102や、掘形の径が1.6mで、丁寧に円形に花崗岩を削って井

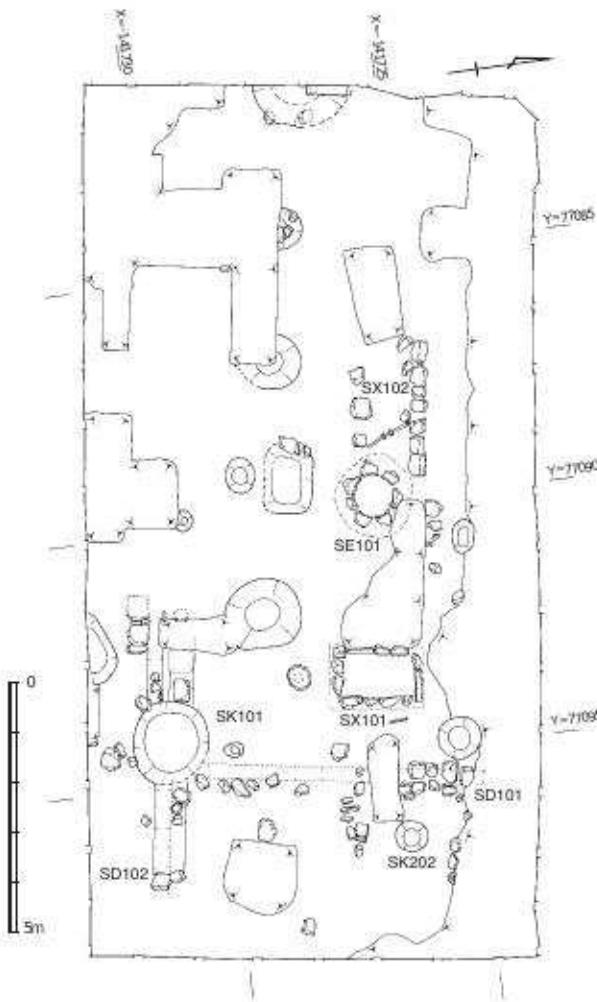


fig.123 第1遺構面平面図

戸側としたSE101、割石を漆喰で固めた貯蔵庫と考えられる石組み施設SX101が東西に並ぶ。その南、調査区の中央には径約1.5m、深さが0.1~0.2mほどの浅い土坑が5基並んでいる。

溝や土坑から陶磁器、瓦片が出土しており、19世紀代（幕末～明治時代頃）の生活面と考えられる。SX101やSE101は戦中頃まで継続して使用されたものと考えられる。

第2遺構面

調査区南側に石列の溝SD201があり、これは第1遺構面SD102の下位に位置する。東西両端では幅0.2~0.3mの溝状となるが、中ほどでは南側に石が一列のみとなり、石のない北側には埋甕を伴う土坑などがある。また第1遺構面SD101の下位では扁平な大振りの石を北端に敷く溝状遺構SX201を検出した。第2遺構面も東西、南北2条の溝により大きくは区画がなされるのだろう。

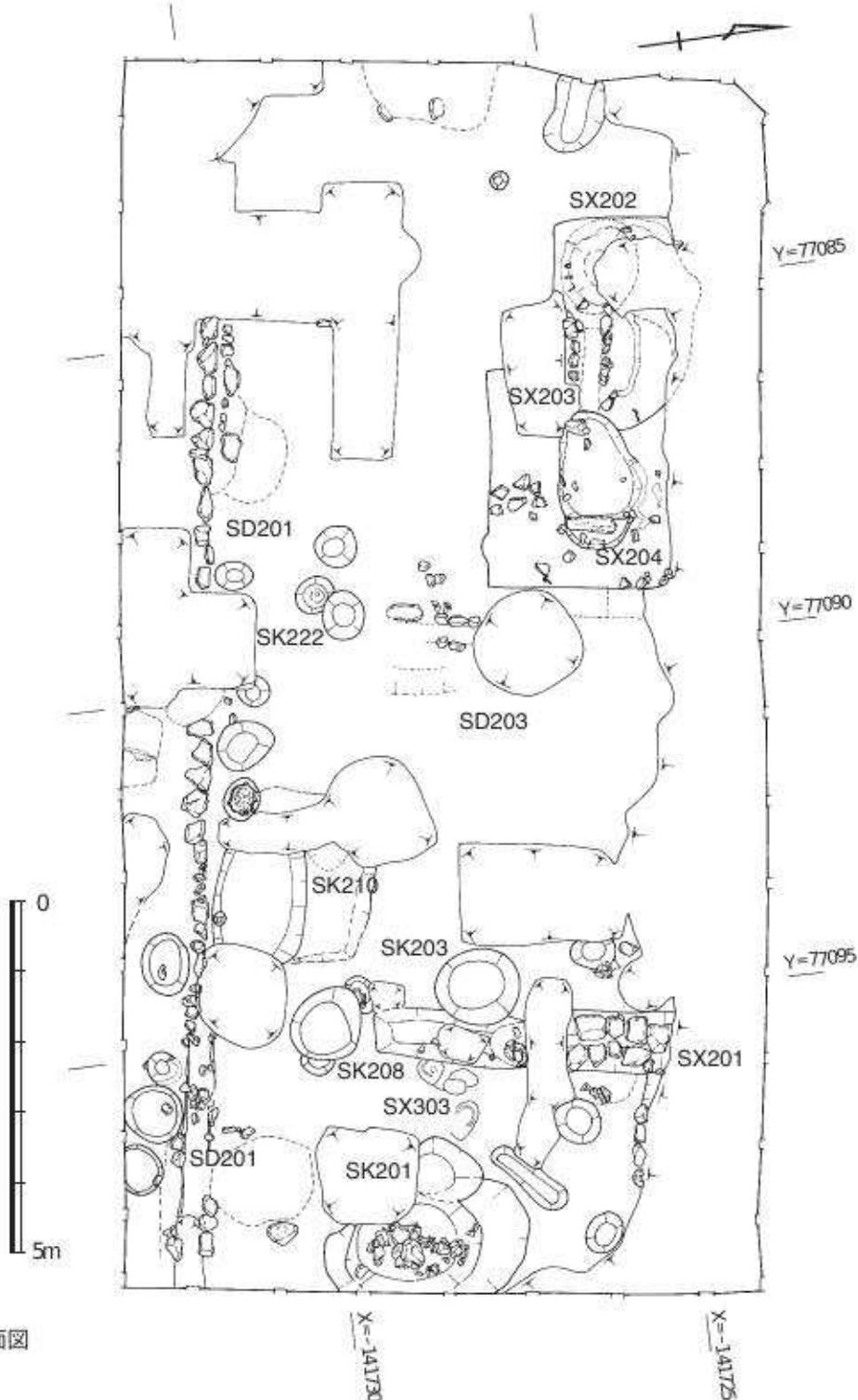


fig.124 第2遺構面平面図

調査区北西で大型の竈と考えるSX202及びSX203、大量の瓦や漆喰が投棄された土坑SX204を検出した。SX202は径1.4m、深さ0.7m、上部の壁体は激しく赤変しており、芯の石が露呈する箇所もあった。下半には礫や粘土質の土が敷かれ、これに付随するSX203は幅0.3mで2列に石を敷く。下部にはSX202同様、炭層が厚く堆積する。北側の擾乱により平面形状は明らかでないが、SX202、203を囲む範囲は、深さ1.0mまで一括して整地されたようである。SX204は断割りの結果、井戸であったものと考えられ、底はT.P0.0m以下に続く。第1遺構面のSE101に近く、またこれら井戸の南側では、溝SD203と伏甃SK222を検出した。井戸からの水を流した水場の空間があったと想像される。

調査区中央南側では、一辺2.0m、深さ0.5mほどのやや大型の土坑SK210を検出し、陶磁器類、瓦片が出土した。調査地の東半では他に10基ほど土坑を検出したが、このうちSK203は18世紀後半の染付碗を中心とする小型の供膳具が一括投棄されたものである。径1.0m、碗類が投棄された最終埋土部分は深さ0.2mである。下層掘削の結果、本来はさらに1.0mほど深く掘られたものであった。また調査区東端で検出したSK201も、陶磁器類が投棄された土坑であるが、出土したのは炮烙、擂鉢などの調理具や大型の皿類、火消壺などである。最終埋土には瓦も多量に投棄されており、同一敷地内に位置する場合には用途別に投棄された可能性が考えられる。

第2遺構面でも明確な礎石や柱穴は確認されず、建物の様子は不明である。第1遺構面の遺構と重なる部分が多く、第1遺構面に散在する大型の礎石、また第2遺構面での大型の竈や井戸の検出、投棄された大量の碗類の出土など、街道に面した立地条件を合わせると、規模の大きなミセなどの存在も想像される。

第3遺構面

第2遺構面を形成する砂層を除去すると焼土層が検出される。周辺の調査で確認され、時代の判明する宝永の大火灾(1708年)に伴う焼土層である。今回の検出面は標高1.5m付近である。

礎石状の石などが散見されたが、調査区全体には拡がるものではなかった。検出遺構は調査区の東半に偏っている。比較的小規模な土坑7基(SK301~307)と、環状の粘土に炭が伴う竈の痕跡と思われる遺構4基(SX301~304)を検出したに留まる。第2遺構面検出の遺構の下部、あるいは下層が宝永の大火灾の際の火災面(第4遺構面)であるため、整地の際の片付けに伴い、遺構が検出されなかつた可能性がある。このうちSX303は遺存状態のよい単独の竈で、径0.6m、深さ(高さ)0.4m、底部に炭の堆積があり、その上部の埋戻し過程で、銅錢を載せた土師器皿が1点、正位に据えられていた。竈の破棄に伴う何らかの行為と考えられる。

焼土層からの遺物の出土は少ないが、第4遺構面検出中に、調査区中央南側で検出した大型の土坑SK308やSK408からは多くの陶磁器や瓦が出土している。また調査区の西半、南壁際では赤変した大量の瓦が7箇所の土坑状の窪みから出土した。28ℓコンテナにして30箱を超す量が出土しており、礎石の抜き取り痕に投棄されたものと考えられる。



fig.125 I区第2遺構面全景(西から)

第4 遺構面

焼土層下面の標高1.3m付近、宝永の大火灾による火災面と考えられる面である。町屋敷に伴う多くの礎石、石列、竪状遺構や土坑などを検出した。

SB401は西国街道との境が検出されていないが、調査区中央北側で検出した石敷遺構SX405までの東西9.0m以上、南北6.6mの町屋と考えられる。床面の赤変が顕著であり、礎石も被熱状況が認められる。南1/2の範囲では焼土の堆積が厚く、その下面では柱材や畳表などの炭化材が出土し、床部と考えられる。北1/2が土間で、床部より高くなる。床部と土間の境に土坑SK413~415の3基の土坑があり、竪の痕跡と考えられる。この町屋の東側では、単独の竪SX402やSK406、SK407の隣接する竪状遺構、土坑などを検出したが、赤変の様子や炭の分布は顕著でない。また周辺での建物の痕跡も明らかでない。

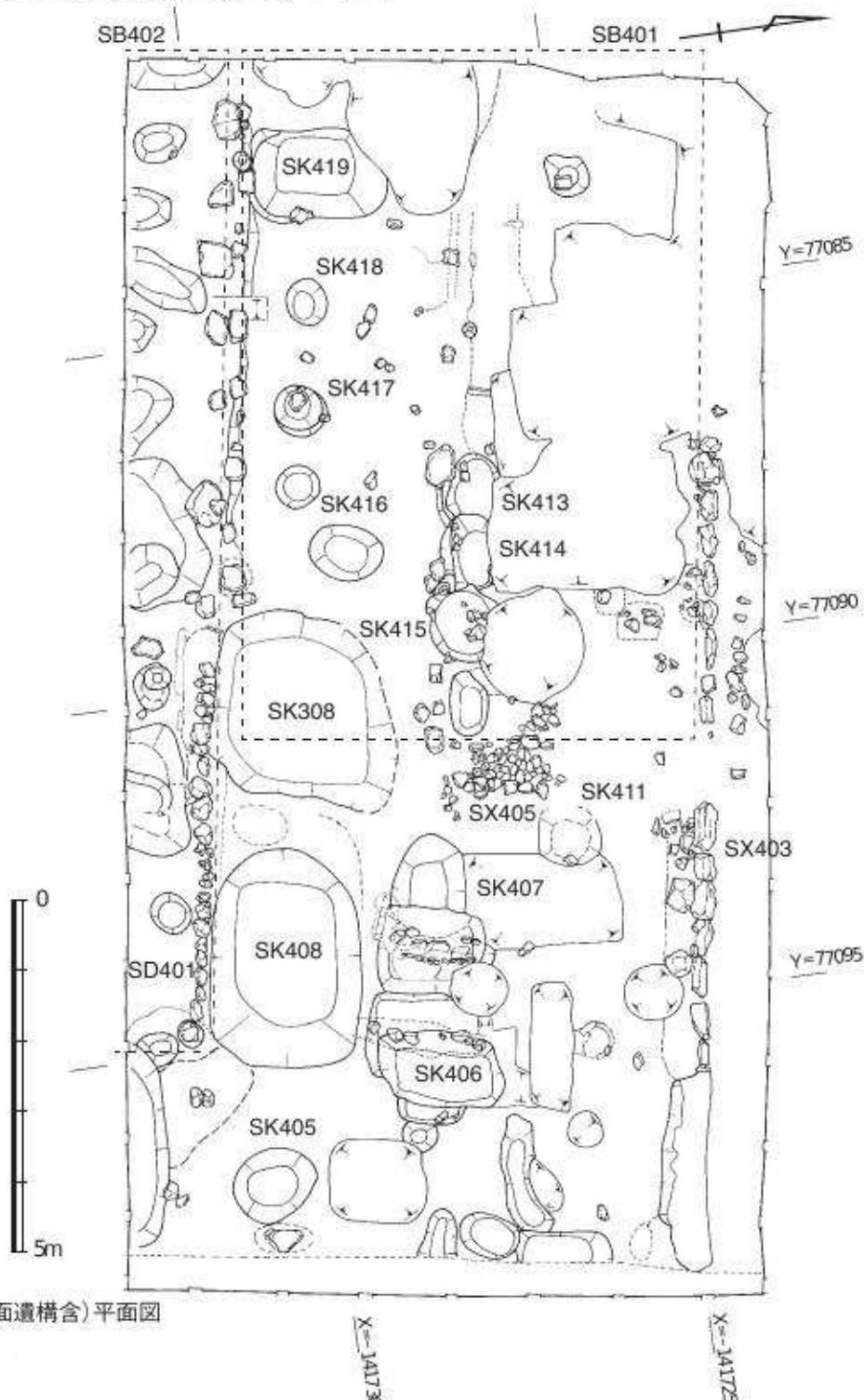


fig.126 第4 遺構面(3面遺構含)平面図



fig.127 I区第4遺構面全景（北西から）



fig.128 II区第4遺構面SK412遺物出土状況

SB401の南では町屋SB402の北壁の礎石を検出した。東西8.0m以上である。SB401の礎石と比べると規模が大きく、赤変した瓦を投棄した礎石の抜き取り痕も、この町屋に伴うものと考えられ、瓦葺きであった可能性がある。礎石の東に続く石列SD401は、上層第2遺構面のSD201の下位に位置することから、当初、溝と考えていたが、構造などをみると町屋の基礎や屋敷地割に伴う石列とも考えられる。SB401の北側にやや大振りの石を用いた石列SX403と、小振りの石で形成されるSX404の2列の石列があり、側溝SD402を形成する。SX403から北は、砂面が固く締まっており、東西方向の道路部分と考えられる。またSX405の北では、石列が幅1.0mで途切れる箇所がある。切れ目が路地の入口で、石敷きが建物の裏口であった可能性も考えられる。

調査区南東部、SD401の東側では花崗岩、凝灰岩の2基の立柱状の石を据えた土坑SK405を検出した。この土坑は、第1遺構面、第2遺構面で検出した溝の交点の下位に位置し、境界標石であった可能性がある。北側道路沿いの石列SX403では、この土坑から北側への延長線上以東で、石が抜き取られた状況が確認できる。SB401、SB402の町屋敷がこの部分にまで延び、東西14.0m以上となる可能性を示唆するものと考えている。

遺物は、第3遺構面から続く投棄土坑SK308や、第4遺構面で検出した長辺約3.0mの大型の投棄土坑SK408、竈状遺構SK406とSK407の掘形などから、陶磁器類や瓦が多量に出土している。このほか、標石の可能性のあるSK405の周辺では伊万里焼や唐津焼の皿、土師器焙烙、火鉢などの瓦質土器、瓦などが出土した。SB401南西隅の土坑SK419からは、陶磁器類、瓦のほかに焼土塊やスラッグが混じり、出土している。

第5遺構面

標高1.2m付近、褐色砂質土面で検出した遺構面である。第4遺構面を形成する砂層を除去すると、部分的に焼土や炭の混じる薄い土層の堆積があり、周辺調査で貞享年間（1684-1687）の火災面と推測された層と考えられる。17世紀代の生活面と考えられ、この面でも多くの礎石や石列を検出し、町屋敷を確認した。

調査区中央北寄りで南北長2.5m、東西幅1.3mの石を3段ほど積んだ石組み遺構SX504を検出した。貯蔵庫あるいはゴミ穴と考えられ、この遺構の東西で町屋敷を検出した。

西側のSB501は、東西7.5m以上、南北6.6m、西1/2が床部で、床部中央に南北方向の仕切りがある。東が土間で、床部よりやや高くなる。床部と土間境の礎石掘形から染付碗の破片、炮烙が出土した。東側のSB502は、東西7.0m以上、南北6.6m、南2/3が床部である。西から1.2mの位置で瓦列SX501を検出した。戸口に伴う仕切り壁の基部の可能性もある。床部では丹

波焼甕の底部に入る土坑SK504や、一辺40cmの匂炉裏跡SX502を検出した。土間状部分である北1／3の範囲では、土坑5基、井戸1基を検出した。SD501、SK501～503などの土坑から陶磁器類、瓦がまとまって出土した。

調査区北端では、厚さ1～2cmの砂と粘質土の互層部分や、貝殻細片が薄く敷かれた状況が確認できた。第4遺構面同様、道路の痕跡と考えられる。

またSB501に接する南側で薄い粘土の貼土と炭の拡がりを確認した。南に接する町屋SB503の土間と考えられる。土坑SK509から火消壺が出土した。礎石の様子から、SB501と同規模の町屋があったと思われる。東には瓦列SX503が続いており、SB503と関連する建物部分や、屋敷地の整地の際の土留めなどと考えられる。

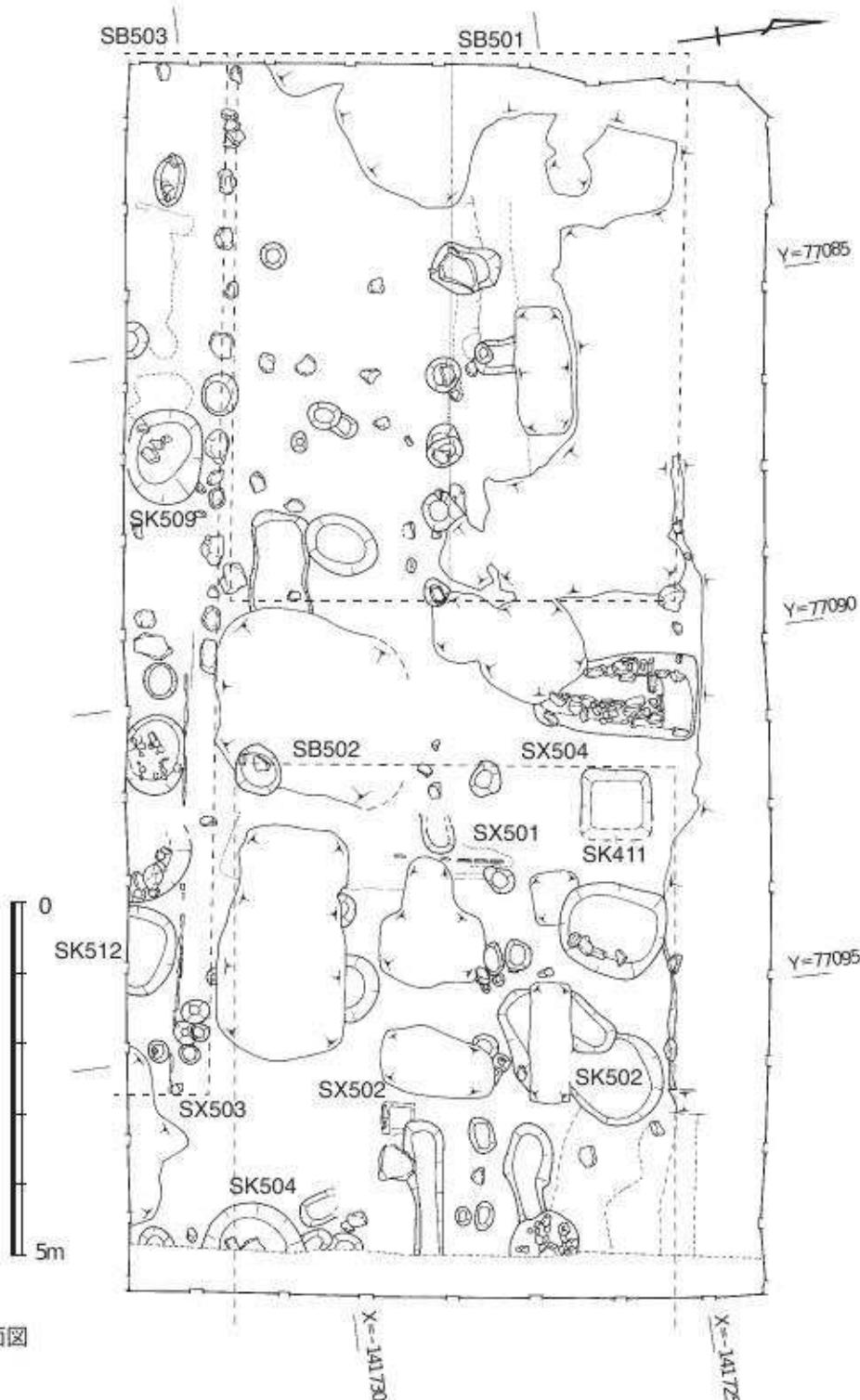


fig.129 第5遺構面平面図



fig.130 III区第5遺構面全景（東から）



fig.131 II区第5遺構面南西部全景（北東から）

第6遺構面

第5遺構面を形成する褐色砂質土は層厚0.15~0.2m、東側にやや厚く堆積する。この層の下で慶長大地震（1596年）に伴う焼土層を検出した。標高は0.9~1.0mである。

調査区東側では、薄い焼土層や砂が互層となって堆積する箇所がみられ、細かい整地の様子が窺える。焼土の露呈する面で、明瞭な礎石の抜き取り痕や礎石状の石が疊らに分布する様子を確認したが、調査区全面に拡がらず、建物の存在は明らかでない。また、調査区中央南寄りでは底部に人頭大の礎の多く入る大型の土坑SK602と砂が堆積したSK601の小土坑を検出した。SK602からは備前焼や唐津焼などの陶器類や瓦が多数出土しており、投棄土坑と考えられる。第7遺構面の片付けに関連する遺構と思われる。

第7遺構面

標高0.7~0.9m付近の灰色砂質土面で検出した生活面である。慶長大地震に伴う焼土層下面で、炭の分布や被熱箇所がみられる。多数の礎石と壁の基部と考えられる瓦列や粘土を検出したが、他の遺構面とは異なり、調査区北端で道路の痕跡を確認していない。第5遺構面の道路痕跡の下面、西端で6連の竈を検出しておらず、建物が北側にわずかに拡がるか、さらに続くものと考えられる。

西国街道に面した町屋敷の配置、奥行に関しては、東へ10mほどの部分で礎石や壁基部の東西方向の並びにややズレが生じており、この部分までが街道を間口とする建物の東辺ではないかと考えている。

SB701は東西10m以上、南北6.0mの町屋で、竈の痕跡と思われるSX707の位置から、西1/2が土間、東1/2が床部と考えられる。SX707の粘土内には瓦片が多く、上面では土師器皿が出土している。

SB701の南には町屋SB702が復元できる。SD701は拳大の礎が入る溝で、溝の南側は礎敷きとなり粘土の貼り土が認められ、土間と考えられる。SK712からは備前焼などの陶器類、瓦が出土した。

SB701の北には町屋SB703が復元できる。東西の土坑に挟まれて6連の竈が設けられる。西端の土坑SK704は径1.4m、深さ0.5m、埋土の大半は焼土、炭である。東の土坑SK703は径1.2m、深さ0.6mで、粘質土の埋土中から、やや大きな礎とともに陶器片、瓦片が出土した。SB703は東西9.0mほどの町屋と考えられ、その土間部分と考えられる。

調査区東半で町屋2棟が復元できる。北側の町屋SB704は、東西6.2m以上、南北4.0mと考え

られる。北側は第4遺構面SX403石列部分の下位あたりであろう。竈と考えられるSX701の検出位置から、西1／2が土間、北側が床部であろう。SX703の瓦列には1点鬼瓦が含まれ、この部分が壁となる。石列SX705には一辺60cmの花崗岩の框状の石が含まれる。いずれの石も被熱状況が顕著である。

SX705の南に接する瓦列SX706は、南側の町屋SB705の北壁痕跡と考えられる。東西6.2m以上、南北3.6m以上である。礎石の一部に石臼が使用されていた。粘土の壁基部と瓦列SX704に囲まれて竈SX702を検出した。東が床部、西が土間と考えられる。東寄りで土坑SK701を検出し、備前焼など陶器類が出土した。

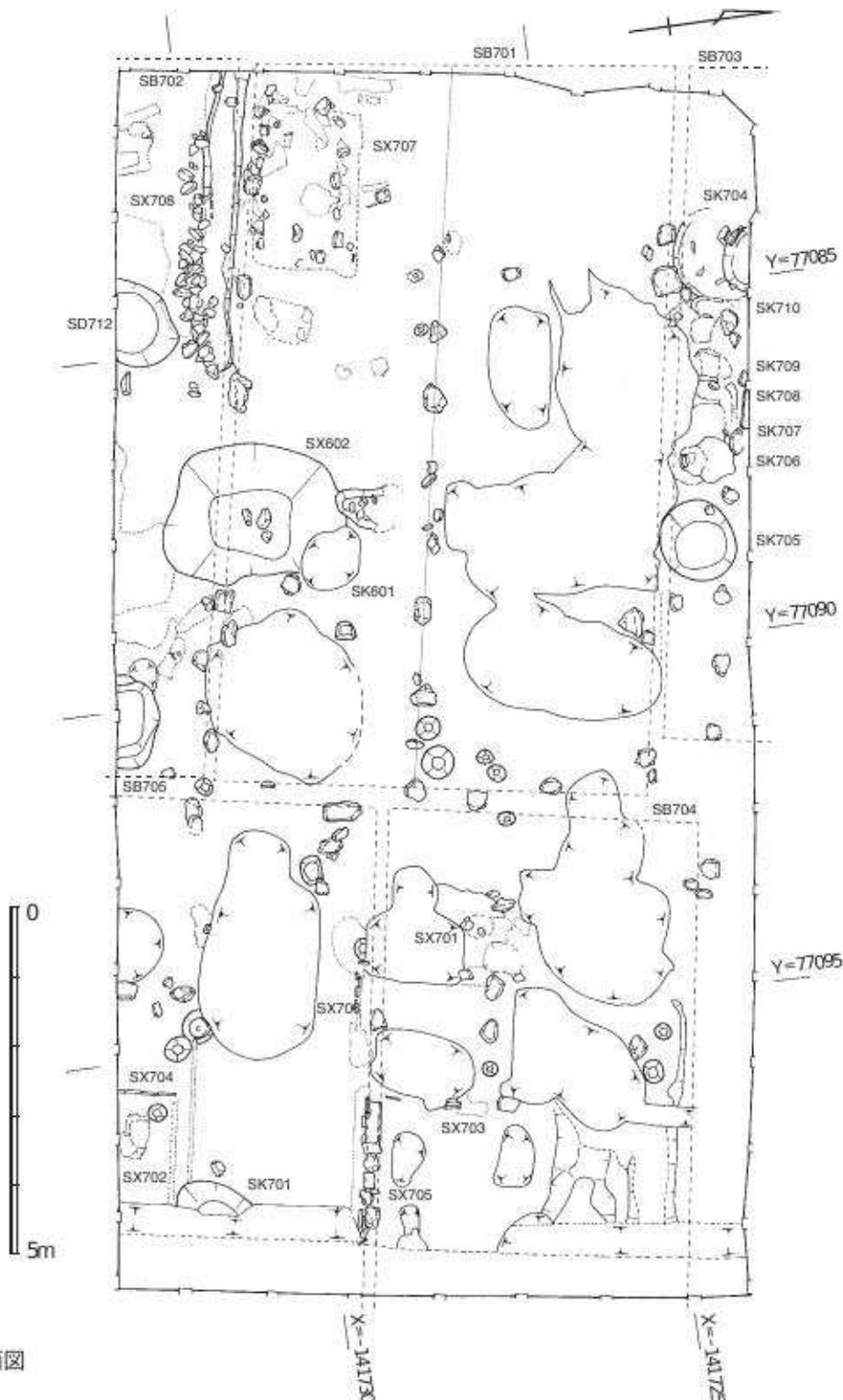


fig.132 第7遺構面平面図



fig.133 I区北半第7遺構面全景(西から)



fig.134 III区第7遺構面全景(北東から)

東側の町屋の間口については、礎石の並びや竈の位置、壁基部の検出状況を考えると、東西に長い町屋敷とするのが妥当かと思われる。

なお第7遺構面のベース土より下層には灰褐色粗砂、灰色粗砂が堆積し、調査区西半の中央付近では灰褐色粗砂中に薄い土壤化層を確認し、土師器皿の集積を検出した。周辺で土坑状のプランなどは確認できない。周辺の調査でも、遺構のプランが不明瞭な13~15世紀頃の土師器の集積遺構などが検出されている。今回の調査区では深さのある遺構で、下層確認を行ったが、東半では明確な遺構面は確認できなかった。下層の砂の堆積状況からは、西側で地形的にわずかに高くなっていくようである。

3.まとめ

今回の調査では7面の遺構面を確認し、西国街道と宮前町大道の街路が交わる場所に営まれた町屋敷群を検出した。また、28ℓ入コンテナ100箱を越す多量の遺物が出土した。

第1遺構面、第2遺構面での建物の様子は明らかでないが、第4遺構面以下で町屋群を検出した。町屋については、調査区の西半では西国街道に面した東西9.0m以上の町屋が比較的明瞭に検出できたが、町家の奥や屋敷地の裏手となる東半での様子についてはやや不明瞭である。

第5遺構面、第7遺構面では東西の奥行7.0mほどの町屋を検出し、第4遺構面よりはやや規模が小さいものと推測される。第7遺構面の町屋の軸はやや北に振れるようである。

第7遺構面では、上層で道路であった調査区北端において土間や竈を検出したことから、16世紀末の段階では、宮前町大道となる街路はまだ整備されていなかったと考えられる。第5遺構面、17世紀の後半に街路の整備が進み、現代まで続く町並みの整備が、一定の姿に整ったものが元禄9年に描かれた「摂州八部郡福原庄兵庫津絵図」に反映されたものと考えられる。

第4遺構面以降は、町屋が大きくなる傾向が窺われ、出土遺物の量も増す。18世紀代に最盛期を迎えるとされる兵庫津の西国街道沿いの様相を示す内容と考えられる。

今回の調査範囲内で想定しうる町屋を復元すると、西側の町屋は西国街道に取り付くものであるが、北側街路の宮前町大道に取りつく町屋の存在は明確にならなかった。これはもう少し広い範囲での検討が必要であるが、第14次調査では、宮前町大道の南側に連なる町屋群が検出されており、検出された町屋群と天保9年(1838)作成の水帳絵図と比較が行われ、17区画の屋敷割が該当することが判明している。調査地周辺の絵図などの史料が判読できれば、踏襲されることの多い屋敷割を考える上で重要な要素となるであろう。

16. 兵庫津遺跡 第71次調査

1. はじめに

兵庫津遺跡は奈良時代の大輪田泊に起源をもつ港町で、平安時代末には平清盛による改築で日宋貿易の拠点ともなった。ただし、この時期の遺構検出例は現段階では希薄である。鎌倉時代以降で遺構の確認例が徐々に増加している状況である。

室町時代には日明貿易の拠点となり、文安二年（1445）作成の『兵庫北関入船納帳』からも当時の繁栄が窺われる。

その後、応仁、文明の乱（1467～1477）により国際港としての地位を失い、港の機能も衰退したとされるが、調査例の増加により15世紀～16世紀にかけての遺構や出土遺物の質や量から当該時期に港湾都市としての兵庫津が、一概には衰退していない状況が明らかとなってきた。天正八年（1580）には織田方の攻撃で、花隈城と共に、兵庫津も焼失したとされ、その後兵庫城が築城され、近世には最大で人口2万人の港湾都市となっている。



搅乱より下層は暗灰褐色砂質土が約30~40cmの厚さで堆積し、標高約0.5~0.8mの黄褐色細砂上面において中世後期の第2遺構面を確認した。また、暗灰褐色砂質土は主に14~15世紀にかけての遺物包含層として調査している。なお暗灰褐色砂質土遺物包含層は、2~3層に細分する事が可能である。緻密に観察すると、より細かな分層も可能である。土層断面では、暗灰褐色砂質土の堆積途中から切り込む遺構も散見できた。しかし調査深度が深く脆弱な地盤であったため、本来は2面以上存在する遺構面を全て最終遺構面である第2遺構面として調査する結果となった。

第1遺構面

第1遺構面は、搅乱直下を遺構面として中世後期~近世の井戸6基と、中世後期~近現代の柱穴3基を確認している。

井戸の多くは径約10~20cmの礫が最終的に投棄された状態で確認された。井戸底部に曲物等は確認できなかった。これらの井戸は、精良で崩落しやすい細砂層を最大0.5m掘削している。本来は石組みや木組み等が施されていたと考えられるが、廃棄時に抜き取りを行ったようである。

SE01 径約1.2m、残存している深さ約0.4mを測る。遺物は、19世紀前後の丹波甕等が破片で出土している。井戸構築物は廃棄時に破壊されていたようで、詳細は不明である。

SE02 径約2.6m、深さ約1.1mを測る。中世の土師皿等の遺物も多く出土するが、18世紀以降の肥前系磁器の小皿や土人形が出土しており、井戸の廃棄時期もその頃であろう。最終埋土に径約10~20cmの礫が投棄されており、石組み井戸であった可能性も考えられる。

SE03 径約1.5m、深さ約0.8mを測る。遺物は出土していないため、詳細は不明である。

SE04 径約2.2m、深さ約1.0mを測る。出土した土師皿や備前播鉢、土鍋等から14世紀~15世紀に廃棄された井戸と考えられる。井戸の掘形から出土した遺物では14世紀の土師皿や備前播鉢が存在し、井戸の掘削は14世紀の可能性が高い。埋土に径約10cm~20cmの礫が多量に投棄され、石組み井戸であったらしい。

SE05 径約1.4m、深さ約1.1mを測る。備前の播鉢や甕が出土しており、15~16世紀に廃棄されたと考えられる。最終埋土に大礫が多量に投棄され、石組み井戸の可能性を持つ。

SE06 径約3.0m、深さ約1.2mを測る。土師皿、土師器鍋、備前播鉢等の細かな破片が出土し、15世紀に廃棄された井戸である。最終埋土に大礫が投棄されている。

柱穴 搅乱直下で3基を検出した。径約30~40cm、深さ約30~40cmの範囲に収まる。淡黄



fig.136 III区第1遺構面SE04検出状況（東から）



fig.137 III区第1遺構面SE04断割り（東から）

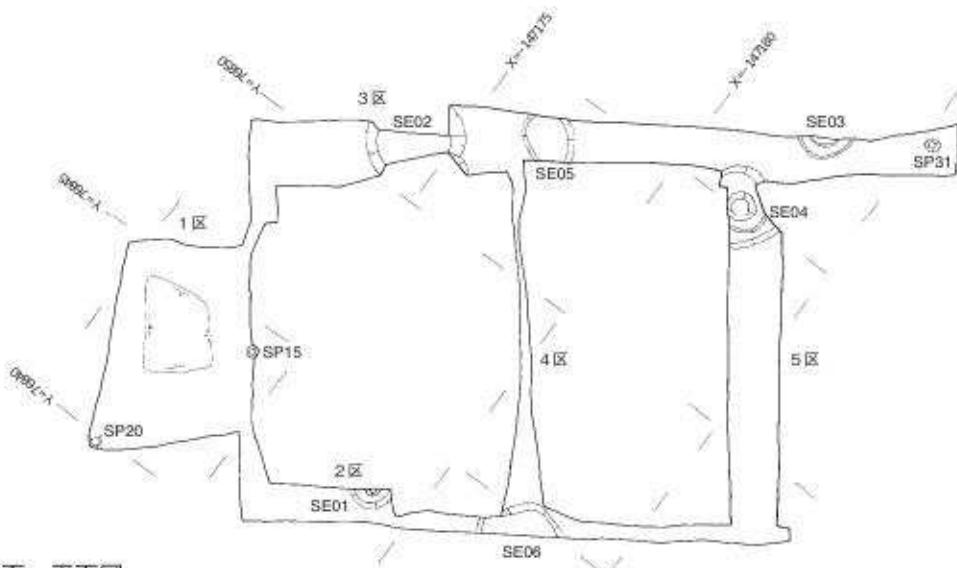
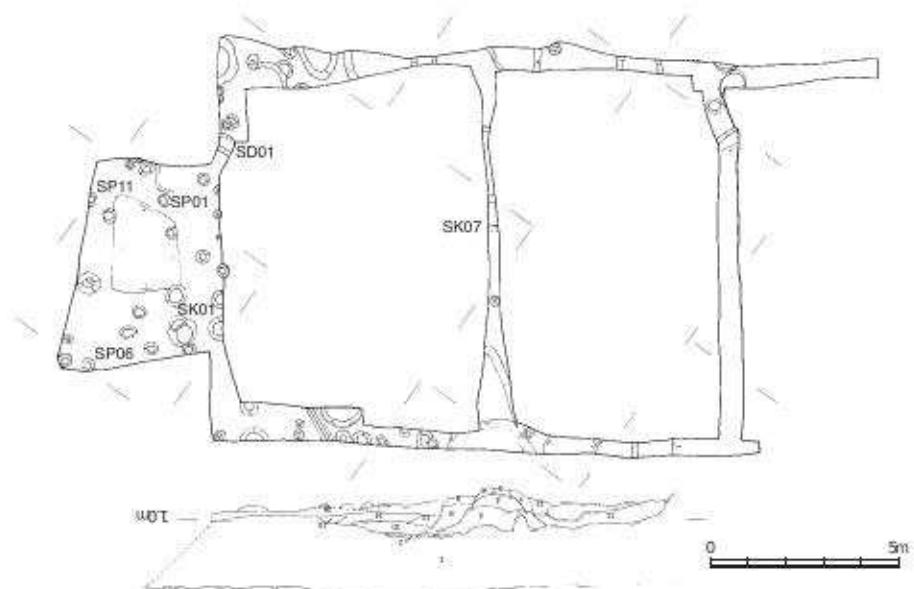


fig.138 第1遺構面 平面図



- | | |
|-------------------------|------------------------|
| 1. 摂乱 | 12. 摂乱井戸 淡黄褐色粗砂 |
| 2. 暗黄灰褐色細砂～中砂 | 13. 雜灰褐色細砂（色調やや暗い） |
| 3. SE06 暗茶灰褐色砂質土 | 14. 雜灰褐色細砂（灰色が強い） |
| 4. SE06 大疊混り暗茶灰褐色砂質土 | 15. 明黃褐色中砂～粗砂 |
| 5. SE06 暗黄茶灰褐色細砂～中砂 | 16. 雜灰褐色細砂 |
| 6. SE06 淡黄茶灰褐色細砂～中砂 | 17. SK05 暗灰褐色細砂（色調が暗い） |
| 7. SE06 淡黄茶灰褐色細砂～中砂 | 18. SP31 暗灰褐色細砂（色調が暗い） |
| 8. SE06 雜灰褐色砂質土（色調やや淡い） | 19. SP23 暗灰褐色細砂（色調が暗い） |
| 9. SE06 雜灰褐色細砂（灰色が強い） | 20. SD02 暗灰褐色細砂（色調が暗い） |
| 10. 暗灰褐色細砂 | 21. SP24 暗灰褐色細砂（色調が暗い） |
| 11. 暗灰褐色細砂（色調やや暗い） | 22. 淡黄褐色中砂～粗砂 |

fig.139 第2遺構面 平・断面図

褐色砂質土と暗灰褐色砂質土の異なる埋土が認められる。SP15から中世と推定する土師皿片、備前甕片等が出土した。SP31では、底部に戦後の米軍統治下の製品である、MADE IN OCCUPIED JAPANの銘のある磁器片も出土している。

第2遺構面

この遺構面では、14～15世紀の柱穴や土坑を多く検出した。また、中世遺物包含層の暗灰褐色砂質土遺物包含層からは、ほぼ14～15世紀に収まる土師皿や羽釜、鍋を含む土師器、甕や鉢の東播系須恵器、火舍等の瓦質土器、備前甕等が破片で多く出土している。

柱穴群 調査区のほぼ全域から30基以上を検出された。調査範囲が狭いため、建物等としての纏まりは不明である。

柱穴は、径約20～40cm、深さ約15～40cmの範囲に、大多数が収まる。遺物包含層とほぼ同じ暗灰褐色砂質土が堆積している。出土遺物は少ないが、14～15世紀の土師皿、土師質鍋と瓦質土器の火舍、14世紀の瓦器碗、東播系須恵器の鉢、甕、備前の甕が破片で出土している。出土遺物から、14世紀の柱穴も存在するが、15世紀の柱穴がより多い。

SD01 幅約50cm、深さ約10cmを測る。暗灰褐色砂質土が堆積し、14世紀の鍋や15世紀の羽釜片、14～15世紀の土師皿等が出土している。

SK01 径約70cm、深さ約26cmを測る。暗灰褐色砂質土が堆積する。遺物の出土はない。

SK02 径約1.3m、深さ約12cmを測る。暗灰褐色砂質土が堆積し、14世紀～15世紀の土師皿等が出土している。

SK04 径約42cm、深さ約22cmを測る。暗灰褐色砂質土が堆積し、14～15世紀の土師皿等が出土している。

SK06 径約1.26m、深さ約18cmを測る。暗灰褐色砂質土が堆積し、14～15世紀の土師皿等が出土している。

SK07 径約1.1m、深さ約15cmを測る。暗灰褐色砂質土が堆積し、東播系須恵器甕、備前甕、土師皿等が出土している。14～15世紀の土坑である。

3. まとめ

今回の調査では、14～15世紀の柱穴等からなる中世の兵庫津遺跡の一画を確認できた。この時期は、ほぼ室町時代にあたり、日明貿易等により兵庫津が興勢に向かう時代である。周囲で実施された多くの調査でも、13世紀～17世紀、それ以降に至る建物等が確認されており、近世とともに中世の兵庫津遺跡の様相が確認できる地域として知られている。特に当該調査区と国



fig.140 I区第2遺構面全景(東から)



fig.141 III区第2遺構面全景(南から)

道2号線を挟んだ南側に位置する51次調査では、今回と同じく14~15世紀の遺構も確認されている。

今回の第71次調査でも柱穴を主体とする14~15世紀の遺構群が確認されている。出土遺物から、確認した遺構の主な時期は15世紀とも考えられる。ただ調査区が少少なため、柱穴による建物等の方向は不明である。搅乱されているが、15世紀~19世紀までの井戸等も確認できた。本来はこの時期についても遺構面が存在したが、削平され井戸等の深い遺構だけが残存したと考えられる。第51次調査でも同一時期の遺構が確認されており、ほぼ同様の調査結果である。

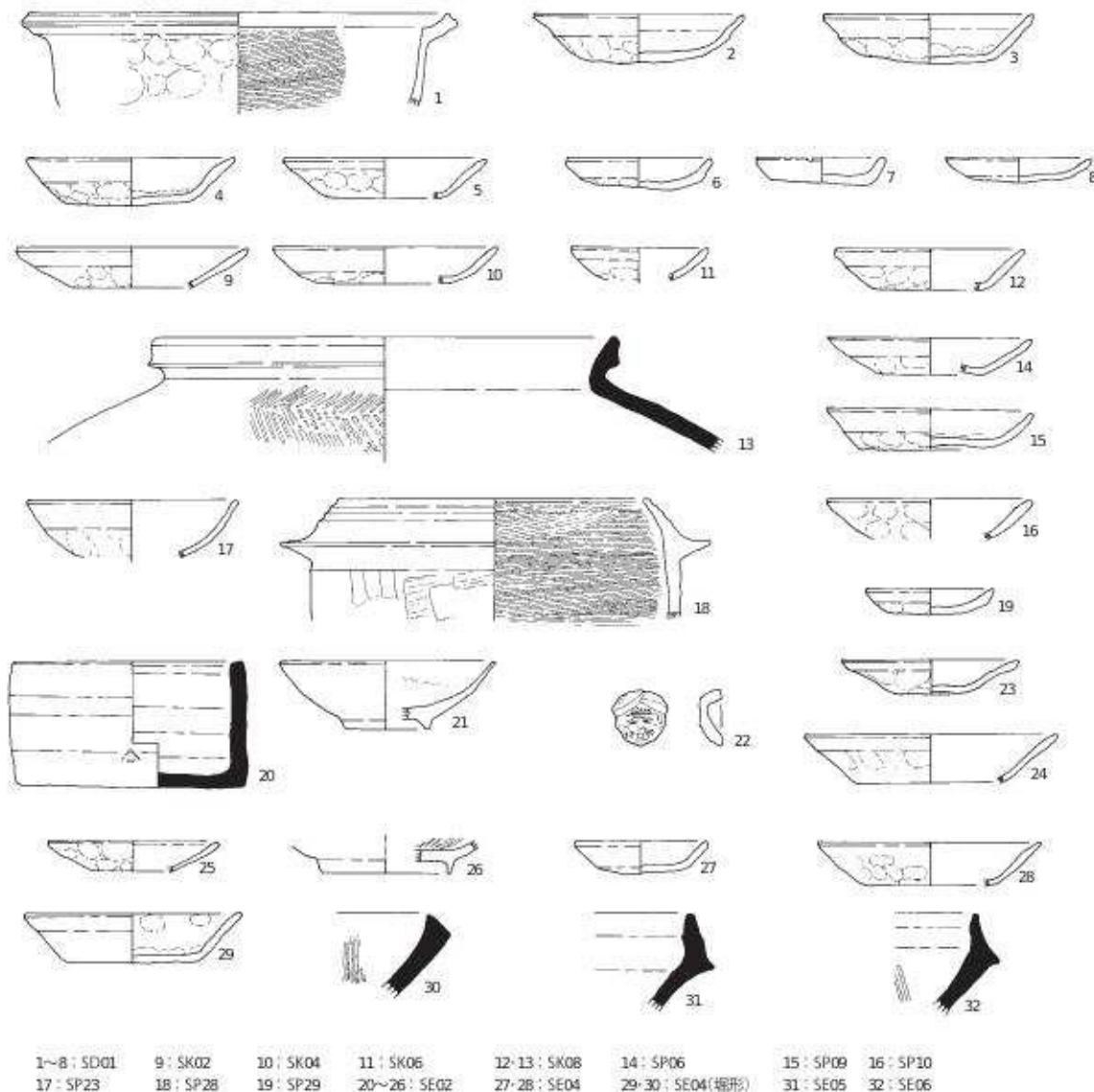


fig.142 遺構出土遺物実測図

0 20cm

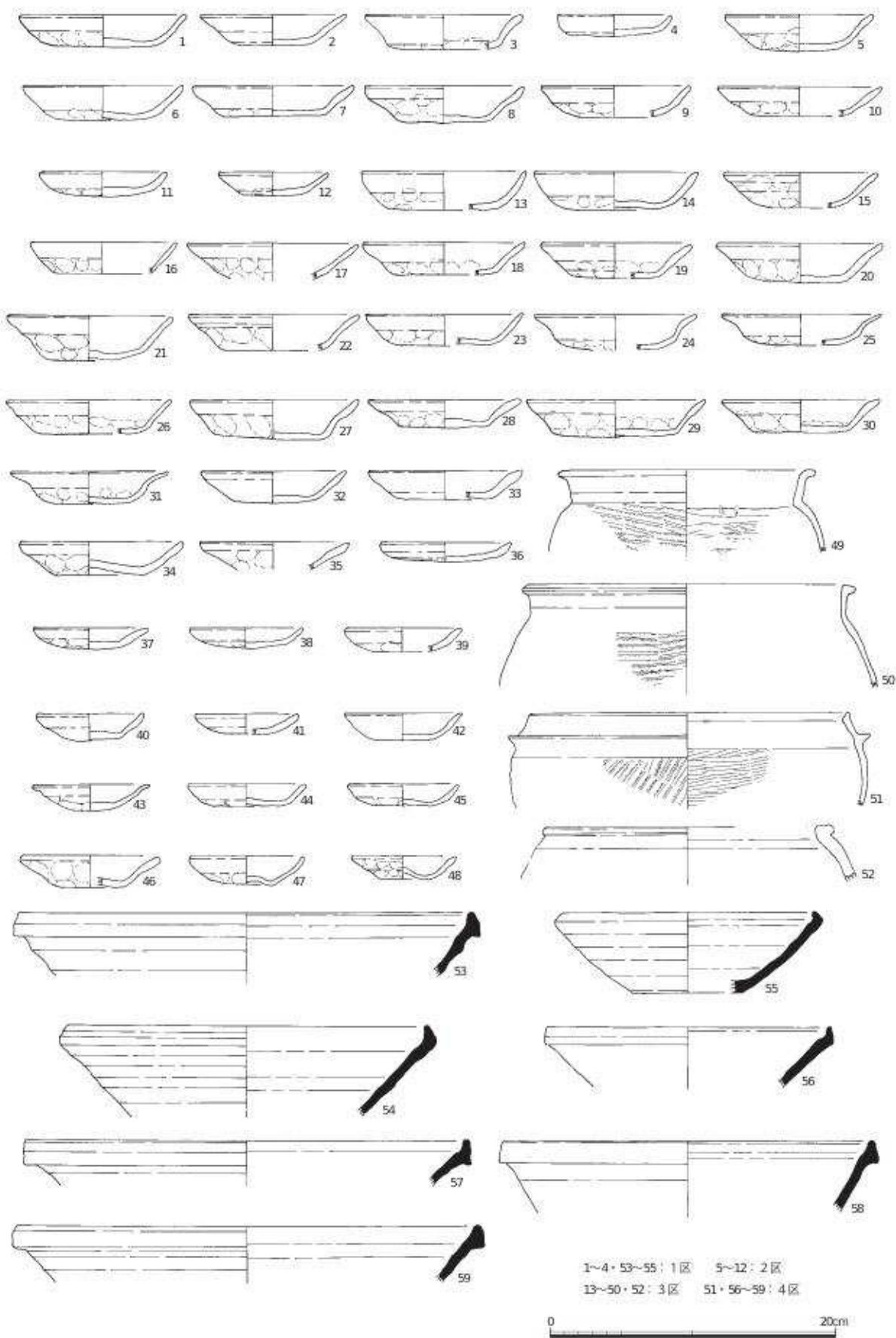


fig.143 出土遺物実測図

17. 神楽遺跡 第16次調査

1. はじめに

神楽遺跡は、六甲山系から南へ流出する苅藻川、妙法寺川などによって形成された扇状地の扇端部付近、標高5m前後に立地する、弥生時代～中世の遺跡である。市営地下鉄建設に伴い、昭和54年度に行われた第1次調査から、これまでに15回の発掘調査が実施されている。

現在の長田南小学校南側で実施された第1次調査では、自然流路1条を検出し、弥生時代中期後半～後期の土器や結晶片岩製紡錘車など多くの遺物が出土した。付近には集落の存在が推定される。古墳時代は、市立神楽保育所改築に伴う昭和58年度の第2次調査で、中期の掘立柱建物と竪穴建物各1棟が検出された。昭和59年度にその北側で実施された第3次調査では、後期の竪穴建物5棟、後期以降の掘立柱建物1棟の他に土坑などが検出され、窪地状の落ち込みから製塩土器、蛸壺、土錘、韓式土器片、算盤玉形の滑石製形紡錘車、滑石製装身具や獸骨などが出土した。この他、市立神楽小学校（現在の長田南小学校）改築に伴う第7次調査でも、後期の竪穴建物5棟と掘立柱建物6棟などが検出されている。また、神楽町4丁目北端での第11次調査では、前期の竪穴建物1棟と中期末～後期初頭頃の掘立柱建物2棟が検出されている。

平安時代は、第1次調査において、溝から10世紀中頃～11世紀初頭頃の土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・有溝土錘・棒状土錘が出土し、「東福」と墨書きされた土師器・須恵器・灰釉陶器が数点含まれていることが確認されている。

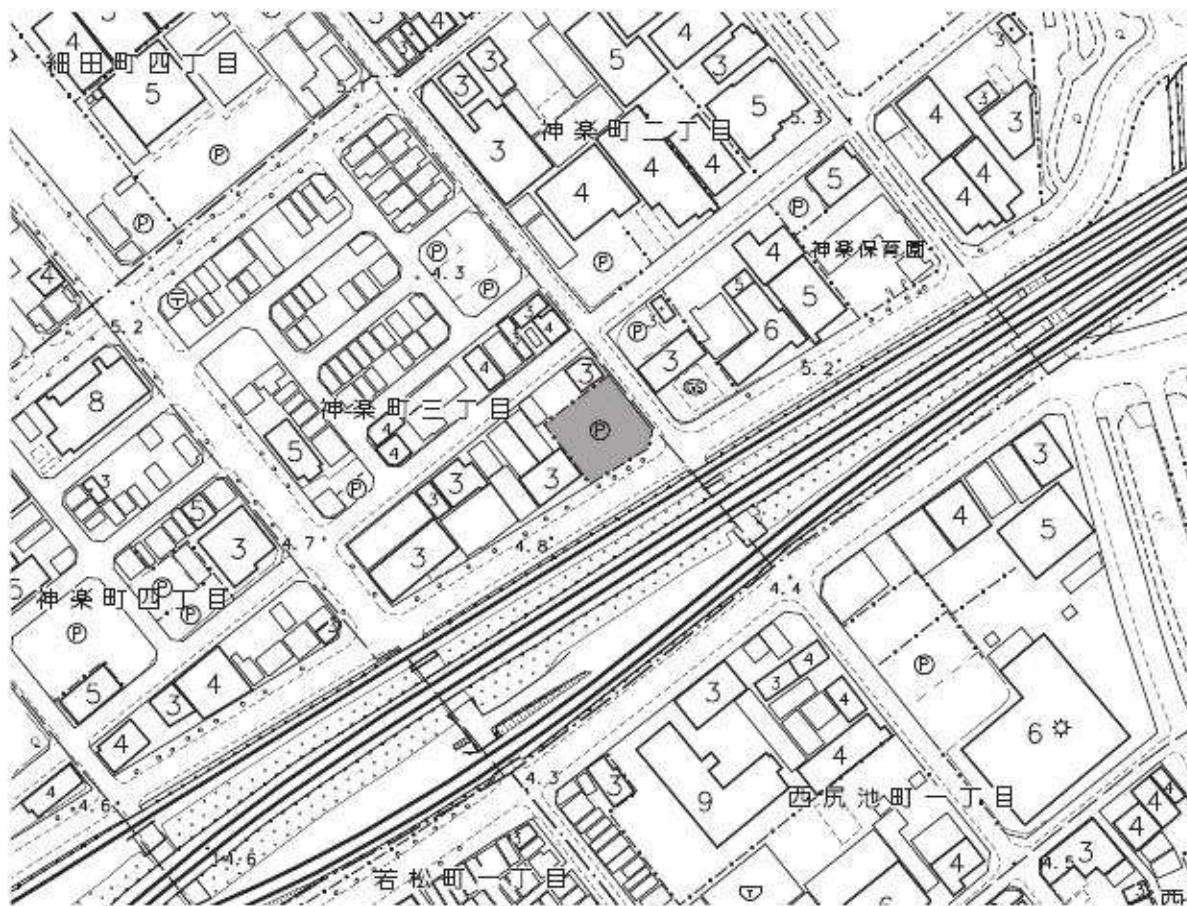


fig.144 調査地位置図 1:2,500

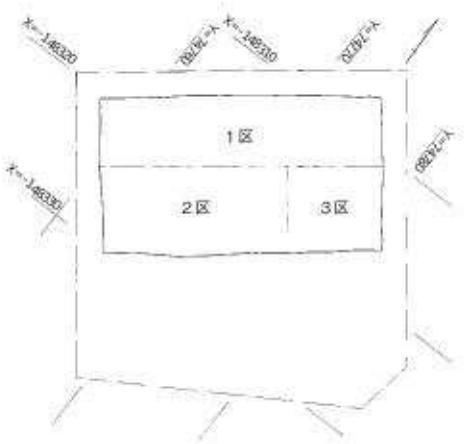


fig.145 調査区配置図

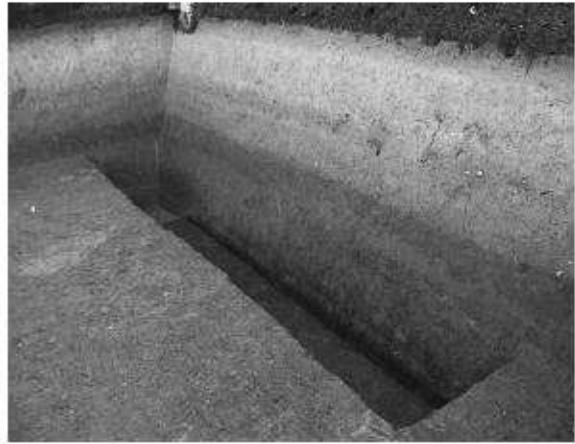


fig.146 2区西壁土層断面

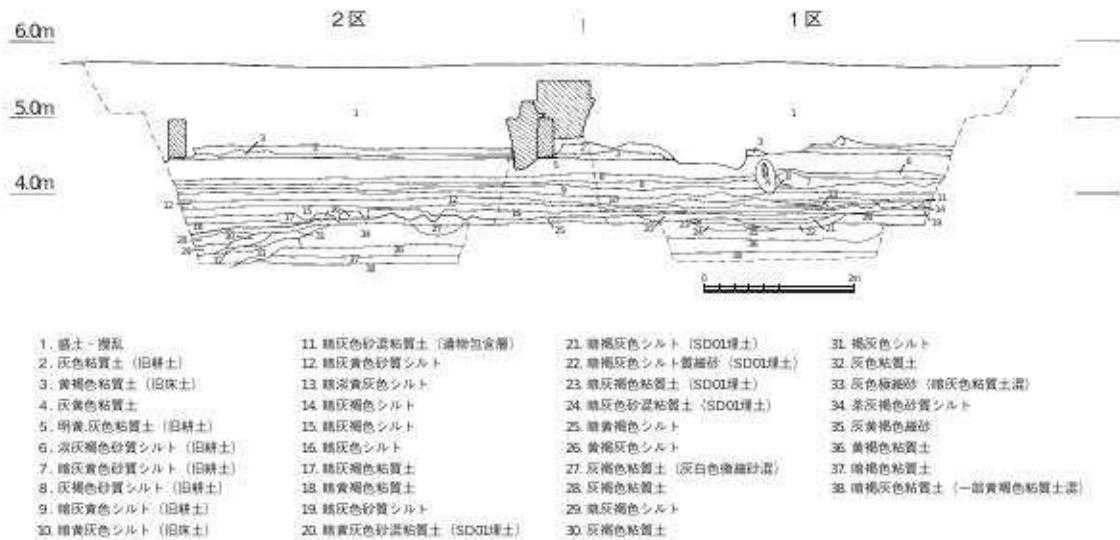


fig.147 西壁土層断面図

2. 調査の概要

今回の調査は、共同住宅建築に伴うものである。調査地は過去のいずれの調査地とも隣接せず、昭和54年度の第1次調査地より、JR山陽本線に沿って約100m南西に位置している。工事計画により、建物基礎の掘削が及ぶ範囲について発掘調査を実施した。調査は残土置場確保の関係上、3分割の反転調査を実施した。調査区北半1/2を1区、南半は東と西に分割し、西側の2/3を2区、東側の1/3の範囲を3区とした。

基本層序

調査地は過去の造成に伴い、全体に約1m前後の盛土が行なわれていた。この下層には、数枚の耕土・床土層が存在し、その下層に遺物包含層である暗灰色粘質土(12層)が存在する。遺構面はその下層である淡灰褐色粘質土(43層)の上面に検出された。なお、調査区の西端部は西側へ落ち込む。暗灰色シルト(18層)や暗灰褐色粘質土(19層)などが堆積して、湿地状の様相を呈し、この下層の黄褐色シルト(32層)上面でも遺構を検出した。

検出遺構

調査区の西端部、1区と2区の西端で溝2条、土坑・ピット各1基を検出した。溝は南北方向の溝(SD01)と北西から南東方向の溝(SD02)が存在する。SD01は、調査区の北西角で、湿地状堆積の下層に検出された。幅1m~1.5m前後、深さは0.2~0.25mで、出土遺物はなかった。SD02は幅0.5m、検出面からの深さは0.05~0.1m前後で、主軸はN-37°-Wである。土師器片がわずかに出土した。SD02の西側は湿地状に落ちており、周囲には、遺構面上に複数の足跡が検出されたが、不明瞭であり、動物かヒトであるかは特定できなかった。

土坑(SK01)は、2区西半部のSD02東側で検出された、一辺0.8m前後の三角形状の土坑である。検出面からの深さ0.09mで、出土遺物はなかった。

ピット(SP01)はSK01の南側で検出された。直径0.2m前後、検出面からの深さ0.25mのピットで、古墳時代後期後半頃の須恵器壺が出土した。周囲に建物などに対応するピットは確認されていない。

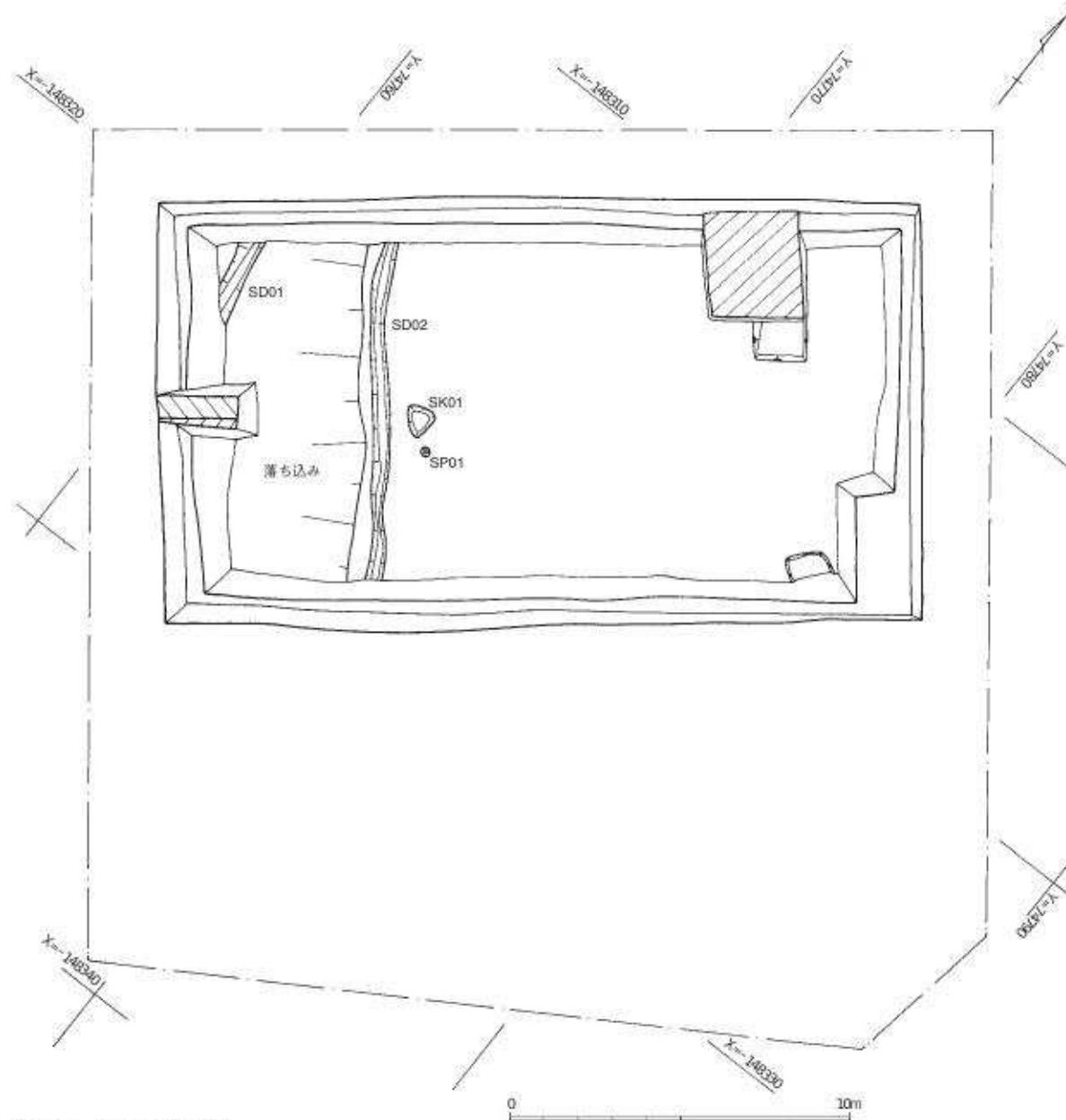


fig.148 遺構面平面図

3. まとめ

今回の調査では、調査区の西端部で溝2条、土坑・ピット各1基を検出した。検出した2条の溝はそれぞれ方向を異にしている。SD01は南北方向の溝であり、同様な主軸をもつ遺構は、神楽遺跡では第7次調査の古墳時代の掘立柱建物や、第1次調査の平安時代の溝、第4次調査の奈良～平安時代の掘立柱建物など中世以前の遺構に認められる。SD02は現在の地割と方向を同一にしており、これは調査地周辺の松野遺跡、大橋町遺跡、二葉町遺跡など、多くの遺跡で中世以降に認められるものである。

神楽遺跡の西に位置する松野遺跡や二葉町遺跡では、弥生時代の溝が東西もしくは南北方向で検出されており、中世には現在と同じ地割へ変化をして行くことが指摘されている。SD01・02は出土遺物が乏しく、時期を特定することは困難であるが、SD01は湿地状堆積の下層からの検出であることから、SD02よりも時期が古いものであることは明らかである。近隣での調査例から、SD02を中世期の遺構と考えた場合、これまでに指摘されているように、長田区西部一帯で、中世期に大規模な土地区画の改変が行なわれた可能性が推定される。

遺物包含層から出土した遺物は、古墳時代後期後半（6世紀後半）頃～平安時代後半頃のものが含まれている、神楽遺跡におけるこれまでの調査では、長田南小学校の南西側一帯、及び神楽町4丁目北側付近に、古墳時代・平安時代頃の遺構・遺物が集中する範囲が存在し、集落域の存在が推定されている。調査地北方には顯著な遺構・遺物は確認されていない。調査地の土層堆積状況から、調査地付近は両者の集落域が立地する微高地間の低地で、耕作地もしくは湿地状地形の中に位置する可能性がある。遺物包含層からの出土遺物は、北東側の微高地方面より流入したものと推定される。調査地西半では、西側へ落ちる湿地状堆積が確認されたが、溝などの遺構が検出されたことから、調査地の西側にはさらに遺構が存在する可能性を考えられる。



fig.149 1区全景（東から）



fig.150 2区全景（北東から）

18. 出合遺跡 第51次調査

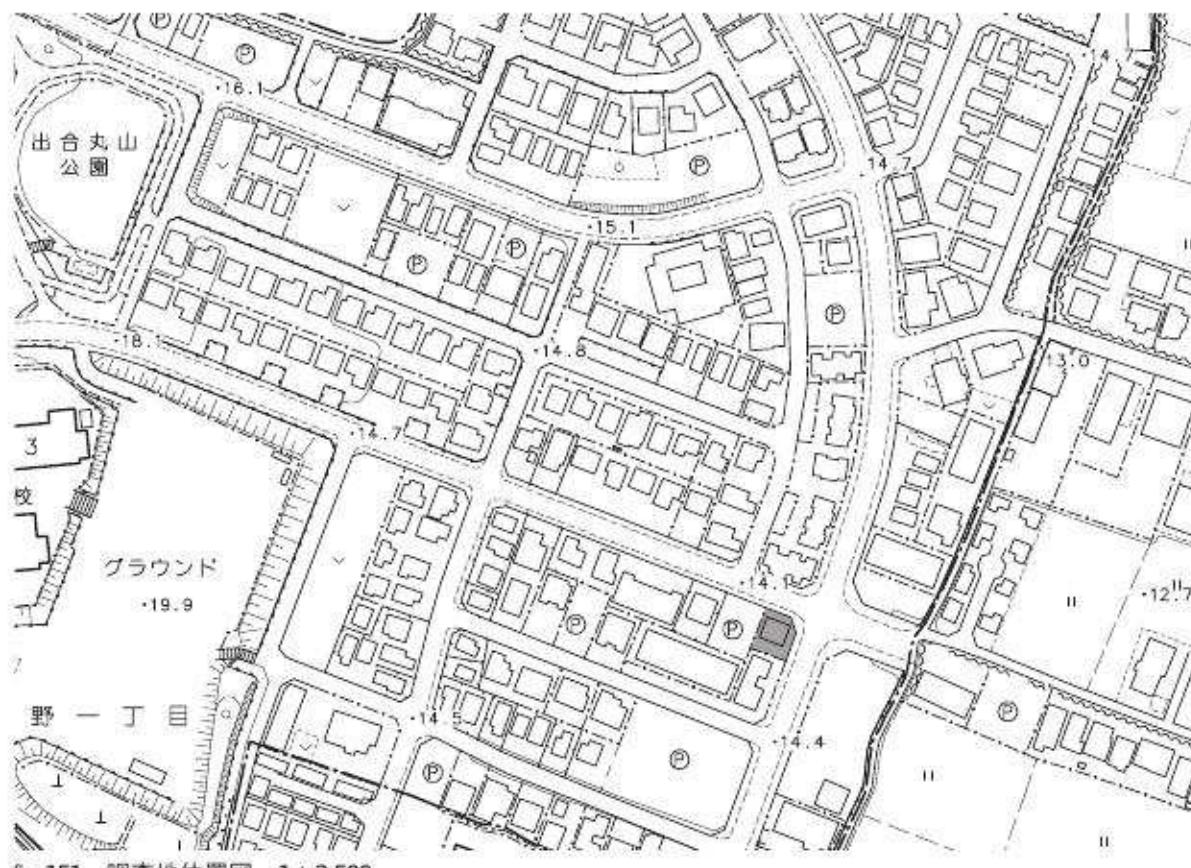
1. はじめに

出合遺跡は、西区玉津町出合、中野、王塚台、平野町中津に広がる旧石器時代～中世の集落跡である。遺跡は明石川中流域右岸の沖積地および西側の段丘上に位置している。明石川は遺跡の北から東にかけて接するように流れ、櫛谷川と合流して下流へと向かう。出合遺跡では昭和52年に第1次調査が実施されて以降、現在までに50次に及ぶ調査が実施されている。過去の調査では、弥生時代～中世の各時代の遺跡が発見されている。

弥生時代の遺跡は、明石川に近い沖積地を中心に展開している。既往の調査では、前期末～中期初頭、および後期末～古墳時代前期の集落のほか、中期～後期の方形周溝墓群、中期の水田跡などが見つかっている。

古墳時代の遺跡は西側の段丘上から沖積地にかけて広く展開している。とくに段丘上では、中期～後期の古墳が20基以上見つかっており、出合古墳群として知られている。その内の龟塚古墳は全長29mの帆立貝式古墳である。同じ段丘上では奈良時代の大型掘立柱建物や大型井戸も見つかっており、官衙的な施設が存在したと考えられている。一方、沖積地では古墳群と同時期の竪穴建物が複数見つかっているほか、初期須恵器の窯跡が発見されている。また、韓式系土器が出土している地点もある。

中世の遺跡としては、沖積地において平安時代後期～鎌倉時代前期の掘立柱建物や木棺墓が複数見つかっている。また、出合小学校付近には戦国時代の出合城が所在していたことが知られているが、実態は不明である。



2. 調査の概要

今回の調査は個人住宅建設に伴うもので、建物基礎工事によって埋蔵文化財に影響がある約78m²が調査対象範囲である。ただし、隣地境界に接近している部分については、安全のため調査区から除外して調査を実施した。よって、実際の調査区の面積は約60m²となる。調査は残土処理の関係上、調査区を3分割して実施し、それぞれ1～3区とした。

基本層序

調査地の現地表面の高さは、隣接する道路部分で約T.P.13.8mである。ただし、敷地全体に盛土がされており、その上面の高さはT.P.14.2m前後となる。T.P.12.4m付近までは造成土による堆積であり、その下層に現代耕土が約0.3m堆積する。以下、複数の堆積層が続き、T.P.11.7m付近で基盤層となる緑灰色粘土層に到達する。

今回の調査で検出した遺構は、暗渠排水とみられる溝1基のみであった。溝は南北方向に走っており、幅約0.3m、深さ約0.4mを測る。埋土には拳大の礫が充満していた。遺構の詳細な時期は不明ながら、近世以降のものと考えられる。

遺物は包含層から少量の土器片が出土している。土器片は土師器・須恵器を中心であり、主にオリーブ灰色細砂層(3層)・オリーブ灰色極細砂層(4層)から出土している。詳細な時期は決め難いが、古墳時代後期頃とみられる。それ以外に、中世の青磁片などがわずかに出土している。

3. まとめ

調査地の周辺で過去に行われた調査(1～5・7・9次)では、古墳時代中期～後期の堅穴建物が発見されており、集落が存在したことが明らかとなっている。今回の調査で出土した土器もこれに関連するものであると考えられる。ただ、遺物の出土量は少なく、遺構も検出されなかったことから、集落の中心域からは外れている可能性が考えられる。今後、周辺の調査が進展することで、集落の様相が解明されることに期待したい。

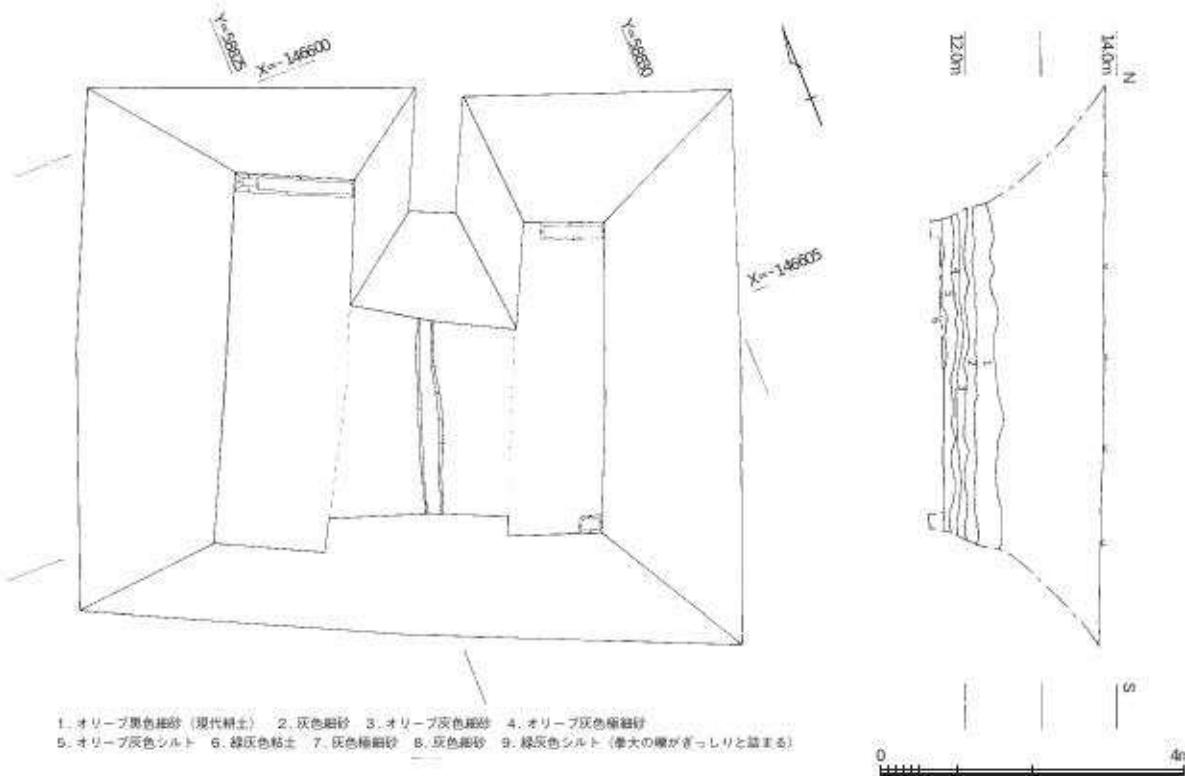


fig.152 遺構面平・断面図

III. 保存科学調査・出土遺物の調査

1. 平成28年度の保存科学調査・作業の概要

遺物の保存科学

兵庫津遺跡第57次調査、大開遺跡第14次調査：出土木製品の保存科学的処置
はじめに 神戸市教委における水浸出土木製品の保存科学的処置には、樹脂含浸法と真空凍結乾燥法を導入している。含浸に使用する樹脂は、ポリエチレングリコール（PEG #4000）、ステアリルアルコール（カルコール）の2種を対象遺物に応じて隨時選択している。一方、1990年代半ばより奈良県立橿原考古学研究所と財団法人大阪市文化財協会（当時）が中心となって開発が進められてきた、糖アルコール含浸法の一手法として「ラクチトール法」があった。特に昨今では国内外において、さらに進化した「トレハロース（トレハ）」法が実践され、定着してきている。メリットとしては、「含浸期間が（PEG #4000に比べて）短い」「形態安定性が良い」「材料費が比較的安価」「耐湿性が良い」などが挙げられる。一方で、通常の含浸工程で運用される、60℃程度までの温度域においては水への溶解度が低い（60℃で70%程度）ため、劣化の激しい遺物に対しては処理後の強度に不安がある他、含浸処理後、樹脂の結晶化～乾燥に至る工程と、乾燥後のクリーニング作業に多少の手間と時間をかける必要がある。このように長短が認められる素材ではあるものの、将来的な展望として、多様な手法を実践した中からより良い手法の選択的導入を検討すべきと考えられるため、当該年度より出土遺物に対する運用を開始した。

対象資料 今回は東灘区北青木遺跡第7次調査（平成23年度調査）出土遺物1点と、兵庫区兵庫津遺跡第57次調査（平成24年度調査）出土遺物1点、同じく兵庫区大開遺跡第14次調査（平成25年度調査）出土遺物4点の合計6点について、保存処置を行なった。

保存処置工程 各遺物は水漬けで保管していた。含浸期間は6月4日から7月11日までの37日間である。30%水溶液から始め、最終的に65%まで段階的に濃度を上げて行った。温度管理は恒温乾燥機で行った。樹脂含浸後、処理液から取り上げ、温水（約60℃）にくぐらせ、表面の水分を拭き取った。それから6日間、乾燥棚に置き、扇風機で風を当て続けた。その後、欠損した部位にはバテタイプのエボキシ系合成樹脂を補填、アクリル絵具で補彩した。

結果と所見 重量変化について、含浸前から含浸終了時への重量変化は凡そ21～26%の重量増となつたが、大開遺跡出土のクスノキ製横杓子のみ、6%の重量増に留まっている。これは含浸中に接合が外れて破片に割れてしまい、細片の計測ができていない事が要因である。風乾中の重量変化については、10日間のうちにほぼ横這いになつていると見受けられたため、送風をやめプラコンテナに収納し、室内環境下において経過観察を行なった。そのまま約2か月経過した9月23日とさらに約2か月後の12月1日に重量計測を実施したところ、7月21日から12月1日のおよそ4か月間で11.5～26.8%の水分蒸発を続けていたことが判明した。特に大開遺跡出土の横杓子および加工材は、この4か月間でそれぞれ26.8%・21.1%乾燥が進んだ。これらは厚みが他の資料より厚く、乾燥が緩慢であったことが要因と考えられる。

形状の変化について、目視で確認されたものは大開遺跡出土クスノキ製横杓子に生じた放射方向の微細なクラック、大開遺跡出土アカガシ亜属製鉗身の放射方向の収縮が挙げられる。数値計測による処理前後の拡縮率を出したところ、アカガシ亜属製鉗身に厚さ（接線方向）で-

26%と大きな収縮を見た。クスノキ製横杓子では、放射方向に15%の開きが生じた。その他は-4~7%と、若干の増減が確認された。

今回実施した保存処置全体において、目視や触感では良好な仕上がりであったと感じた。PEG法では処置後の資料表面に若干の光沢やぬめり感を生じるが、トレハロース法では適度な乾き感をもって仕上がる。

寸法変化については現段階で拙速な原因究明はできないが、変化の大きかった製品がアカガシ亜属およびクスノキと、保存処置において変形を生じやすい樹種であった事や、処理温度をあまり上げないよう55℃までとし、溶液の最終濃度を65%と低く設定した事、含浸後、表面を温水で洗浄した事等、いくつかの要因が考えられる。今後、より良い効果を得るためにこれらを検証する必要がある。

日付	大開遺跡				北方木道跡		馬鹿池遺跡		溶液濃度 (%)	
	枚数	加工材 ヒノキ	加工材 ニロウマツ	横杓子 クスノキ	鉢身 アカガシ亜属	鳥居木製品 アカガシ亜属	人形 ヒノキ			
6月4日	133	154.5	126.1	42.7	—	—	41.7	30		
6月7日	149	166.8	133.7	46.8	—	—	46.1	—		
6月18日	149	166.9	133.5	46.8	—	—	46.1	—		
6月14日	144	166.7	134.5	47.1	—	—	47.4	42.42		
6月17日	148	172.7	134.4	47.7	—	—	49.6	—		
6月20日	149	173.8	134	48	—	—	49.8	—		
6月22日	151	173.9	134	48	—	—	50.2	46.91		
6月27日	154	179.7	129.9	48.7	—	—	50.9	—		
6月29日	—	—	—	—	—	—	—	48.09		
6月30日	155	181	129.9	48.8	—	—	51.2	—		
7月1日	156	182	130.5	49	—	—	51.5	50.91		
7月4日	159	185.5	132.1	49.8	—	—	52.3	56.28		
7月6日	—	—	—	—	—	—	—	61.89		
7月11日 11-15	16.7	190.5	133.8	52.5	51.4	54.3	—	—		
12-09	16.6	190.2	—	51.9	50.3	53.4	—	—		
13-10	16.5	189.5	—	51.8	49.8	52.8	—	—		
14-09	16.5	189.3	—	51.4	49.7	52.6	—	—		
15-09	16.5	189.1	—	51.5	49.5	52.4	—	—		
16-09	16.4	189.8	—	51.4	49.4	52.2	—	—		
17-09	16.4	188.7	—	51.3	49.4	52.2	—	—		
7月12日 9-09	16	186.7	—	50.4	48.1	50.4	—	—		
11-09	15.9	186.3	—	50.4	47.8	50.4	—	—		
12-09	15.7	186	—	50.1	47.7	50.1	—	—		
15-09	15.5	185.9	—	49.9	47.5	50.4	—	—		
7月13日 10-09	15.3	183.7	136.8	49.1	46.7	49.1	—	—		
7月21日 10-30	13	171.5	—	45.1	46.1	48.9	—	—		
9月2日	11.8	141	98	39	41	43	—	—		
12月1日	11.5	139.4	95.7	38.4	39.4	41.7	—	—		

表17 トレハロース含浸処置経過



fig.153 含侵前状況 (横杓子 / 大開遺跡)



fig.154 含侵前状況 (鉢身 / 大開遺跡)



fig.155 含侵工程状況



fig.156 処置完了後

2. 兵庫津遺跡 第67次調査

1. はじめに

本報告は、平成27年度に兵庫区切戸町において実施した兵庫津遺跡第67次発掘調査の出土遺物整理作業に関するものである。当該調査では5面の遺構面を確認、28リットルコンテナにして約20箱程度の遺物が出土している。

出土遺物は土器、陶磁器、瓦、銭貨を含む金属製品、木製品、銅滓、石製品に大別され、整理作業はこのすべてを対象としたが、ここでは出土量の大半を占める第3～第5遺構面、すなわち中世の土器・陶磁器および、兵庫津遺跡でもまだ確認例の少ない古代の土器、瓦を中心詳述する。必要に応じて遺構単位で遺物実測図を提示するが、遺構の詳細および発掘調査の概要については『平成27年度神戸市埋蔵文化財年報』に所収されている。併せて参照されたい。

2. 中世の土器

A. 土師皿の分類—在地系及び模倣系の抽出—

中世遺跡から出土する土器・陶磁器類が土師質土器を主体とし、付隨的にそれ以外の土器を伴う構成をなす事は、近年進展の著しい中世土器研究によって、すでに周知の事実となっている。土師質土器、須恵器、瓦質土器といった種別上の基幹分類に、地域性や様式といった概念を組み合わせることで、現在の中世土器研究は成立している。その点を踏まえて、本論でも土器類の産地に着目したが、その前提に立つ場合、土器は種別を超えて「他产地系」と「在地産」とに分けることができる。他产地系は、消費地にとっての搬入品で、国内産と外来の輸入品とに細別される。一方在地系は、地産地消的なその土地の生産品だが、これも純粋な在地オリジナルの土器と、他地域で生産されたものを在地で模倣した模倣系土器とに概念上は分けることができる。

以上の観点から67次調査出土の中世土器を分類した場合、ほぼ在地系のみで構成されるもの

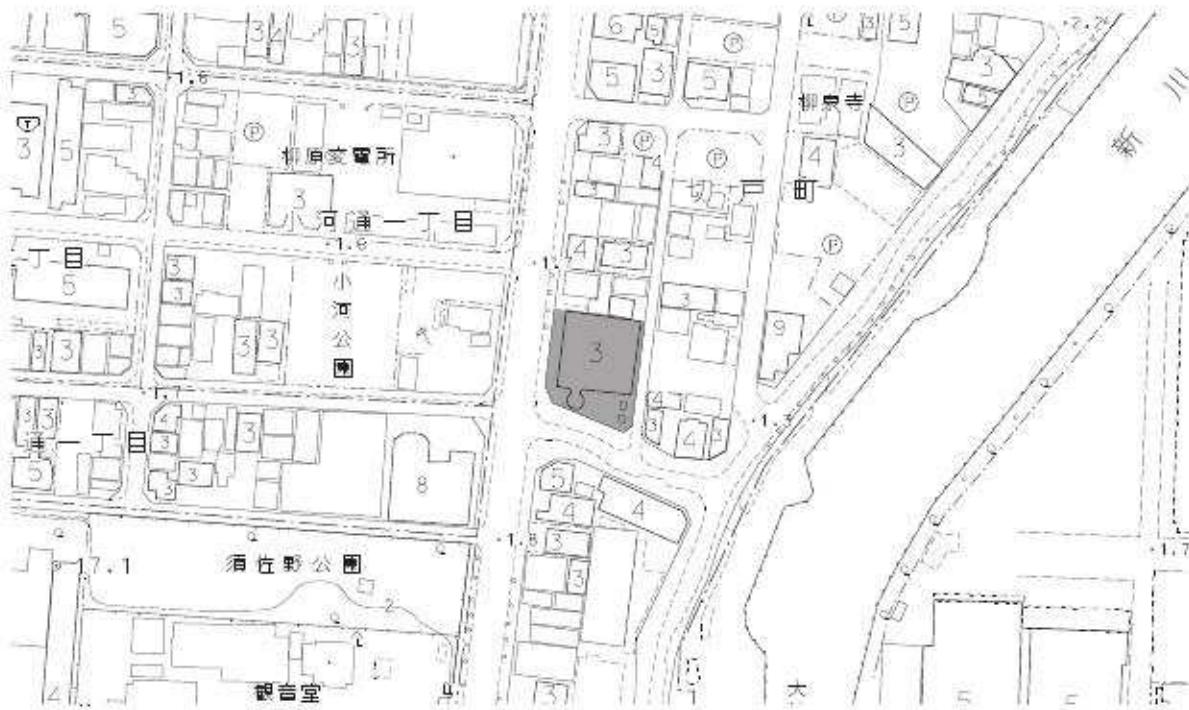


fig.157 調査地位置図 1: 2,500

が土師質土器、複数の他产地系が組み合わさって構成されるのが瓦質土器となる。「系」の字句に象徴されるように、これらは漠然とした生産地系列が把握できるものの、具体的な产地同定に至らないという共通点がある。須恵器については土師質土器に近い存在形態ながら、一部他产地系と考えられる製品を確実に含む。そして土師質土器の対極にあるのが、純粹な搬入品として一定量出土する備前焼である。そのほかに少量の輸入陶磁器、古瀬戸といった例外が存在する。以上が兵庫津遺跡67次調査の中世土器の組成である。いずれの種類も、食膳具、煮炊具、調理具、貯蔵具などさまざまな用途の器種が存在する。

今日の中世土器研究において、その方向性は①編年②地域性の抽出、の二つに大きく分けられるが、①についてはすでに優れた先行研究が多く存在する。たとえば兵庫津遺跡における土師質土器煮炊具の長谷川・岡田案、瓦質土器の鋤柄案や、備前焼の乗岡案などがその一例である。本報告では確立した編年案のない在地系土師皿以外は、これら既存案に依拠して時間軸を掘り下げるることはせず、中世都市としての兵庫津における、土器組成の地域性を確認することに主眼を置いた。その上で中世土器の地域性をもっとも端的に表す土師質土器、特に土師皿を中心に観察を進めた。

1990年代に「模倣系」の概念を提唱した鋤柄俊夫氏の研究（鋤柄「畿内における古代末から中世の土器」）を受け、伊野近富氏が確立した京都一在地間における土師皿の、原型—模倣モデル論（伊野「原型・模倣型による平安京以後の土器様相」）は、近年「模倣」という現象の内実を問うべきという修正意見を生み出しながらも、大筋において現在も有効である。模倣系という概念を兵庫津遺跡出土の土師皿に当てはめた場合もそれは明確で、以下に提示する形態に基づく土師皿の分類は、鋤柄氏が京都出土の土師皿で提案した形態（鋤柄「平安京出土土器の諸問題」）と概ね呼応する。ただし鋤柄氏は京都で皿AからKに至る14形態を示しているが、兵庫津遺跡で確認できたのはその一部にすぎない。兵庫津出土の土師皿で模倣系「京都系土師皿」として認識できる一群については、基本的には鋤柄案の型式番号を踏襲しつつ、在地のものを追加して以下のように分類した。

皿B 内面の体部と底部の間に粗い指押えを施し、明瞭な指頭圧痕が底部内面外周を一周するも

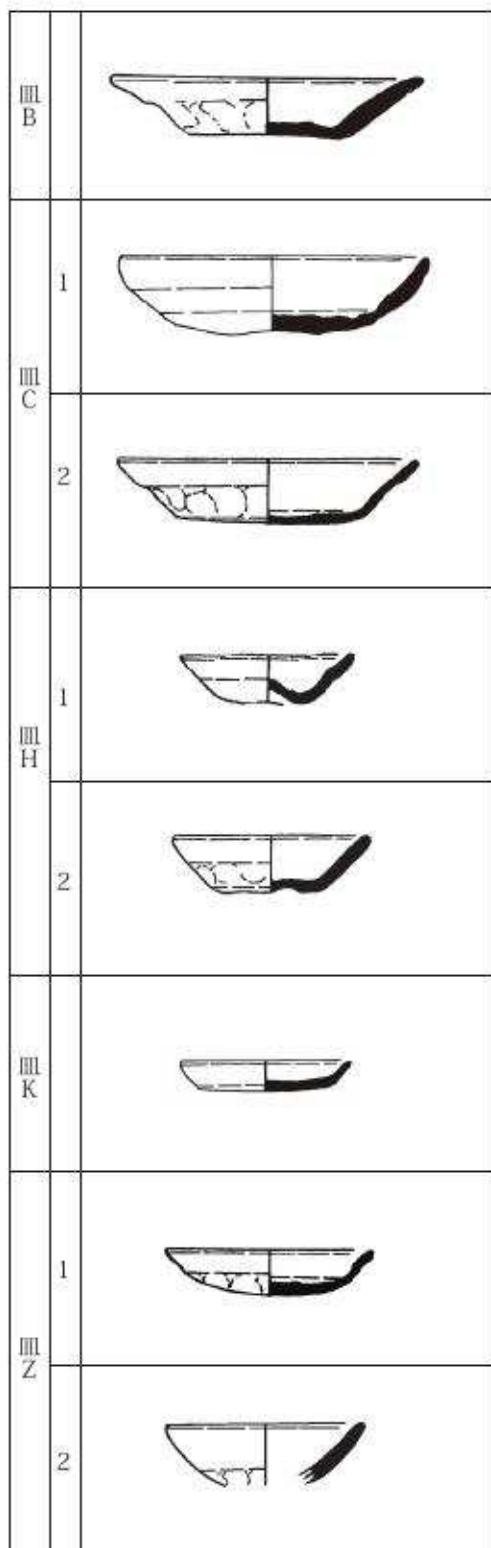


fig.158 出土土師器分類図

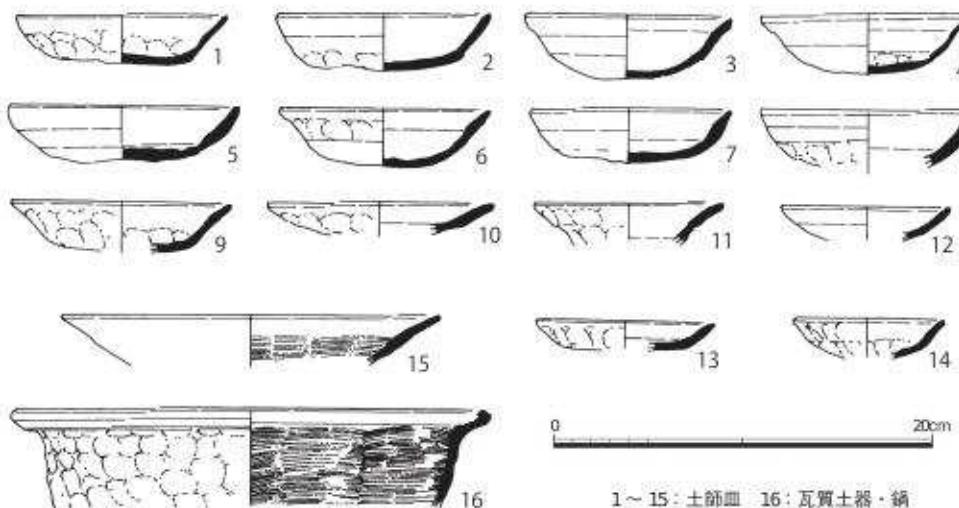


fig.159 SX403出土遺物実測図

のである。出土量は少ない。

III C C1とC2に細別できる。この二つが、兵庫津における土師皿の量的主体をなすものである。ただし京都産のC1が型作りとされるのに対し、兵庫津出土のC1は手捏ねで、京都の土器は白色だが、こちらは在地の橙褐色系の胎土である。C2も手捏ねで、杯型のC1と皿型のC2に分かれる点は京都と同様。両者のもっとも大きな形態的差異は、C1が内湾気味の直線で立ち上がるのに対し、C2は途中で屈曲しながら口縁部が外に開き気味になる点である。

III H いわゆるへそ皿であるが、京都の土師皿Hを忠実に胎土まで模倣し、あるいは京都産の搬入品かと疑われる白色のものと、それを模倣した在地の褐色～橙褐色系胎土のものがある。鋤柄案ではHは1種だが、兵庫津では京都産に酷似する（あるいは搬入品）ものをH1、在地産で明らかに模倣のものをH2とした。H1が明瞭なへソを持つのに比べ、H2のへソは浅く京都の編年論に照らせば新旧関係を表すとも取れるが、両者の間に共伴する出土遺物から見える時期差はなく、本調査区においては時期差を認めない。

fig.160 SX504出土遺物実測図



fig.161 分類図

H2のへソは浅く京都の編年論に照らせば新旧関係を表すとも取れるが、両者の間に共伴する出土遺物から見える時期差はなく、本調査区においては時期差を認めない。

III K 濑戸内系のロクロ成形品である。出土量はごく少ないと、確実に存在する。胎土から搬入か模倣かは、目視で判別できない。

III Z 京都には存在しない形態のため、新たにZの型式番号を与えた。在地系の手捏ね小皿である。CからHが京都産の模倣、Kが瀬戸内産の模倣（あるいは搬入）であるのに対し、この型

式は西摂津から東播磨周辺のオリジナルな在地系土器と推察される。器高の浅いZ1とやや深いZ2に分類した。

以上が兵庫津遺跡第67次調査で確認できた土師皿の型式分類試案である。いわゆる二寸五分の「小重」に相当する小径品は皿H、KとZでB、C、はそれより口径が大きい。出土量はCが圧倒的に多く、土師皿同士でいえば、HやZは客体的である。その他、BやCよりさらに大口径で、大皿あるいは杯に分類すべき品も多少認められるが、今回出土したものは破片のみで、かつ量的にH、Z以上に少ないため検討対象から除外した。

C1とC2、およびBの間の形態差は連続的で相関性が認められ、両者の中間形態的なものも存在する。このことは型式変化の問題とも絡むため、後程改めて述べる。

B. 共伴性の検討

前節でみたように、兵庫津遺跡第67次調査で出土した土師皿は京都産の模倣系を主体とし、在地産の小皿、瀬戸内系のロクロ成形小皿がわずかに付随するという構成をとる。すべての土器・陶磁器に占める土師皿の割合については、現状で有効な定量的分析法を見出しえないため言及不可能だが、図化可能な個体だけを任意に抽出した結果、挿図がほぼ土師皿（特にC類）によって占められている点をみても、その量的主体性は明らかである。

以上を確認した上で、中世兵庫津の土器の大半を占める土師皿C類と、その他の土器・陶磁器の共伴関係を遺構単位で確認していくこととする。

a. 土師皿C1を出土する遺構

図化可能な中世土器を出土した遺構のうち、土師皿C1を出土する遺構はSX403とSX504である。土師皿以外では、SX403がⅢ～Ⅳ期に相当する京都系瓦質鍋16を共伴するほか、土師皿Z類（12～14、20）を伴うという共通点がある。

b. 土師皿C2を出土する遺構

土師皿C2を出土する遺構は、掘立柱建物1（SB301）、掘立柱建物2（SB302）、SK301、SX302、SX304、SX318（鍛冶関連遺構）、SK406、SX501（湿地）の肩埋土で、その他に第3遺構面のピットからも少量ずつ出土している。

各遺構における土器・陶磁器類との共伴関係は図に示す通りだが、土師質土器煮炊具を伴うものはSK301、SX302、SX318、SB302である。そのうちSK301の播但型59とSB302の羽釜形50は既存の編年案に該当しない形態だが、SB302の鉄かぶと形48は岡田・長谷川案のⅣ期を示

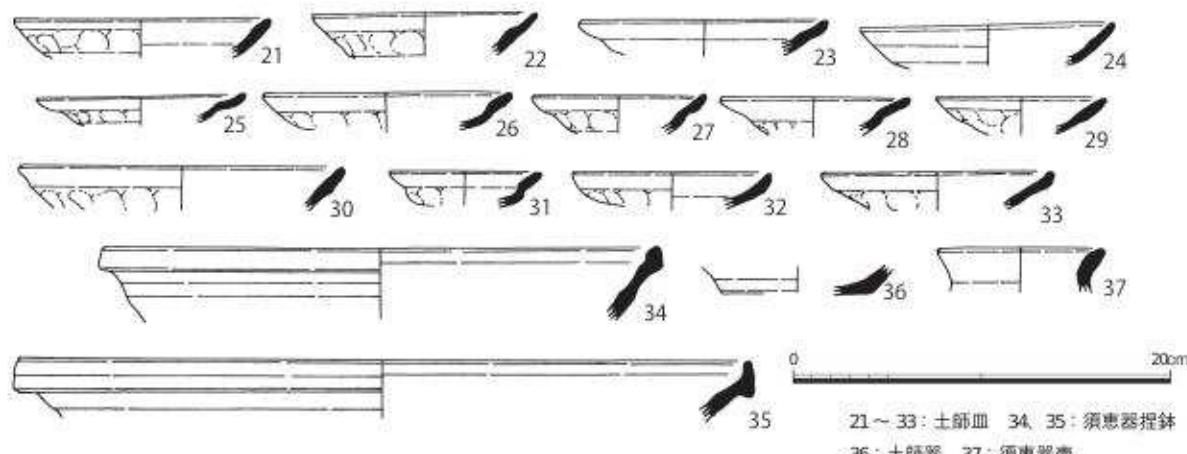


fig.162 SB301出土遺物実測図

す。SX302の鉄かぶと形63も同時期で、SX318の播但型84はV期である。SX318では和泉系の瓦質釜85と備前焼擂鉢84も共伴しており、瓦質釜85はIV～V期、備前焼84は乘岡案中世3b期に相当する。備前焼擂鉢はSK301でも出土しており、こちらの59は中世3a期である。

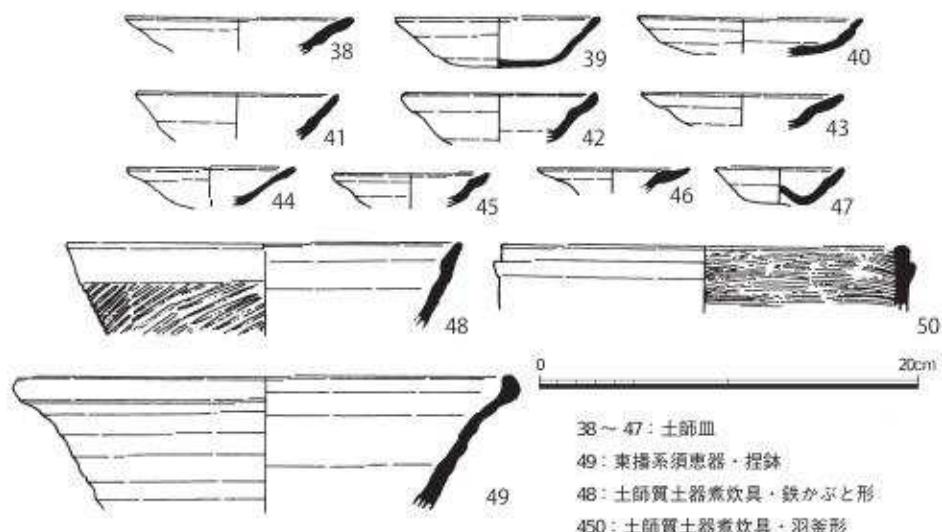


fig.163 SB302出土遺物実測図

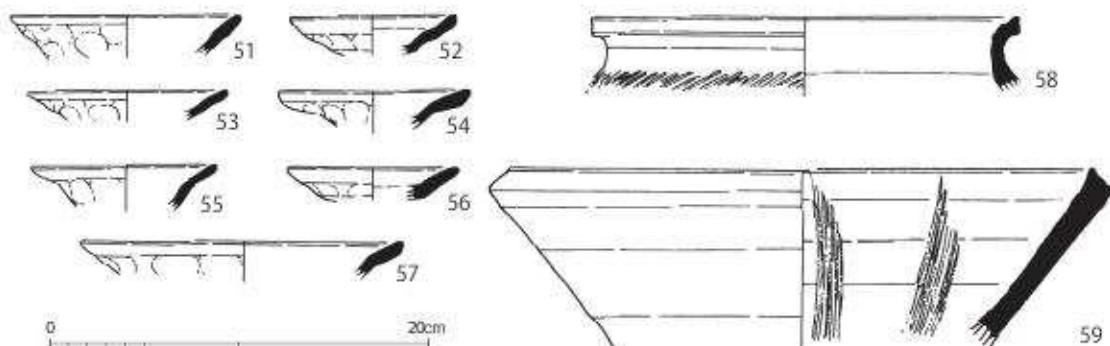


fig.164 SK301出土遺物実測図

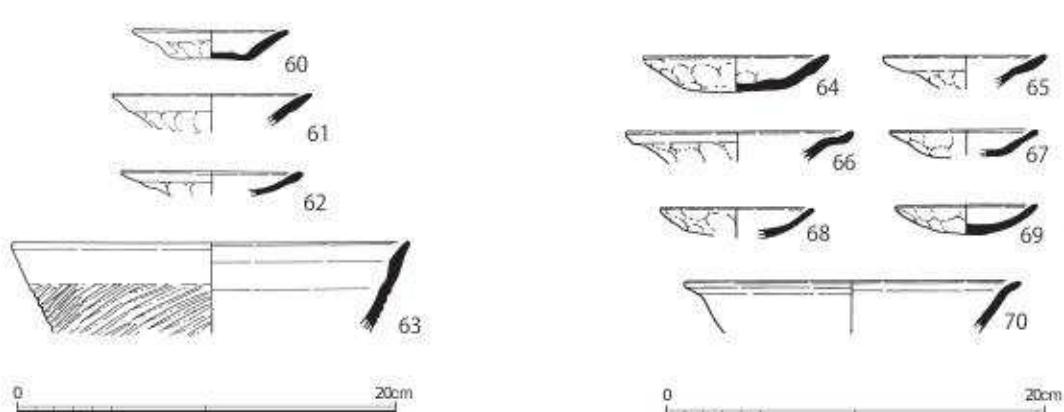


fig.165 SX302出土遺物実測図

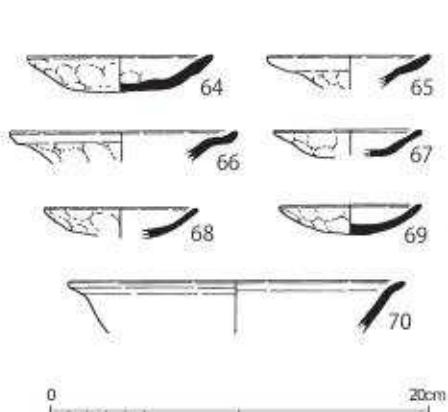


fig.166 SX304出土遺物実測図

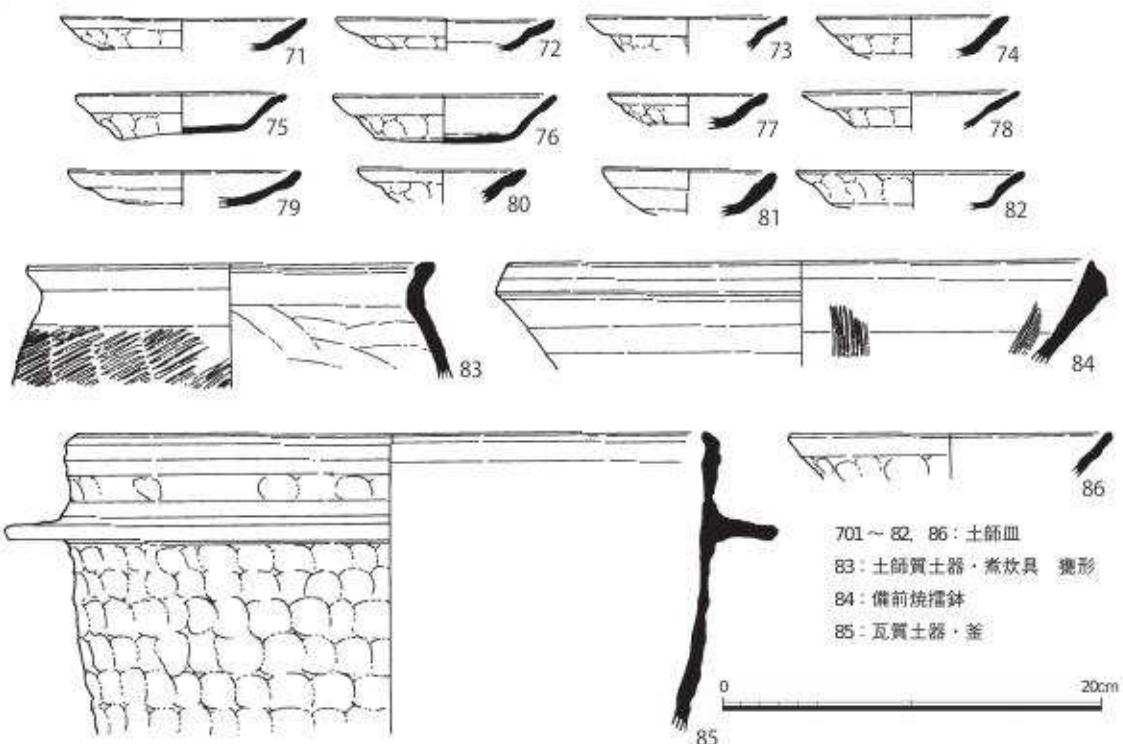


fig.167 SX318出土遺物実測図

土師皿C2を伴う遺構には東播系捏鉢を共伴する例が散見されるが、東播系須恵器捏鉢は、口縁形態から概ねfig.161に示す4型式に分けることができる。すなわち口縁部が上下に発達して口縁帯をなすもの、口縁帯が丸みを帯びて上方に発達する玉縁a、全体に丸みを帯びる玉縁b、どの方向にも発達しない単純口縁、の4形態である。SB301では玉縁aの34と玉縁bの35が共伴し、SB302では玉縁aの49のみが、SX501では口縁帯94と玉縁bタイプの95とが共存するなど、これら口縁形態の異なる捏鉢の間には、当該調査では積極的な時期差は認めがたい。

また土師皿C類とその他の土師皿との共伴関係としては、皿Hとの共伴が顕著になり、SB302の44～47、SK406の92、93などが挙げられる一方で皿Zも健在である。

その他例外的なものとして、SX304では輸入青磁碗が伴う。

c. 土師皿C1とC2が混在する遺構

上記のC1、C2どちらかを出土する遺構以外に、両者が混在している遺構もある。SP322、SP325、SX301、SX310、SX314、SX315、SX316である。それぞれに土師質煮炊具、備前焼、東播系須恵器捏鉢などを共伴している。

このような混在形の遺構については、整地と埋め立てを繰り返し、恒常に地層が搅乱されるという兵庫津遺跡特有の理由で下層遺構からの混入と考えられるが、それ以外に、元来土師

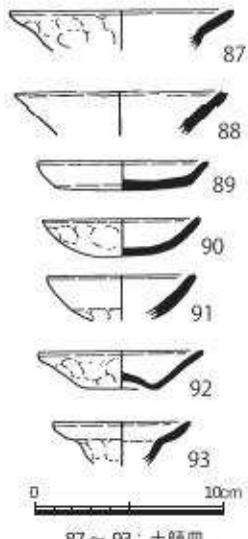


fig.168 SK406出土遺物実測図

皿C1とC2は、中世の一定期間において共伴するという可能性も指摘できる。C1とC2の差異は指揮の度合の多寡によって生じるもので、同一型式内の亜型式として認識できる形態変化なのである。同様の指摘は土師皿Bについても当てはまり、C1からC2への形態変化のある段階で、さらに土師皿Bに分化する可能性は十分考えられるが、当該調査では土師皿Bの出土量が少なく、判断するに至らなかった。

d. 共伴関係

兵庫津遺跡67次調査において、土師皿C類は上記のような土器・陶磁器類との共伴関係を示す。中世遺跡の年代確定においてしばしば基準となる備前焼が、本調査では比較的古相に傾く傾向があり、その年代観は共伴する土師質土器煮炊具の示す年代観と必ずしも一致しない。その堅牢さから備前焼は使用年代が長めに出る傾向があり、それが如実に表れたともとれるが、土師皿C1のみを出土する遺構では備前焼を共伴しないことから見て、土師皿C1が主体的に使用された時期は、兵庫津遺跡で備前焼搬入が一般的になる以前の可能性を指摘したい。

今回の調査では、図示できない小片ながらSX309、318から中世1期と考えられる備前焼壺の破片が確認されており、SP307からは他産地系須恵器あるいは極めて初期の製作年代に特徴的な須恵器様の備前焼片口壺の可能性がある破片も認められるなど、乗岡案中世1期段階で、兵庫津に備前焼が持ち込まれていることは明らかである。兵庫県教育委員会が平成9年に実施した調査でもやはり13世紀代の備前焼壺が確認されており、広域に流通する以前の備前焼が、

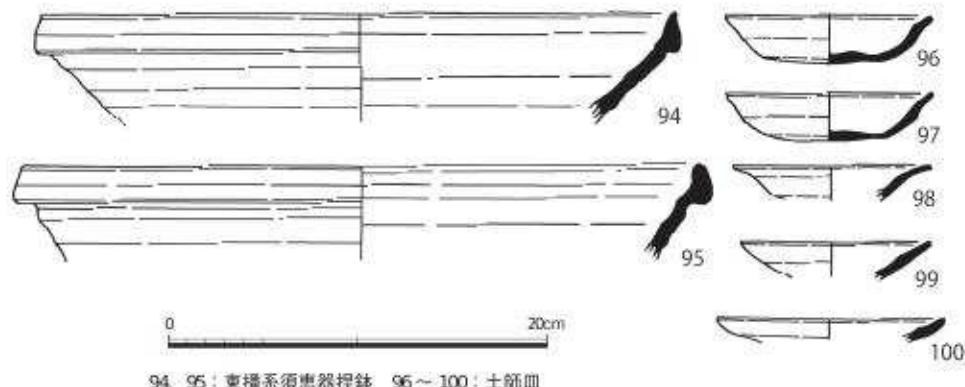


fig.169 SX501出土遺物実測図

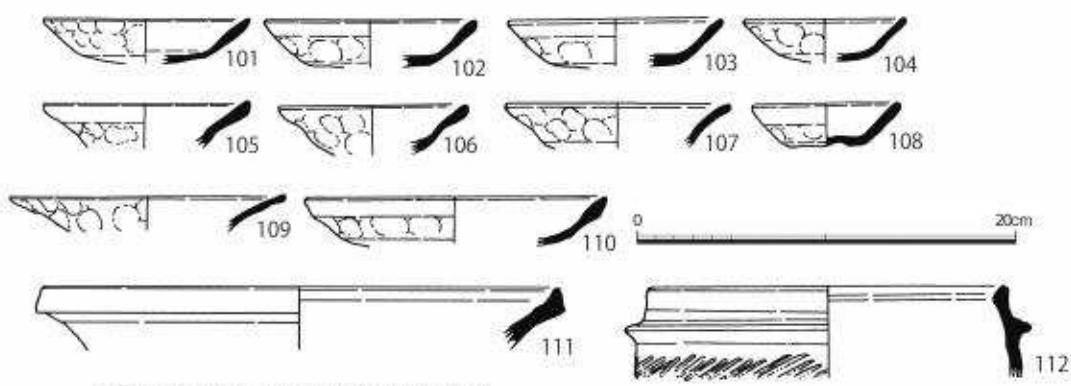
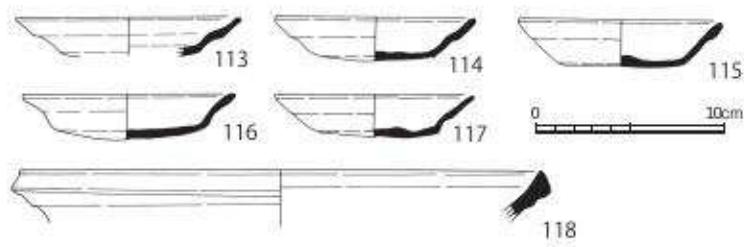
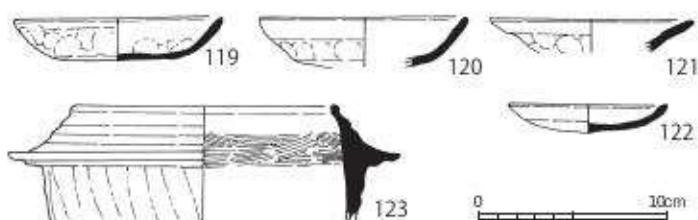


fig.170 SP322出土遺物実測図



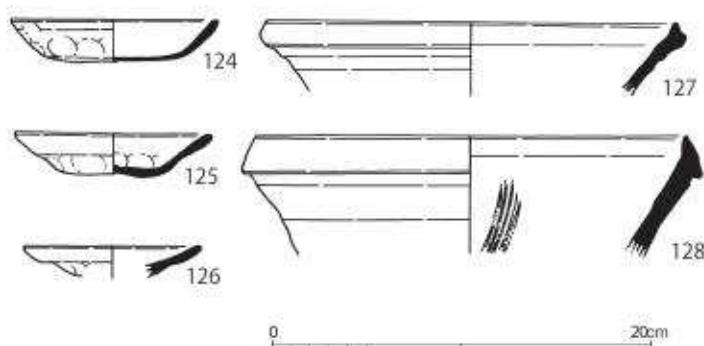
113～117：土師皿 118：東播系須恵器・捏鉢

fig.171 SP325出土遺物実測図



119～122：土師皿 123：瓦質土器・釜

fig.172 SX301出土遺物実測図



124～126：土師皿 127：東播系須恵器・捏鉢 128：備前焼・擂鉢

fig.173 SX310出土遺物実測図

して使用年代をダイレクトに反映しやすい土師質土器の示す年代が、土師皿C2の主体的に使用された年代を示すと考えて良いだろう。

土師皿間の共伴関係として土師皿C1を出土する遺構では、小皿Z1を伴う例が多い点が指摘できる。土師皿C2の遺構ではZ1は少なく、小径ではH類が中心となる。

e. 土師皿C類の時期

今回の調査で純粹に土師皿C1のみを出土する遺構の数は少なく、今後も継続して資料を収集すべきではあるが、本調査の様相から大まかな傾向として、その使用年代は瓦質土器類の示す上限13世紀後半、下限15世紀中葉までと捉えて差し支えないであろう。なおかつ備前焼を伴わない事を考慮して、13世紀代が使用年代の中心と考える。

土師皿C2は14世紀後半の備前焼、15世紀代の土師質土器煮炊具と共に伴する例が認められ、これらがその使用年代の中心を示すと考える。

壺を主体として当該地方にまで移動していた様子がうかがえる。ただしそれは散発的かつ偶発的な移動であり、経済商品として一般化するのは中世3期頃、実年代にして14世紀以降のようである。本調査でも中世3期の備前焼は土師皿C2を出土する遺構SK301とSX318から擂鉢が出土している他、中世2b期の可能性がある擂鉢の破片がC1とC2を混在するSX316から出土している。14世紀代に流通網が確立した後の備前焼は擂鉢を主体として甕が付随し、壺の比重は下がるようである。15世紀半ばの兵庫北関入船納帳に「ビゼンツボ」の記載が非常に多いことと、遺跡から出土する備前焼の実態との乖離は今後の検討課題であろう。

一方土師質土器煮炊具は、土師皿C1のみを出土する遺構では共伴せず、土師皿C2を出土する遺構では概ね岡田・長谷川案IV～V期に相当するものが共伴し、その年代は15世紀代に収まる。備前焼に比

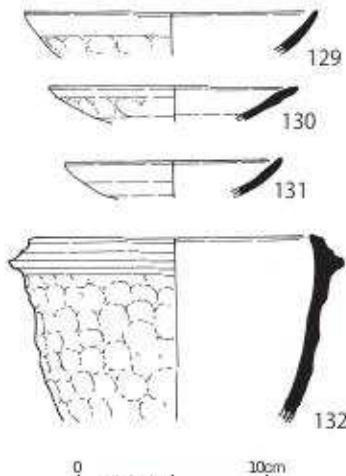


fig.174 SX314出土遺物実測図

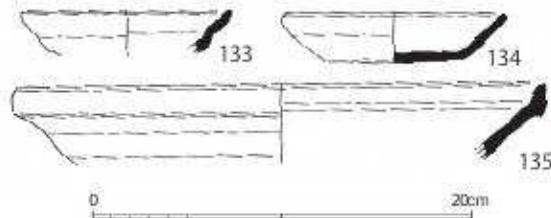


fig.175 SX315出土遺物実測図

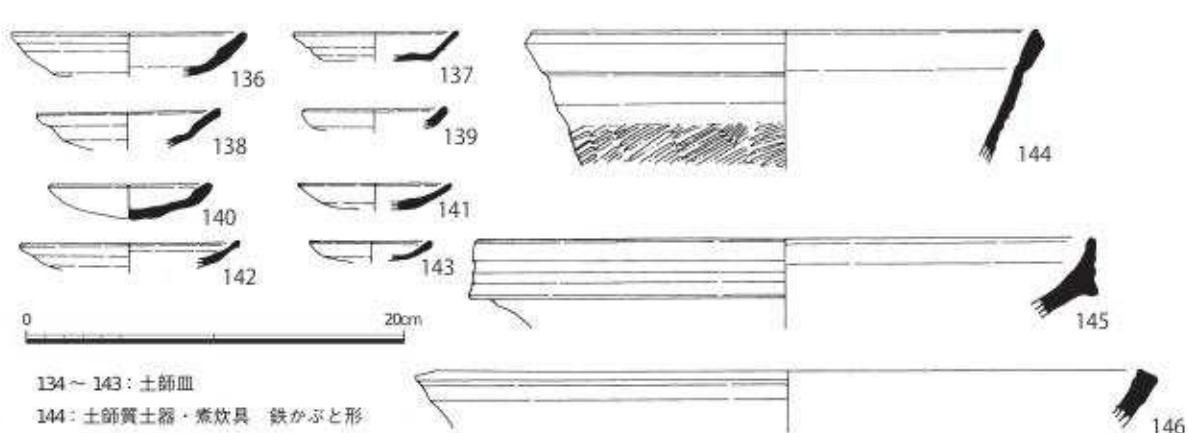


fig.176 SX316出土遺物実測図

以上、兵庫津遺跡において主体となる中世土器は土師皿C類であり、C1とC2の間に、多少の時間的前後関係がある事を確認したが、これはC1を出土する遺構が第3から第5遺構面までにまたがり、下層ほど純粹にC1を出土する遺構となるのに比べてC2のみを出土する遺構が第3遺構面に集中している点や、第3遺構面基盤層から出土した土師皿C類がほぼC2であるのに対して第4遺構面の基盤層からはC1とZ1を主体とし、若干のC2を含むという層序的な事実にも、一定の妥当性が表れていると考える。

土師皿C類はそれぞれB、H、K類といった他産地の製品を模倣した土師皿、あるいは在地系の土師皿Z類を伴うが、量的主体はあくまで京都産土師皿の模倣系である。今回検証した兵庫津遺跡における土師皿C類の使用年代は、京都におけるオリジナルの土師皿C類の使用年代と乖離するものではなく、C1からC2への型式変化を想定できる点でも一致している。京一兵庫津間で原型が模倣者に伝わる速度には、現在の型式学で提示可能なスケールでのタイムラグはないことがわかる。

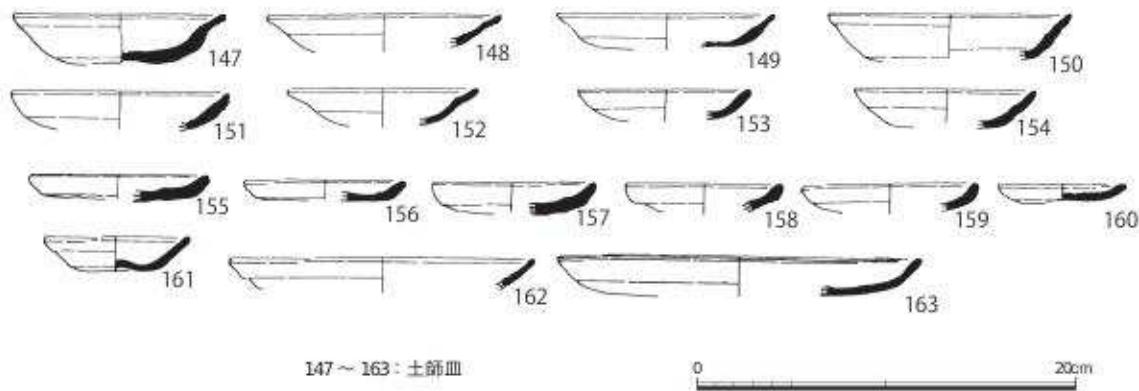


fig.177 第4遺構面基盤層出土遺物実測図

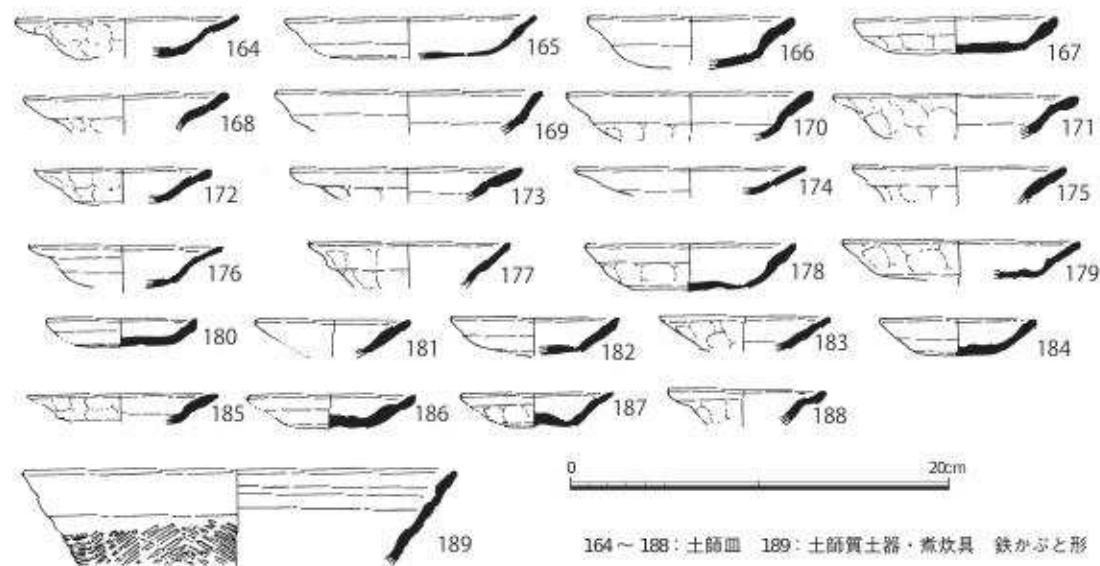


fig.178 第3遺構面基盤層出土遺物実測図

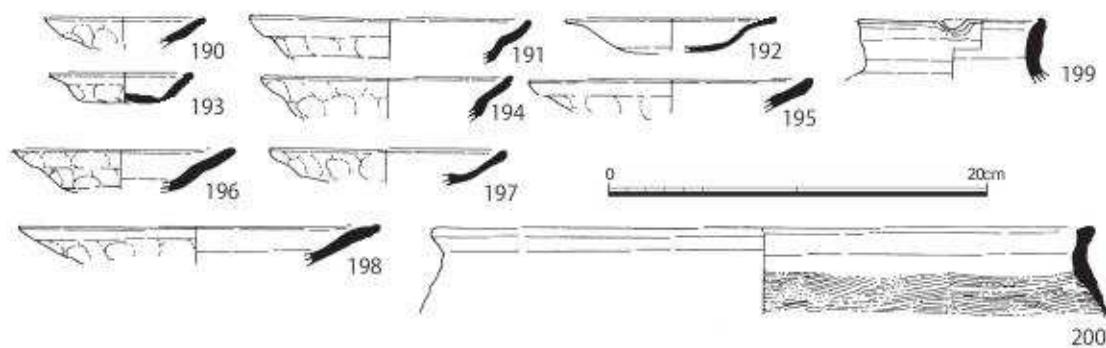


fig.179 その他の遺構出土遺物実測図

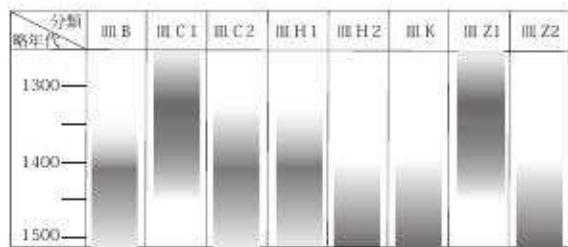


fig.180 出土土師皿の使用略年代

最後に、中世土師皿の模倣の意味については、多くの研究者が論じるところだが、本論はその任はない。模倣品と搬入品によって土器組成の大半が占められるという、中世後期の兵庫津における利用実態の一端を示すにとどまるものである。

3. 奈良時代の瓦

本調査で出土した古代の瓦・土器は28リットルコンテナ換算で1箱程度である。近世～中世の瓦は一定量出土しているが、古代の瓦は重圈文軒平瓦片1点が出土したのみである。第4遺構面基盤層中からの出土で、遺構に伴わない。

神戸市域で重圈文瓦の出土例は少なく、本調査以外では、長田区御藏遺跡の軒平瓦2点と、兵庫区上沢遺跡、房王寺廃寺の軒丸瓦各1点を数えるのみである。行論の便宜上、周辺遺跡類例の計測値も併せて記載する。なお重圈文系軒平瓦の呼称については、「重郭文」と呼ばれる場合もあるが、本報告では奈良文化財研究所・古代瓦研究会の2013年の検討内容を踏まえて、軒丸瓦、軒平瓦ともに重圈文で統一した。

①兵庫津遺跡第67次調査出土軒平瓦 (fig.181-201)

軒平瓦である。瓦当文様は、一重郭線内に弧線1本を配する。難波宮6574型式に相当すると考えられる。外縁を欠損し、外縁と郭線との高・太さの比較は不可能である。残存部のみで瓦当厚は第2郭内厚で4.8cmを測り、外縁を含めると瓦当厚6～7cm程度と推定される。郭内単線の端は郭線に接しない。

単線、郭線ともに厚6mm、高2～3mm前後で、郭線断面形状は半円形に近い三角形をなす。脇部幅1.4cm。頸部は幅1.1～1.5cm程度の短い面取りをほどこすものの、直線頸の範疇である。瓦当部凹凸面の調整については、磨滅が著しく不明である。瓦当接合技法については判断が難しいが、断面部の観察による限り瓦当貼り付けの可能性がある。平瓦部は欠損しており詳細不明。

②御藏遺跡第37次調査出土軒平瓦 (fig.181-202)

軒平瓦である。一重郭線内に弧線1本を配する。単線の端は郭線に接しない。難波宮6574型式に相当する。瓦当厚6.3cmを測る。外縁は上外縁が三角縁、下外縁が内向傾斜縁となる。脇部幅は7mmと狭い。単線、郭線ともに厚7mm、高3mm前後で、郭線断面形状は半円形をなす。

頸部は幅5mm程度の面取りによって頸面をなすが、直線頸の範疇である。瓦当部凹面は瓦縦位に対し斜め方向のヘラ削り、凸面は上外縁上面を幅9mmの面取りの後、縦位ヘラ削りで調整する。瓦当接合技法は瓦当貼り付けの可能性がある。

③御藏遺跡第45次調査出土軒平瓦 (fig.181-203)

両脇部を欠損するが、資料①、②と同様難波宮6574型式に相当する、一重郭線内に弧線1本を配するタイプである。瓦当厚6.8cm。外縁は内向傾斜縁となる。単線の両端は欠損しており、郭線に接するか不明。単線、郭線ともに厚5～6mm、高2～3mm前後で、郭線断面形状は半円形をなす。

頸部は幅1.5cm程度の短い頸面をなすが、直線頸の範疇である。瓦当部凹面は外縁上端に幅2cm程度のヘラ削りを施し、布目压痕を残す。凸面は斜め方向のヘラ削りだが、下外縁端から8.2cmの位置に朱線を残す。軒先からの瓦の出を示すと思われる。瓦当接合技法は粘土板貼り重ね

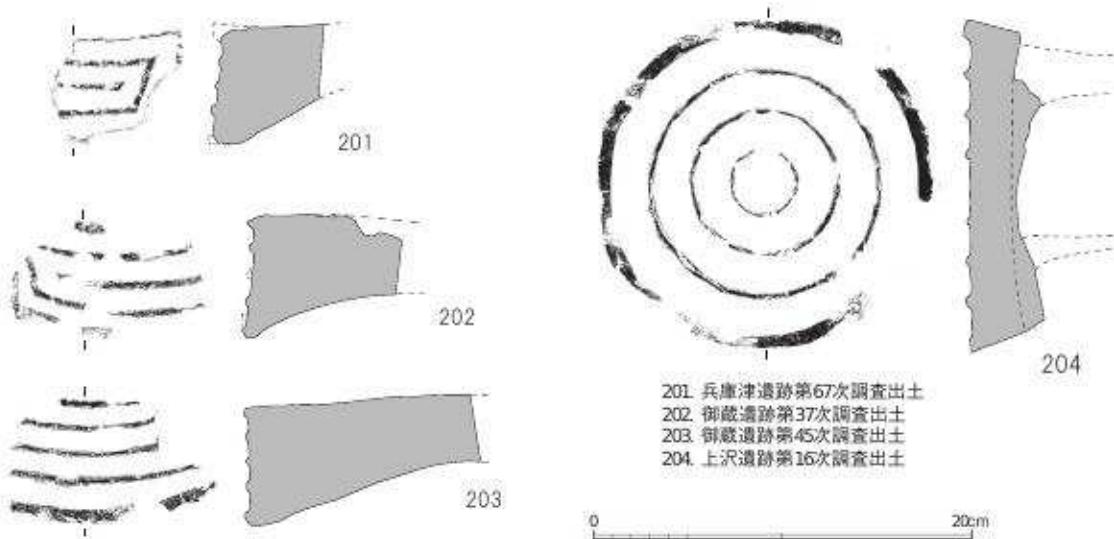


fig.181 神戸市域出土の重圓・重郭文軒瓦

の可能性があるが、判断が難しい。

④上沢遺跡第16次（新次数9—2次）調査出土軒丸瓦（fig.181—204）

無点の三重圓文軒丸瓦である。直径17.5cmを測る。圓線断面形は半円形をなす。周縁高5mm程度で内向の傾斜縁Ⅰである。第1から第3圈まですべて圓線高3mmで描うが、圓線幅は第1、第2が6.5mmに対し、第3圓線のみ9mmと太くなる。第1—第2、第2—第3間は1.5cmと等間隔ながら、最外圓線間は1.35mmとわずかに狭い。

瓦当接合技法は、瓦当裏面に円弧の約3/4程度まで溝を設定し、先端未加工の丸瓦を接合式によって接合したのち、瓦当裏面に1~1.6cm厚さで補充粘土を足している。その際、補充粘土を瓦当裏面中心から周縁部に向かって荒く指でナデ上げて凹ませて土堤状に高く仕上げ、周縁部には横方向のヘラ削りを施している。そのため断面図では、一見土堤状の周縁突帯形状を呈す。難波宮式の範疇だが該当する型式は不明である。

以上、神戸市内出土の重圓文軒瓦は、いずれも難波宮式の範疇に収まる。軒平瓦同士は瓦当幅、圓線の意匠に共通点がある一方で、瓦当接合技法、外縁形状等に微差が認められる。顎形態についても、すべて曲線よりの直線顎ではあるが、顎裏面取りの多寡に応じて明瞭な顎面を持つ資料と、持たない資料の差が存在する。

軒丸瓦については、比較資料が無いながらも、無点である限りにおいて難波宮系と判断できる。瓦当径17.5cmは難波宮資料の中でも大型の分類に該当し、相応の規模の所要建物を想定する必要がある。

意匠的には、軒平瓦は明らかに難波宮6574型式を意識し、軒丸瓦は該当する型式が不明である。ただし法量的に見て両者が組み合う可能性はかなり高い。

上沢遺跡出土の軒丸瓦には、瓦当裏面に周縁突帯を有する特徴がある。瓦当部と丸瓦部の接合工程で、範詰めした粘土の上にさらに補充粘土を全周加えることで生じたものである。難波宮・平城宮ともに報告例はないが、七尾瓦窯資料に類例が認められる。難波宮6303型式の複弁蓮華文である。七尾瓦窯例では、丸瓦接合位置は瓦当裏面やや中央寄りだが、上沢遺跡例は瓦当上端近くに接合跡が認められるという違いがある。

出土遺跡 (遺物番号)	瓦 当 厚	單 線 厚	單 線 高	第 1 部				第 1 ~ 第 2 部 間	第 2 部				郭 縁 断 面 形 状	郭 縁 間 断 面 形 状	彫 形 態	瓦当製作技法
				郭 内 厚	郭 外 厚	郭 縁 厚	郭 縲 高		郭 内 厚	郭 外 厚	郭 縁 厚	郭 縲 高				
兵庫津67次(201)	(48)	6	3	19	33	1.6 7F	1.2 3F	1.8 8F	48	—	—	—	三角	台形	直線	瓦当貼り付けか
御蔵37次(202)	63	7	3~4	21	35	1.7 7F	1.3 3F	1.6 4F	44	63	2	13	半円	台形	直線	瓦当貼り付けか
御蔵45次(203)	68	5	2	21	33	1.5 5F	1.2 2F	1.8 10F	48	68	1.6 7F	1.2 3F	半円	台形	直線	粘土板貼り重ねか

表18 神戸市内出土重圏文軒平瓦 (単位: mm)

出土遺跡 (遺物番号)	直 径	第 1 圈				第 1 ~ 第 2 部 間	第 2 圈				第 2 ~ 第 3 部 間	第 3 圈				最 外 周 縁 ~ 外 縁 間	内 外 縁 幅	外 縁 高	外 縁 形 状	瓦 当 厚	圓 線 断 面 形 状	接合技法	
		内 徑	外 徑	圓 線 幅	圓 線 厚		内 徑	外 徑	圓 線 幅	圓 線 厚		内 徑	外 徑	圓 線 幅	圓 線 厚								
上沢16次(204)	175	30	42	6.5	3	15	70	82	6.5	3	15	113	127	9	3	13	15.5	8	5	類斜1	38	半円	接合式・瓦当裏面に補充粘土

表19 神戸市内出土重圏文軒丸瓦 (単位: mm)

在地資料では芦屋廃寺出土の重圏文軒丸瓦がやはり土堤状の周縁突帯を有するが、こちらは平城宮系である。

以上の点から、兵庫津資料も含めて神戸市域出土の重圏文軒瓦については、都城のものを比較的忠実に模倣しながらも、造瓦技法および範型に都城例にない特徴が認められ、生産地系列としては都城系在地産と判断する。

重圏文瓦には、難波宮、平城宮に至るそれぞれの交通路沿いに主体的に分布するという傾向がある（上田睦「畿内（揖河泉）の重圏文瓦」）。特に難波宮系は京城内では宮との同範関係が認められ、周縁経路上まで広がると同範関係ではなく在地産化する周囲的採用がみられる。神戸市域はおそらく周囲の西端にあたり、神戸市須磨区を境に、以西の播磨地域で都城系重圏文瓦は出土せず、四半世紀程度後出の資料として、完全に在地転化した本町式軒丸瓦が採用される。本町式に組み合うのは平城宮・京系均整唐草文V系を祖系とする軒平瓦だが、神戸市域出土の重圏文軒平瓦が6574型式という後期難波宮造営時における中心型式を祖形とした在地系資料で、かつ組み合う軒丸瓦も都城資料を忠実に模倣した重圏文意匠である点とは、互いの採用の背後にある政治性が異なると推測される。

仮に在地化の度合の強弱を、都城からのダイレクトな造瓦情報によって製作されたものを1次的、そこからさらに国衙を経由してより在地化したものと2次的として区別した場合、神戸で出土する重圏文の主体は1次的である。その意味について、現時点では出土遺跡が御蔵、上沢遺跡といった古代山陽道沿いの官衙関連遺跡やそれと密接に関わる寺院に集中することに注目したい。

摂播国境地帯を境に都城系重圏文から国衙系の本町式に転化することは、1次的な造瓦情報の拡散範囲、8世紀第2四半期における都城系造営組織（この場合は摂津職）権限の実効範囲を示唆する可能性がある。そこに兵庫津遺跡が加わることで、難波宮から西国へ至る陸路同様、海路にも同職の関与が想起される。すなわち大輪田船瀬だが、当該調査地が直接その施設として比定されるものではない。当該調査地を含め、兵庫津遺跡において過去に古代の土器を出土した地点同士を結んだ範囲が、大輪田泊関連の重点調査エリアとして指摘できるのみである。

一方で芦屋廃寺資料が平城宮系の範型を採用しながら、難波宮系の上沢資料と類似する造瓦技法を示す点など、京域以西での重圈文資料の拡散を摂津職の関与のみで単純化するには矛盾も存在する。この問題については、都城系重圈文→本町式→中国地方で出土する重圈文系資料との比較による周囲的伝播の妥当性や、1次的・2次的という造瓦技法上の概念の内実の検討といった、さらに踏み込んだ議論が要求される。

なお都城系重圈文瓦と本町式軒瓦は分布類型としては、ともに古代瓦研究におけるIV類に相当する（上原眞人「瓦を読む」）。同じIV類のありようにも在地単位で個性が存在することを示すとともに、四半世紀程度の時期差を内包することによって、両者は排他的な関係性に無かつたことも示すと言えよう。

4. 平安時代の土器

本遺跡では第5遺構面を中心に、9世紀の土器を出土する遺構が存在し、遺構面の主体的な時期を示すと考えられる。SK501、SX502、503、およびSE501である。それ以外に第4遺構面の基盤層と第3、第4遺構面の一部からも同時期の遺物が出土しているが、第3、第4遺構面については下層からの混入と考えられる。以下に図化可能なものを掲載する。

A. 遺構出土の土器

土師器、黒色土器、須恵器などがある。土師器は甕、皿A、黒色土器は無高台のA類壺と鉄鉢型壺である。土師器甕には外面・内面とも刷毛目が明瞭に残る。土師器皿の調整はe手法である。黒色土器壺の内面に暗文は認められない。調整は細かいヘラ磨きを基調とする。

B. 第4遺構面基盤層出土の土器

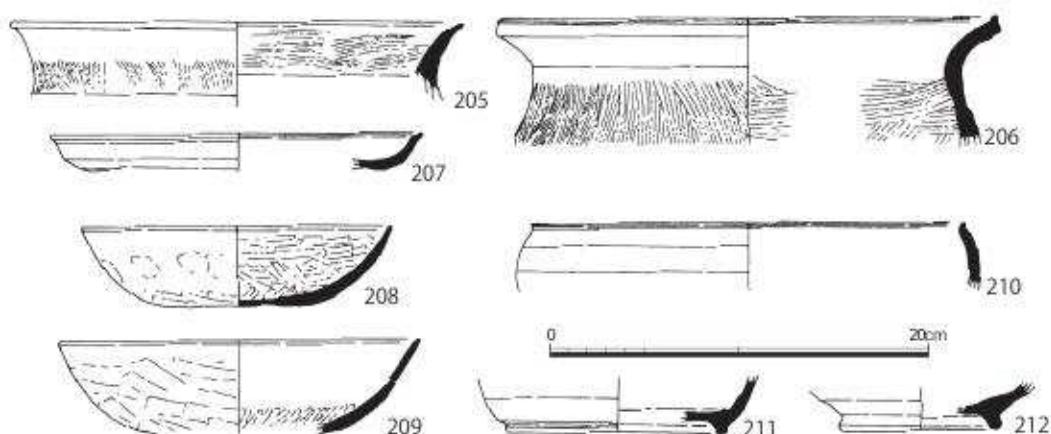
土師器壺A、鉄鉢型黒色土器、須恵器が存在する。土師器壺の調整はe手法である。

C. 混入品

土師器皿、須恵器蓋、壺身などが存在する。土師器壺の調整はe手法である。

D. 遺物の時期

これら平安時代食器類については、土師器壺の調整がすでにc手法でない事、土師器皿体部の開きは強く、口縁部は撫でにより外反がやや目立つこと、黒色土器は鉄鉢型に壺Aが共伴す



205, 206: 土師器甕 207: 土師器皿 208, 209: 黒色土器壺 210: 黒色土器鉢

211, 212: 須恵器壺

205～209: SX502 出土 210: SX504 出土 211: SK501 出土 212: SE501 出土

fig.182 第5遺構面遺構出土遺物(平安時代)実測図

るが、塊は無高台で暗文を省略する段階にある点などの諸要素の集合から、平安前期ではあるが、すでに律令的土器様式を脱却し、平安京的な土器様式の成立に至ると判断する。小森俊寛氏の編年案における9世紀中葉から後半に該当し、10世紀には達しないであろう。

京では土師器塊は、この段階にはすでに刷毛目調整の認められないものが主体となるが、本遺跡では刷毛目が明瞭であった。これをもって在地性について言及するには、あまりにも資料数が乏しいと言わざるを得ないが、今後周辺他遺跡の資料と比較検討しつつ、摂津西部における当該時期の土器様式の在地性について考察することは有効と思われる。

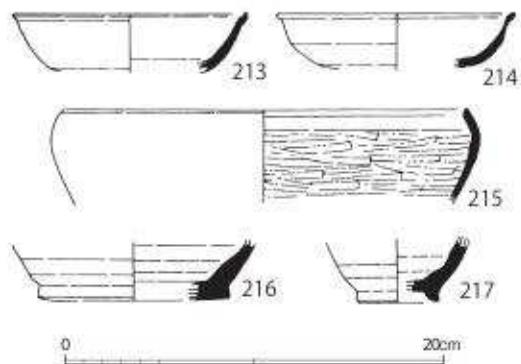
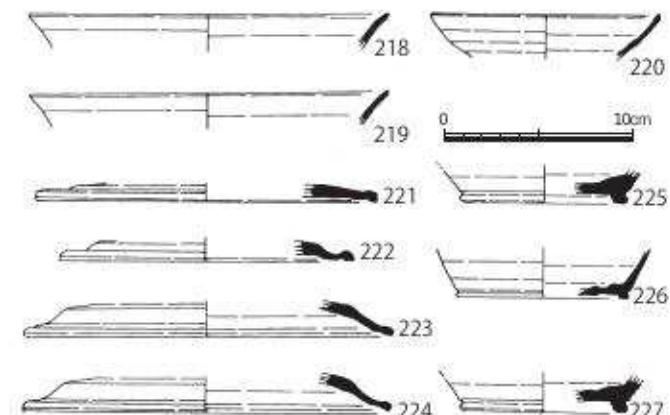


fig.183 第4遺構面基盤層出土遺物（平安時代）実測図

213～214：土師器塊 215：黒色土器鉢
216、217：須恵器壺

fig.184 その他の遺構出土遺物（平安時代）実測図



218、219：土師器皿 220：土師器坏 221～224：須恵器蓋 225～227：須恵器坏
218、219：SP323出土 223、224：SX309出土 226：SP401出土 227：SK301出土

平成28年度 神戸市埋蔵文化財年報

平成31年3月 印刷
平成31年3月 発行

発 行 神戸市教育委員会文化財課
神戸市中央区加納町6丁目5番1号
TEL078-322-5799

印 刷 デジタルグラフィック株式会社
神戸市中央区弁天町1番1号
TEL078-371-7000

